
とある魔術の天の住人

翔泳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔術の天の住人

【Nコード】

N7588N

【作者名】

翔泳

【あらすじ】

ノノ蒼天の如く澄み渡る瞳、遙か彼方から輝きを放つその力は『神の目』。それは神より与えられし体の一部を宿した者、天人である証。

科学、魔術、想い、願い、悲しみ、憎しみ、定め、様々なモノが交差する中、主人公、かみこえ守越尊みごとの物語が始まる。ノノ

ノノこれはとある魔術の禁書目録の世界を舞台にした2次創作物語りです。原作を軸としたサイドストーリー的なモノになりますので、原作の時間軸での出来事はほぼ全てが起こっています。予めご了承

下さい／／

／／原作を読まれているとよりわかりやすいと思います。

／／キャラクター集にイラストをアップ中です。

1 - 1 「出会いと魔術師と」(前書き)

色々もあるかもしれませんがよろしく願いします。

一応原作に沿って行きたいと思しますのでこのキャラはこんなんじゃないぞ！みたいな事がありましたら教えてください。

大したモノではありませんが少しでも楽しんでもらえたらと思います。

オリジナルは入れて行きます。

1 - 1 「出会いと魔術師と」

1

七月二十日

時間は十四時過ぎ。

『学園都市』

東京都の三分の一ほどの大きさに人口二三〇万人もの人が住んでおり、その八割が学生である。最先端の科学技術が研究・運用されており、都市の内外では数十年以上の技術格差が存在する。また学園都市はそれぞれ特色のある二三の学区から構成されており、その第七学区のとある寮に彼はいた。

見た目はワンルームマンション、鉄格子の様な手すりに覗き防止用の板が張られていないのはここが男子寮だからだ。汗一杯になりながら両手に荷物をぶら提げ、エレベーターに乗り込む。工場にある搬入用のエレベーターよりも小さいと思われるそれは七階で止まりそのガラクタの様なドアがガコガコと開く。

隣接している建物の所為で七階と言うのにも関わらずビル風はなく夏の暑さを象徴する蒸し暑い空気が立ちこめていた。

直線通路にずらりと並ぶドアを一つずつ確認するように廊下を歩く。

（隣は上条さんって言うのか……）

上条と書かれてある部屋を通り過ぎ一つ奥のまだ表札のないドアを開けて彼は中に入る。すでに運び込まれている段ボールがいくつか積み重ねられているが一人暮らしと言う事で然程多くも無い。支給されている小さなテレビとどこにでも有りそうなシングルベッド、生活するのに必要最低限のモノしか置かれてない部屋はまだどこか寂しい雰囲気があった。

彼、かみこえ みこと守越尊はこの九月からこの第七学区に高校に転校する予定の

高校一年生である。

人口二三〇万人、その八割の学生に『記憶術』や『暗記術』などと名前を誤魔化して『頭の開発』を時間割りに組み込み能力の開発をしている場所がこの学園都市だ。

つまり誰もがマンガの主人公の様な存在になり得る可能性を秘めた場所でもある。ただその六割は無能力者ばかりではあるが、そんな希望を夢見てこの学園都市に来る学生は多い。

「ふう、片付けるか」

と殺風景な部屋を見渡し守越尊はそう呟いた。

衣装ケースの中に片っ端から衣服を詰め込んでいく。目覚まし時計はベッドの棚にセットし本棚には溢れんばかりのマンガと少量の参考書を並べ、奮発して買ったDVDレコーダーをテレビの下に設置なんかしてみる。

作業は一時間ほどで一段落し殺風景だった部屋はまあ男子生徒が一人生活するにはぴったりの部屋になった。

2

「ええつとこんなもんかな」

学園都市の街中を歩く守越尊は手に生活に必要な一セットの食器や少量のインスタント食品等をぶら提げていた。さすが学園都市と言わんばかりに辺りには地面にへばりつくガムも一瞬にして剥がしてしまおうと言うドラム式掃除ロボットや警備ロボットが横を通り過ぎていく。道の真ん中には風力発電用の三枚のプロペラが夏の風に煽られクルクルと回っている。もう少しマジマジと見たい所であったがそんな事をしていては田舎モノ丸だしなのでチラチラと見る程度にする。

ドン、と誰かと肩がぶつかった。

「すみませ ツ!？」

「おいデメえ、どこ見て歩いてんだあ??」

その明らかにがたいの良さそうであらうに悪そうな男はぶつかるや否や守越尊の胸ぐらを掴んで来た。その勢いで荷物を落としてしまった守越尊はパリっと言う何かガラス系のモノが割れる音を聞いた。

ああ、せつかく買った食器が……と残念がる暇も無く今にもその目の前の男は殴りかかって来そうであった。

「何をされているんですの？」

不意に後ろから聞こえて来た鈴の様な女の子の声に一齐に振り返った。

茶色い髪をツインテールにした女の子は腕章を突き出すように

「ジャッジメント風紀委員ですの、それ以上の行為は暴力と見なし拘束させていただきますわ」

ちつジャッジメント風紀委員か、と男は無造作に手を離すと唾を吐き捨てそのまま街中に消えていく。残された守越尊は無残に落とされた袋を拾い上げ中身を確認するとガクつと肩を落とした。皿は真っ二つだった。「お怪我はありませんこと？」

ツインテールの女の子は胸の前で両手を組んで見上げるようにしてやさしく声を掛けた。

「あ、ああ、ありがとう」

「完全下校時刻ですし、この時間になりますとあの様なゴロツキがウヨウヨいますわ。早めの帰宅をオススメしますの」

などと話をしていると、甲高い警報音が遠くから聞こえて来た。

また事件ですか？ と彼女は振り向き、私はこれで失礼しますの、と言うと

瞬！ とその場から消えた。

え！？ と守越尊は辺りを見回すが先ほどの女の子はどこにも見当たらなかった。

「あれが能力……」

初めて能力と呼ばれるモノを目の当たりにした守越尊は一瞬ボーとしていたが、ゆっくりと荷物を持ち立ち上がると荷物をチラッと

見てハアとため息をつき夕焼けに紛れるように寮へと向かった。

寮に着いたところには辺りは暗くなりかけていた。オートロック式のドアを抜けてエレベーターに乗り込む。その中でも再び荷物を見てため息をつく。余分なお金を持って言っていなかった守越尊は、また明日買いに行かなくちゃな、と呟き7階に着いたエレベーターから重い一歩を踏み出す。

「ん？」

と守越尊は廊下の直線的な向こうに何やら白いモノが床に転がっているのが見えた。

自室の一つ手前、お隣さんの部屋の前だ。

近づいて行くにつれてそれが人である事に気が付いた。そしてその白い服の背中は血のように赤く

「！！」

守越尊は今度は自分で荷物を落とすと駆けだす。さらにパリんと言う音が聞こえたがそんな事を言っている暇は無かった。

白い服はおそらく修道服、と言うことはシスターさん？

顔を見る感じでは十四か十五歳くらいの女の子。銀色の髪を見る限り外国人と見られるその少女は背中から大量の血を流し倒れていた。

「おい！ あんた大丈夫か！？」

声をかけるが返事はない。この部屋の前で倒れていると言う事はこの『上条』と言う人の知り合いか何かなのだろうが部屋からは何の応答もない。彼女の背中には何かとてつもない刃物で切りつけられた様な傷。銀色の髪もその溢れ出す血液によって赤く染められていた。

(ど、どうすれば……あ、き、救急車)

と携帯電話を取り出そうとするが、目の前で人が切られている、と言う状況を前にその手は震えてしまいせつかく取りだした携帯電話を落としてしまう。

ああ、と慌てて携帯電話を拾い上げボタンを押そうおとしてカツつと言う足音。

ボタンを押そうとした瞬間に聞こえて来た足音。

振り向く先には白人の二メートルはある身長、背丈の割に幼く見えるその顔、おそらくこの少女と同じ十四か十五歳であろう。服装は教会の神父が来ているような漆黒の修道服。ただその姿は『神父』と呼べるものではなく、鼻に匂う甘い香水の香り、そして肩まで燃えるような赤髪、両手の指には銀の指輪がメリケンのように並んでいる。そして耳には数個のピアスを付け、煙草を銜えたその姿は不良と呼んだ方が良さそう。

この彼女を見る視線からこの子を知っている事は無さな事はないだろうがこの状況を見て何も感じないと言うのはおかしい。知り合いがこんな状況で平然としていられる訳がない。まるでこうなっていることを知っているかのようにその男は見ていた。

「あんな誰だよ」

「うん？ 僕たち『魔術師』だけど？」

（ま、魔術師??）

「学園都市には魔術師もいるのか!？」

なに、心配ない。僕たちは外の住人さ。と、さらつと云ってのける魔術師と名乗る男。ただおかしい。都市の周囲は高さ五メートル・厚さ三メートルの壁に囲まれ、外部から隔離されている。都市への出入りは厳重な審査があり外部の人間が簡単に入れる訳がない。

だがそんな事はどうでもいい。

「これはあんたがやったのか？」

「うん？ まあ半分半分とこだね。僕がやった訳じゃないが『僕たち』がやったって事に変わりはないからね」

守越尊は理解不能であった。こんな状況を目の前にして平然と自分たちがやったと言っているこの男、そしてこんなことをやっているおいて平然と表情一つ変える事無く立っているこの男の心が理解できなかつた。

「うん、そろそろいいかな？ それ、回収したいんだけど」

回収？？ その言葉の意味が分からない。治療ではなく回収？
こんな状態である女の子を前にしてまるでただの荷物を取りに来た
と言わんばかりの発言に最早言葉もでない。

「正確に言つとそれの持つている一〇万三〇〇〇冊の魔道書なんだ
けどね、まあ君には関係のない話だよ」

「インデックス！」

その直後に魔術師の後ろから叫ぶ声が聞こえた。

「また変なのが現れた見ただけで、どうやらそれとは面識がある
みたいだね」

魔術師は煙草を揺らしながら言葉を発した。

「お前何者だ！？」

「ステイル＝マグヌスと言いたい所だけど、ここはFortis9
31と言つておこうかな」

ステイル＝マグヌスと名乗る男はさらに言葉を続ける。

「魔法名だよ、聞きなれないかな？ 僕たち魔術師つて生き物はど
うやら魔法を使用するとき真名を名乗つてはいけない古い習慣み
たいなものがあつてね」

まあと言つよりも

殺し名だよ

ステイル＝マグヌスは煙草を指で弾く。回転しながら火の粉を飛
ばすそれは

「炎よ」

ステイル＝マグヌスが呟いた瞬間、轟！ と爆発した。

炎はまるで踊る様に噴き出し炎の剣が生み出される。

「こ、これが……魔術」

ドサつと尻餅をつく守越尊を鼻で笑うとステイル＝マグヌスはそ
の炎剣をもつ一人の彼目掛けて叩きつけた。

「巨人に苦痛の贈り物を」

咄嗟に彼は手で顔を庇ったがそれは彼に当たると激しく爆発し爆音と炎を巻き上げた。

「やりすぎたかな？」

と魔術師、ステイル「マグヌスは笑っている。

魔術師じゃなくても分かる。あの炎は生身の人間が耐えられる様な代物ではない。その近くでは金属の手すりが飴細工のように融けている。きつとあの中の彼も……

そう考えた瞬間吐き気に襲われる。目の前で人が焼き殺される瞬間を目撃してしまった。

必死でそれを飲み込み抑え込む。

さて、とステイル「マグヌスはこちらを振り向く。一人を殺したと言うのにその表情は全く変わる事がない。

「それ、回収したいんだけどいいかな？」

ステイル「マグヌスはゆっくりと近づく。

魔術師の後ろで燃える炎の暑さで汗が出ているのか、それとも別の冷たい何かの背中を伝っているのか。守越尊は有りもしない唾を必死で飲み込んだ。

後ろには傷ついた見ず知らずの女の子、そして目の前には一人殺す事に何の躊躇いも無い魔術師。

だからその拳に震えながらも強く握られた。

「へえ、よく逃げないんだね。まあ君たちみたいなのが何回戦おうが勝てないんだけどね」

「誰が勝てねえって？」

ギクリ、と炎の中から聞こえた声に二人の動きは止まる。

その炎の中心から全てを吹き飛ばすように彼は姿を現した。

一瞬思考回路が停止する。それぐらい衝撃的な出来事だった。

魔術、能力、そう言った類の事は全く分からない守越尊だったが、あの炎だ人を死に至らしめるであろうことは見て分かった。しかし、彼はその中から無傷で現れた。

だがそれ以上に魔術師ステイル^{II} マグヌスはそれ以上に動揺していた。

ステイル^{II} マグヌスは自分が放った炎がどれだけの威力であるかを知っている。その男がこれほど動揺するほど今の出来事は異常だったのだ。

彼は勢いよく走りだす

「チツ！」

ステイル^{II} マグヌスは右手を水平に振るう。生み出された炎剣を再び彼に叩きつける。だが彼の放った拳はその炎をかき消し魔術師の頬に突き刺さる。

大きく後ろに仰け反る魔術師を見て彼が叫ぶ。

「インデックスを！！！」

守越尊は悟る様にその女の子の傷に触れぬように背中に担ぐ、そして予想以上に軽いその女の子を背に勢いよく走り出した。

彼も同時に走る。一刻も魔術師から離れるように

「インケンテイウス 魔女狩りの王！」

魔術師が何かを叫んだ。と同時に魔術師の服の中から炎が飛び出し二人の前に燃え上がった。ただそれは単なる炎の塊では無く、真紅に燃え上がる炎の中で黒くドロドロとしたモノが『芯』になっている。

それはまるで生きている様に人の形を成していた。

その炎の巨神は人間を磔にするかのような十字架を片手にそれをツルハシでも振るうかのように叩きつける。

「……っ！！！」

目をつぶり顔を横に向ける守越尊であったが、その十字架が守越尊に届く事は無かった。

瞑った目を開くと左手で右手を支えるようにその十字架を押さえつける彼の姿が守越尊の目に入った。

「右手が通用しない！？ クツ、お前！ インデックスを連れて逃げろ！」

「あんたはど」

「いいから逃げる!!」

守越尊は階段を駆け降りる。自分がいても何の出来ない事は分かっている。それに彼はあの炎の中でも生きていた。きつと大丈夫。でもあの炎の巨神は消えなかった……

くっ

とにかくこの子を病院に連れて行かなければ、だから急いで階段を「!?!」

と階段を下りている最中に妙なモノを見つける。寮の至る所にテレフォンカードの様な大きさの紙が貼られてある。

「あれは……」

「ルーン」

と背中少女が声を発した。

「『神秘』『秘密』を示す二四の文字にして、ゲルマン民族により二世紀から使われていた魔術言語で、古代英語のルーツとされます」

守越尊は信じられなかった。先ほどまで意識すらなかった彼女がそれもこんな怪我をしてここまで冷静に話せるのだろうか？ただ彼女はそのまま話を続ける。

「『インケンティウス魔女狩りの王』を攻撃しても効果はありません。」

全ての『ルーンの刻印』を消さない限り何度でも蘇ります」
「なっ!?!」

なら上にいる彼はあの炎の巨神を倒す事が出来ない。つまりこのままだと彼は……

それ以上は考える事を止める。

彼は今上にいて『インケンティウス魔女狩りの王』を足止めしている。しかしこのままでは倒す事が出来ない。そして目の前にはその炎の巨神の命、ルーンと言われる大量の紙切れがある。

彼女の傷は深い、しかし彼女は現にこうやって喋っている。ただその言葉は機械のように冷たいモノであったがそんな事を気にして

いる余裕はない。このままでは彼は間違いなく殺られる。

「なああんたインデックスでよかったよな？」

「はい。私はイギリス清教内、第零聖堂区『必要悪の教会』^{ネセサリーウス}所属の魔道図書館、正式名称はIndex - Librorum - Proh^{インデックス}ibitoriumですが、呼び名は省略の禁書目録で結構です」
「このルーンってヤツをどうにかすればあの『魔女狩りの王』^{インケンティウス}ってやつを倒せるって事だよな？」

はい。と彼女は答える。

とは言ったモノの、寮の天井、階段、壁、あらゆる場所に張り付けてある。恐らくは数万とこのルーンは張り付けられてある。

守越尊は一枚を剥がし手に取る。

一体どうすれば……

ポツリつと守越尊の汗が紙に落ちる。ジワつと怪しげな記号の文字が僅かに歪んだ。

3

彼は追い込まれていた。

向かう先には『^{インケンティウス}魔女狩りの王』、そして振り返れば魔術師ステイル^{インケンティウス}マグヌス。二つに挟まれた彼はどうする事もできなかった。

ステイル^{インケンティウス}マグヌスは笑う。

「どうやら『^{インケンティウス}魔女狩りの王』までは破壊できないみたいだね。そりやそうだろつ、『^{インケンティウス}魔女狩りの王』その意味は『絶対殺す』」

十字架を振り下ろす炎の巨神に彼は右手突き出しそれを防ぐ。ただそれは防ぐ止まりだ。

「灰は灰に」

ステイル^{インケンティウス}マグヌスは右手に炎剣を生みだす。

「塵は塵に」

さらにもう一本、左手に炎剣が伸びる。

「吸血殺しの」

!?

言葉が終わる前に建物中にある火災報知機が鳴り響いた。

嵐のようにスプリングラーの水が天井から降り注ぐ。

そして変化を彼はいち早く感じた。

明らかに目の前の巨神の様子がおかしい。

チーンと電子レンジの様な音が聞こえてエレベーターがこの階に到着した。

勢いよく飛び出して来た二人にステイル・マグヌスと彼は驚いた。背中の女の子に自分の衣服を掛け、上半身裸の守越尊の姿があった。何で戻って来た!? という言葉よりも先に守越尊の言葉が発せられた。

「そいつはもう無敵じゃない!」

その言葉に彼は右手をその巨神に振りかざした。

『魔女狩りの王』は呆気ないほどの音を立てて辺りに散らばる。

その炎は再生される事無くモゾモゾと動くだけであった。

「ば、バカな……僕の『インケンティウス魔女狩りの王』が……そんなハズはない! ルーンを全て破壊しない限り『インケンティウス魔女狩りの王』が負ける事はない! えない!」

「インクは……水に弱かったみたいだな」

スプリングラーの水によってインクが流されるのに比例するように『インケンティウス魔女狩りの王』は力を失い溶けるように消えていった。

彼はゆっくりと魔術師との差を詰めて行った。

「は、灰は灰に」

魔術師は焦る様に唱える。

彼は拳に力を込める。

「ち、塵は塵に」

そして力強くその足を踏み込む。

「吸血殺しの紅十字!」

左右からオオバサミの様な炎剣が彼を襲う。しかし彼がその右手で触れるとその炎は跡形も無く消え去り、

その拳は魔術師の頬へと突き刺さった。
人形の様に飛んで行った魔術師は後頭部から金属の手すりへと激突した。

1 - 1 「出会いと魔術師と」(後書き)

感想等ありましたらよろしく願います。

1・2 「二人の関係は」(前書き)

なんともうポイントを頂けたと言う事でびっくりしています。

1 - 2 「二人の関係は」

4

辺りは救急車と消防車のサイレンが鳴り響いている。

ルーンを破壊するために使用した火災報知機の為、寮は消防車と野次馬で溢れかえりほぼ無人であった寮は人で埋め尽くされてしまった。

彼はインデックスと名乗る少女を抱えて路地裏を歩き守越尊はその後ろについて行くように歩いていった。

彼の名は上条当麻というらしい。

裏路地を歩きながらお互い名前を知らないと言っ事で軽い自己紹介をした。

最初は敬語混じりだったが同じ高校1年なのでこれからは敬語は無した。

「あんた、これからどうするつもりなんだ？」

上条当麻は分からないと答えた。

彼が言っにはその少女を救急車に乗せる事は出来ないと言っ。インデックスにはIDがないからだ。

魔術師ステイル・マグヌスが言っっていた、僕は外の住人だと。上条当麻彼自身もまだ信じる事が出来ないみたいだが、つまりインデックスも魔術師と言っ事らしい。

どうやって入って来たのかは守越尊には分からなかったが、学園都市と言っ所は『外の人間』を嫌っ傾向がある様でIDを持たないインデックスが入院したとなるとその情報はすぐに漏れてしまうそうだ。

ただ、だからと言ってこのままほっておく訳にはいかなかった。

インデックスは先ほどの機械的な冷静さは無く度々発せられる声は弱々しいモノであった。先ほどまでの彼女は一体何だったのかと

疑問に思う事は山ほどあるが今はそんな事を言っている暇はない。

上条当麻は意を決したようにインデックスに言葉を発した。

「インデックス！ お前の一〇万三〇〇〇冊の中に、傷を治すような魔術はねえのか？」

傷を癒す魔術、そんなモノがあるのだろうか？

ステイル「マグヌスは自分を魔術師だと言った。その魔術も目の当たりにした。正直魔術と能力の違いなんて守越尊には分からなかったが、彼が魔術と言ったのだからあれは魔術だったのだろう。そしてインデックスと名乗るこの彼女も魔術師、どうやら彼女は知識に長けている部分があるのでそう言った魔術を知っているのかもしれない。

「……ある、けど」

二人は一瞬喜びかけたが『けど』と言う言葉が気にかかって、

「君には……無理」

インデックスはそう言った。

「例えば私が術式を教えたとしても……痛っ、君の能力チカラがきつと邪魔をする」

上条当麻は自分の右手を見て、またこの右手がわるいのかよ……、と歯を食いしばっている。

インデックスは付け加える様に言葉を続ける。

「君の右手じゃなくて……『能力者』っていうのがもう……ダメなの」

インデックスは真夏の夜にも関わらずまるで雪山に居るかの様に声を震わせてそれでも続ける。

「魔術っていうのは……君たちみたいに『才能ある人間』が使うためのモノじゃなくて……『才能ない人間』がそれでも『才能ある人間』と同じ事がしたいから……生み出された術式と儀式の名が、魔術」

インデックスはその後説明を続けた。

『才能ある人間』と『才能ない人間』では回路が違うらしい。つ

「まりは『才能ない人間』の為に作られた魔術を『才能ある人間』が使う事は不可能だと言う事。」

その話を聞いて上条当麻は絶句した。

「守越尊には完全には理解できなかったが、要するに学園都市の時間割を受けた人間は『脳の開発』が行われているため普通の人間と脳の回路が違うと言う事は分かった。ここはそういう場所なのだから。」

「ただ考えてみる。つまり学園都市の時間割を受けていない人間なら魔術を使えると言う事。」

「なあ？ 俺じゃダメなのか？」

「そう守越尊は学生だが今日引越して来た学生。つまりまだ『脳の開発』の時間割を受けていない。脳の回路は普通の人間と変わらないのだ。」

「俺は今日引越して来たばかりだ、つまりこの時間割は受けていない。だから俺が指示に従って魔術を使えば」

「めで」

「え??？」

「ダメだ。これ以上関係の無いお前を巻き込む訳にはいかない」

守越尊が言葉を言い終わる前に上条当麻はそう言った。

「なんで……と守越尊は聞き返した。」

「お前はインデックスを守ってくれた、そんな相手をこれ以上危険に巻き込む訳にはいかない」

「関係の無い？ 俺はもう既に関わった！ 魔術師も見た、魔術も目の当たりにした！ これでどうして関係無いなんて言える？」

「確かにまだ出会って数時間。関係の無い人と言われればそうかも知れないが、目の前に可能性があるのに、それを前にしてどうして指を銜えて待たなければならぬ？ そう言う気持ちだった。」

「あんたら2人の関係がどんなモノかは知らないけど、俺だって傷ついた女の子を目の前にして、はいそうですか、なんて言っただけで帰れる訳ないだろ！」

上条当麻は少しの間黙ってから言葉を発した。

「インデックスとは今日知り合った」

「じゃあなんで!？」

「インデックスは俺に地獄の底までついてきてくれるかって聞いたんだ」

「じゃああなたはその子と一緒に地獄まで行くっていうのか!？」

「違う、と上条当麻は言った。」

「俺はインデックスを地獄の底から引きずり上げてやる」

その目に迷いは無かった。それは男が何か心に決めた時の目。

それにと上条当麻は言った。俺が一番に関わっちまったから、と。上条当麻とインデックスが出会わなければ守越尊は巻き込まれる事はなかった、だからこれ以上巻き込めないと。

それに

関係の無い人を巻き込むのはこれが最後だ

そう言っつてインデックスを背に歩いて行く姿を守越尊は見送るしかなかった。

5

体が重い、いや心が重いのだろうか。自室のベッドで起きた守越尊はそんな感覚に襲はらわれていた。

昨日、あれから熱ほとほりが冷めるのを待って寮に帰宅した。部屋前の廊下は手すりが曲がっていたり溶けたりしていたがあれだけの炎にも関わらず被害はそれほど大きいモノでは無かった。

グーっと自分のお腹の鳴る音が聞こえた。思い出してみれば昨晩から何も食べていない。

現在は十一時を少し過ぎた頃、朝食にも昼食しも中途半端な時間ではあったがとりあえず何か食べようと台所へ向かったが

「な、何も無い……」

昨日買ったインスタント食品も、そう言えば魔術師との戦いの前

に廊下に落としてそれからどうなったかかは分からない。

もちろん冷蔵庫の中にも何も無い。

「食べに出るか」

守越尊は部屋を出る。

上条当麻の部屋の前を通るが人気は無い。

下から確認してみたがルーンは全て回収されていた。あれだけの枚数を一体どうやって一晩で回収したのか気になるがその辺はやはり『魔術』なのだろう。

そう、守越尊は『魔術』と言うモノに出会ってしまった。

あの時自分が魔術を使えばあの場でインデックスを救える事が出来たかもしれない。だが上条当麻はダメだと言った。関係の無い人間を巻き込めない、そう言って彼はどこかへ行った。

隣の部屋にはどうやら戻って来てはいないようだ。つまりは誰かの所で一夜を過ごしたと言うことだろう。

ただ、もし彼が戻って来た時一体どうすれば良いのか？ 単なる隣の住人として日々を過ごしていくのだろうか？ あんな危険な目に遭っている彼らに目を向けずにいられるのだろうか？

「はあ、関わるなつてのが無理だよなあ……ん？」

何気ない路上にポツンと立つ自動販売機。

その前で何やら女の子が一人、華麗なステップワークからの

「ちえいさーっ！」

「つてえええ！？」

見事なまでの上段蹴りを叩きこんでいた。ズドンつと轟音に次いでガタゴトと中で何か落下する音。

これが普通ですよ、と何食わぬ顔で取り出し口から缶ジュースを取り出す。

おっラッキー、みたいな顔をして『ヤシの実サイダー』と書かれたジュースを開け一口飲む。

日常とはちよつと離れた光景につい見とれてしまっていた。

肩まである茶色い髪に半袖の白いブラウス、サマーセーターとプ

リーススカートに身を包んだ女の子は、何見てんのよ、とばかりに守越尊に睨みをきかせていた。

チラツと見えたがスカートの中には短パンを穿いている。

「何夢を砕かれたって顔してんのよ」

どんな顔か訊きたくなつたがまあ要するに啞然としていると言つ事だろう。

それに女の子が自販機に蹴りを入れる姿なんてみれば誰だつて驚くに決まつている。ただ、平然とやっている姿からは普段からこんな事をしているに違いない。

「いやあ、科学の最先端と言われる学園都市の自動販売機がこんなモノだとは思わなかつたからさ」

「ああ、この自販機ジュース固定してるバネが緩んでんのよねえ。

まあ何のジュースが出て来るか選べないのが難点なんだけど」

と言いながらグイグイとジュースを飲む。

化粧は必要ない程度にデフォルトで整った顔立ちに少しはときめいたりしても良いはずなのだが、先ほどの蹴りを見てしまった所為かそんな感情は浮かんで来なかつた。

寧ろ何か本能が危険を知らせているような感じもした。

そんな事を考えたりしていると、

「おねえ様」

フツと一瞬にして女の子は現れた。

茶色い髪をツインテールにした彼女は後ろから覆いかぶさるように抱きついていていた。

（おねえさまって……あれ？ どこかで……）

「は、離れなさい黒子。こんな道の真ん中で」

顔をぐいぐい押されても一向に離れようとしないう黒子と呼ばれる女の子。

寧ろ押し返されることを望むかのように止めようとしないう。

「わたくしとおねえ様の『愛』を周囲に見せつけるチャンスですよ」

バチンつと火花が飛んだ気がしたが

「いい加減に……しなさい!!」

気がしたのでは無く、瞬間、彼女の体から雷撃の槍が発射される。が、その青白い火花がツインテールの女の子に直撃する事無く彼女は消え、すぐに地面へと着地する。

もうおねえ様だったら、なんて言いながらようやく守越尊の存在に気が付いたようだ。

「あら、あなたは……昨日の、またお会い致しましたわね」

ああ、と守越尊もそこまで来てようやく思い出した。昨日不良に絡まれた時に現れた、

「確か……ジャツシメント風紀委員、だったっけ？」

「ええ、わたくしジャツシメント風紀委員第一七七支部、白井黒子といますの。で、あなたはおねえ様とはどう言っただご関係で？」

何か視線が痛い様な気もしたが

「今初めて会ったばかりなんだけど……さっきの電気は能力なのかな？」

まあ、と驚いた様な顔をして

「おねえ様をご存じなくて?? この方こそ学園都市に7人しかいない超能力者（レベル5）の一人、常盤台中学のエース、超電磁砲レールガンこと御坂美琴おねえ様ですわ」

とまるで自分の事のように力説してみせた。

学園都市内の事情は全く分からない守越尊であったが、この学園都市に七人しかいないと言う事から凄い能力者なんだなあと感心していた。

「で、黒子はなんでここにいの？」

「わたくしはただおねえ様リーダーが反応したので立ち寄っただけですわ。お仕事ですので」

と盾の腕章をポンポンと叩く。

「そのリーダーってのもあなたの能力なのか？」

「いえいえリーダーと申しますのは、わたくしとおねえ様の愛し合

う心が呼び合う運命の赤い糸と」

ガツン、と言う見事な音と共にもの見事な拳骨が白井黒子に降り注いだ。

もちろん放ったのは御坂美琴だ。

「見ず知らずの人の前で何有りもしない事言ってるの！ 本当に勘違いしたらどうすんのよ！」

うそなのね……

まったく、もう。と言いながらスタスタと歩いて行く御坂美琴を追いかけるように白井黒子を駆けて行く。

まるでコントを見ているようであった。

それに仕事がどうかこうとか言っていた気がしたが……

何て考えるが

それよりも

「飯……食べないと」

訴えかける様に鳴り響く腹の虫に急かされるようにその場を後にした。

1・3 「ミサカ」(前書き)

やはり時間軸などが難しいですね、かなり調べてはいるんですが、多少の誤差とつはご了承ください。

とある店で食事を済ませた守越尊はただ行く当てもなく歩いていった。

部屋に帰った所で何が出来る訳でもない。もし昨日の事が無ければ何も考える事も無くただ新学期が来るのを待つだけの夏休みを過ごしていたであろう。

だが知ってしまった。魔術、狙われているインデックス、それを守ろうとしている上条当麻、そんな事を忘れて日常に戻る事が出来る訳がない。

ただ上条当麻が一体どこへ行ってしまったかなんて事は全く分からない。ならインデックスの事は彼に任せた方がいいのだろうか？
上条当麻とインデックスが無事に帰ってくることを待つしかないのだろうか？

「まさか部屋ほったらかしでもう帰って来ないなんて事はない……よな？」

いつの間にか日は既に傾き、オレンジ色の空が徐々に黒に変わり始めようとしている。

そろそろ戻ろう、と公園に差し掛かった時

(あれは……)

守越尊が見つめる先には木の陰に隠れるようにしゃがみこむ少女の姿があった。

肩まである茶色い髪に整った顔立ち、白い半袖のブラウスとサマーセーターとプリーツスカート。その姿は先ほど出会った御坂美琴であった。

木の根元には猫が一匹座っており、どうやらそれに餌を与えているようであった。

「また会ったな」

彼女はその声に気が付き無表情のまま首だけを振り向かせる。

「どちら様でしょうか？ とミサカは質問します」

向けられたその瞳は一点に集中せず常に視界に映るモノを追いかけている様な焦点の曖昧なモノであった。

さつき会ったはずなんだけど、と思ったがそう言えば向こうはこっちの名前を知らない事を思い出す。

「俺は守越尊って言うんだけど、名前は御坂美琴で合ってたよな？」
「けど彼女は少し首を傾げる様に」

「御坂美琴ですか？ とミサカは問い返します。ああ、お姉さまの事ですね」

「え？ って事は」

「妹です、とミサカは間髪いれずに答えました」

おかしな口調だなあとと思うが、喋り方何てのは人それぞれだ。自分の場合は他人の事を「あんた」と呼んでしまう癖がある様に、個人個人だ。

「姉妹だったのか、であんたの名前は？」

「ミサカの名前はミサカですが、とミサカは即答します」

……まあ、家庭の事情に首を突っ込めるほど偉くは無いのでミサカが名前なのだろう。

御坂ミサカ??

「えええと、それあげないのかな？」

守越尊はその手に握られているチヨコレートを指さす。

「ミサカがこの猫にチヨコレートをあげたとしても食べる事は無いでしょう、とミサカは結論づけます。猫は力カオに含まれるテオブロミンを代謝できないため、チヨコレートを与えてはいけません。大量に与えたり長期にわたって与え続けると、腎臓や肝臓に障害の出るチヨコレート中毒になるおそれがあります、とミサカは懇切丁寧に説明します。なお、ネコは甘味を感じないため基本的にチヨコレートを好みません、とミサカは補足説明します」

「……じゃあ何であげようとしてるんだ？」

「ミサカは外に出る事が初めてですので猫と言う生物と自分の知識が正しいかどうか確認をしていました、とミサカは説明します」

（外？ 初めて？）

気になる事はあったが、乙女の秘密を無理に聞く事もない、とみことは思いとどまるってうつつてるし！

あ、と不意に猫は雑草の中に隠れるようにして逃げてしまった。

逃げてしまいました、と寂しげそうな感じに見えたが相変わらず表情が変わる事は無かった。

「なあ、あんた今からどっか行かないか？」

（俺は何を急に言い出してるんだろっ）

「どこか、と言う言葉には計画性を感じることができません、とミサカは忠告します」

確かに計画性何てモノは無かった。

それに何故そんな事を言い出したのか自分でもよく分からなかった。

「理由は知らないけどあんた外初めてなんだろ？ 俺も昨日引越

して来たばかりで街の事良く分からないから、そう、探検だよ探検」

「探検という言葉は分かりかねますがミサカは研修中ですので、と

ミサカは簡潔に答えます」

ただ普通に女の子と街を歩いたり、ご飯を食べたりしてこれまでの日常に戻るうとしているのかもしれない。

「なら飯だけでもどうだ？」

「……食事と言うモノには些か興味があります、とミサカは呟きます」

なら、と守越尊は手を差し出した。

何ですかその手は？ と言う様にその焦点の曖昧な瞳を向けて来る。

そしてスツと立ち上がり、置いてあった大きなゴーグルらしきモノを手に取ると歩き出す。

おいつ、と声を掛けそうになるがそれよりも先に彼女はこちらを振り返って

「何をしているのですか？ とミサカは問いかけます。食事に行くのではなかったのでしょうか、とミサカは再度確認をとります」

しかしあるいは日常に戻るのではなく、彼女から日常と離れた何かを心のどこかで薄々感じ取っていたのかもしれない。

7

食事と言ったがミサカが提案してきたのはファーストフード店であつた。

バーガーとどこにでもありそうな店に入ってミサカは店員にスマイルを注文していた。

本人曰く

ファーストフード店には無償で注文が出来るスマイルと言うモノが存在すると言う知識があつたのでそれを確認した、

との事であつた。

もちろんの事、店員は完璧に作りきつた一〇〇点満点ものスマイルを披露した。

「ミサカは自分自身の対人応答能力の高さを確信します。先ほどのハンバーガーの注文およびあなたとの会話からミサカの対人応答能力は人並み以上である事を、ミサカは自信を持って宣言します」

ハンバーガーを口に放り込みながらミサカは呟いていた。

確かに話し方などに多少違和感はあるが、彼女は初めての割にまるで注文から受け取りまでのマニュアルみたいなモノが頭の中にあるかのように思えた。

「なあ、超能力ってどう言ったモノなんだ？」

話す話題が見つからなかった守越尊は不意にそんな事を聞いてみた。

「超能力とはですか？ とミサカは呆れたように問い返します。あ

あ、あなたは引越して来たばかりと言っていましたね、とミサカは納得します」

ミサカは飲んでいたジュースを置き話し始める。

「ここに一つの箱があります、ではこの中には何が入っているでしょう、とミサカは問いかけます」

ミサカは先ほど猫にあげていたチョコの箱を取り出して机に置く。

「そりゃ、チョコに決まってる」

「この中には飴が入っています、とミサカは言います」

……いや、さつきチョコ入ってるの見だし

「ではこの箱の中には何が入っているでしょうか？ とミサカは再度質問します」

「飴が入ってるんでしょ？」

「いいえ開けてみなければ分かりません。何故ならミサカが嘘をついているかもしれないからです、とミサカは説明します」

……

「つまりこの箱の中には『チョコが入っている可能性』と『飴が入っている可能性』の2つが可能性が混ざっています、とミサカは説明します。ただ、箱の中にはどちらか1つしかありません、とミサカは補足します」

ミサカはその箱を軽く振って見せる。

「二つの可能性は蓋を開ける事で『一つの結果』になります。チョコ五〇％飴五〇％から『見る』事でチョコ一〇〇％に替えてしまう事です、とミサカは丁寧に説明します」

スツとミサカが蓋を開けると中にはチョコが入っていた。では、と再び蓋を閉じて

「この中には先ほどの二つの可能性が混ざり合っています。この何かには何が入っていますか？ とミサカは質問します」

「さつきチョコが入ってたけど……」

「はい、普通の人であれば『チョコ五〇％』を取るのが妥当でしょう。ただその中に『飴五〇％』を取れる人がいればどうなるでしょう。

う、とミサカは問いかけます」

そうなる箱の中身は飴になって……

「通常とは異なる現象が起きるって事かな？」

「その通りです、とミサカはあなたを初めて感心しました」

つまり、超能力の正体とは『それ』である。

現実にある様々な可能性、『手から炎を出す可能性』『人の心を読む可能性』それら九九%の常識からあぶれたたった1%の『異なる可能性』こそが異能力。

ただ、たからこそ万全では無くこの箱には『チヨコ五〇%飴五〇%』以外の可能性は0%であるため、ここからガムが出て来ると言った事は無い。可能性の『ない』場所や条件では力を使う事は出来ない。

「つまり超能力者とは、この『チヨコ五〇%飴五〇%』の『現実を見る力』が普通の人とはズレてしまった人たちを指します。能力開発に用いられるガンツフェルト実験は意図的に五感を封じる事によって『通常の現実』から切り離すモノで、まともな現実から切り離された『超能力者』は、一般人とは異なる『自分だけの現実』パーソナルリアリティを手に入れます。その結果、常人とは異なる法則でミクロの世界を歪め、触れずして物を破壊したり、電気を発したりと言った『力』を手にする事ができます、とミサカは懇切丁寧に説明したミサカに盛大なる拍手を所望します」

難しい事を言っているのだが、どうしてか守越尊の頭の中にはそれらがスツと入って来た。

ミサカは自分で自分を褒める様にパチパチと拍手をしていた。

8

店を出た二人はただ歩いている。

話のネタがあまりにも無さ過ぎる。能力についての説明もまるでコンピュータに入っている情報を丸々話すかのようにミサカが説

明してくれた為、今思いつく限りでは聞く事がなかった。

日も暮れた街中を男女二人が歩いていると小恥かしい気もしたが、ミサカはそう言った素振りを見せる事無く平然と歩いている。

そろそろ時間を確認しようと思い、携帯を開こうとすると

「現在午後八時〇五分になりました、とミサカは申し上げます」

「ああ時間教えてくれたのか、ありがとな」

しかし、ミサカはこちらを向く事もなく何かを確認するように辺りを見回す。そして大きなゴーグルを水泳のゴーグルの様に額に着けると何かに導かれるように道を逸れて歩き出す。

「おい、どこ行くんだ??」

ミサカは振り向くと、軽く頭を下げ

「ミサカはこれから用がありますので失礼します、とミサカは頭を下げます」

そして普通では決して通らない様な裏路地へと姿を消して行く。

他人の用事に突っ込むのも気が引けたが、どうも気になる、腑に落ちない。

ミサカには悪いが……

後続く様に裏路地へと入って行った。

思った以上に入り組んでいなかったその裏路地のおかげですぐにミサカの姿を確認する事が出来た。

ただ彼女は先ほどまでには無かった大きなケースを抱えている。

(あんな物どこで……?)

一定の距離を保つように影に隠れながら追跡する守越尊。

淡々と同じペースで歩き続けるミサカは裏路地の奥深く、人気の全くない通路に來た所でようやく立ち止った。

その目の前には

(人と待ち合わせ? こんな所で?)

「時刻は八時二五分でとこか、ンじゃ、オマエが屋外『実験』第一号って事で構わねエンだな?」

暗くて顔はハッキリと見えなかったが、少年と思われる人の引き

裂かれる笑みの口から発せられた声は鋭く尖ったモノであった。

それでもミサカは表情一つ変えずに

「はい、ミサカの検体番号は九八〇三号です、とミサカは返答します」

「相変わらず平然としてるよなア、この状況で。まア初の屋外『実験』って事で俺は緊張してんだけどさア」

「本当に緊張しているのですか、とミサカは疑問に思います。被験者には瞳孔の拡大、呼吸の乱れ、脈拍の異常などが検出されません、とミサカは観測いたします」

あアそうかい、と少年はゆっくりと距離を詰めて、そしてある程度の所で立ち止まる。

沈黙が続く中ミサカは大きなケースから何やら取り出し、彼女はゴーグルを着用するとそれを構える。

その手に握られているのは……

(ライフル!?)

「絶対座標X - 419808、Y - 630703。現在午後八時二十九分四五秒、四六秒、四七秒　これより第九八〇三次実験を開始します」

彼女は手に握られたアサルトライフル引き金を引いた。

衝撃と共に発射される五・五六ミリの弾丸が少年の急所へと叩きこまれる。

守越尊は目の前で戦争映画でも見らされている様な状況に声を出しそうになるが、その弾丸は少年に当たると同時に四方八方へと弾かれる。

ミサカは愕然とする、びずっ、と肉を潰す音が聞こえると同時にミサカの左肩に赤い穴が穿たれていた。

弾かれた弾丸の一つが彼女の肩を撃ち抜いていた。

「……………ぎー」

彼女の体がよろめく。

守越尊はその姿を見て飛び出そうと手に力を入れた

瞬間、少年は薄気味悪く笑うと追い打ちを掛ける様に壁をドンと叩く。すると壁は何かを伝う様に揺れ、上にあつた何かの機械が激しい音を立てて落ちて来た。

そしてその衝撃で守越尊の上にあつた数本の鉄棒も落下する。

一瞬の出来事に守越尊は対応できずにその1本が守越尊の背中から後頭部に激しく打ち付けられた。

「がっ……」

前のめりに倒れた守越尊は後頭部を強く打つた所為で意識が朦朧としていた。

その意識の中、爆発音と共に倒れて来た血まみれのミサカと目があつた。

!!!

彼女は一瞬驚きの表情を見せた。

が、意を決した様に立ち上がると少年に向かって走り出した。

それはまるで守越尊から少年を遠ざける様に。

意識が途切れそうな彼に聞こえて来た銃声と少年の笑い声。

意識が途切れたその場所は最早日常では無かつた。

1・3 「ミサカ」(後書き)

感想頂けたらうれしいです。

1 - 4 「逃走の裏」(前書き)

久々の投稿になります。

一応まだ原作に沿っています。

目が覚めて見えたのは知らない天井だった。

とにかく白い。天井だけでなく床も壁も全てが白一色に染められている。

ただカーテンの揺れる窓の外は燦々と降り注ぐ太陽の光によって空は青く木の葉は緑色で、ここがいつも通りの世界である事を教えてくれる。

ガラガラ、とトビラの開く音。

目が合ったその白衣を身に纏った男性は恐らく医師であろう。

「やあ、目が覚めたようだね」

小太りで胸にアマガエルのシールを張り付けた医師は自分の顔がカエルに似ている事を理解しているのだろう。最早その事をネタにしている。

「ここ……は？」

「ここは病院だよ。まあ無理もないね、丸1日眠っていたんだからカエル顔の医師はそんな事を言いながら聴診器を守越尊の胸に当たる。

ひんやりとした金属が肌に触れ、ドクンドクンと正確に刻まれる鼓動が自分の中から聞こえて来るのがこちらからも分かる。

丸一日。

何故丸1日も眠る事になってしまったのか？ ここは病院だ。つまり自分は気を失っていたと言う事。

守越尊は記憶を辿る様に何があったのかを思い出す。

一昨日の夜ミサカと言う少女に会って、食事をした。その際に能力についての説明をしてもらった。

能力者は自分だけの現実、パーソナルリアリティを手に入れる事

によって能力を手にする。

話しをした後街を歩いて、彼女が別れて後を追って

その後……

そう言えば、とカエル顔の医師は何かの思い出した様に

「あの女の子にはお礼を言っておいた方がいいだろうね。制服から常盤台中学の生徒かな？ 茶髪で大きなゴーグルを掛けた女の子。君をここまで運んでくれたんだから」

「そうだ……先生！ その子も怪我してませんでしたか！？ 撃たれていたりしてませんでしたか！？」

そう、ミサカはあの男と交戦して肩を撃たれて、最後の記憶では彼女は傷を負い血を流していた。

それにも関わらずカエル顔の医師から返って来た言葉は耳を疑うモノであった。

「いや、彼女には怪我どころかかすり傷一つなかったよ。ただ言葉使いが少し気になったくらいじゃないかな？」

え？ と守越尊は戸惑いと隠せない。

そんな事は無いはずだ。あの夜確かに彼女は傷を負っていた。肩を銃弾で撃たれ出血し倒れた彼女の顔は既に血で染まっていた。

それなのに、かすり傷一つ無かったと言うのはどう言うことだろうか？

しかしこのカエル顔の医師が嘘をついている様には思えなかった。ではあの夜起きた事は何だったのだろうか？

10

病院での検査の結果は異常なし。

身体及び脳波にも異常は無いとの事で守越尊は退院した。もう1日くらい入院する事をカエル顔の医師はオススメしたが守越尊は帰る事を選択した。

日が暮れた道をただ一人で守越尊は歩いている。

その顔は腑に落ちない、納得できない、そんな面持ちだった。

あの夜、ミサカと言う少女と会った事は彼女が病院まで運んでくれた事から事実だ。じゃあどこまでが事実なのか？

傷を負い血を流すミサカを守越尊を見た。だがカエル顔の医師は怪我は無かったと言う。この矛盾は何か？

もしあの夜の出来事が本当に無かったのだとしたら何故病院に運ばれた？

何よりもこの背中や後頭部の小さな傷は何か？

これは間違いなくあの時に出来た傷だ。それはハッキリ思い出せた。

「何がどうなつてんだ？」

ますます混乱の渦に飲み込まれていく。

本人に会って確かめるのが一番早い事なのは分かっている。彼女はどうかやら常盤台中学の生徒である事はカエル顔の医師から聞いた。

ただ今は夏休み。学校に行ったからと言って会える訳でもない。それに時刻はもうすぐ8時になるうとしている。日の暮れた今日はもう無理だ。

「とりあえず今日は戻ろう。っとその前に」

守越尊は財布の中身を改めて確認する。先ほど病院を出た時に確認したがやはり中身はほぼゼロ。お金を下ろす必要がある。またラッキーな事に少し行った所にコンビニらしき建物が見えている。とにかくお金を下ろそうとそのコンビニへと向かう事にした。

三〇〇メートルほどの距離。

五分も掛からないであろうその距離を歩いて行くのだが、
「あれ??」

何やら見覚えのある白い修道服に身を包んだシスターさんがこちらに歩いて来るのが見えた。

「い、インデックス？」

「あつ、君はこの前の」

両手に洗面器を抱える少女はもう元気だった。

あれだけの傷を追いながら彼女は一命を取り留めていた。つまりは上条当麻が一先ずインデックスの命を助ける事が出来たと言う訳だ。

血に染まっていたはずの修道服もまるでクリーニングに出した様に純白。安全ピンで止めてある事からあの時の物である事は間違いない。

これも魔術の力なのだろうか？ そんなモノがあっても不思議ではない。何せあれだけの傷を治してしまう魔術があるのだから、服の汚れを落とす魔術くらい朝飯前なのだろう。

しかしインデックスだけでこんな所を歩いているのはおかしい。いくら銭湯が男女別々のモノだったとしても上条当麻が一緒に行かない訳がない。インデックスは狙われているのだから。

「所で上条とう」

言葉を出し切る前に

何かがおかしい事に気が付いた。

どうやらインデックスも何かを感じる様で辺り見渡している。

辺りの静まり返った様子はあまりにも不自然過ぎる。

人通りの少ない道なのだろうか？ と辺りを見回すが、人が少ないのでは無い。

人がいないのだ。

並び立つ建物に出入りする人さえ見受けられない。見渡す限りの無人の道路。

信号機の光、風力発電のプロペラ、そう言ったモノだけがいつも通りに仕事をしているのだが、まるでこの場所だけ違う世界に切り離された様な感覚。

日常では無く、異常であった。

「これは」

「人払い。対象となる相手と自分以外の人を退けるルーンの種類」

インデックスはそう答えた。

ルーンと言う言葉は聞いた事がある。

それは数日前、インデックスを回収すると言った男が使っていた。それは数日前、一人を平気で殺そうとした男が使っていた。

カツ、と無音の背後からの足音。

最早振り向く事をしなくても何となくその正体は分かった。

金髪を赤色に染めた髪に右目のまばたの下にバーコードの形をした刺青が刻み込まれてある。
タトゥー

暗闇から姿を現したのは数日前男子寮を襲った魔術師ステイル
マグヌス。

その表情は初めて会ったあの時と変わっていない。

口の端で火のついた煙草が揺れている。

「やあ、また会ったみたいだね」

その顔を見た瞬間、無意識に拳に力が入った。

ステイル「マグヌスが放つ炎は一瞬にして人間一人を簡単に殺せてしまう。なぜ上条当麻が無事なのかは分からないが、彼の能力に違いない。

しかし自分はどうかだろう？ 能力すらない、魔術が使える訳でもない。

後ろには狙われる少女インデックス。この状況で彼女を守れるのは自分しかない。

手が震えている。もしもあの炎が自分に当たってしまえばそこで命は終わってしまう。

「とうまはまだ向こうなんだよ」

インデックスの突然の声に守越尊は我に帰る。

何の返答かと思いきや先ほどの途中まで言いかけた質問に対する答えであった。

となると、やはり自分一人で彼女を守らなければならない。しかし戦った所で勝ち目が無い事くらい分かっている。

魔術師との距離は約十メートル。

「ここは」

グツと足に力が入る。この状況での最良の選択は

「逃げるしかないよな。インデックス！」

ぱつと一八〇度回転すると二人は全力で走り出す。

インデックスも大方同じ事を考えていたらしくほぼ同時に走り出した。

人をかき分けると言う行為は必要ない。この一帯は人払いのルーンによって無人である。ただ走るのみ。

しかしそれは向こうも一緒である。だれもいないと言う事は

「灰は灰に、塵は塵に」

左右の手から炎剣が伸びる。

「吸血殺しの紅十字！」

思いつきりやれると言う事。

轟！ と放たれた大バサミのような炎が水平に襲い掛かる。

「インデックス！ 頭を下げる！」

頭を大きく下げた二人の頭上三〇センチを大バサミの炎が通過して行く。

直撃は免れた、と安心するのもつかの間、

その炎は通過し数メートル先で爆発音と共に大きな炎の壁となって2人に立ちふさがった。

（ やられた ）

ステイル「マグヌスが放った炎は二人に向けられたモノではなく、前方へ放ち二人を足止めさせる事が目的だった。

が、気付いた時には前方は大きな炎の壁であった。

道路幅一杯に広がる高さ二メートルの炎を越えて行く事は不可能であった。

近くに水もない。ただあったとしてもこの炎が水なんかで消えるとは思えない。

振り返る先にはステイル「マグヌスがゆっくりと歩いて近づいて来るのが見える。

ふ、と視線の右に

「インデックス、こつちだ！」

見えたのはビルとビルの間にある裏路地への入り口。

インデックスの手を引き、滑り込むように裏路地へと入って行く。捨てられたゴミが異様な匂いを放っているように瓶から流れる液体を踏もうが、ただ裏路地を走った。

後方から放たれる炎は二人の手前で爆音と共に燃え上がる。2人に当たる事は無かったが、それは足を止めた瞬間に炎に包まれてしまふ事を意味する。

一〇分ほど走った。するとまるで自分たちを見失ったかの様に炎が飛んで来なくなっていた。

ただ振り返るが闇の向こうに魔術師がいるのかどうか分からない。とにかくその引く手を離さないように出口へと走った。

光が差し込む裏路地の出口。走り抜けた先には

「人がいる」

先ほどまでの雰囲気と違い、周りには所々にカプルの姿や学生の姿が見える。つまり人払いのルーンの影響を受けていないと言う事だ。

裏路地の方に目を向けるが炎が飛んでくる事も無かった。

「逃げ切ったのか？」

フウと大きなため息と共に力が抜けた。

裏路地を通った所為かうまく撒く事が出来たみたいだ。隣でインデックスも「やったあ」と手をあげて喜んでいる。

魔術師ステイル「マグヌスから逃げ切ると言うとにかく自分の出来る最善を尽くした。」

後は上条当麻と

上条当麻は大丈夫なのか？

ふとそんな事が頭に浮かんだ。

ステイル「マグヌスが現れた時インデックスは、上条当麻はまだ向こうだ、と言っていた。つまりはあの近くに上条当麻は居たと言う事だ。」

かつて魔術師ステイル「マグヌスは『僕たち』と言った。インデックスの傷も炎では無く何かによって切られたモノであった。

つまり、ステイル「マグヌスばかりに気を取られていたが、魔術師は最低でももう一人いる。その仲間が上条当麻を襲っていると言ふ事は無いだろうか？

ステイル「マグヌスが放った炎に自分たちを直接狙うモノは無かった。それがただ単に時間稼ぎだとしたら？ 上条当麻から離れさせる為のモノだとしたら？

ただ本当に撒いた可能性もある。

しかし上条当麻の安否を確認するためには戻る必要があった。

来た道に戻る事は危険極まりない事であるが守越尊は嫌な予感がしていた。

インデックスにも理由を説明すると二人は再び裏路地へと入って行く。来た道全てを覚えている訳ではないが、大体なら覚えている。小走り気味に裏路地を進む二人。改めて見てみると色々なゴミの臭いが混ざり合い複雑な臭いを放っている。自転車や何かの電化製品のゴミ、無残に捨てられた生ゴミなど、こんな所を通ってきた自分を感心していた。

先ほどとは少し離れた場所に出た二人は小走りを止める事無く道に戻った。

風が止んだ所為か風力発電用のプロペラはほとんど回っていない。辺りに人が居ない事から未だにルーンが刻まれている。つまり近くに魔術師が居る可能性は十分あり得る。しかし二人の足は止まらない。

片道三車線の大通りに出た所で二人の目に入って来たモノは、一枚だけがまるでレーザーか何かによって切断された風力発電用のプロペラ。切り刻まれた街灯や街路樹。粉々に砕かれたアスファルト。その真ん中に

ワイヤーか何かによって切り裂かれ血まみれになった右腕。

体中に無数の切り傷。

ボロボロの体で

上条当麻は倒れていた。

「と、とうま！」

インデックスは上条当麻に駆け寄るが、体中の力を全て使い果たして人形のようにピクリとも動かない。

上条当麻の意識は無かった。

心臓は脈を打ち、呼吸もしている。生きている。

ただこの場に長いは出来ない。どう言う訳か魔術師の姿は見えず襲ってくる様子も無い。

守越尊はとにかくこの場を離れる為に上条当麻を背負い立ち上がった。

いくら上条当麻が細い部類に入ると言っても高校生の男子だ。インデックスの時とは違いズシッと体重が押し掛かる。ふらつきながらも少しでも早くこの場から立ち去る為に守越尊は力を入れる。

その様子をビルの屋上から見つめる二人の魔術師が居た事は守越尊とインデックスに知る由もなかった。

1 - 4 「逃走の裏」(後書き)

最近他の作家さんがどんどん実力をつけてこられているので焦り美味なんですよね……
頑張ります。

感想アドバイス等いただけるとうれしいです。

サブタイトルが思いつかない……

1・5 「小さな目覚め」(前書き)

サブタイトルが適当過ぎる気が……
地味にサブタイトルって難しいですね

1 - 5 「小さな目覚め」

11

インデックスの案内で辿りついた場所はとてつもなく古いアパートだった。この地震が来たら一発でお釈迦になってもおかしくないアパートがお世話になっている上条当麻の先生、月詠小萌の自宅らしい。通路に洗濯機が置かれてある事から風呂場が部屋に無く、どうやらその為に銭湯に向かっている最中の出来事だったようだ。

初めて月詠小萌を見た者は彼女が教師である事を信じがたいだろう。

身長一三五センチ。赤いランドセルにリコーダーを横付けして通路を歩いている姿がよく似合う外見の持ち主だ。

しかしビール好きのヘビースモーカーであり、部屋の中には灰皿に大量の煙草の吸殻を溜めこみ部屋の彼方此方にビールの空き缶が転がっていた。そう言ったモノを見る限りやはり大人なのであろう。

二日。

既の上条当麻は二日も眠り続けていた。

インデックスは上条当麻につきっきりで看病に励んでいる。険しい面持ちで上条当麻を見つめながら額にあるタオルを取り替えている。少し不慣れな手つきではあったがその姿はシスターそのものであった。

「インデックス、休まないで大丈夫なのか？」

「大丈夫、とうまの看病は私がするんだよ」

彼女の疲労は目に見えている。守越尊が見る限り彼女が休んでいる所を見た事がない。さすがに睡眠はとっているだろうが、日中は上条当麻の傍を離れる事無く看病し続けている。

上条当麻がステイル・マグヌス以外の魔術師に襲われた事に相当責任を感じているようであった。

「俺そろそろ帰るな」

「うん分かったよ、みこと」

彼女は上条当麻から目を離す事無くそう言葉にした。

時刻は二二時を回っている。

時間が来たから帰ると言うのではなく、月詠小萌が気を使って部屋を開けるように守越尊の気遣いであった。それに例え彼女に看病を代わると言った所で却下されるであろう。

帰り道例の大通りに差し掛かった。

二日前この場所の上条当麻はボロボロになって倒れていた。

切り裂かれたプロペラは既に工事が住済んでいるようで元の三枚プロペラとなつて仕事に励んでいる。道路や街灯も既に修復されていた。こう言つた所はさすが科学の最先端学園都市である。

そう言つたモノを見ながら何気に辺りを見回すと

「ん??」

様子がおかしい。

先ほどまで見えていたカップルの姿や賑わう学生の姿が見えない。

この一帯が夜の森の様に静まり返っている。聞こえて来るのはビ

ルの隙間を通り抜ける僅かな風の音。

こんな感覚は以前味わつた事がある。

そうこれは

「人払いの刻印ルンですよ」

不意に聞こえて来た女の声。

一回の瞬きで誰もいなかった場所に突如現れた女性はTシャツに片足だけ大胆に切つたジーンズと言う姿。長い一本に束ねられた黒髪を風に靡かせ腰から拳銃の様にぶら下げた長さ二メートル以上ある日本刀が殺気を放ちながら揺れている。

守越尊は気付けなかった。彼女の声が聞こえるまで存在にすら気が付かなかつた。

「初めまして、神裂火織と申します」

黒い鞄に納められた日本刀。人払いの刻印。インデックスは背中

を刃物の様なモノで切られていた。上条当麻の傷も何かに切り裂かれたモノ。

「あなた、魔術師だな」

「ええ、出来れば魔法名は名乗りたく無いのですが」

魔法名、ステイルⅡマグヌスが名乗った『殺し名』。そして全てが一致する。インデックスを切ったのも上条当麻を襲ったのも、この神裂火織だと。

自然と拳に力が入る。

「止めて下さい、危害を加えるつもりはありません」

「危害を加えない？ 何を言っている、あれだけインデックスと上条当麻を傷つけながら良くそんな事が言えるな」

しかし守越尊の拳は震えている。相手はあの上条当麻でさえかなわなかった相手だ。ステイルⅡマグヌスの炎を退ける力を持っていたにも関わらず、上条当麻は手も足も出なかった。

彼女には傷一つ見当たらない。

「ではこうしましょう、あの子は……インデックスはどうしていましたか？」

質問の意図が分からなかった。仮にもインデックスを狙っている魔術師がどうして彼女の事を訊く必要があるのか？

「インデックスなら上条当麻の看病に付きつきりだ」

そうですか、と何故か神裂火織の表情が一瞬緩んだ気がした。どこもなく悲しくそして安心するような。

しかしすぐにその表情は戻ってしまふ。

「何で敵のあなたがインデックスの無事を確かめる様な事を訊く必要がある？」

「それは……私たちがあの子の仲間であり親友だからですよ」

意味が分からない。仲間？ 敵の間違いじゃないのか？

「貴方はインデックスの事をどこまで知っていますか？」

昨日、インデックスからはある程度自分におかれている状況を訊いた。

インデックスの頭の中には一〇万三〇〇〇冊の魔道書は全てを使えば世界を捻じ曲げる事が可能であるとか、それを狙っている魔術師に追われているとか、一年くらい前からの記憶が無い事とか。他にも色々話を聞いた。

それらは信じがたい事であったがインデックスが嘘を言っている様には見えなかった。

神裂火織は言う。

インデックスの頭の中は一〇万三〇〇〇冊の魔道書を記憶する事に八五%を使用している。その為に彼女の脳の容量は残りの一五%しかない。普通の人間なら問題にならないことだが彼女は完全記憶能力の為『忘れる』と言った行為が出来ない。その所為で残りの一五%の脳は一年でパンクしてしまう。

だから自分たちが記憶を消した。

インデックスが一年前からの記憶が無いのはその為である。

自分たちを敵だと思っているのも記憶が無いから。

「インデックスの脳はあと一日が限度でしょう。私たちは明日あの子の記憶を奪います」

「何だよ……助ける為なら背中切っていいのかよ。あんなに小さな子を、敵になつてまで追い回さなきゃダメなのかよ。他のどうする事も出来なかつたのかよ！」

「言いたい事は分かります……貴方も上条当麻と同じなのでしょう」
それは一秒にも満たない時間だったかもしれない、一瞬再び彼女は悲しげな表情を見せた。

だからこそ

「貴方にはここで引いて頂きます。もう他人が辛い思いをするのは嫌なんです」

神裂火織は鞘に手を当てた。

「貴方も明後日になればインデックスの記憶には残っていません。分かりますか？ これ以上関係を深めた所で傷つくのは貴方なんですよ？」

そりゃそうだ。人間がもつとも傷つくのは忘れられる事だ。人の死は命が尽きた時では無く人に忘れられた時。そう言われるくらい人から忘れられると言う事は人を傷つける。

神裂火織が言っている事は嘘ではないだろう。時折見せる彼女の辛そうで悲しそうな顔がそれを証明してくれる。

「それでも嫌だと言ったら？」

自分だけが逃げるみたいで嫌だった。

「そう言うと思っていました。簡単な事です、貴方には病院で寝ていてもらいます。貴方には何の力もありません、私たちがインデックスの記憶を消す邪魔をして来た所で何の害もないでしょうが万が一の可能性もあります。それ以前に……苦しみを味わうのは私たちだけで十分です」

チン、と言う小さな音と共に

『七閃』

瞬間、目の前を砕かれたアスファルトや街路樹の細かい破片が砂埃の様に舞っていた。

風圧が頬を掠める様に通り過ぎ、守越尊を避けるように地面を七つもの直線的な傷が十メートルほど走っていた。

「私の七天七刀が織りだす『七閃』の斬撃速度は一瞬と呼ばれる時間間に七度殺すレベルです。再度問います、それでも引いて頂けませんか？」

ワザと外された。

七つの内の一つさえも見えなかった。聞こえたのは刀と鞘が触れる金属音、そして後に続く風の音だけ。

それは威嚇だった。七つの斬撃が当たれば神裂火織が言う様に間違いなく病院で寝る事になるだろう。恐らくそれですら手加減されている。

冷たい汗が頬を伝って落ちた。

「引けるかよ。いくら力が無いからって、知っているのに関係無い、巻き込みたくないから、そんなんで俺だけ蚊帳の外に置かれるのは

懲り懲りだ」

「　　そうですね、なら仕方ありません」

『七閃』

轟音と共に目の前の地面が破裂し体が後方へと飛んだ。

庇った右手は斬撃によって血まみれになり、砕いたアスファルトが無数の破片となって体に突き刺さった。

「が……っ！」

背中から地面に叩きつけられた衝撃で肺の空気を持って行かれた。全身に痛みが走りギシギシと骨が軋む。

たった一度の攻撃で何十発の攻撃を喰らった様に足はふらつき、骨は痛み、右手は血まみれになり。

それでも大きく息を吸い込み、歯を噛みしめて守越尊は立ち上がる。

「どうしてそこまでして立ち上がるのですか？」

「　　何でって、あんな女の子が傷つく事が分かっていて、上条当麻があれだけ傷だらけになって、そいつらの為に何かしてあげたい。

……理由はそれだけで十分だろ！」

一瞬にして神裂火織は距離を詰めて。

「分かって下さい、あの苦しみを他人に味わってほしくありません」

ゴス、と神裂火織の右手が守越尊の腹部にめり込むように深く突き刺さった。

「がっ……、は……っ！」

まだ食事を取っていなかった事が幸いし胃の中の物が出て来る事は無かったが、それは一般人を気絶させるには十分な威力だった。

俺はまた何も出来ないのか……

力がないから？

力があれば誰かを救えるのか？

力があれば……

膝、上半身と崩れ落ちる様に地面へと倒れた守越尊。それを見つめる神裂火織の表情はどこか辛そうにも見えた。

彼女は人を傷つける事が嫌う。しかし今回はこうしなければ守越尊は間違はなく苦しみを味わってしまう。少しでもインデックスとの関係を切る事が苦しみを和らげてくれると信じて、彼女は守越尊を見降ろした。

まずは彼を病院へ運ぶ必要があった。言った以上そうする義務がある。

と神裂火織が守越尊に手を掛けようとした瞬間
ピク、と僅かに指が動いた。

咄嗟に神裂火織は距離を取ってしまった。

何故そんな事をしたのか自分でも不思議なくらい、増して彼は意識を失っている。加減はした。ただそれであっても普通の人間なら数時間あるいはそれ以上の時間は意識を失っているはずだ。何より彼の体は七閃によりボロボロのハズである。

しかしそれはゆっくりと立ち上がる。下を向いたまま、無言。暗闇に溶け込む様にその体の力は抜け立っているのがやっと。

そうであるはずなのに神裂火織の手は無意識に七天七刀の柄へと向かっていた。

『七閃』

もう放つつもりは無かった。しかし体が勝手に反応したと言っしかない。

七つの斬撃は一瞬にして大きな轟音と共に地面を切り刻み砂埃を巻き上げる。先ほどとは違い走る斬撃はレーザーの様に地面を深く切り刻み、地雷が爆発したように拳よりも大きなアスファルトの破片が地面から飛び交い巻き上げた砂埃は辺り一面を覆った。

一瞬の時間に七度殺せる全力の七閃。加減をする事が出来なかった。七つの斬撃をまともに食らっては普通の人間なら生きてはいない。

「クッ」

神裂火織は嘔みしめ、目の前で起こってしまった事に悔いた。

この戦いはただ彼をあのみ苦しめから遠ざけるだけのハズだった。

インデックスとの関係を切つてあの悲しみを彼に与えない為に。
しかしそれどころか彼をこの手で

ゆらりと何かが動いた。

十メートルほどの距離。七閃を放つたその中心で辺りの地面は斬撃によつて削られ、生きた人間がいない八ズの場所にそれは立っていた。

ボロボロの体で、右手は血で染まり、それでも立っていた。
ありえない。

神裂火織は驚きを隠せない。加減なしの七閃を生身の人間が受けて無事で済むはずが無かつた。

しかしそれはゆっくりと歩み寄つて来る。フラフラの足取りで無言のまま。

右の瞳は青に染められ、暗闇にただ一つ光る星の如く天上から全てを見降ろす様な青さで神裂火織を見つめていた。

一歩一歩ふらつきながら腕は振っているのでは無く足を踏み出すごとに小さく揺れ、力尽きる寸前の状態である事は間違いない。

それでも神裂火織はそれを目の前に表情を歪め動揺を隠せず七天七刀の柄から手を離す事が出来ない。最早相手の事よりも自分の危険を感じていた。

それとの距離は五メートルを切ろうとしている。

チン、と言う金属音と共に

『七閃』

七つの斬撃が瞬時にアスファルトを砕き地面を走る様に滑走していく。七閃の斬撃速度は一瞬に七度殺せる速さ。その速さを避ける事など普通の人間には不可能だ。

しかし神裂火織が目にしたものは、その斬撃を歩みを止める事無く避ける守越尊の姿。

まるで何が起こるのを見極めた様なその動きは人の域を超えている。

「あ、貴方は一体」

ピタ、とその歩みが止まる。その距離は二メートル。

クツ、と神裂火織は再び七天七刀に手を掛けその刀を抜こうとしてドサ、とそれは倒れた。

まるで電池の切れたロボットの様に地面へ崩れ落ちた。

何か起きた訳ではない、守越尊の体が限界を迎えたと言ったのが正しいのかもしれない。そんな感じで守越尊は動かなくなった。本当の本当に意識を失い眠りに行った。

1・5 「小さな目覚め」(後書き)

毎回言っている気がしますが、原作に沿って行く事は難しい。
前書きでも言いましたがどうなるかは分かりません。
ご了承ください。

感想等頂けると嬉しいです。

1・6 「残ったモノ」(前書き)

ちよつと短めです。

お気に入り10件ありがとうございました。

これから少しでも楽しんで頂けるように頑張ります。

1 - 6 「残ったモノ」

12

真っ白な天井、壁、床、部屋のほとんどが白一色で覆われた病院の一室。守越尊はつい数日前に同じ光景を見ていた気がする。とは言うモノのこうやって天井を眺めているのは既に今日二回目だ。

ベッドの傍の窓は開いていて外から入って来る季節に似合わぬ涼しげな風が白いカーテンを爽やかに揺らしている。

守越尊は上半身を起こそうと体に入れた。

「痛てて、やっぱキツイな」

体を起こすのは今日二度目だから体が悲鳴を挙げている事くらい分かっていた。骨と言う骨はギンギシと痛み、有りと有らゆる筋肉は昨日ウエイトトレーニングを一日中やっていたのではないかと思えるくらいの筋肉痛を引き起こしている。思う様に体が動かない。

上半身を起こすだけの動作に歯を食いしばらなければならぬほど体はボロボロだった。

ふう、と自然に息が漏れる。

ガラガラ、とドアの開く音。姿を現したのはカエル顔の医師だった。

「やあ、また会ったね」

どう聞いても皮肉にしか聞こえないモノであったが仕方がないだろう。正直、守越尊もこんなに早くまたこの顔を見る事になるなんて思っていなかった。

と、カエル顔の医師は何やら真剣な表情で守越尊に近づき

「君、もしかしてナーズ属性なの？」

「……何ですかそれ」

真剣な表情から飛び出した言葉に呆気にとられる守越尊。

「ほら君一週間の間に二度も入院してきてるし、そう言った患者は

看護婦の中で噂になるね？」

要するに看護師目当てで入院しに来ているのではないか？　と言
う事らしいのだが……

確かにここ数日の間に入院を二度もする事になってしまった。か
と云つて別にナースが好きだからとか、病院でのナースとの出会い
に期待しているだとか、ナースとの疚しい事を目的としているだ
とかそう言う趣味は無い。

何だ残念、と残念そうな顔をしながら部屋を出て行くこととするの
は少し問題かもしれないが、

「そう言えば手紙は読んだのかな？　そこに飾つてある花と一緒に
君を運んで来た背の高い女性が今朝持つて来たモノだよ、と言うか
前は違つた女の子だったね？　君、案外モテるのかな？」

なんて言いながら、また来るよ、と言葉を残し部屋を後にするカ
エルが顔の医師。

医師の言う花と言うのは白い部屋に一か所だけ彩られた場所にあ
る少し赤みがかつた青い紫陽花あじさいの事である。

花言葉は『元気な女性』と言うらしい。

手紙と言うのはこの枕元に置かれてあつたこれである。

差出人は『神裂火織』となつている。

『怪我を負わせた本人が言うのも何ですがお怪我は大丈夫でしょう
か？　ただあれは貴方に私たちと同じ痛みを味わつてほしくない
と言う想いからの行動と理解して頂きたいと思います。』

謝罪代わりと言つては何ですが、貴方が眠つている間に起きた出
来事を軽く報告しておきます。単調に言いますとインデックスの問
題は上条当麻が解決してくれました。私たちが何年かかっても解決
出来なかつた事を彼は成し遂げてしまつたのです。そのお陰でもう
あの子の記憶を消す必要が無くなりました、本当に彼には感謝して
います。病室も隣になりますので一度顔を出してあげて下さい。

貴方とはまたいずれ会う事になるでしょう。それまで上条当麻と
共にインデックスをよろしくお願いします。短い文となりましたが

謝罪と報告とさせて頂きます。』

こう言った内容になっていた。

「てかどこまでボコボコにすればこんな体になんだよ？」

と、改めて体を捻ったり背伸びを試みるが……

ピシ、と電気が走った様な感覚に歯を食いしばる。

右手はチクチクと針を刺す様な痛みが走り、体幹部分では腹筋が役に立たない。上体を起こそうとした時にも腹筋だけでは起き上がる事が出来なかった。もはや腹筋がずつと酸欠状態なのではないかと疑いたくなるほどの使い物にならない。

しかし彼女にやられたくらいでこんなにも体がボロボロになるのだろうか？

確かに神裂火織は強かった。と言うよりも守越尊は手も足も出なかった。ただ体を改めて見たが外傷は思いのほか少ないのだ。

右手は包帯でグルグル巻きみされている所や痛みから外傷はある程度あるみたいだ。ただその他の部分では斬撃による切り傷やアスファルトがぶつかった所や最後に殴られた腹部に青アザが見られるが、それでもこの体の痛みとは比例しない気がした。

どちらかと言えば外部からではなく内側から痛めつけられた感じだった。

13

ぎゃあああ、と言う絶叫が病棟中に響き渡った。

声の主はどうかやら隣の病室の彼の様だ。

軋む体に鞭を打ち、ベッドの横に置いてある松葉杖を左手に持つてゆっくりとした足取りでドアへと向かう。

ドアを開けると同時に白い修道服のシスターが部屋の前を通り過ぎて行く。

元気そうではあるが何やら不機嫌そうな動きとプンプン、と言う効果音付きで廊下を歩いて行った。

きつと紫陽花にはこう言う意味が込められていたのだと考えながら守越尊はゆつくりと廊下を歩いて隣の部屋へと向かう。

立った瞬間に違和感があったが廊下を歩き始めてそれは確信に変わる。

「足が一番酷いんじゃないか？」

重いのは体では無く足自身だ。まるで鉛をぶら下げられた様に重く鉄球でも引きずっているかの様に足が前へ出ない。膝を曲げて足を上げる動作も難しい。一歩一歩足を踏み出す毎に痛みが全身を走り回る。

足の筋肉を全て破壊されてしまったかの様に見事に足は動いてくれない。

それでも松葉杖に体を預けてゆつくりと確実に前へと進む。

たった十メートルほどの距離だったが今はそれ以上に感じた。

ようやくドアの前に辿りついてドアノブに手を掛けた所で

『けど、あれで良かったのかい？』

そんな声が部屋の中から聞こえて

『君、本当はあの子の事も何も覚えていないんだろ？』

ガラガラ、とそのドアを開いた。

ふらつく足を出来るだけ速く動かして。

自室と同じように真っ白でカーテンがヒラヒラと揺れる部屋。一

人はカエル顔の医師、そしてベッドに座るもう一人の彼が見えた所で

「覚えてないってどう言う事だ!？」

守越尊は会話に割り込んだ。

二人は驚いた表情でこちらを向いている。カエル顔の医師は、聞かれちゃったね？ みたいな顔で上条当麻を見つめ、その上条当麻は一瞬表情を曇らせたがこちらを見つめて

「いやあ、何の事だか？」

飽くまで白を切る。

「じゃあ、俺の名前を言ってみる」

それは……

上条当麻の言葉が詰まる。

あれだけの事を一緒にやっておいて覚えていない訳がない。

「君たちは知り合いみたいだね？　なら彼くらいに知っておいてもらってもいいんじゃないかな？」

カエル顔の医師は上条当麻にそう告げた。

「記憶喪失？」

立っている事に辛くなった守越尊は上条当麻のベットの足元に横側から足を放り出し腰かけながらそう聞き返した。

「正確に言つと記憶破壊になるね？　脳細胞ごと思い出を破壊されているからまず思い出す事はないと思つよ？」

医師は語る。

二人の魔術師と名乗る男女が上条当麻とインデックスを病院に運んだ事。

その内の一人はその昨晚に守越尊を連れて来た事。

上条当麻の脳は魔術によつて破壊された事。

その他にも魔術師と名乗る二人から聞かされた話を医師は話す。

代償は大きすぎた。上条当麻はインデックスを助ける為に自分の記憶を失ってしまった。

「インデックスには伝えてあるのか？」

第一にそれが気になった。インデックスの事だ、自分の所為で上条当麻の記憶が無くなったと知れば大騒ぎになるところでは済まないハズだ。

だから返つて来たのも

「いや、あの子には伝えてない」

その答えだった。

ただどうやって誤魔化す事ができたのか？

「イマジンプレイカー幻想殺しで防いだつて事にした」

「イマジンプレイカー（幻想殺し）？」

どうやら上条当麻の右手にはイマジンプレイカー幻想殺しと呼ばれる異能の力があるようだ。それは神の作った奇跡ルルさえも殺す力があると言つ。

もちろんこれもカエル顔の医師から聞いた話しだそうだ。ただ上条当麻にしてみれば自分の右手にそんな力があるなんて言われても信じられない話である。

ただ守越尊は思い出す。かつてステイル・マグヌスと戦った時に上条当麻の右手が灼熱の炎を打ち消した事を。魔女狩りの王イノケンティウスの攻撃を防いだ事を。あれはこの幻想殺しの力によるものだと今確信を得た。

つまりインデックスには

魔術が脳に達する前にその幻想殺しイマジンプレイカーでその魔術を打ち消してしまつた。

と言う事にしてしまつたみたいだ。

何故インデックスが怒つていたかと言うと、記憶を失つた振りをしてインデックスをからかった後、幻想殺しイマジンプレイカーで防いだから覚えていゝる、と言う『ウソ』をついたからだ。

「でも先生も良くそんな話を信用しましたね？ 魔法とか魔術師とか、そう言つたモノって医師には一番遠い存在じゃないですか？」
「案外そうでもないんだよ？ 病院とオカルトってものは意外と密接な関係だね？ 宗教によつては輸血や手術もダメ、命助けても裁判沙汰つてのがよくある話だからね？ 医者にとつてのオカルトって言うのは『とりあえず患者の言う通りにしておけ』って意味なんだよ？」

とカエル顔の医師は得意げに話してくれた。

「あんたはこのままでいいのか？ インデックスに真実を伝えたりはしないのか？」

守越尊は上条当麻に質問する。

ウソをつき続けると言う事はこれから先知らない事でも恰も知っている様に振る舞わなければならぬ。

しかし、これでいいんだ、と彼は答えた。

「なんかあの子にだけは泣いて欲しく無いって思ったから、覚えてなくたつてそう思えたから」

上条当麻は純粹に微笑んでいた。

それだけ上条当麻はインデックスの事を守りたかったって事。嘘
をついてまでインデックスの笑顔を守りたかったって事。

だから

「 当麻が言うなら俺もそうするよ」

インデックスには内緒のままが一番良いと思う。

上条当麻の思い出は死んでいる。守越尊と一緒にステイル「マグ
ヌス」を退けた事も、月詠小萌先生の家にお世話になっていた事も、
神裂火織にボロボロにされた事も覚えていない。もちろんインデッ
クスと過ごした日々何てモノも記憶には残っていない。全て脳細胞
ごと壊されてしまったんだから。

一体なぜそんな事を思えたのか？

どうしてインデックスだけは泣かせたくないと思ったのか？

そんなモノは

脳が覚えていなくなたって『心』に残ってたって話した。

1 - 6 「残ったモノ」 (後書き)

今回は無理やり話を原作に繋げた感じになってしまいました。少しずつオリジナリティを出していきたいと思っています。

感想等頂けるとうれしいです。

2・1 「再び公園で」（前書き）

お気に入り登録も14件になりました。ご愛読ありがとうございます。

これからも少しでも多くの方に読んで頂けるように頑張りたいと思います。

2 - 1 「再び公園で」

1

八月一七日

とある寮の一室。特に散らかっている訳でもなく、片付いている訳でもない。ただ単に荷物が少ないだけ。そんなまだ余り生活感の溢れないモノ寂しい雰囲気が残る部屋の真ん中で二人の少年は向かい合っていた。

一人はこの部屋の主の守越尊。まだ数回ほどしか使われていない新しいベッドに腰かけながら目の前の光景をため息混じりに、まるで同じ失敗を繰り返す部下を目の前にする上司の様な表情で見つめていた。

数時間前、二週間以上に及ぶ入院生活から解放された守越尊は久しぶりに自室で朝を迎えていた。ベッドの棚に置かれている目覚まし時計は午前八時を指しているのだが次に時計を見るのは午前九時となる。この約一時間守越尊が何をしていたかと言つと

二度寝だ。

二度寝ほど気持ちの良いモノは無い。朝、目を覚ましてからもう一度眠りに入れると言つ幸せな気持ち、幸福感、まさに祝福の時と言えよう。

ちなみに何故二度寝が気持ち良いかと言つと二度寝の最中は睡眠が浅い状態にある為、寝ていながらも寝具の心地よい感触がなんとなく感じられるという状態である事と、完全に覚醒している訳ではないので視覚や聴覚などが半分遮断された形となり、起きている時に比べて光や音の刺激がやわらいで感じられるからだそうだ。

まあ実際の所、二度寝に入る際にそんな詳しい事を考えた事は無い。二度寝は気持ちがいい、その結論さえ分かっていたら十分だ。

しかしそんな祝福の時は一人の少年よって終わりを迎える事とな

った。

隣の住人、上条当麻である。

朝の九時前後に響き渡った彼の悲鳴によって守越尊は現実世界に引きずり戻された。

そんな上条当麻が今日の前にいるのだ。

「で、何をしたらそんな風になるんだ？」

テーブル越しに座るもう一人の少年上条当麻は右頬に真っ赤な紅葉マークを張り付け、体の有らゆる場所に何かに噛みつかれた歯型が残っている。おまけに左目には喧嘩で殴られた様なアザが目の周りを覆っていた。

上条当麻が言うにはそれは不可抗力だったと言う。

それは午前九時前の事。

上条当麻は訳あって自室のバスタブの中で睡眠と取っていた。硬く冷たい床は今の時期となつては逆に気持ちがいいそうだ。

そんな場所に一人で眠っているハズの上条当麻にどうしてか水の流れる音が聞こえて来た。シャワーの流れる音。まだハッキリとしない意識の中、上条当麻は丸まった姿勢から上半身を起こすのだが、そこには生まれのままの姿でシャワーを浴びる少女の姿があった。歳は十四か十五で外国人らしい純白の肌に腰まで伸びた白銀の髪。鼻歌交じりに胸元にシャワーの水を浴びていた少女はこちらを向いて時間が止まった。

彼女の名前はインデックス。この上条当麻の部屋に寝泊まりするシスターであり、上条当麻がバスタブを寝室とする原因である。

部屋に一つしかないベッドはこのインデックスが使用している訳であつて、健全な高校生である上条当麻は間違いを起こさない為にバスタブで睡眠を取っているのだが……

うっかり風呂場のカギをかけ忘れた上条当麻と上条当麻がバスタブで寝ている事をすっかり忘れていたインデックス。二つの偶然が重なりこの不幸は訪れた。

あ、あの、ええっと……

とりあえず、

「お、おはよう」

瞬間、頭を丸かじりされた少年の悲鳴が寮内に響き渡った。

二度も見られた！　なんて叫ばれながら強烈なビンタを喰らい、桶が飛びシャンプーやボディソープの容器が飛び、おまけに飛んで来た椅子は左目にクリティカルヒット。これでもかと言うほど体中を歯が襲い、何故か自室を締め出されて、

今に至ると言う訳だ。

「て言うか、今の話しだと以前にも当麻はあの子とそんな事があつたみたいだけど……まあ覚えてないよな」

上条当麻は記憶喪失なのだ。

記憶喪失と言っても全てを忘れた訳では無く、脳内に蓄積されていた『思い出』のみがゴルフのグリーン上にカップを開けるみたいにごつそり抜き取られた感じだ。つまりはその他の知識は生きていく。『おはよう』が朝の挨拶のだったり携帯電話の使い方だったり、そう言った事は覚えているのだ。

「はあ、記憶が無くなる前の俺はあの子に一体何をしたんだ……」

とは言うものの、直接インデックスに訊く事も出来ない。

彼女には上条当麻が記憶喪失と言う事は秘密だからだ。インデックスだけでは無い、ここにいる二人（+カエル顔の医師）以外には知られない様になっている。

その中でもインデックスだけには知られてはならない。それは思い出を失う前の上条当麻から思い出を失った上条当麻へ唯一受け継がれたモノと言えるのかもしれない。

初めてインデックスを見た瞬間この子だけは泣かせてはいけない、そう思う事が出来たと言う。それだけ上条当麻はインデックスの事を大事に思っていたと言う訳だ。

とりあえずどうにかしないといけないと言う事で上条当麻の部屋のドアのノックしてみるモノの応答がない。上条当麻曰く、基本的にインデックス一人の時はドアを開けるな、と言う事になっている

そうなので守越尊だと言う事を名乗ってみる。

ガチャ、と鍵の開く音が聞こえてドアがゆっくりと開かれるのだが、

ブスつとした表情で

「後ろにとつまがっているんだよ」

なんて言いながら再び施錠される始末。

どうにか交渉でドアを開けてもらって上条当麻を中に押し込む事に成功したのだが、後は上条当麻の頑張りしだいである。

再びこの寮全体に悲鳴が轟かない事を祈りつつ守越尊はエレベーターに乗り込んで寮を後にした。

2

時刻は午後二時過ぎ。守越尊はある建物の前にいた。

どこか歴史ある洋館の様な石造りの三階建ての建物は常盤台中学の学生寮だ。

初めて来るにも関わらず一寸の迷いも無くこの場所に到着できたのは『第七学区・常盤台中学学生寮前』なんて言うバス停が存在するからだ。

情報によるとこの常盤台中学はこの学園都市内で五本の指に入るエリート学校であり、生粋のお嬢様校であると言う。

ただ守越尊が出会った常盤台中学の学生と思われる少女は三人。

一人は自動販売機に見事な上段蹴りをヒットさせジュースをタダ飲みする少女。もう一人はその少女に好意を寄せ人前にも関わらず大胆な行動を取るツインテールの少女。

この二人を見ただけでも本当にお嬢様校であるのか疑問に思ってしまうのだが……

正面玄関前まで来た守越尊は横壁にいくつも並んであるポストの中から二人の名前を発見する。

二〇八号室、御坂美琴・白井黒子

「ああ、二人は同部屋なのか」

すぐ隣にインターホンがある。マンションと同じように電卓式のボタンがあり、部屋の番号を押せば直接その部屋に繋がるみたいだ。(ええっと二〇八っと)

カチツとインターホンを押した所で

そう言えば、向こうはこっちの名前知らないんだった……

ブツツと言うインターホンのノイズと共に

「えと、あのう、御坂さんいますか？」

なんて言う改まった声での質問。相手は年下の中学生にも関わらずどうしてもこう言った機械の前では敬語みたいなモノを使ってしまうみたいだ。

『お姉様はただ今外出中ですが、どちら様ですか？』

どうやら声の主は白井黒子の様だ。

「ああ、守越と言いますが、一応白井さんとも二回ほどお会いした事があるんですけどね」

……

数秒インターホンからの返答が途切れて

「あら、あなたでしたの」

その声は後から聞こえた。

振り向く先には先ほどまでインターホンで会話をしていた白井黒子がいた。

「そんなに驚かなくてもよろしいのでは？ 私^{テレポート}はただ空間移動でこ

こに来ただけですの」

改めて便利な能力だと痛感する。ちなみに寮内では能力の使用は禁止されているのでご内密にとの事。

「守越さんでしたわよね？ お姉様にどう言ったご用件ですか？」

自分の物を取られまいとする獣の様な威圧を感じる。

「用があるって訳じゃないんだけど」

「まあ、用も無いのにお姉さまに会いに来るなんて。あなたストーリーか何かですか？」

「いや、そうじゃなくて妹の事を訊きたいと思って」

守越尊が出会った少女の三人目はミサカの事である。

守越尊にとってインデックス以上の謎めいた少女であった。

あの夜の出来事が入院中何度も頭に浮かんできた。あの夜は間違いない存在した。にも関わらずカエル顔の医師は彼女に怪我は無かったと言いつ張る。

しかし最後に見たのは間違いなく血にまみれそれでもあの男に向かって行くミサカの姿だ。

ミサカ自身の事、あの少年の事。そしてその少年が口にしていた『実験』と言う言葉。

知りたい事は山ほどあった。

この学生寮に来たのも彼女が常盤台中学の制服を身に纏っていたのでここに来れば居場所が分かるかもしれないと思ったからだ。

しかしながらポストを見ても彼女の名前は無く、あったのはミサカの姉である御坂美琴の名前だけだったのだ。そうなれば姉の御坂美琴を頼るのは当たり前である。

それなのに目の前の白井黒子は頭の上に『？』が付いていそうな表情で首を傾げている。

「姉にそっくりな妹だよ。ここに名前がないからどこにいるのか訊きたかったんだけど、あんた分かるかな？」

あれだけそっくりなのだ。同じ学校にいれば嫌でも目立つしどこにいるかなんてのはすぐに分かると思っただのだが、

何を言っていますの？ と白井黒子は呆れた表情で

「お姉様に妹などいませんわ」

そんな驚くべき一言が返って来た。

え???

守越尊は聞き間違えたのではないかと思って訊き返した。それでも「ですから、お姉様に妹などおりませんの。何か勘違いされていますっしやるのでは？」

やはり聞き間違えではなく返って来た答えは同じだった。

御坂美琴に妹はいない。

そんなハズは無かった。彼女は確かに

「妹です、とミサカは間髪入れずに答えました」

そう言っていた。御坂美琴の事を「お姉様」と言っていた。

白井黒子が嘘を言っている様には見えない、増して四六時中御坂美琴と一緒にいていそうな彼女が妹の存在を知らないと言うのがおかしい。

ミサカが嘘をついているのか？　しかしあれだけ似ていて他人の空似と言う事もないだろう。

だとすると大げさな考え、存在がバレてはいけない理由があるのだろうか？

学生寮を後にしバスに乗り込んだ守越尊はそんな事を考えていた。あの後、白井黒子にはやっぱりストーカーだったのだ、お姉さまは渡しませんだの色々な事を言われたがそんな事は気にしてはいなかった。

とにかくミサカが御坂美琴を見つけるしかない。

バスを降りた守越尊はある場所に向かって歩いていった。学園都市は広い。闇雲に探したとしても二人に出会う可能性は低いだろう。

だからまずは初めて出会った場所を探すのが筋、と言う事で守越尊はミサカと初めて出会った公園を目指した。

既に空はオレンジ色に変わっている。街行く人たちの数も次第に減って来ていた。

正直出会える可能性はゼロだと思っていた。学園都市全体で二三十万人、単純計算で一学区一〇万人。そんな中から一人に出会えるとしたら運命と言えるかもしれない。

しかし彼女はいた。

初めて出会った公園で、同じ木の下。肩まである茶色い髪、半袖

の白いブラウスにサマーセーター、灰色のプリーツスカート、そして額には大きな軍用ゴーグルを引っかけている。

御坂美琴ではなく、その姿はミサカで間違いなかった。

最早これは何かの運命なのか？

そんな感情を心にしまいつつ守越尊はミサカへと近づいていった。

2・1 「再び公園で」(後書き)

感想等ありましたらよろしく願います。

2 - 2 「妹達（シスターズ）」（前書き）

ミサカと運命？の再会を果たした守越尊はどうするんでしょうか???

駄文、+内容が今一かもしれませんが……

2 - 2 「妹達（シスターズ）」

4

彼女は立ったまま木の根元を見降ろしていた。

初めて出会った時の様にそこに猫がいる訳でもないのに、ただラフの様な草が生い茂っているだけの場所を見つめていた。

近づく気配に気が付いたのか、ゆっくりと首から上だけで振り向いて守越尊を見る。

「あなたでしたか、とミサカは呟きます」

その姿は以前と何も変わる事は無い。視界に映るモノを全てを追いかけている様な焦点が曖昧の瞳、少し変わった口調、感情を表に出さないその表情、額に付けられた軍用ゴーグル。

体のどこを見ても傷一つ見当たらない。

既にあれから三週間近く経っている。傷跡が残らないのも不思議ではないかもしれないのだが。

（もしかしたら見えてない部分に傷跡があるのかも……）

何て考えながら生唾を飲み込んだ所でハッ、と自分が危ない領域を想像しようとしていた事に気が付く。

慌てて首を左右に振って妄想を振り払う。

「こんな所で何やってんだ？ 猫でも探してるのか？」

と言う今思いついた質問をしてみる。確かに以前この場所に猫はいたのだが、発した言葉は単なる話しかける為の口実である。偶々そこが猫のいた場所であっただけで話題は何でも良かった。そう考えていたのだが、

「はいそうです、とミサカは返答します」

自分で質問をしておいてその質問の答えが yes だった事に正直驚いていた。

しかしよく見てみると

「ああ、それをあげるつもりだったのか」

その手にはマタタビが握られていた。

「マタタビを猫に嗅がせると恍惚状態になるとの事前情報がありましたので一度見てみたかったのですが、とミサカは理由を説明します」

ミサカは手に持っているマタタビを少し持ち上げて、軽くその手を振るとマタタビは一定のリズムでフサフサと揺れている。

「まさかあれから毎日ここに来てるとかそんな事ないよな？」

「いえ、そんな事はありません。今日は偶々この近くに用がありましたので立ち寄っただけです、とミサカは質問に答えます」

じつと数週間前に猫のいた場所を見つめるミサカ。その顔は無表情で感情の無いロボットの様で、ただ数秒に一回瞬きをする以外は全く動く事が無い。呼吸をしているのかさえも怪しいくらい物静かな表情だ。

しかし、守越尊にはその下を見つめる顔が何故か寂しそうに、そしてすぐにいなくなってしまうようで、そんな風を感じた。

「探そうか？」

不意にそんな言葉が守越尊の口から飛び出した。

「何をでしょうか？ とミサカは問いかけます」

「だから 猫」

正直猫くらいすぐ見つかるだろう思っていた。可能性は無きにしても非ず、三週間も前に出会った猫が一番なのだろうが、この際猫なら誰でもいいだろう。

本来の目的も忘れた訳ではなかったが、困っていたら何故か力になってあげたい、そんな事を考えてしまうタイプの人間の様だ。

しかし、すぐに見つかるだろう、と言う簡単な気持ちで始めてみたのは良かったもの

「なんで……一匹もないんだ？ 野良猫くらい一匹いてもいいだろ……」

街中となれば裏路地、建物と建物の間といった場所に猫がいそう

なイメージがある様に、公園と言えば草むらに一匹くらいは猫がいそうなイメージがあったのだが、

そう言ったイメージを尽く潰して行くかのように最早毛玉すら見当たらなかった。

公園のブランコに腰かけながらため息を漏らす守越尊と、その隣のブランコに同じようにして腰かけるミサカ。

既に空はオレンジ色から紫色へと変わっている。公園の周りにある数本の街灯と少し離れた所にある自動販売機が光を放つだけで、その公園には当たり前前の如く二人以外の人の姿は無かった。

周りに人はいないものの、他人からみたら恋人みたいに見えるのかな？　なんて事もチラツと考えながらとりあえず、

「悪かったな、見つからなくて」

ミサカが猫に会いたがっていた様に感じたので言い出した事なのだが、（実際はどう思っていたかは不明）

終わってみれば全くの成果なし。

多少は自信があった為残念な気持ちが大きかった。そしてそれに追い打ちを掛けるかの様にミサカの言葉が発せられる。

「いえ、初めから期待はしていませんでしたので、とミサカは心の中で呟きました」

（期待されてなかったんだ……）

ミサカはブランコを前後に少し揺らしながら、今だ手に持っているマタタビを見つめながらクルクルと回している。

親指と人差し指で回す度に実の部分がブルンブルンと回る。

「このマタタビは使い道が無くなってしまいました、とミサカは残念そうに呟きます」

その姿を見ている限りでは期待していなかったと言ってもやはり猫に会いたかったのだろう。

しかし、ふと何かを思い出したようにミサカはブランコの揺れを止めて、スツとそのマタタビを超越尊へと差し出して来る。

「……俺は猫の代わりにはなれないぞ。そんなマタタビ相手にミヤ

とか言つてゴロゴロするスキルは持ち合わせて無いからな」

そう言う訳ではありません、とミサカは呟き

「マタタビの名前の由来の一つに、マタタビを食べた旅人の疲労が回復し又旅が出来た、と言うモノがありますので捜索に疲れたあなたの疲労を回復させる為にもミサカはあなたに」

「いや疲れて無いし、疲れてたとしてもマタタビは食べないし！」

そうですか、とミサカはスツと立ち上がり今まで持っていたマタタビをブランコの上に置く。

そして何事も無かつたかの様にその場を後にしようとするのだが、
「ま、待てよ！」

守越尊は猫を探しに来た訳でもない、マタタビで遊ぶ為に来たのでもない。

「あんだ、今からどこへ行くつもりだ？」

ミサカはそつと振り返る。

振り向いた彼女の顔は何も変わらない。視線も表情も感情を持たない人形のように眉一つ動かさない。今まで何とも思わなかつたかつたその表情が今となって何故か恐ろしく感じていた。

「ミサカはこれから用事がありますので、とミサカは理由を説明します」

以前にも聞いたセリフだ。

あの日ミサカは同じセリフを言った後裏路地へと消えて行った。

そしてそれをこっそりと追いかけた守越尊は、一人の少年と会うミサカを見つけてその後

「一つ聞かせてくれ。あの時俺を病院まで運んでくれたのは、あなたなんだよな？」

「はい、ミサカで間違いありません、とミサカは申し上げます」

「じゃああの血を流していたあんだは何なんだ？　なんであれだけの事があつて無傷で俺を病院に運べるんだ？　あんだは確かに傷を負っていた、傷が回復でもする魔術でも使えるのか？　そもそも

」

『実験』ってなんだよ

ミサカは今までほとんど即答していたにも関わらず今回即答して来ないと言う事は考え込んでいるのだろうか？

しかし分からない。何せ表情は全く変わらないのだから。

そしてミサカはゆっくりと口を開く。

「魔術と言つ言葉は分かりかねますが、ZXC741ASD852 QWE963、とミサカはあなたを試します」

「な、何を言つて」

「今の符丁を解読出来ない時点であなたはやはり『実験』の関係者ではありませんね、とミサカは確信します。ですから何もお話しする事は出来ません」

話し終わると同時にミサカは体を反転させて歩き始めるのだが、その足は数歩進んだだけで止まってしまふ。

「何をしているのですか？ とミサカは疑問を投げかけます」

ミサカの目の前には守越尊が立っていた。

「行かせない、あなたは今から『実験』に行くつもりなんだろ。何であんたがあんな事しないといけないんだ？」

「それは、ミサカはその為に作られた様なモノですから、とミサカは答えます」

つ・く・ら・れ・た？？

その言葉の意味が理解出来なかった。人を表現するには間違っている、人間は生まれて来る者だ。作られる者では無い。

「あんたは、御坂美琴の妹じゃないのか？」

「はい、ミサカはお姉様の量産軍用モデルとして作られた単細胞クローンシスターズ妹達です、とミサカは答えます。もうよろしいでしょうか？ とミサカは問いかけます」

ミサカは表情一つ変えずにサラツと言つてのける。自分が今どんな事を言っているのか分かつているのだろうか？

守越尊には分からない、彼女が何を考えているかなんて。

そんな言葉の中にも引つかかる言葉が、

妹達??

「ちよつと待て、達? って事はあんた以外にも」

「はい、ミサカの検体番号シリアルナンバーは九九九九号です。とミサカは申します」

あ、と守越尊は三週間前を思い出す。

『はい、ミサカの検体番号シリアルナンバーは九八〇三号です。とミサカは返答します』

彼女はそんな事を口にしていました。そして『九八〇三次実験』そうとも言っていた。

つまり、単純に考えても約一万人のミサカがいると言う事とそれと同じだけの実験があると言う事。

ゾク、と何か嫌な予感がした。

もしこれらが本当だとした場合、あの夜の出来事の謎が解決してしまう。

傷だらけのミサカが何故無傷で病院まで自分を運べたのか、

「おい、俺が初め出会ったミサカは……どうしたんだ?」

「検体番号シリアルナンバー九八〇三号のミサカは死亡しました。とミサカは報告します。心配はいりません、ミサカは『実験動物』ですから」

そんな事を言っけても彼女の表情は変わる事は無い。さらに彼女は続けて

「ミサカは電気を操る能力を応用し、お互いの脳をリンクさせて記憶を共有させています、とミサカは説明します。あなたを多少なりとも実験に巻き込んでしまった事はここに謝罪しましょう、とミサカは頭を下げます」

守越尊は言葉が出て来なかった。

一体どこの二次元か液晶の中の話をしているのだろうか? そう思いたくなる。

聞いては行けないような言葉がいくつか発せられた。

死亡? 実験動物?

「ふざけるな……何が心配ないだ」

守越尊は歩き始めようとしていたミサカの前に仁王立ちの様に両

手を広げて立った。

「何のつもりでしょうか？ 話せるだけの事は話しましたが？ とミサカは警告も含めて申し上げます」

「そんな実験に行くと分かって見す見す通せるとでも思ってるのか！？」

最早何も考える事が出来なかった。とにかくミサカを行かせてはならない、そう湧いて来た気持ちだけで守越尊は彼女の前に立った。「そこをどいて下さい、とミサカは再度警告します」

しかし守越尊は動かない。

「そうですね、しかたありません、とミサカは残念そうに呟きます」
ミサカはゆっくり歩き始めると守越尊に近づいて行く。

実験の妨害と見られる行為の対象法をマニュアルに照らし合わせて確認します。この場合もつとも安全かつ効率の良い対処法は、ミサカの足が守越尊のすぐ手前で止まる。

「行かせる訳にはいかない」

「分かっています、だから」

バチン、と一瞬にして守越尊の腹部辺りから全身に電流が走り地面に倒れた。

「こうするのです、とミサカは答えます。ミサカの力はお姉様の1%程度ですが数十万ボルトの電気を生み出す事くらいは出来ま、とミサカはやって見せました」

ミサカは右手を守越尊の腹部に当ててスタンガンの要領で電気を流していた。

五〇万ボルト以上のスタンガンを使えば人を数分間失神させる事が可能である。

つまり効率の良い対処法と言うのは、相手を気絶させる、と言う以外にも簡単にシンプルなものだった。

地面に倒れた守越尊を見つめるミサカであったが何を考えているのかは表情では全く予想がつかない。彼女はゆっくりと守越尊の上体を起こし背中に乗せると、山状に膨らんでいる砂山の真ん中にある

るドラム状の空洞に守越尊を下ろす。

そういった事がミサカなりの配慮なのであろうか。

ミサカは意識を失い目を瞑っている守越尊を少し見つめると、

「さようなら、とミサカは別れのあいさつを致します」

軽く頭を下げるとミサカは公園を後にするのであった。

2・2 「妹達（シスターズ）」（後書き）

感想やご指摘よろしくお願いします。

改行は増やしてみたのですがどうでしょう？

2・3 「二人のみこと」(前書き)

お気に入り20件ありがとうございます。

PVも10000を越えました。

これからも頑張ります。

ようやく原作9巻まで読みました……もっと読んで理解しなければ

2 - 3 「二人のみこと」

5

「まだ少し腫れてるな」

後頭部の辺りを右手を触れて出っ張りを確認する。

日付は二一日、時刻は午後の六時二〇分。

守越尊は夕暮れの街中を歩いていた。

あの日、目が覚めた守越尊がいた場所はコンクリートの筒が砂の山の中を横断するように作られたトンネルみたいな所だ。大きさはもちろん小学生用に作られているモノである為、高校生がそんな中に入っただけならば窮屈であるのは分かりきった事である。

そんな中でボーっとする頭でミサカの事を思い出し、飛び起きる様に頭を上げた守越尊はコンクリートに頭突きをクリティカルヒットさせる事になる。

三日たった今日でもまだその場所は腫れている様だ。

この三日、守越尊はミサカについて出来るだけの事を調べたのだがネットで検索をかけてみてもヒットは無し。辛うじてある能力者を元にした軍用のクローンが作られているらしい、と言う噂が流れていると言った情報のみであった。

街中も歩き回った。

ミサカの居場所が分からないのであれば探すしかない。それでもこの三日間成果は無かった。

三日連続で御坂美琴に会う為に常盤台中学の学生寮にも出向いた。一日目は同部屋の白井黒子に、なんだかんだ言われていたが三日目にもなると逆に呆れられて

『また貴方ですね、残念ながらお姉様は寮におられませんの』
なんて風にワーワー喚く事も無く対応して来るようになった。

しかしミサカに会えないのは仕方がない事なのかもしれないが、

御坂美琴にこれほどまで会えないとは思っていなかった。

白井黒子の話ではここ数日ほとんど寮に戻っていないと言う。
そしてここ数日の間に生まれた一つの疑問。

御坂美琴は妹達シスターズについてどこまで知っているのか？

ミサカの話では、妹達シスターズは御坂美琴をモデルとして作られた単細胞クローンと言っていた。

単細胞クローンを作るのに必要なのは髪の毛一本と血液一滴。それらから遺伝子を抜き取りクローンを作るらしい。

つまりはクローンを作る為には元になるDNAが必要な訳であつて、御坂美琴をモデルとしていることは、

御坂美琴は自分のDNAを提供した？

提供しなくとも髪の毛一本や血液の一滴なんてモノはどうにかすれば手に入れる事は出来るかもしれない。とにかく真相を知る為には「ミサカか御坂美琴のどちらかに会わないと始まらないな」

そう考えながら歩く事数分、守越尊は高台の様な場所に辿りついた。

そこからは学園都市の大半が見えそうなくらい眺めが良く、夕焼けのオレンジ色の光を反射した建物が幻想的な風景を作り出している。

その眺めを見ながら策沿いに歩いていると、何となく見た事がある様な後ろ姿が目に入った。

黒のズボンに白のワイシャツ、と言うどこにでもありそうな制服を身に纏い、ツンツンした黒い髪形に鞆を肩からぶら下げる様になっている。

上条当麻がいた。

(そう言えば、補習がどうこう言ってたっけ?)

どうやら上条当麻も誰かと丁度出会ったらしく鞆を上に乗上げて挨拶をしている様であつたが、

上条当麻の視線の先には探し求めていた人物の姿があつた。

白い半袖のブラウスにサマーセーターとプリーツスカート。常盤

台中学の制服に茶色い髪を揺らして、ゴーグルが無い事からミサカでは無く

御坂美琴。

彼女は手すりに両手を掛けて夕日を浴びる学園都市を眺めていた。そして上条当麻に気がつくところを振り向き、それと同時に守越尊にも気がついた様だ。

上条当麻もその目線に気がつきこちらを振り返る。

「お、尊じゃねえか。こんなところで何してんだ？」

「単なる散歩、当麻は補習か？」

「ああ、漸く今日で補習終わりだ」

なんて話していると

ハア、と上条当麻の後ろからため息が聞こえて来た。

御坂美琴は手すりに背を向けて両肘を置く形で、何やら疲れた表情をしていた。

「何だ？ お前疲れてんのか？」

「そう言う事、だから今日はビリビリも勘弁してあげるわ」

三人の横を一機の掃除ロボットが通過して行く。辺りでは風力発電用のプロペラが夕日を浴びながらクルクルと回っていて、その夕暮れの空を大画面を付けた飛行船が飛んでいる。

「私、あの飛行船って嫌いなよね」

御坂美琴がボソリと呟いた。

何でだ？ と上条当麻が訊ねると

「機械が決めた政策に人間が従っているからよ」

『ツリーダイヤプログラム
樹形図の設計者』

世界最高のスーパーコンピューターと言われる究極の予言機械シミュレーターである。

より完全な天気予報を行う為に、との名目で人工衛星『おりひめ？号』に搭載され打ち上げられたモノで、世界中に流れる全ての空気の粒子の動きを完全に予測することで天気予報を天気予言に変えてしまったと言う。

「何だ？ お前チエスとかで人間が機械に負けるのが許せないタイプの人間か？」

そうね。と如何にも適当な返事を返して来る御坂美琴であったが、少し空を見上げて何かを考えている様に目を瞑ると、

「じゃ、私こっちだがら」

と言つてその場を後にしてしまう。

その後ろを眺めていた守越尊であったが、目的を忘れてしまった訳ではない。

「悪い当麻、俺も用事あるから」

軽く上条当麻に手を上げると御坂美琴がいる方へ歩いて行く。

その姿を見送った上条当麻は指で頭をポリポリとかいてその場を後にした。

6

(これじゃ本当にストーカーかもな)

守越尊は御坂美琴との距離を一定に保つようにして街中を歩いていた。

空はすでに夜へと変わり、街行く人の数も減って来ている。

御坂美琴の歩くスピードは変わらない。

店、街行く人、全てに興味を示すことなくずっと正面を向いたまま、淡々と歩いている。

初めは声を掛けようかと思った守越尊であったが、彼女がどこへ向かっているのかが知りたかった。寮に帰ってしまうならそれで寮についてから話を聞けばいいと思っていた。

しかし御坂美琴が歩いている方向は寮とは全く逆の方向で、街の外れに向かっているみたいであった。

時間が経つにつれて辺りに人影が無くなってくる。

二〇メートルほどの距離を開けていたが、見る限りではほとんど二人と言つてよいかもしれない。それほど急激に人数が減った。

(もう少し距離を取った方がいいか?)

そんな考え事をしていると、ふと御坂美琴が少し狭めの道へと入って行った。

大通りと違い入り組んだ道に入られてしまうと追跡が困難になってしまふ。そう思った守越尊は小走りで角まで走ると隠れる様にその道を覗き込んで

(え?)

そこに御坂美琴の姿は無かった。

その道は建物と建物の間にある小さな道だ。幅は七メートルくらいの一直線な道でどこかに横に入れるスペースなど見当たらない。

(一体どこに)

「私になんか用でもあんの?」

突如としてその声は『上』から聞こえた。

見上げた先には足元に電気を帯びながら重力を無視した様に壁に立つ御坂美琴の姿があった。

「そう言えばあんた、超能力者(レベル5)の超電磁砲^{レールガン}だったんだっけ」

御坂美琴は壁を歩いて降りて来ると

「で、その私に何か用なの? アイツの友達の、みことさん。変な感じよね、なんか自分の名前呼んでるみたいで」

右手を腰に当てて左手で髪を払う。

「アイツを別れてからずっとついて来てたみたいだけど、尾行するならもつとうまくやりなさい。バレバレよ」

「別にここまでついて来る必要もなかったんだけど、一つ訊きたい事があったね」

と、守越尊は少し呼吸を置いて言葉を発した。
「妹^{シスターズ}達に会った」

ビク、と御坂美琴の体が少し動いて、瞬間その表情は険しいモノへと変わっていった。

「アンタ、何であの子達の事知ってるのよ」

「やっぱり知ってるんだなミサカの事。何だよ妹達シスターズつて、実験で何なんだよ!？」

二人は数秒ほど睨み合つて、先に御坂美琴が口を開いた。

「それを知つてアンタはどうするつもり？」

その口調は鋭く尖つたモノだった。

「助けてみせるさ」

ハハ、と御坂美琴は笑つた。

「どうやって? 実験の内容もしらないのに?」

彼女は続けて

「いいわ、教えてあげる。あの子達が何をされているか」

『絶対能力進化計画』

樹形図ツリーダイアグラムの設計者の演算結果に従い、まだ誰も到達しえない絶対能

力者(レベル6)への領域に到達する者を生み出す計画。

七人のレベル5の中で唯一レベル6へ辿りつける者を一方通行アクセラレータと

言う。

樹形図ツリーダイアグラムの設計者の予想演算の結果、一二八通りの戦闘環境を用意

し一二八回超電磁砲を殺害する事で一方通行アクセラレータはレベル6へと進化す

る事が判明。

しかし、超電磁砲レールガンを一二八人も用意する事が出来ない。そこで増

産型能力者計画ディオノイスけいかくの妹達シスターズを用いて、一方通行アクセラレータに二万通りの戦闘環境を

用意し妹達シスターズを二万回殺害する事で同様の結果となる。

そこまで聞いて守越尊は愕然とする。

説明は続けられるが、全てが異常なモノであつた。

一方通行アクセラレータ。その名前を思い浮かべて出て来たのは、あの暗闇の中

にいた一人の少年。あの不気味な口元。

自然と拳に力が入つた。

「あんたはこれだけの事を知つていながら何も思わなかつたのか!

? 何でDNAなんか提供したんだよ!？」

御坂美琴は歯を食いしばる。手に力が入る。

「……んな訳ないでしょ」

彼女はボソリと呟き

「そんな訳ないでしょ！！ 既に一万人の妹達シスターズが殺されているのよ！」

その声は怒りに満ち溢れていた。

「序列第一位の一方通行アクセラレイタは有らゆるベクトルの向き操る。アイツは私達と根本的に力が違いすぎるの！ 最強なの！ 同じレベル5の私でさえ手も足も出なかった……だから私は実験に関わる全ての研究所を破壊したわ！ それでも……実験は終わらなかった。私だつて……こんな事に使われるのが分かっていたらDNAマップなんて提供しなかった！」

それは悲痛の叫びに聞こえた。

御坂美琴は実験に関わっている訳では無かった。

自分の時いた種は自分で何とかする。そう言わんばかりに彼女は一人で戦っていたのだ。

最強と言われる能力者に挑んだ、それがダメなら研究所を破壊した。誰にも知られない所で御坂美琴は妹達シスターズを守る為に戦っていた。

「これだけ話してもう一度訊いてあげる。アンタに何が出来るの？ これでもまだ助けるなんて言える？」

守越尊は喉まで来ている『助ける』と言う言葉がそこからなかなか出て来なかった。

守越尊には力が無い。能力も無ければ魔術も使えない。ただの高校生。

自分みたいな人間が首を突っ込んでいい話では無い事は分かる。でも自分を犠牲にしても人を助けに行く少年を守越尊は知っていた。

自分の記憶が無くなってもそれを隠してある少女の笑顔を守った少年を知っていた。

もし彼がここにいたなら何て答えただろうか？

そんな事は決まっている。

「助けるさ」

御坂美琴の時間が一瞬止まった気がした。

そして驚きの表情を隠しながら、

「無理よ、普通の人にはあの実験を止める事は出来ない。あの子達を救うには普通じゃ無理なの……だから私は」

と御坂美琴の言葉が止まった。

何かを見て表情を歪めて。

その視線の先には

「何をしているのでしょうか？ とミサカは質問します」
守越尊が振り向いた先にはミサカがいた。

2 - 3 「二人のみこと」(後書き)

感想や意見、指摘お待ちしております。

2 - 4 「透明なモノ」 (前書き)

とある魔術の天の住人をいつもありがとうございます。
お気に入りも少しずつではありますが増えております。

守越尊と御坂美琴の前に現れたミサカ。
どうなって行くんでしょうね？

肩まである茶色い髪に常盤台中学の制服。

ドッペルゲンガーの如く、二人は瓜二つだった。

御坂美琴のDNAから作られた単細胞クローン、シスターズ妹達。改めて二人を一緒に見ると見分けがつかない。

違うと言えばミサカは軍用ゴーグルを額に装着している。

クツと、御坂美琴の顔が引きつる。

自分蒔いた種によってこれから命を失う運命しかない少女が目の前にいる。ミサカを見るたびに御坂美琴の胸はチクチクと痛んだ。

だからこそ、自分がやらなければならない。

そう胸に刻み込んで

バツ、と御坂美琴は飛び上がるとその体は磁石に吸い寄せられる様に建物の壁に引き寄せられる。左手と左足を壁につけて、そこに梯子でも在るかのよう壁にぶら下がっている。

「おい！ どこに行くつもりだ!？」

御坂美琴は守越尊を見降ろしている。

その顔はまるで何かを優しく包み込むように優しく、

「アンタはこれ以上関わらないで。これ以上来たら戻れなくなるから」

御坂美琴は僅かに笑ってそう言った。

守越尊からは御坂美琴の顔がはつきりとは見えなかったが、無理をしている事くらい分かる。

その声は泣きそうなほど弱々しく、そしてとても辛そうだった。

「これは私にしか出来ない事、私がやらなくちゃいけない事。だからアンタは戻って、絶対に来ちゃダメ」

御坂美琴は守越尊の言葉を聞く前に建物の屋上へと壁をつたって

走る。

守越尊には彼女追う術が無かった。

御坂美琴は一人で実験を止める為に行ってしまった。

守越尊は心の底から思う。どうして頼ってくれないのか？ と。

確かに守越尊と御坂美琴は二度会っただけの顔見知りだ。

しかし、守越尊が考える限りではこの実験を知る人間は数少ないであろう。ネット上にすら載る事の無いモノだ、増してそれを止めようと思っっている人間は一体何人いるのだろうか？

御坂美琴が一人で戦っている以上、御坂美琴の周りでその事を知っている人物はいないであろう。

だからこそ実験を知る数少ない人間を頼ってほしいと思った。

「何の話しをしていたんでしょか？ とミサカは質問します」
振り返る先にはミサカがいる。

「ああ、あんたにかなり関係のある話だ。聞かせてやりたいのは山々なんだが、その前に質問させてもらおう。まず、あんたは何でこんな所にいるんだ？」

ミサカはその質問にやはり表情を変える事無く答える。

「ミサカは研修中ですので、とミサカは答えます」

研修。前回聞いた時には何も感じなかったが、今となつてはその言葉の意味がある程度理解出来た。

ミサカが言う研修と言うのは恐らく実験を行う為の準備の事だ。

二万本もの妹達^{シスターズ}。彼女達が実験に支障が出ない為に適正させる為のモノだと守越尊は推測した。

「あんたは、何番目になる？」

「ミサカの検体番号^{シリアルナンバー}は一九〇九〇号になります、とミサカは答えます。この質問に一体どんな意味があるのでしょうか？ とミサカは訊ねます。貴方は九九九九号の記憶によれば実験とは無関係のハズですが？ とミサカは確認を取ります」

^{シスターズ}妹達は脳をリンクさせる事によって記憶を共有しているらしい。

つまりはあの日のミサカに守越尊が何と言ったか、何をしたかと

言う事は筒抜けのようだ。

「ああ、その通りだ。だから俺にはあんた等が何で実験をしているかなんて分からない。あんたは何とも思わないのか？ 自分が殺されると分かっているだけでも何も感じないのか？」

「ミサカの脳内情報は洗脳装置テストメントによって基本情報を強制入力させているに過ぎません。よって不要な感情は持ち合わせていません、とミサカは説明します。それにミサカは実験の為に作られた実験動物です」

「本気で言ってるのか？」

「はい、ミサカはボタン一つで大量生産出来るクローンです。その単価は一八万、とミサカは説明します」

ふざけるな、と守越尊は心底強く思った。

こんな事が許されるハズは無かった。たった一人の為に二万人の人間が殺されて良い理由なんてあるはずが無い。

ミサカは猫にチョコを上げようとしていた。

一緒にご飯も食べた。

そしてマタタビを握りしめ猫を探す姿、見つからなかった時表情には出さなかったが残念そうに見えた。

それは普通の事かもしれないが、ミサカはそんな普通の事が出来る人間だ。

実験動物なんかでは無い。

「おい、あんた。確か妹達シスターズは脳がリンクされてるんだよな？」

「はい、その通りです、とミサカは答えます」

なら、

実験がどこで行われるかも分かるんだよな？

「……、念のために確認します。貴方はそれを訊いてどうするつもりでしょうか？、とミサカは問いかけます」

そんなもん分かるんじゃないか？ と守越尊は答え、そして力強く「実験を止めに行くに決まってるだろ！」

ミサカはこちらを見つめている。無表情、無感情なミサカは何を

考えているか予想がつかない。その瞳は絶えず映る全てのモノを捉えるかの様に焦点が曖昧だ。

そしてミサカはゆっくりと右手を腰に持つていく。

先ほどまで気がつかなかったがミサカは腰にポーチの様なモノを付けていた。

そしてその中から何かを取り出して、

上位命令文によって実験の妨害行為を行うと見られる人物の対処を致します。

「これ以上の行為は実験の妨害と見做しそれなりの対処を取ります、とミサカは警告致します」

ミサカの手には小型の拳銃が握られていた。

「ミサカは研修中ですので『オモチャの兵隊』などは持ち合わせておりませんが、これを使用すれば貴方は致命傷を負う事には変わりはありません、とミサカは再度警告致します」

(銃はさすがにマズイよな……)

しかし下がる訳にはいかなかった。こうしている間にも二万人の人間が殺害されている。

守越尊は両足を開き、重心を落として構えた。

「そうですか、残念です、とミサカは呟きます」

最小限の炸裂音と共に一発の弾丸が銃口から発射される。

爆竹の様は音が鳴ると同時にそれは守越尊の頬を掠める様に空気を切り裂いて行った。

ジワリ、と守越尊の背中を冷たい何かが流れて行く。

「最後の警告です、とミサカは貴方に投げかけます」

クッ

と守越尊はミサカとの距離を詰める為に勢いよく走りだす。

その距離およそ一〇メートル。

直線的に走る訳にも行かない。守越尊は建物の壁に向かって走る。それと同時に二発の銃声と共に二つの銃弾が空を切った。

一つは耳の数センチの所を掠める。

守越尊は壁伝いに走った。

数発の弾丸が放たれるがそれは壁へと突き刺さる。

守越尊は考えた。何故こうも弾丸が外れるのか？

以前妹達シスターズがライフルを使用していた際には、その弾丸は確実に相手を捉えていた。

その全ては尽く弾かれていたが、こんな素人の自分に一発も当たらない訳が無い。闇雲に走っているだけなのだから。

だから、守越尊は一つの答えを考える。

同時に、残り二メートルも無い距離を足に力を入れてミサカの懐へを飛び込む。

攻撃なんて出来ない。守越尊にはただ彼女の動きを止めて実験場所を聞き出す事くらいしか選択肢が無い。

それでもラグビーのタツクルの様に姿勢を低くしミサカとの距離が一メートルを切る所で

「お忘れですか？ ミサカは発電能力者ですよ？ とミサカは促します」
エレクトロマスター

手に溜められ放たれる電気は形を成す前に守越尊に直撃した。

「が……ッ！」

全身を針が突き刺すような痛みが走る。

同時にミサカは、そう、まるで自動販売機を蹴り飛ばす御坂美琴の様な上段蹴りを放つ。

痺れる体に防げと信号が送られるが腕は反応しない。丁度肩の下に叩きこまれた蹴りの反動で守越尊は横へと大きく飛ばされる。

二回三回と体は地面を転がり、仰向けの状態で止まった。

「く……そ……ッ！」

腕に力を入れて上半身を起こそうと数センチ上げた所で、カチ、と言う金属音が聞こえる。

「終わりですね、とミサカは貴方にチェックメイトを宣告します」
守越尊の腹部を跨ぐ様にして膝をつきミサカは銃口を突きつける。その表情に変化は無い。焦点の曖昧な瞳と銃を守越尊に向ける。

「貴方はたったこれだけの力で実験を止めようとしていたのですか？ とミサカは訊ねます。ミサカは既に一方通行アクセラレータによって一〇〇三一回殺害されています。そのミサカに手も足も出ない様では話にならないのでは？ とミサカは貴方に疑問を投げかけます」

確かに守越尊は弱かった。運動神経には自信があるが喧嘩もろくにした事が無い。能力開発も受けておらず魔術も使える訳ではない。それでも守越尊は思う。

「確かに俺には何の力も無いかもしれないけど……それで人が死ぬって分かっている事を見逃していいって事はねえ」

「先ほどミサカが申した様にミサカは実験動物です。実験の為に作られたクローンです。ですからミサカは」

「うるせえよ」

守越尊は吐き捨てる。

「あんたは実験動物なんかじゃねえって言ってるだろ！ なんて分からねえんだ？ 难道でおかしいって感じねえんだ？」

「ですから先ほど申した様にミサカの情報は洗脳装置テストメントで強制入力インストールされているに過ぎません、とミサカは再度説明します。ですからミサカにはそう言った余分な感情は持ち合わせていません、とミサカは補足説明します」

「なら訊いてやる」

守越尊はまるで小学生に質問するようにゆっくり

何であんたの手は震えてんだ？

「何を言ってる」

自分の手を見てミサカの言葉が止まった。

銃を握られている手が小刻みに震えている。

ミサカは内心驚いていた。それは銃の重さに腕が耐えられない、と言うモノではない。重量僅か六一三グラムの拳銃などで腕が耐えられない訳が無い。

ならこの震えは何なのか？

モゾ、と守越尊の体が起き上がろうと動いた。

ミサカは後ろへ飛び退く様に距離を取る。

「動かないで下さい、とミサカは警告します」

ミサカは銃を構える。しかしどうした事かその腕の震えが止まらない。

守越尊は起き上がるとゆっくりとした足取りでミサカへと近づいて行く。

ミサカは自分の心理状態に疑問を抱いていた。

彼を見ると何故か中で何かがチクチクと痛む。

ミサカは気が付いていない。自分の声すら震えている事に。

それでも銃を下ろす事は出来ない。頭の中の命令文がそれを邪魔する。

守越尊が近づくと同じだけミサカは後退りをする。そして、ドン、と背中にかかたる感触。

建物の壁がミサカの後退をそれ以上許さなかった。

「け、いこくします、それ以上近づいた場合はミサカは貴方を打つ事になります、とミサカは忠告します」

ミサカは震える声でそう呟いた。

しかし守越尊は足を止めようとはしない。ミサカの瞳を力強く見つめたまま。

カチャ、とミサカの構える銃が動く。その僅か数センチ先に守越尊の左胸があった。

ミサカは震える右手に左手を添えるがそれでも震えは止まらない。「貴方はミサカが打たないとも思っているのですか？ とミサカは問いかけます」

それは守越尊ではなく、まるで自分に言い聞かせている様に

「ミサカには逆らうことの出来ない上位命令があります。それは実験の妨害をする者の除外と言う命令文となつて今も発令しています、とミサカは説明します。つまりミサカは実験の妨害をする貴方にこの銃を打つ事が可能と言う事を示しています、とミサカは貴方に忠告します」

「じゃあなんで当てなかつたんだ？」

最初の一撃を含めて明らかにミサカは守越尊をワザと外す様に銃弾を発射していた。

もしも上位命令に逆らう事が出来ないのであれば、殺すまでは行かなくとも急所をハズして体に当てる事が出来たハズだ。

しかしミサカはそれすらやらなかった。

「今ミサカが引き金を引けばこの銃弾は間違いなく貴方に当たりますよ？」とミサカは問いかけます」

ミサカは気がついていない。自分の声が震えて、手も震えている。だからこそ守越尊は言う。

「じゃあ引いてみるよ。あんたが実験動物で命令に逆らえないと言っただけなら打ってみるよ」

彼の目はまっすぐだった。

「なあ、あんた今からどっか行かないか？」

「探そうか？猫」

「マタタビは食べないし」

ミサカはその視線の曖昧な瞳を閉じて腕に力を入れて、

「あんたは実験動物なんかじゃねえ！」

その銃は力なく地面へと落ちた。

「ミサカは自分の心理状態に疑問を抱きます。ミサカは実験の為に作られた単細胞クローンであり実験動物です。脳内の情報も洗脳装置インストールを用いて強制入力されたモノで感情を持ち合わせていません、とミサカは再度説明します」

ミサカの声は震えて

「なのに」

ポツリ、ポツリと地面へ透明の粒が落ちる。

なぜ涙が出るのでしょうか？とミサカは質問します。

ミサカの目からは涙が零れていた。

初めて見る涙にミサカは戸惑った様子で自分の手に落ちる涙を見つめている。

だから守越尊は初めてのモノを小学生に説明する様にやさしく

「そりゃ、あんたが『人間』だからに決まってるだろ」

「ミサカが人間？ 実験動物ではないんでしょうか？ とミサカは確認を取ります」

「あなたは命令通りにしか動けないロボットでもないし、実験の為に作られた実験動物なんかじゃない。そんなんだつたら涙なんて流さないし俺は撃たれていた。あなたは人間だよ」

ミサカはその場に力無く崩れ落ちた。正座を崩した様な形で座り込み、その目は涙に溢れていた。

「ミサカは人間なんでしょうか？」

ああ、と守越尊は地面に右膝をつけて答える。

「ミサカは実験をしなくてもよろしいのでしょうか？」

ミサカは確認するかのように訊ねる。

「ミサカは」

生きても良いんでしょうか？

「ああ、いいに決まってる。だから教えてくれミサカ、実験はどこで行われるんだ？」

学園都市の西にある工業地帯。そこにある列車の操車場が第一〇

〇三二回目の『実験場』だとミサカは伝えた。

「残りの妹達シスターズを助けて下さい、とミサカは心からお願ひします」

ミサカの涙を拭き取った目は真っ赤だった。

当たり前だ、と言って守越尊は立ち上がった。

相手は学園都市最強と言われる一方通行アクセラレータ。御坂美琴が言うには有らゆる物の向きベクトルを操る能力者。

どう立ち向かえばいいかなんて分からない。

しかし戦わなければならぬ理由が出来た。

上条当麻の様に命を掛けて戦う理由が。

守越尊は拳を強く握りしめ『実験場』へ向けて走り出した。

2 - 4 「透明なモノ」（後書き）

今回は色々あるかもしれませんがね、

ミサカにつきましては

一九〇九〇号は布束砥信によつて人間の感情（恐怖となつていますが）をインストールされている固体なのでそれを参考にさせてもらいました。

まあ、2次と言う事である程度はご了承頂けたらと思います。

2・5 「一方通行」(前書き)

今回はダメな気がします、

文章は少ない、表現はダメ、毎回うまくいくとは思っていませんが、
酷い。

そんな作者をこれからもよろしくお願いします。

2 - 5 「一方通行」

8

守越尊は夜の街を走っていた。

完全下校時刻を過ぎた今、交通機関を使う事は出来ず自分の足で工業地帯を目指すしかなかった。

繁華街を抜け、住宅街を通り、辺りからは少しずつ人氣が無くなり街の灯りが遠ざかって行く。そんな中、守越尊の頭の中に幾度もミサカの顔が思い出される。

ミサカは泣いていた。

初めて涙を流す様に、その目は赤く腫れて。

守越尊は拳に力を入れる。

何故上条当麻がインデックスに記憶喪失を隠すためにウソをついたのか、笑顔を守る為にウソをついたのか。それが今ハッキリと分かった気がしていた。

「もうミサカを泣かせたくない」

辿りついた工業地帯は何の物音も聞こえなかった。

音も無く、風も無く、人氣も無く、まるで人払いの刻印ルインでも刻まれているのではないかと疑いたくなる様な静けさだった。

しかし、そんな中一つの足音が守越尊に近づいて来て、後ろで止まった。

守越尊が振り向いたその先には

9

アクセラレータ
一方通行

学園都市最強の能力者。その能力は運動量・熱量・光・電氣量と言ったあらゆる向きベクトルを変換する。その能力の前では核兵器を打ち込

んだとしても無傷のままですらられると言っ。

そんな相手に対して一人の少女は敵を視界に収めつつ距離を取る様に走り続けていた。

灰色のプリーツスカートに半袖のブラウスとサマーセーター、茶色い短髪に軍用のゴーグルを装着した少女。

シスターズ
妹達

検体番号一〇〇三二号と名乗るミサカは操車場のコンテナに囲まれた場所、まるで檻の様な所を走る。

振り向く先には白い肌ハンターに白い短髪の少年、一方通行。アカセラレータ暗闇に光る紅い瞳は獲物を狙う肉食獣の如く獲物ミサカを視野に入れている。

ミサカは走る方向を横へと向ける際に左手を払い電撃を放つ。しかしそれは一方通行に当たると同時に四方八方へと弾かれる。

「何だよ何だ何ですかアその逃げ腰は？ 愉快にケツ振りやがって誘つてんのかア！？」

アカセラレータ一方通行は不気味な笑みを浮かべてミサカを追う。

それは鬼ごつこの様なモノだ、鬼は如何に素早く獲物ミサカを捕まえるかを考えればいい。相手が電気を放とうが銃を撃とうが気にする必要はない。全て一方通行アカセラレータの能力において『反射』されてしまう。そう設定されてある。

しかし追いかけられるミサカの立場は鬼ごつこと言う遊びのレベルでは無い。ミサカもそれを分かった上で一方通行アカセラレータから距離を取りつつ攻撃に転じている。

もし一方通行アカセラレータに捕まった場合は死を意味する。捕まった瞬間、体に流れる血流の流れを逆流させられその体は肉の塊となってしまうだろう。

ミサカは幾度も一方通行アカセラレータに対して火花を散らす。反射を適応している一方通行アカセラレータに電気を放とうがそれは全て退けられる。それでもミサカは攻撃を止めない。

アカセラレータ一方通行だけでなく辺りの空気をも巻き込んで電撃を放つ。

「んな事やったって無駄な事くらい分かんねエかア？ 一万回も殺

されて学習能力ゼロかア？ オマエは」

しかしミサカはその行動パターンを変えない。

放たれる電気は一方通行アクセラレータの周りで火花を散らすばかり。

チツ、と舌を鳴らした所で息切れを起こしている自分に気がつく。

「今実験の用途は『反射』を適応出来ない戦闘における対処法、とミサカは確認を取ります」

あア？

ミサカの声は一方通行アクセラレータには届かなかつたが、その鼻を突く異臭に

「はアン、電気で酸素を分解してオゾンって訳か」

ミサカは一方通行アクセラレータに近づく必要はない。鬼から遠ざかる様に逃げて空気を分解して酸素を奪えば良い。

幸い、今日は無風。風によって空気が流される事はない。留まつた空気は電気によってオゾンへと変えられ、辺り一帯は無酸素状態になる。

『反射』を適用出来ない戦闘、とは即ち人間が生きる為に必要な空気（酸素）を武器として使用する事を指している。

一方通行アクセラレータが如何に学園都市最強の能力者であったとしても酸素を肺に取りこんで生きている人間に変わりは無い。

この実験は一方通行を絶対能力者（レベル6）にする為のモノ。その為に必要な戦闘回数は二万回。その実験全てに意味があり、それは樹形図ツリーダイアグラムの設計者によって導き出された答えに則って行われている。

つまりは今回の実験も、今日この時間に風が無い事も全て樹形図ツリーの設計者によって導き出されたモノだ。

「よく考えられた作戦だが、弱点が二つあるなア？」

一方通行アクセラレータは不気味に笑う。

逃げるミサカの背中に悪寒が襲う。

「一つは鬼ごっこでオマエが追いつかれちまえばそこでゲームオーバー」

もう一つは

一方通行は右手を体に交差される様に左方まで持つていくと、それを何かを投げつける様に振るう。

ミサカはその姿を振り向いて確認して、瞬間、後方から突風が吹き荒れる。

「が、は……ッ！」

それと同時に背中を何かに殴られた様な衝撃によってミサカは地面へと前方に転がる様に倒れた。

仰向けになって倒れる体を、左肘を地面へ着き体を捻ってうつ伏せの状態になる様に右手を着く。

そして頭を起こし見上げる先には、ゆっくりとした足取りで一方通行が近づいて来る。

「風で空気が流されちまえば意味ねエよなア？」

ミサカは全身に力を入れて、立ち上がるうと膝を着いた所で

「ぐ、ふっ……！」

腹部に一方通行を靴のつま先が突き刺さった。

中のモノが全て出て来そうな衝撃にミサカは背を丸めて倒れる。

「なア、自分の手を汚さずに相手を殴る方法って知ってつかア？」

体を丸める隙間を塗って腹部に衝撃が加わる。

「相手の体が触れた瞬間、運動量の向きを相手に向けりゃいいんだよ。まア、その分相手のダメージは倍になるけどなア？」

幾度となく突き刺さる衝撃に耐えきれなくなったミサカはゴロン

と仰向けに転がった。

かすむ視界では最早空に光る星どころか一方通行の顔すらばやけている。

仰向けに転がるミサカに対して一方通行は右足を軽く膝を曲げて、地面に捨てた煙草を踏みつける様に足を下ろそうとした。

しかしその衝撃はミサカを襲う事は無かった。

「おいおい。この場合、『実験』ってなアどうなっちまうんだア？」

一方通行は踏み込む足を地面に下ろすと後方へと振り返る。

ミサカの位置からでは一方通行が視界の邪魔になってその先にあ

るモノが分からない。地面を這う様に場所を移動し、その視線の先を確かめた。

そこには、

「おいおい、一般人を二人も『実験場』に連れ込んでんじゃねエよ」
上条当麻と守越尊の姿があつた。

二人の服はすでに地面に転がった様に汚れて、頬を切り足を切り、ボロボロであるにも関わらず、

「おい、御坂妹から離れろ」

その瞳の光りは失われておらず、一方通行を睨みつけていた。アクセラレータ

「何を……しているのですか？ とミサカは問いかけます」

自分はこの実験の為に作られた模造品でしかない。

ボタン一つで自動生産される実験動物。

作りモノの体を作りモノの心。

いくらでも替えを作る事の出来る体。

単価にして一八万円。

こんな自分の為に何故二人の少年はこんな所にいるのか？ 何故そんな言葉を発しているのか？ ミサカには理解出来なかつた。

「何をしているのですか？ とミサカは問いかけます。ミサカはこの実験の為に作られた実験動物です。作られた体に作られた心、単価にして一八万円。いくらでも替えの作れる模造品でしかありません。とミサカは説明します。なのに、貴方たちはどうしてここに

」

「何って決まつてるだろ」

守越尊は叫ぶ。

「あんたは実験動物なんかじゃねえ！」

上条当麻は叫ぶ。

「お前は世界にたった一人しかいねえだろが！」

その二人の黒い瞳は力強く、

その二人の声は力強く、

「御坂妹！ 助けに来たぞ！」

二つの声は混ざり合う様にミサカの心に響いた。

「何だよ何だ何ですかア？ 黙って話し聞いてりゃ、お前ら何様だア？」

低く突き刺さる様な声に混じって辺りに殺気が放たれる。

「つまりお前らは学園都市七人の超能力者（レベル5）の頂点って呼ばれるこの俺を倒すつてかア？ ハッ、笑えねエ」

暗闇に映る真紅の瞳は殺気を放ち二人を睨みつける。

「うるせえよ」

上条当麻は右手に力を込める。

「超能力者（レベル5）だとか最強だとかそんなのはどうでもいい。

お前は妹達をシスターズ一万人殺した、御坂美琴を泣かせた」

守越尊は歯を食いしばる。

「あんたはミサカを泣かせた」

だから俺らは

「「あんたテメエをぶつた押す！」」

「お前ら面白れエな」

白い少年の瞳に真紅の狂気が灯る。

「 本当に面白れエ！ 来いよオ、三下！」

2・5 「一方通行」(後書き)

尊だけで一方通行を倒して欲しいと思っていた方には残念ですが、上条さんの登場です。

ただお忘れの無い様に言っておきますがこの作品の主人公は尊ですので、

ミサカについて違和感のある方がおられると思いますが、ミサカネットワークは意識を共有していますが、自分だけの記憶を持つ事が出来ますので、一九〇九〇号は自分だけの記憶にしたと言う事です。

感想やご指摘がありましたらよろしくお願いします

2・6 「右手と右目」(前書き)

PV20000アクセス、2000ユニーク

とある魔術の天の住人をいつもありがとうございます。

これからも頑張りますのでよろしくお願いします。

実験を止める為に学園都市最強の超能力者、一方通行アクセラレータに挑む守越尊
と上条当麻。二人は最強にどう対抗するのでしょうか？

毎回サブタイトルで悩むのは自分だけですかね？

2・6 「右手と右目」

10

一方通行を倒す方法は恐らく上条当麻の右手に宿る力しか無いだろう。
イマジンプレイカー
幻想殺し。

それが異能の力であれば神の奇跡さえも触れただけで無効化させる。

一方通行が向きを操り攻撃を跳ね返すのであれば、それを撃ち碎ける者は上条当麻しかない。

「オおおっ！」

一方通行との距離は一〇メートル前後。

守越尊と上条当麻は同時に地面を力強く蹴る。

砂利とレールが敷き詰められた大地を踏みしめて駆けだす。

一方通行はそんな二人を前にして構えもせず、両手はブラリと下がったまま。

ニヤリと笑みを見せて

ドン、と地面を踏みつける。

瞬間、一方通行の足元の地面が爆発する。

それに気がついた二人は慌てて腕で庇おうとするが、大量に飛び散る砂利は二人を容赦なく襲う。

無数の弾丸に襲われた様に体の至る所に小石が叩きつけられる。

それと共に訪れる衝撃で二人は後方へと飛ばされゴロゴロと地面を転がる。

「ンだよ口先だけかア？ 三下！」

一方通行は地面に引かれるレールを踏む。それと同時にレールは生きた蛇の様につねりを上げながら地面から外れる。

宙へと投げだされた鋼鉄のレールをまるで風船を叩くくらいの感

覚で殴り飛ばす。

弾く蹴る殴る、十数個に及ぶレールは銃の弾丸の様に一直線で二人に向かつて行く。

二人は左右に飛び散る様にしてそのレールを避けるが、避けたレールは地面へと突き刺さると同時に小さな爆弾が破裂したように地面が爆発する。

左右に避けた二人を砂利が襲う。

一つ一つは小さな小石であつても弾丸の様に飛んでくる小石の威力はバカに出来ない。

全身を叩きつける小石は防ぐ腕の隙間を塗つて守越尊に胸へと直撃する。

「がっ……!!」

飛んだ勢いに乗せられる様に後方へと飛ばされ、地面を二回三回と転がった所で止まる。

「尊!」

ガン、と言う金属音が辺りに響く。

「他人の心配なンざアしてる暇はねエぞ!」

上条当麻が見上げる上空には無数のレールが散りばめられ既に落下を始めていた。

「オラオラ、踊れよオ三下!」

地面へと急降下するそれは大きな爆音と共に砂利を巻き上げて地面へと突き刺さる。その間を掻い潜る様に上条当麻は地面を転がる様にしてその場から這い出る。

守越尊は這い蹲る地面から立ち上がると額の汗を拭う。

一撃を浴びせるどころか近づく事さえ出来なかつた。

自分は囷。上条当麻に右手を振るうチャンスを作る事さえ出来れば一方通行にダメージを与える事が出来る。
アクセラレーター

確認するかのように目をやると上条当麻も構えた所であつた。

(どうにかチャンスを)

そして地面を蹴つて、勢いよく走りだす。

(何でもいい……何か)

ポケットに膨らむそれを手に取る。

(やけくそだ！)

右手でポケットに入っていた携帯電話を投げる。

もちろん何の効果も無い事は分かっている。ただ一瞬でも上条当麻から視線を外す事が出来れば良かった。

携帯電話は一方通行へ当たると弾かれると同時に木端微塵に砕け散る。

目もくれずに一方通行へと拳を突き出す。

ゴキ、と殴りつけたその拳は嫌な音と共に変な方向へと曲がった。

「があああ」

弾かれる様に後方へと倒れる守越尊を一方通行は笑う様に見つめる。

と、一方通行はすぐ視線を戻すと、そこには上条当麻が拳を振り上げて迫っていた。

それでも一方通行は動じない。

「オマエもアイツと一緒にだつてのが分かんねエのかア！？」

何故なら知らないからだ。上条当麻の右手に秘められた力を。

反射出来ると思ひ込んでいた一方通行の顔に上条当麻の拳が突き刺さる。

吹っ飛んでコンテナへと激突した一方通行は何が起きたか分からない様な顔で

「クツ、イテ、何だア？ 八八、決まっちまったぞ、面白れエ。オ

マエら面白れエぞオ！！」

ゴン、と一方通行は背中に当たっていたコンテナを左右同時に叩く。

どう向きを変えたかは分からないがその二つのコンテナは宙を舞い、左右別々に二人に襲い掛かる。

上条当麻は落ちて来るコンテナを回転する様に避ける。

それに対して地面に膝をついていた守越尊は回避の動作に遅れる。

曲がった右手を庇いながら前方に死に物狂いで転がると、そのすぐ隣にコンテナは落下した。

何とか回避に成功した守越尊は反転して起き上がるうと右膝をついて、

見上げた瞬間、

アッセラレータ

既に一方通行は飛ばしたコンテナの陰から落ちて来た直径二センチほどの筒状のポールを守越尊に向けて弾いていた。

もう遅いと思った。

丁度、顔目掛けて飛んでくるそれはまるでコマ送りの様に鮮明に映り、そのポールが守越尊に刺さる直前に

守越尊の視界を何かが入った。

瞬間、ガン、と言う金属音と共に守越尊の視界が赤色に染まった。

「な、んで……」

すぐ後ろのコンテナにはポールが突き刺さり、ポツリポツリと先から赤いモノが滴り落ちている。

守越尊の声は震えていた。

その視線の先には

茶色い短髪に赤く染まったブラウス、灰色と呼べないプリーツスカート、頭には軍用ゴーグルをかけて。

そして腰にはポーチの様な物をぶら下げて。

両手を広げたその姿は支えの無くなった人形のようにドサツと地面へと倒れた。

「み、ミサカ……」

守越尊はすぐさま駆け寄り、左手で支えながらミサカの上半身を起す。

貫かれた右腹部から流れる血はブラウスを赤く染めている。

「何で……こんな所に来たんだよ！」

どうしてこんな所に来てしまったのか、ミサカにも分からなかった。

ただハッキリしている事は自分が他の妹達と少し違う所だ。シスターズ

悪く言えば、自分一人だけ頭のネジが一本抜けてしまっている様に、考え方が変わってしまった。

少年と離れた後、ミサカは後を追うべきかしばらく考えていた。ミサカネットワークと通じて他の妹達シスターズに交信してみるモノの、全ての回答が行くべきでは無いであった。

しかしミサカはこの少年との出来事で自分の中に生まれた新しい何かを追うべきだと訴えていた。

それがどういったモノであるかは完全には分からないが、ミサカは他の妹達シスターズには無いそれを信じてみたくなった。

「自分が実験動物だからとかまた思ってるんじゃないや
違います、とミサカは否定、ツ……いたします」

それは違つとミサカは強く思った。

この少年によつてミサカは自分が人間なのだと教えられた。それも恐らく妹達シスターズの中でも自分だけだろうと考えている。

だから自分の命を大切にしなければならぬ事もそれなりに分かっている。

ただそれ以上に

「貴方を……助けたかつたのだと、ミサカは推測します」

この場所に到着して一番に目に入った光景。それは一方通行アクセラレータが筒状のポールを蹴り飛ばそうとしている瞬間であった。

そしてその先にはそれに気が付いていない少年。

ミサカは自分でも分かつていない。気がつけば地面を蹴っていたのだ。

自分の命がどうでもいいと言う事はもう無い。下手をすればこの一撃で命を落としていたかもしれない。それでもこの少年の傷つく所を見たくないと、自分の中の何かを訴えていたのだ。

「デメエ！」

その様子を見ていた上条当麻は拳を振るい上げて駆けだし、一方通行ラレータへと振り下ろす。
アクセラレータ

一方通行はただ地面を踏みつける。

地雷が爆発した様に地面が破裂し砂利と共に吹き上がる衝撃で上条当麻は宙へと投げ出され、地面に叩きつけられた。

「っ、は……ッ！」

背中を撃ちつける地面が肺の酸素を空気中へと吐き出させる。

「高が乱造品一匹傷ついたくれエで喚くんじゃねエよ」

一方通行は刺す様な声を発する。

ドクン

守越尊の心音が大きく体を伝う。

「なん……だと」

「所詮、俺に殺される為に作られたモノでしかねえんだよ」

ドクン

心臓が耳元にある様にその音は鳴り響く。

全身の血液が暴れる様に駆け巡り、何かが溢れ出して来る様な感

覚。

丁度いい、と一方通行は不気味な笑みを浮かべて

「死んどけや、二人まとめてなア！」

一方通行が地面を踏むとレールは踊る様に舞い上がり、その一

つを殴り飛ばす。

放たれたレールは弾丸の様に一直線に二人へ向かう。

レールが舞い上がる瞬間、一方通行を見ていたミサカは、このま

までは二人ともが危ないと察した。

だから自分を置いてこの場を離れて下さい、そう目の前の少年に向かつて言葉を発しようとして、

(な、にを)

ゴオン、と言う教会の鐘を鳴らす様な轟音が響き渡る。

レールは二人に突き刺さる事は無かった。

ミサカはそのレールがどこに行ったのか分からなかった。何故ならそれはミサカの頭上側のコンテナに深々と突き刺さっているからだ。

守越尊はミサカの肩と膝下を抱えると、スツと立ち上がる。

「チツ、調子に乗ってんじゃねエぞ、三下！」

ダン、と一方通行が地面と蹴ると、その体は弾丸の様に加速した。数十メートルとあった距離が僅か数秒で縮められる。

しかし、触れただけで人を殺せる両手を前に突き出して飛んでくる一方通行の横を、

何事も無い様に守越尊は通過した。

「ハア？」

瞬間にして視界から消えた相手に一方通行は一瞬戸惑う。

グルンと振り向いた先、さっきまで自分がいた場所に守越尊は立っていた。

「ク、ざけんじゃねエぞ！」

一方通行は地面に転がるレールを蹴り飛ばす。

守越尊に抱きかかえられているミサカはレールの行く末を見た。

一直線に飛んで来たレールは目の前で、何かに弾き飛ばされた。

向きが変わったのではなく、弾き飛ばされたのだ。

弾き飛ばされたレールは回転しながら離れた場所にある建物へと激突する。

ミサカは気がついた。少年の左手の甲が赤に染まっている事を。

つまりはレールを左手で弾き飛ばした。

抱えているミサカを落とす事無い一瞬の動作。ミサカの肩から手が離れた事すら分からないほどの一瞬。

さっきもそうだった。

この場所まで来る時もこの少年はただ移動しただけ、レールもただ弾き飛ばしただけ。

弾いた左手の甲からは赤く血に染まっている。

生身の体で鋼鉄に当たれば当然そうなってしまう。それでも守越尊の表情を歪める事は無かった。

「御坂美琴、そこにいるんだろ？」

(な……何で分かったの?)

コンテナとコンテナの隙間から御坂美琴が姿を現した。

守越尊は御坂美琴へと歩み寄る。

「当麻から話は聞いてる。レベル5のあんたがこの戦いに参加しちまったら意味ねえんだろ？」

この戦いは最強の超能力者（レベル5）を最弱の無能力者（レベル0）が倒すからこそ意味がある。

イマジンブレイカー
上条当麻の幻想殺しは何故か無能力として扱われている。

守越尊が参加している理由も、彼はまだ能力開発すら受けていない一般人と言う扱いになるからだ。

「だから、ミサカを頼む」

守越尊はミサカをゆっくりとコンテナを背もたれにする様に座らせる。

御坂美琴は気がつく。守越尊の右手が変な方向に曲がっている事に。

「アンタそんな手で え？」

御坂美琴は見た。

守越尊はミサカを下ろすとゆっくりと立ち上がる。その体は右手が曲がり服はボロボロ、体の至る所に傷が見える。

しかしそれよりも

「アンタ……一体何なの？」

立ち上がった守越尊の右の瞳はまるでどこまでも続く大空の様な青で、夜のこの場所では一際異様な色を放っていた。

2・6 「右手と右目」(後書き)

もっとうまく書ければ良かったのですが……

途中から自分でも何書いてるか分からなくなってしまいました；

ご意見ご感想お待ちしております！

表現等にも色々自信がありませんので、アドバイスやご指摘もよろしく願います。

2・7 「決着」(前書き)

いつもとある魔術の天の住人をありがとうございます。

お気に入りも41件になりました。

これからもどうぞよろしくお願いします。

そして今回は言い切れます。

駄文です。

すみません；

2 - 7 「決着」

1 1

守越尊は不思議な感覚に襲われていた。

何故、御坂美琴がこの位置にいる事が分かったのか自分でも良く分からない。

ただ脳が示していた。あそこに御坂美琴がいると。

守越尊は御坂美琴達に背を向けて

「あつちにいるもう一人のミサカも頼む」

そう言つて守越尊は指差す方向には、もう一人のミサカが地面にうつ伏せで倒れていた。

「でも」

「早く！」

ビクン、と御坂美琴の体が震える。それほど守越尊の言葉には威圧があつた。

御坂美琴は砂利の上に倒れたままのミサカに駆け寄つて行く。

それを確認すると同時に守越尊は歩を進める。

くつくつ、と一方通行は笑う。

「イイねエ」

向きを操つて数十メートルを一秒二秒で移動する自分の横をすり抜ける速さ。素手で鋼鉄のレールを弾き飛ばす力。

発電能力を応用した移動能力、或いは肉体強化系による力なのか、一方通行にとってそんな事はどうでも良かった。

「殺し甲斐あつぞオ、オマエ！」

ドン、と地面を踏みつけると同時に一方通行は急激に加速する。

ロケットの様に地面が爆発すると、その触れるだけで人を殺せる両手を突き出して一瞬にして守越尊との距離を詰める。

守越尊は御坂美琴達から離れる様にして横へ移動する。

一方通行アクセラレータをそれを追う地面を飛び跳ねる様に大地を蹴る。直角に曲がる様に向きベクトルを変更する。

守越尊は先とは違い見えるスピードで、それでも数十メートルを一秒二秒で移動する一方通行アクセラレータに追いつかれないスピードで駆けて行く。それは速度を緩めて一方通行アクセラレータに態と後を追わせている様であった。

「逃げてンじゃねエぞ、三下！」

その言葉を聞いた事によるモノかあるいは初めからそうするつもりだったのか、守越尊は言葉と同時に立ち止まり振り返る。

その右目は一段と輝きを増して、その瞳には光りを放つ線が映し出される。

「目には目を歯には歯を」

一方通行は立ち止まる守越尊に手錠に繋がれた様に手首を合わせた双掌を突き出す。

触れただけで体内の生体電気を逆流させ、内側から体を破壊するその手。

それが守越尊に触れようとした瞬間、

パン、とその双掌は守越尊の左手に弾かれた。

「な!?!」

一方通行は信じられない様な目を向ける。

そして、

グシャ、と鈍い音と共に顔を殴られた一方通行は宙を舞うように後方へと吹き飛ぶ。

数十メートルを飛び、地面を幾度も転がった所でようやく止まる。

「な……なんだ? どうなって、やがる」

一方通行は立ち上がるように足に力を入れる。しかしその足は思うように動かさずガクガクと震える。

足が震えると言う感覚は一方通行にとって初めての経験だ。むしろ殴られると言う行為自体が今日初めての事だ。

全ての向きベクトルを操り、反射してきた一方通行にとって二度目の打撃。

慣れていない痛みは一方通行の芯にまで届いていた。

膝に手を付いてようやく立ち上がったのもつかの間、
瞬、と目の前に現れた守越尊は左手を振るう。

ミシミシ、何か引き裂かれる様な音が体から聞こえる。

顔を捕らえたその左手。またも反射の効力を発揮せずに打撃が伝わる。

「が……ッ！」

仰け反るように飛ぶ一方通行。

宙を舞いながら目を開くと同時に視界に入ってくるコンテナ。

ク、とそのコンテナにぶつかると同時に衝撃全てコンテナに向けると、

ガゴン、と言う音を立ててコンテナは後方へと弾け飛んだ。ガン、ゴン、と音を鳴らしながらコンテナは地面を転がる。

「なんで……反射が効かねエ!？」

『変換前のベクトル』と『変換後のベクトル』の計算は間違っ
てはいない。無意識下でも行える『反射』の計算を学園都市最強の能
力者であり学園都市最高の優等生が間違えるはずが無かった。

ポツリ、と一方通行の頬を伝って赤い液体が流れ落ちる。

「あん？」

その正体に気がつくまでに二秒ほどかかった。他人のモノは数
多く見て来たが自分のモノは初めてだった。

血

「調子に乗んじゃねエぞ、三下が！」

「誰が」

その声は後ろから聞こえた。

「三下だ！」

ブチブチ、と嫌な音を立てて守越尊が放った蹴りは一方通行の腹
部へと突き刺さる。

体をクの字に曲げてコンテナへと激突する。コンテナは無残にも
形を変形させるが、それは一方通行が向きを全てコンテナに向けた

からである。

数個にも並ぶコンテナは衝撃をすべて向けられて激しく軋む。

「ご、ふ……」

アクセラレータ

一方通行の吐血する。恐らくこれも初めての体験であろう。

口の中を鉄の味が支配する。

ジャリ、と地面を踏む音がすぐそこで聞こえた。

膝をつきながら見上げる先には守越尊が立っていた。

アクセラレータ

守越尊は左手を振り上げて、その瞳は一方通行を捉えて、

ここで全てが終わると確信した。

瞬間

ドクン

守越尊の振り抜いた拳が自分の顔を過ぎた辺りで止まった。

全身を強烈な痛みが走り抜ける。途端に全身の機能を失い、体は

鉛の様に重くなり折れた右手が急に疼きだした。

アクセラレータ

膝を付く守越尊を前に一方通行は正直何が起こったのか分からな

かった。が、

ふらつく足をどうにか動かして立ち上がると、守越尊に歩み寄る。

アクセラレータ

不気味に笑う一方通行を前に守越尊は成す術が無かった。

流れ出て来る情報もウソの様に動く体も、もう何も無い。全てが

どこかに行ってしまった。

腕は痙攣し、足は脳の命令を効かない。もはや指一つ動かす事さ

え儘ならない。

アクセラレータ

移動をする度、一方通行を攻撃する度、聞こえた体の悲鳴は守越

尊のモノであった。骨が軋み、筋肉が引き裂かれる音。

アクセラレータ

一方通行は笑う。自分の痛みを忘れてしまっているかの様に笑う。

口周りに付いた血を、甘い蜜でも舐めるかの様に舌を走らせる。

後ろへ振り上げた足を、勢いよく振り下ろす。

ガゴ、とそのつま先は守越尊の顎へと突き刺さった。当たる瞬間

ベクトル

に運動量の向きを変換する事でその威力は倍増する。

「ぐ、あ……ッ！」

顎を蹴り上げられたその体は後ろに飛ばされて、まるで糸の切れた人形の様に地面に倒れる。

「ハッハア！ 何だよ何だ何ですかアそのザマは！ イモムシみてエに転がりやがって、さつきまでの威勢はどうしたア！？ 結局デカイ口叩いてもその程度なンだよ！」

地面に倒れる守越尊の右手を一方通行は踏みつづす。

「があああああああ」

グシャ、と嫌な音と共に守越尊の声が辺りを覆う。

「ンなところに転がってのが悪いンじゃねエかア？ だがこんなンじゃ割に合わねエ、おらもつと苦しめよオ、三下！」

容赦なくその右手を踏みつける。

隠れていた御坂美琴の我慢は限界に達していた。

先までの守越尊の能力がどんなモノかは分からないが、一瞬は本^{アクセラレータ}当に一方通行に勝つてしまふかと思つた。しかし今の現状はいつ殺されてもおかしく無い状態だつた。

自分が行つた所で何にも出来ない事くらい分かっている。でも、

（だからといって見殺しになんて出来ない！）

だがそんな御坂美琴の行動は一つの人影によって踏み止められた。「へへ」

守越尊が苦痛に顔を歪めながら力無く笑う。

一方通行はそれが、あまりの激痛に精神が壊れてしまつたかと思つたがそうでは無かつた。

「最強さんよ。あんた、俺ばっかりで遊んでるけど……何か忘れてないか？」

「ザ、と地面を靴が擦る音が聞こえた。

一方通行は何かを思い出した様にその方向へと顔を向ける。

「俺を忘れてもらつちや困るよな、一方通行！」

しかし既にその先には拳を振り上げる上条当麻の姿があつた。

ガツン、と一方通行の頬に拳が突き刺さる。

殴られた瞬間にさらに思い出す。上条当麻の拳も『反射』が通用

しない事。そしてもはや守越尊に与えられたダメージが大きすぎて体が言う事を効かない事。

負ける。それがどんな事なのかは分からない。一度も負けたと事がない、負けると思ってた事すらない。

ただ、負ける事は嫌な事だと体が訴えている。

「はは、面白エ」

だから立ち上がった。地面を這う様に立ち上がる。

「オマエら、最高に面白エぞ！」

「悪いな尊、良いとこだけ持って行っちゃまって」

アクセラレータ 一方通行は地面に踏み込んだ足の力の向きをベクトル変えて、地面を飛ぶように走る。

「ああ、いいさ。決めちまってくれ、当麻」

アクセラレータ 一方通行の両手が上条当麻に突きつけられる。

振るう右手を身を屈めて避け、追い打ちを掛ける左手を右手で払いのける。

「歯を食いしばれよ、一方通行！ おれら 一万人分の拳はちつとばつか響

くぞー！」

上条当麻の拳がアクセラレータ一方通行の顔に突き刺さる。

もはやボロボロの体に打ちつけられた衝撃は芯まで届き、その体は手足を投げ出しながら地面を転がっていった。

その様子を確かめると同時に守越尊の瞼は閉じられ、視界は真っ暗になった。

12

「本当、君たちは病院が好きなんだね？ それともやっぱり目当てはナーズなのかな？」

お馴染みのカエル顔の医師は二人に向けてそんな言葉を発する。

相変わらずの白い部屋。前回までとの違いと言えば、隣併せに並べられたベッドが二つ。

どうやら今回は二人部屋に入院する破目になった守越尊と上条当麻。

その後、守越尊は上条当麻に抱えられてこの病院に送られたそう
だ。ただその上条当麻も病院に着いた途端に崩れ落ちる様に意識を
失ったそうだ。

聞く話では一方通行と戦う前に数億ボルトの電気を数発浴びて
いたらしい。

妹達はと言うと、体のホルモンバランス等を整える為に一時研究
施設にお世話になるそうだ。ただ、なんでも一〇〇三二号と一九〇
九〇号の二人は体へのダメージが激しい為に何故かこの病院で治療
を受けつつ調整を行うようである。

正直、このカエル顔の医師はどれだけ凄いな、と感心してしま
った守越尊であった。

「いや、好き好んで看護婦に会う為に態々右手を骨折しますか？」
守越尊はグルグルに巻かれた右手の包帯を指さして言う。

カエル顔の医師が言うにはこの右手は手首及び小指から人差し指
までの複雑骨折だったそうだ。ただそんな酷い状態であってもこの
医者からすれば問題ないそうだ。

改めて感心する。

まだ動かす事がやつとの左手を使って、今朝早くに訪れた御坂美
琴が持つて来たクッキー手に取る。

上条当麻曰く「手作りクッキーが一番」みたいだが、御坂美琴が
そんなキャラには見えない。

そんな御坂美琴が作るクッキーだからこそいいんじゃないか、と
言っていたがそんな日が訪れる事は難しいだろう。と守越尊は心の
中で思う。

御坂美琴も妹達シスターズに関して相当責任を感じていたらしく、自分の死
を持って実験を止めるつもりだったらしい。

そんな彼女も上条当麻の言葉で最後には小さな笑顔を見せて帰っ
ていった。

ちなみに実験は一方通行アクセラレータの敗北によって中止に向かう事が決定したそうだ。

ガラガラ、とドアの開く音が部屋に響いた。

「お客さんのようだね？」

テクテクと頭に猫を乗せた純白のシスターさんがドア側にある上条当麻のベッドに一直線に向かい。

「とうま、何か言う事は？」

超至近距離で顔を覗き込むインデックスに少々顔を赤めながら上条当麻は答える。

「……………は、腹減ったのか？」

瞬間、いつもの悲鳴が病室に響き渡った。

噛みついたインデックスはまるでマンガに出て来る番犬の様に上条当麻の頭から離れない。

これを見ると日常に帰って来たと思う。

そんな中、守越尊には一つだけ気がかりな事があった。

窓の方に振り向くとそこに薄らに見える自分の顔。そこに映っているのは間違アクセラレータいなく守越尊である。

しかし、一方通行と戦っている時の自分は、自分自身では無い様に感じた。

頭の中に突如入りこんで来る情報、人間ではありえないほどの身体能力。

あれは一体何だったのか？

「みことも何か言っただけで。とうまがまた女の子に…………て、みこと？」

窓の外を眺めて上の空の守越尊にインデックスは心配そうに訊ねる。

「…………あ、ああ、悪い悪い。で、どうしたって？」

「うつん、もついいんだよ。それより、みことどうかしたの？」
傾げるインデックスの頭から猫がベッドに飛び降りる。

インデックスに上条当麻以外の心配ごとを増やす訳にはいかない。

だから

「いや、空が綺麗だなあって」

雲一つ無い空に降り注ぐ太陽の光。

夏休みも残り一週間。その一週間も病院で過ごす事になった守越尊。

そして、ようやく守越尊の学園都市初の学校生活が始まるうとしていた。

2-7 「決着」(後書き)

2章終了です。

感想やご意見お待ちしています。

アドバイスや指摘もよろしく願います。

あと、申し訳ないのですが10月一杯は少し更新遅れそうです。

3 - 1 「始まりの9月」（前書き）

評価が200ポイントと超えました。ありがとうございます。
こんな作品をご愛読いただけている事に本当に感謝です。

3章開始です。

これからもとある魔術の天の住人をよろしく願います。

すみません、時間軸ミスで後半多少修正しました；

3 - 1 「始まりの9月」

1

九月一日

「夏休みは終わったが残暑厳しく、朝だと言うのにほぼ快晴と思われる空から太陽が道行く人たちを照らしている。」

「ええっと、この大通りを真つすぐ進んで、それから」

守越尊は片手に地図らしき紙を持って道順を確かめる様に呟く。

皺一つ無い黒いズボンに純白のカッターシャツ、埃一つ被っていない鞆を肩から提げる様に手で持って守越尊は大通りを歩いていた。辺りにもちらほらと同じように制服に身を包んだ学生が道を歩いている。何故なら今日から二学期が始まるからだ。

守越尊にとっては学園都市において初めての登校となる。

本来ならば夏休み中に学校の場所を把握しておけばよかったのだが、夏休みの八割以上を病院で過ごす事になってしまった守越尊にそんな時間は無かった。

お陰で明らかに今日が登校初日ですオーラを全開に、地図を確認しながらの登校となっている。

「やっぱプリントにある通り、スクールバスに乗った方が良かったかなあ？」

「どうやら守越尊がこれから向かう高校は電車通学を禁止し、スクールバスを推薦している様だ。」

「どうしてそのスクールバスを利用しなかったかと言うのは、単に登校初日くらいは歩いて登校したいと言う守越尊の変な考えの所為である。」

しばらくするとその高校が見えて来た。

地図から見る限りではその校舎は『工』の形をしている。学校紹介のパンフレットにも目を通したが、どうやら校舎は二つにわかれ

ており、その中央を渡り廊下が繋いでいる。その校舎を挟むように右手にはプールがあり左手には体育館があるようだ。

校舎に入り下駄箱に来た所で、

「俺の下駄箱ってまだ無い……よな？」

そう呟きながら靴からおニューの下履きを取りだす。仕方が無いので履いて来た靴はそのまま手に持って職員室に向かう事にする。

職員室に向かう間、通り過ぎる学校の生徒の中に守越尊にチラチラと視線を向ける者がいる。

守越尊はあまり気にはしない。理由は大体分かっているからだ。恐らくそれは右手に巻かれた包帯の所為である。

とは言っても、動かないほどグルグルに巻かれているモノでは無く、指一つ一つが動く様に包帯は巻かれてある。それに痛みはそれほど無く、動かすにも問題は無い。

カエル顔の医師曰く、君たち二人の丈夫さには驚かされるね？
だそうだ。

もう一人と言うのはもちろん上条当麻の事である。

上条当麻は以前にも守越尊の知らない所で一戦交えていたらしく、その際に切られた腕が一日でくっ付いたと言うファンタジーな体の持ち主みたいだ。

守越尊は部屋の前で立ち止まった。

札には職員室と書かれている。高校生とは言え、職員室に入る時は多少緊張する。軽く咳をし、そのドアをノックしようと手を伸ばした所で

「あれ？ 尊、何でこんなところに居んの？」

聞きなれた声が廊下の向こうから聞こえて来た。

振り向く先にはツンツン頭の少年上条当麻と、見た目一二歳くらいで身長一三五センチの月詠小萌が両手に封筒を抱えて歩いて来た。「守越ちゃんは今からこの学校で勉強するのですよ上条ちゃん。転校生なのです」

「なんだよ、それなら言ってくれば良かったのに」

「まあそうだけど、俺は昨日退院した所だしそれに当麻、昨日昼間と夜いなかっただろ？」

ああ、昨日は色々とあってな。と言いながら頭を数回かく。

「じゃあまたあとでな」

と上条当麻はそのまま自分の教室へと向かい、守越尊は月詠小萌に連れられて職員室へと入った。

「黄泉川先生、今日から転入の生徒さんが来たのですよ」

お、と小さく声を上げて立ち上がって近くまで来たその先生は、月詠小萌とは正反対の一言でいえばナイスなボディの持ち主だ。長い髪を後ろで縛って、月詠小萌の頭ほどありそうな豊富な胸は歩く度に上下に揺れて思わず目のやり場に困ってしまう。ただ体育の教師だろうか、緑色のジャージ姿と言うのが実にもつたいない。

「守越尊だな。担任の黄泉川愛穂だ、よろしくじゃん」

「あ、よろしくお願いします」

軽く会釈をして顔を上げると何やら黄泉川愛穂は両手を組んで、うんうんと頷いて

「いや、やっとウチのクラスにも面白そうなガキが来たって感じじゃん」

と覗き込むように前屈みに守越尊に顔を近づけると

「守越、何でも夏休み中に一騒動やらかしたみたいじゃんよ」

ギクリ、と守越尊の体が反応する。一騒動と言うのは一方通行との事件であろう。

(ヤバ、いくらなんでもあれはやり過ぎたのか)

「まあ、それくらいヤンチャな方がこつちとしても遣り甲斐があるじゃん」

ほら、教室に案内するじゃん。と守越尊の肩に手をポンと置き黄泉川愛穂は職員室を出る。

守越尊も後を追う様に、軽く月詠小萌に頭を下げた歩を進める。

と、ドアを開けると同時に一人の生徒が職員室に入って来た。

(おっと)

レディーファーストと言う言葉がある様にその女子生徒に道を譲る。特に会話は無く互いに会釈するだけ。

黒く長い髪が印象の女子生徒だ。もう一つ印象に残ったとすればそれは首から下げられた十字架のアクセサリー。

(宗教か何かのモノか?)

「早くするじゃんよ」

振り返って女子生徒を見ていた守越尊に、廊下の向こうから黄泉川愛穂が呼び掛ける。

少し気になったが職員室のドアを閉めて黄泉川愛穂が待つ所まで少し小走りで向かった。

ドアを閉める直前に月詠小萌の声が僅かに耳に届く。

「 姫神ちゃん、こっちなのですよ」

2

学園都市には窓の無いビルがある。

ドアも窓も廊下もないビルは最早建物としての機能を失っている。大能力者の一つである空間移動テレポルトを使わない限り出入りも出来ない。

その密室の中心に佇む直径四メートル、全長一〇メートルを超す強化ガラスの円筒の中に『人間』は浮かんでいた。

それは男にも女にも見え、大人にも子供にも聖人にも凶人にも見える。学園都市総括理事長、アレキスター。

その人間は赤い液体に満たされた円筒の中で逆さまに浮いていた。「警備が甘すぎるぞ。遊んでいるのか」

その強化ガラスの前に立つ男は、短い金髪をツンツンに尖らせ、青いサングラスで視線を隠し、アフロシャツにハーフパンツと言う姿。

土御門元春。上条当麻のクラスメイトにしてイギリス清教『必要ネセ悪の教会』の魔術師でもある。

「構わぬよ。侵入者の所在はこちらでも追跡している。」

「シェリー・クロムウェル。こいつは流れの魔術師では無くイギリス清教『必要悪の教会』^{ネセサリウス}の魔術師だ。今までの様にはいかないぞ」
魔術師は同じ魔術師が裁かなければならない。それは『科学』と『魔術』互いがそれぞれの技術を独占することでアドバンテージが取れている様に、科学側の人間が魔術師を潰してしまう事によってその均衡に亀裂が出来てしまうからだ。

これまでこの学園都市は何度か魔術師の侵入を許している。そしてその魔術師たちを倒して来たのは上条当麻だ。しかしそれは事前に教会との取引があったり、魔術師が流れ者だったりとそれほど波風が立たなかった。

だが今回は違う。シェリー・クロムウェルはイギリス清教の魔術師であり、教会との取引があった訳ではない。

つまりは最悪の場合、科学世界と、教会世界の戦争となる恐れがある。

「とにかく、俺はシェリーを討つぞ。魔術師の手で魔術師を打てば少しは波も小さくなる。それから」

「君は手を出さなくて良い」

その言葉に一瞬土御門元春の顔が凍った。

「……本気で言っているのか？」

土御門元春は相手の正気を窺う様に言った。

「アレイスター、お前は何を考えている？ 上条当麻を魔術師にぶつける事がそんなに魅力か。確かにあれは魔術に対するジョーカーだが、それだけでは教会全体を破壊する事は出来ないぞ！」

「プラン二〇八二から二三七七までを短縮出来る。」

「虚数学区・五行機関の制御法か」

学園都市の裏側からその全権を掌握していると考えられているが、本当に有るのかも分からない幻の存在と言われている。

魔術側ではこのビルを指しているとされているが、実際はその存在が、誰にも制御出来ずに何の為にあるのかも分からぬままこの学園都市に潜んでいるのだ。

恐らくアレイスターは既にこの五行機関の御し方を掴んでいる。ただそれを実行する為のキーが不十分なのだ。

そしてその中心の一つには一人の少年がいる。

上条当麻。

アレイスターは何かしらイレギュラーが起きる度に計画を組みかえ、それを利用して手順を短縮しようとする。

(今回のシェリー・クロムウエルの件にしてもアレイスターに取ってプランを短縮する為のモノでしかないと言うことか)

「アレイスター。お前はそんなモノの為に科学と魔術がぶつかってもいいと言うのか?」

「そうならない為に裏舞台を飛び回るのが君の役目だ。君の努力次第では水面下の工作戦にしても死者を出さずに済むかもしれんぞ」
ちくしょうが、と土御門元春は吐き捨てる。

強化ガラスの背を向けて歩を進めると同時に思い出した様に振り返る。

「アレイスター、もう一つ訊きたい事がある。あの外部から引越して来た守越尊、あれは何者だ?」

「知りたければ調べると良い」
そうさせてもらう。と土御門元春は言い放ち、迎えに来た空間移動能力者と共に部屋を後にする。

赤い液体の中に逆さで浮かぶアレイスターは呟く。

「さて、手に入れたアレはどう言う成長を見せてくれるのやら」

3

「ん」。これは仕方が無い事なんだよな?」

学校初日を終えた守越尊はプリント一枚を手に街中を歩いていた。既に日は僅かに西に傾き始めている。

始業式と言う事もあり午前中に学校は終了となったのだが、学校初日と言う事もあって守越尊は放課後、月詠小萌に呼び出された。

内容は今手に持っているプリントにも書かれてある様に、
システムスキャン
身体検査。

外部からの転校と言う事でシステムスキャンが臨時に行われた。

知られている様に、学園都市は無能力者から超能力者までの六段階に分けられており、この身体検査システムスキャンによって能力のレベルや系統等が分かるらしい。

その結果表を手を持ち歩いているのだが、そのプリントには

システムスキャン
身体検査における能力測定の結果

貴方の総合評価は
レベル0

小萌先生が言うには

「まだ時間割りも受けていないんですから仕方がないですよ。これから超能力者目指してバリバリ頑張ってください」

だそうだ。

ちなみに担任の黄泉川先生は所属している警備員アンチスキルの仕事で出かけてしまったそうだ。それは一方通行戦アクセラレータで

見せた力の事だ。

あれが無能力とは到底思えないが、実際は身体検査システムスキャンがレベル0を指している。実際の所、あれから特に変わった事も無く、あの感覚に陥る事は無い。

上条当麻の幻想殺しイマジンプレイカーが無能力者の部類に入っている事から自分にも何らかの要因があるのかもしれないが

そんな事を考えている間に目的の建物が見えて来た。

見なれた建物、守越尊が夏休みの八割を過ごす事となった白い建物。

守越尊は病院の前に立っていた。

3 - 1 「始まりの9月」（後書き）

感想や意見をお待ちしています。

アドバイスやご指摘もよろしく願います。

アニメーゼの声が想像と違っていたのは自分だけでしょうか？

3・2 「口から出た名」（前書き）

更新が遅れるなんていいましたが、再び更新です。

まあ、週末から月末までに掛けては本当に更新出来なくなると思いますので、書ける時に書いてしまおうってやつです。

原作に沿っています但し物語りが少しずつ変わって来ています。多分

……

3 - 2 「口から出た名」

4

「腕の調子はどうなんだい？」

廊下を歩きながらカエル顔の医師は訊ねて来る。

「まだ少し違和感はあるけど、動かすには問題ないと思います」
守越尊は病院を訪れていた。

自分自身の診察も兼ねていたが、今日はどちらかと言えば見舞いが目的であった。

昨日まで自分自身も入院していた身でありながら次の日に見舞いで病院を訪れるのも変な話しだが、先に話した様に診察も兼ねているので、そのついでと言う事にしておく。

カエル顔の医師に案内されたのは普通の病棟では無く、少し離れた部屋だった。

特に名札が有る訳でも無く、病室と言われても案内されなければこんな場所には来ないだろう。

それほど一般の病室と分けられた特別な部屋の様だ。

「今さらなんだけど、んゝ君は入っても……大丈夫かな？ 彼女達とも関係は深そうだし、まあ一応気を付けた方がいいね？」

カエル顔の医師の発言を聞いて守越尊は頭の上に「？」を浮かべ
る。

「帰りは分かると思うから僕はもう行くよ」

それじゃ、と言ってカエル顔の医師は廊下を戻って行く。

未だに言っている事がよく分からなかったが、とりあえず気を取り直してドアをノックする。

返事は無かったが、失礼します、と言って部屋へと足を踏み入れた。
た。

そこは他の病室と同じような作りの部屋だった。白い壁に白い天

井、窓は開いておらずカーテンで締め切っている。

ただ他の病室と違う所と言えば、普通の病院では決して見れない様なSF的な強化ガラスのカプセルが二つ並べられる様に置いてある。

中は透明な液体に満たされ、そしてその中に……

肩まで長さの茶色い髪をフワフワと揺らし、体に白いシールの様な電極を張り付けただけの姿で浮いているミサカが二人いた。

もちろん全裸で……

「……、」

守越尊は一瞬時間が止まった様に固まると、すぐさま一八〇度回転した。

「ご、ごめんミサカ！ べ、別に疚しい気持ちがあつたとかそんなんじゃない。ただ単に見舞いに来ただけでそんな状態だなんて聞いてなくて」

向こうからの返事は無い。もちろんカプセルの中の液体に入っている訳で、向こうが言葉を聞きとる事が出来たとしても向こうからの声は届くはずもない。それなのにそんな事にも気がつかないほど守越尊は動揺していた。

（あの力エル顔の医師が言ったのはこの事か！ なんでちゃんと説明してくれなかったんだ！？ 関係が深いから大丈夫って、確かに関係はあるけど……ちょっと待てこの場合の関係って言うのはいけない様な事の方なのか？ あの力エル顔の医師はまさかそっちに捉えていた！？ いやでもそんな事一言も言っていないし、そもそもそんな関係ではないし！）

すると、

ピー、と言う機械音が部屋に響き渡る。ガコン、と何かが外れる様な音と共に、ゴボゴボと液体が流れ出る音が聞こえた。

カプセルの中から透明な液体が抜かれてガラスの部分が上に開く。「ミサカは別に気にしていませんが、とミサカは答えます」

声がしたので改めて守越尊は振り向いて見るが、先に出て来たミ

サカはただ電極を外しただけで、むしろ隠れる部分が全く無くなっていた。

まるでお風呂上りの様に髪から滴が床にピシヤリと落ちる。

「あああつとと、とにかく何か着てくれ！」

顔を赤らめながらまたまた一八〇度回転する守越尊。

サアアと布と肌が擦れる音、服と肌が擦れる音が守越尊の耳にやたらと入って来る。

あまり意識した事の無い生々しい音に思わず唾を飲み込む。

「もう大丈夫ですよ、とミサカは貴方に申し上げます」

守越尊はその言葉を聞いて、チラチラと確認するように振り返る。一応、ミサカ達の大切な部分は隠れてはいたが、手術着の様な服は股下が僅かに隠れるほどしか裾が無く、自称健全な高校生としては目のやり場に困ってしまう。

そんな守越尊など気にする事無くミサカは平然としている。

その姿に気にしているこちらがおかしいのか？ と言う変な感覚になってしまいそうだったが、ふと隣のミサカに目をやると、何やら短い裾の辺りをやたらと気にしている。

その様子を見たもう一人のミサカは

「一九〇九〇号、どうしたのですか？ とミサカー〇〇三二号は貴方の行動に疑問を抱きます」

「……この方の前でこの格好は少し恥ずかしいです、とミサカー一九〇九〇号は率直な理由を述べます」

(……良かったあ、ミサカも恥かしいと思ってくれて。俺が変な訳では無かったんだな、うんうん。って何か間違っていないか？ この思考……)

ムム、とミサカは詰め寄る様に

「どうして同じ環境で育ったにも関わらず一九〇九〇号はそんな事を思うのでしょうか？ とミサカー〇〇三二号は再度問いかけます」

「どうしてでしょうか？ ミサカはこの方の前では何故か胸の奥が

熱くなります、とミサカ一九〇九〇号は裾を気にしながら感情を露わにします」

とミサカは顔を赤らめながら守越尊をチラッと見る。

ドキッと守越尊は慌てて視線を逸らす。

「ミサカ一九〇九〇号、どうしてその情報をミサカネットワークで共有させないのでしょうか？ とミサカ一〇〇三二号は訴えます」

「これはミサカのモノです。とミサカ一九〇九〇号はそっと胸に手を当てます」

ムッと向かい合う二人のミサカ。

何やら言い合いが悪化しそうな雰囲気だったので、守越尊は話題を変えようと間に割って入る。

「ええっと、体の方はもう大丈夫なのかな？」

グイッと同時にこちらを振り向いた二人のミサカは、どうして割り込んだのですか？ と言う言葉を発しそうな雰囲気です。守越尊に視線を送る。

一歩後ろに足を出して後退りしそうなになったが、何とか踏みとどまって足を元に戻す。

二人のミサカはスイッチが切り替わった様に争いを止めて、

「はい、怪我の方は順調に回復している様です、とミサカ一〇〇三二号は現状を報告します。ただミサカとミサカ一九〇九〇号は怪我が完治した上で調整に入りますのでもうしばらく時間が必要です、と説明します」

「貴方がた二人には本当に感謝しています、とミサカ一九〇九〇号は妹達シスターズを代表して頭を下げます」

と言いながらもミサカはやはり裾が気になる様で終始手で裾を下に引いている。

「一九〇九〇号、どうしてそこまで気にする必要があるのでしょうか？ とミサカ一〇〇三二号は改めて問いかけます」

「では逆に問いかけます。一〇〇三二号はもう一人のあの方の前で同じ姿でいられますか？ とミサカ一九〇九〇号は確認します」

「それは　もちろん問題ありません、とミサカー〇〇三二号は自信を持って言います」

「その一瞬のタメは何だったのでしょうか？　とミサカー一九〇九〇号は理由を追求します」

と永遠に繰り返される二人の質疑応答を見て守越尊は改めて心の中シスターズで思う。

妹達はちゃんとした女の子だ、と。

騒ぎ過ぎるのも体に悪いと言う事でどうかその場を落ち着かせた所で、タイミングよく看護師が入って来る。どうやらこれからまた治療が始まる様だ。

二人にお大事にと声を掛け手を上げると、一人はそのまま会釈し、もう一人は顔を赤らめながら右手を胸の辺りまで上げて軽く手を振った。

その姿を見たもう一人がまた何かを言い始めたが、聞いているとキリが無いと思ひ部屋を後にする。

5

(さてどうしようか……)

病院を後にしたのはいいものの、特にこれといって予定も無い。上条当麻に連絡しようも、昨日新調した携帯電話には寂しい事に誰一人として電話帳に登録されていない。

仕方が無く、守越尊は街中をただ行くあても無く歩く事にする。

今日はこの学校も始業式の為に午前中で学校が終わる為か、差し掛かった駅前の大通りには多くの人が殺到していた。

色々な制服に身を包んだ学生達が同じように鞆を持っていると言う事は、皆学校の帰りにそのまま遊びに来たと言う生徒が多数である。

そんな周りの風景を見回していると、ピカッと眩いばかりの閃光が上空に放たれた。

「な、何だ!?」

まだ距離はあるものの、その光が放たれた方向からはたくさんの人が避難してくる。

その人たちは建物の中へと駆けこんで行く。車やバスも止まって避難している事から、これは何らかの避難信号か何かに違いない、と守越尊は推測した。

辺りから人の姿が消えて、ゴーストタウンの様に静まり返った道の向こう。

距離にして百メートルほど先に二人の人影が見えた。

(あそこか!)

守越尊は誰もいない道を走る。

乗り捨てられている車や自転車は時に障害物にもなったがそれらを飛ぶように避ける。

距離を詰めて行くにつれて二人の人物の姿がハッキリと見えて来た。

まず一人目は茶色い髪をツインテールにして、右腕に腕章を付けている。それは紛れもない風紀委員ジャッジメントの腕章。

その少女は常盤台中学の生徒、白井黒子だ。

「白井!」

その声に白井黒子が振り向いた瞬間、

ガゴン、と彼女の足元の地面にひびが入った。

突然の事に白井黒子は態勢を崩しながらも、瞬、と次の瞬間には守越尊の隣に立っていた。

「手間掛けさせやがって」

声の主はもう一人の人物。服装は黒を基調としたドレスの端々に白いレースやリボンを付けた格好をしている。金髪に青い目をした姿からはゴシッククロリータと呼ぶべきだろうか。

「ターゲット以外に興味は無いわ。手を出さなければ傷付けずに済むんだけど、そう言う訳にも行きそうにねえな」

その言葉に守越尊も構えを取るが、白井黒子に止められる。

「ここから先は風紀委員のお仕事ですので。一般の守越さんは早く避難をして頂けませんと困りますの」

なに？

そう反応したのは白井黒子では無く、守越尊でも無く、その金髪
の女だった。

「おいそのテメエ、訊きたい事がある。カミゴエって名前はジャ
パニーズには腐るほどあるのか？」

いきなり何を訊いて来るのかと思いきや、全く関係の無い様な事
を質問されて戸惑う守越尊。

戸惑う守越尊に対して女は再度言葉を発する。

「さつさと答えなさい」

興味本位で質問している訳でもなく、その表情は陰悪であった。

「守越なんて名字はそう多くは無い。俺も知っている限りでは俺の
家系だけが。それがどうしたって言うんだ？」

「ならもう一つ。カミゴエナツキと言うのはテメエの親族か何かか
？」

(な!?)

守越尊には理解不能であった。何故そんな名前がこの女の口から
出て来るのか。

守越尊はその名を知っている。親族なんてモノではない。その名
前は

「何故あんたが母さんの名前を知っているんだ!？」

そうか、と女は数秒の間無言になる。その間に女が何を考えてい
たのか、何をしようとしていたのか分からない。ただ女は無言の後、
弾ける様に笑いだして、

「はっはっは、こりゃ驚いた。まさかテメエがあのカミゴエナツキ
の子供だったとはね」

次第にその笑みは残酷なモノに変わって行く。

「搜索中止、ターゲット補充だ!」

ス、と女は白いチョークの様なモノを取りだすとそれを殴り書く

様に滑らせる。

同時に地面が割れて、そこから生える様に二メートル以上の長さの腕が飛び出す。それは女がチヨークを走らせる動きに合わせて横から殴る様に二人に襲いかかった。

「危ないですよ！」

白井黒子は即座に守越尊の手を掴むと空間移動テレポートで数メートル後ろに移動する。

「ですから貴方は早くここから」

言葉が終わるより早く二人の足元の地面は形を変える。

目の前にある同じような腕がもう一本地面から生えて来た。

白井黒子はもう一度空間移動を試みたが、足の痛みがそれを邪魔した。

割れたアスファルトが白井黒子の右足を挟むように形を変えてしまっている。

(せめて)

ドン、と守越尊は横から突き飛ばされて地面へと転がった。

空間移動テレポートが出来ないと判断した白井黒子は守越尊だけでもと彼をその場から突き飛ばした。

新たに生えた腕に掴まれた白井黒子は身動きが取れない状態だった。二本の腕。それは別々のモノではなくまるで左右の腕の様に生えている。

守越尊は地面から立ち上がりその二つの腕の中心に目をやると、そこから更に地面を割る様に巨大な塊が姿を現した。

それはまるでアスファルトで人の形を成した様で、その左手に白井黒子は掴まれていた。

白井黒子は能力を封じられていた。彼女の能力、空間移動テレポートは複雑な演算を必要とする。三次元の枠を超えた一二次元上にある自分の座標を計算し、そこから移動ベクトルを演算しなければならぬ。

その為、彼女は激痛や焦燥、混乱なども演算に支障をきたす事が起きると演算能力を奪われて能力を使えなくなってしまう。

今がまさにその状況だった。

そんな中でもどうにかして演算を試みる白井黒子であったが、激痛によって演算能力を奪われて能力どころでは無い。握りしめるその腕が力を入れる度に襲う激痛に白井黒子は目を閉じて、

ゴキゴキ、と地面を切り裂く様な音。

ただそれは白井黒子を襲った痛みでは無かった。

「何の騒ぎか知らないけど、私の知り合いに手えだしてんじゃないわよ！」

瞬間、二発目のコインが音速の三倍ものスピードで腕に突き刺さった。

その腕は轟音と共に崩れ落ちて、その腕から解放された白井黒子は落下と共に空間移動テレポートを使う。

守越尊の横へと着地した白井黒子はコインの発射された方を見る。もちろん白井黒子にとって本来振りかえらずともその人物の正体を把握している。

その人物は白井黒子が知る中で最も気高く、美しく、そして白井黒子が最も信頼を寄せている人物。

御坂美琴であった。

「チ、邪魔が入ったか」

女は崩れ去ったアスファルトの塊の向こうで吐き捨てる様に呟いた。

「まあいいわ、ターゲットはアイツでなくてもいい。他を探すしましょう」

チン、と再びコインが宙を舞う。

それよりも先に女はチヨークを走らせた。

ゴン、と腕が再生するかのよう伸びて地面を叩きつける。

大きな爆発音と共に大量の砂利が巻き上げられ、視界がふさがれる。

瞬間、三発目の超電磁砲が宙を走るが砕け散った塊の向こう、風圧によって砂塵が飛ばされたそこには既に女の姿は無かった。

3・2 「口から出た名」(後書き)

感想やご意見お待ちしています。

今回は眠気に襲われながらの投稿になってしまったので誤字がある
かもしれません。すみません。

3・3 「悲しみの追憶」(前書き)

お気に入り59件ありがとうございます！

妄想想像フルマックスの今回ですがご了承承ください。

一気に書かないと文章おかしくなってしまうね；

時間があれば他の作家さんの作品を読むようにしているのですが、
自分をもっと勉強が必要ですね

少しは良くなっていると思うんですけど

3 - 3 「悲しみの追憶」

6

シエリー「クロムウエル。イギリス清教『必要悪の教会』ネセサリウスのメン
バーにしてカバラの石像使いの魔術師だ。

あちこちの破れたレース満点のドレスと言う異様な姿でシエリー
「クロムウエルは街中を歩いている。

彼女はこの街が嫌いだ。

「まずは原初に土」

この街の水も、この街の風も、この街の土の、この街の火も、何
もかもが嫌いだ。

「神は土より形を作り、命を吹き込み、これに人と名をつ
けた」

「この街の地面も、この街の建物も、
その秘法はやがて、地に落つる墮天によって人へと口伝
される」

彼女にとって地図から消し、歴史から消し、人の記憶から消し、
世界から消し去ってしまいたいモノである。

「しかしその御業は人の手に成せるものにあらず、また墮
天の口で正しく説明できるものにあらず」

「これだけの力を持っている事が忌々しい。

「かくして人の手に生み出されし命は腐った泥の人形止ま
り。さて、泥臭いゴーレム「エリス。私の為に笑って使い潰されな
シエリー」クロムウエルは白いチョークの様なモノを進路上にあ
る全てのモノに殴り書く様に走らせた。聖別した塩を聖油で固めて
造られた魔法陣作製のためのオイルパステル。

まるで抜刀術の様な速さで文字を殴り書き、歌い言葉が終わると
同時にパン、と手を打った。

ギョロ、と辺りを覆い尽くす程の眼球がジュースの自販機、ガードレール、街路樹、地面、オイルパステルを走らせたあらゆるモノから盛り上がる様に現れた。

シエリー・クロムウエルは黒い紙を取り出し白いオイルパステルを走らせる。

「相変わらずこの国の名前は複雑ね」

指で弾いた紙は回転しながらゆっくりと地面へ落ちる。

そこには『風斬氷華』と書かれていた。

落ちたそれに群がる様にして眼球が押し寄せる。ものの数秒と立たない内にその紙切れは跡形も無く消えてしまった。

情報を取り込んだ無数の泥の眼球は地面に潜り、壁を走り、それぞれが四方八方へと散って行く。

「あまり待たせんよ、エリス」

シエリー・クロムウエルが口にする『エリス』とは魔術で生み出したゴーレムを指している。しかし元々その名はゴーレムにつけられた名前では無く。

二〇年前に死んだ、一人の超能力者の名前だった。

7

イギリスのとある一つの施設で魔術と科学が互いの知識を持ち寄って、魔術と能力を組み合わせた新たな術者を生み出すための実験が行われていた。

施設と言っても、その場所は見た目では分からない様に表沙汰では教会と言う事になってあり、その地下で研究は行われていた。

「おいシエリー、俺の名前はエリスじゃないって言ってるんだろ！」
少年は目の前を走る少女に向かって叫ぶ。

「貴方の国の名前は難しいのよ。それにエリスとも読めるみたいだからいいでしょ？」

白いドレスを身に纏った少女は振り向きながらそう答えた。

肩までの長さも無い金色の髪を上下に靡かせながら少女は教会の庭を走る。

少年は制服の様なズボンを穿いているが上はTシャツと言う格好だ。それに上下が両方黒と言う組み合わせ。

白い少女と黒い少年。全くの正反対の二人はよく一緒に遊んでいた。

少女は魔術師であり、少年は能力者。

敷地内には少年の他にも数人の日本人がいた。全員が能力者であるが服装は学校指定のモノであるう制服を身に纏っている。

周りから見れば、日本から交流にやって来ている少年少女に見えるだろう。

「二人とも、そろそろ中に入りなさい」

教会の入り口付近から透き通った綺麗な声が聞こえて来た。

腰辺りまである黒色の髪は風に揺らいで、青色のセーラー服を着た女子学生が手を振って二人を呼んでいる。

「あっ、無月の姉ちゃんが呼んでる。行こうぜ」

少年はその声を聞くと一目散に教会の入り口へと走って行く。

もう、待ちなさいよ。と少女も少年を追って教会の入り口まで足を急ぐ。

「またシェリーを追いかけて、男の子は女の子を追いかけるのではなくて守ってあげないとダメなのよ」

その女子学生は少年の目線に合わせる様にしてしゃがんで左手で髪を耳にかける。

その姿は外人の少女から見ても綺麗だった。それに少年は彼女の前ではとても嬉しそうな顔をする。少女にとっては内心いい気分ではなかった。

しかしそれでも少女はその彼女を嫌いになる事はなかった。

彼女はこの教会にいる子供の姉的な存在であり、このイギリスで言えばシスターの見本みたいに全てを包み込む様な優しいオーラを身に纏っていた。

もちろん彼女は日本の女子学生でありシスターではない。それでも彼女の仕草、笑顔、そう言ったモノ全てがシスターとして相応しいと思える、そんな女性であった。

「そんな事言つたつて、シエリーがまだ俺の事エリスつて呼ぶんだ」
まるで姉に甘える弟の様に呟く少年に、後を追つて来た少女は少しバカにするみたいに言う。

「エリスつて名前、可愛くていいでしょ」

くるつと後ろに振り向いた少年はグイツと前に乗り出す様に言葉を発する。

「俺は男だぞ、そんな女の子みたいな名前と呼ばれるのは嫌だつて言つてんだろ」

「エリスが男の子だつて思える所見せたら考えてあげてもいいわ」

二人の言い合いに割り込むように彼女は手をパンパンと叩く。

「はいはい二人とも、争つていないで中に入りなさい」

「はい」

返事はするが二人は建物に入りながらも小さな争いを続けていた。
「見てろよシエリー、お前が教える魔術なんてすぐに使える様になつてやるからな」

「いいわ、私の教える魔術を使えたらエリスつて呼ぶの止めてあげる」

その二人を後ろから眺める彼女から自然に笑みがこぼれる。

科学と魔術。住む世界の壁があつたとしてもこの二人の少年と少女は仲良くなれる。それを見ているだけで幸せな気持ちになれた。

彼女はこの交流が、科学と魔術の更なる発展に繋がると信じていた。

初めて魔術の話しを聞いた時にはそんなモノがある事を信じる事が出来なかつた。

科学と魔術は互いに距離を取つて二つの力は住み分けられている。しかし実際に魔術を目にして魔術師と出会い、そして彼女は思う。どうして同じ人間同士住み分ける必要があるのか。

彼女が出会った魔術師の少年少女は自分達と何も変わらない。

だから先生の言葉は彼女に響いた。

『君たちは魔術と科学が共存する世界の第一歩になる』

その為の交流なのだ。

しかしそれは表面上の話し。本来の目的は魔術と能力を組み合わせた新たな術者を生み出す事。

そんな事は少年少女には聞かされていなかった。

「いい？ 原初は土、それから」

部屋の中央で向かいあう様に座る少年と少女を彼女は見つめていた。

何故か二人の周りには色々な機材、十以上のコンピューターが設置されており、昨日まで教室の様に机や椅子が並べられていた部屋は、まるで実験室の様になっていた。

今まで見た事無い白衣を着た大人も数人見られる。

「なあ無月、あれは何のための機械なんだい？」

近くにいた一人の魔術師が科学側の彼女に質問をして来る。

「先生は脳開発の研究をしておられるので、その為のモノだと思います」

少年の頭に付けられた電極からいくつものコードが機材に繋がれていた。

恐らく魔術を使用する際、脳内にどのような変化が現れるかを測定するためのモノである。

少年は少女に教えられる様に術式を組み上げていく。

表情は真剣そのものだ。全員に見られていると言う事もあるが、一番の理由は目の前にいる少女だろう。

少年は言われた通りに術式を完成させる。

確認するように顔を前に向けると、少女は軽く微笑んで頷いた。そしてそれを見た少年が何かを唱えた瞬間、

ブシャ、と少年の体から赤い血が噴き出した。

え？

少女は一瞬何が起こったのか理解出来なかった。

目の前の少年の体から何かが噴き出し、そしてそのまま床へと人形の様に倒れて行く。

ドサ、と倒れた少年に視線を落とすと同時に自分の白いドレスの色が変わっている事に気がついた。

頬を伝って何かが落ちて来る。それが手を平に落ちて漸く正体に気がつく。

それは少年の体から噴き出した血だった。

周りの大人たちも何やら慌ただしく走り回っているがそんなものはどうでもよかった。

「エ、エリ……ス？」

ゴブオ、と少年の口から血が溢れ出て来る。

「エ……エリス……！ し、しっかりして……！」

少女は少年の体に手を当てて返事を求める様に声を掛けるが、少年は浅く、荒い息をあげるばかりで反応はない。

それを見ていた彼女はすぐにその場に駆け寄ろうと一步を踏み出した。

ガゴン！ と足を踏み出したと同時に部屋のドアが形を変えて無理やりこじ開けられた。

ドドドド、と地面をならして鎧を身に纏った者が部屋へと入って来る。

「騎士団……！」

大人の一人がそう叫んだ。

騎士団の一人がその大人を槍を様な棍棒メイヌで横殴りにすると、顔から横に吹き飛ぶ様に壁に激突しそのまま動かなくなった。

同時に辺りを悲鳴が覆った。

騎士団は大人だけでは無く、少年少女をも攻撃した。殺す事を躊躇う事なく棍棒メイヌを振るう。

中には魔術や能力で対抗する少年少女もいたが、騎士団の前では赤子も同然だった。

「シエリー！」

彼女は地面に横たわる少年と必死に呼びかける少女も元へと駆け寄る。

「エリスしっかりして！ エリス！」

ピク、と声に反応するように少年の体が動いて目が開かれる。

「シエ……リー」

「エリス！」

少年はその場に起き上がるうと体に力を入れるが、体の中から何かに蝕まれた様に激痛が走った。

「二人とも早く逃げますよ！ このままでは殺されてしまいます」
彼女は二人に呼び掛ける。

「でもエリスが、エリスが！」

少年の状態は見るだけで分かるほど酷かった。

体の至る所から血が溢れ出し、既に少年と少女の周りの地面は血で溢れていた。

中でも腹部の出血が酷い様で、着ていた黒い服は血の赤さを吸い取って更に深い黒を作り出している。

一刻も早く治療しないと命が危ない。しかしここから逃げなければ騎士団によって命が奪われる。

「無月！ 君の能力で早くその子達を連れて逃げるんだ！」

彼女のすぐ後ろから声が聞こえた。

彼女に背を合わせる様に一人の男が叫んでいる。

少年の位置からはその声の主は見えないが声だけで誰なのかは分かかった。

「でもそれでは貴方が」

「いいから行くんだ！」

彼女は奥歯を噛みしめて少年と少女の二人に手を当てようとして不意にゆらゆらと少年が立ち上がった。

「エ、リス？」

何をしているの？ と言う少女の声には答えずに少年は激痛に顔

を歪ませながら歩を進める。

一瞬その行動に驚いた彼女だったがすぐに止めようとする、と

「無月の姉ちゃん……三人で逃げて」

「な!?! 何を言ってる」

「無月の姉ちゃん言ったよね、男の子は……女の子を守ってあげなくちゃダメだって」

彼女は言葉に詰まってしまった。目の前にいる血だらけの一〇歳と少しの少年の目は何かを決意した様に動かず、そしてその目は立派な男の目だった。

「それに……無月の姉ちゃん、あの人がなくなったら悲しむだろ? それに魔術失敗しちゃったから……男の子らしい所見せないと、シェリーに名前でも呼んでもらえないから」

少年は自分がもう助からないであろう事を悟っていた。

体の中がどうなっているかは分からないが、自分が助かるか助からないかはある程度分かる。

ここで自分が逃げる事が出来ても恐らく助からない。その所為で彼女の大切な人が死んでしまう。

そんなのは嫌だった。

だから

「無月の姉ちゃん、シェリー……バイバイ」

瞬間、少女の目には全てがスローモーションの様に見える。

動く事も儘ならない体で騎士団に向かって走り出した少年。

少女の体を押さえている彼女が何かを叫んでいた。それも聞こえない。

先ほどの男性が険しい表情でこちらに走って来ていた。その後方には複数の騎士が棍棒クニスを手に迫っている。

少女は押さえつける手を振り解こうともがいた。

しかし彼女はそれを許さなかった。それをしてしまったのは少年の行為が無駄になってしまう。だから彼女は少女を強く抱きかかえた。

少女には分からなかったが彼女の食いしぼる口からは血が流れ出ていた。
そしてこつちに来た男性の手が彼女に触れた瞬間、
三人の体はその部屋から消えた。
消える瞬間少女が見たモノは、騎士団の棍棒メイスによって頭を打たれて横に飛んで行く少年の姿だった。

8

後から聞いた話し。あの場所で行われていたのは、魔術と能力の両方の力を持った新たな術者を生み出す事だった。

手を取り合うと言う建前で、実際は実験のために数十人の少年少女が集められた。

そしてそれを知った同じイギリス清教の者によってあの施設と関係者は潰されてしまったのだ。

二度と同じ過ちを犯す事の無い様に、魔術と科学は住み分けなければならなかった。

だから戦争の火種を起こす必要があった。

それはあの日に誓った事。

全ては亡き友のために。

「見つけた」

ギョロギョロ動く眼球は一人の少女を捉えていた。

3・3 「悲しみの追憶」(後書き)

感想やご意見お待ちしています。

アドバイスやご指摘もよろしく願います。

3 - 4 「戦場へ」(前書き)

うおおおお、評価がいつの間にか344ポイントにまで……
ありがとうございます！お気に入りも81件と言う事で、非常にうれしい限りです。

ただ、それだけ評価を頂いているのに、こんな文章でいいのか……
久々と言う事もあってなかなか文章がまとまらずに悲惨な事になります。

こんなんでいいのか？ いやダメだよなア、こんなじゃダメだ。
こんなんじゃ評価を頂いた方に申し訳ない。
勉強あるのみ。

頑張りますのでこれからもよろしくお願いします。

「白井、さっきの女は一体何なんだ？」

守越尊、御坂美琴、白井黒子の三人は暗闇の地下街を走っていた。「学園都市の侵入したテロリストですの。まさか外部の人間に能力者がいるとは思いませんでしたけど」

白井黒子はそのまま話を続けた。

「どうやらこの地下街にあのテロリストが紛れ込んでいるみたいですよ。ですからお姉様と貴方様一般的な方は大人しく待機しておいて下さいと申しましたのに、お姉様に関してはあの殿方の姿が防犯カメラに映るや否やついて行くと言い出しますし、守越さんにもしても乗りかかった船とか言っつてついてき来ますし」

ジャッジメント
風紀委員のお仕事と言っておりますのに、と白井黒子は軽くため息をつく。

「なんだ、御坂姉は当麻の事が気になってるのか」

「なっ!?!」

不意な守越尊の発言に御坂美琴は急に立ち止まると

「な、何で私があんな奴の事気にしないといけないのよ! まあ、全く気にならないって訳でもないけど……て言うかその呼び方は止めなさい!」

反応を見ていれば大体予想がつくんだけど、何て思いながら、

「じゃあ、あんたでいいのか? 御坂は被るし美琴じゃ自分の名前言ってるみたいだし」

御坂美琴は白井黒子との距離を確認すると、内緒話をする様な小声で話しかける。

「(黒子は妹達シスターズの事は知らないの、だから姉なんて言葉はつけないで!)」

「何の内緒話ですか？」

「何でもないわよ、と笑顔で誤魔化す御坂美琴。

「（いい？ 呼び方何て何でもいいからその呼び方だけはダメだからね）」

シスターズ
確かに妹達の存在が公になるのはマズイ事に違いない。増してやその内の一人人は既に殺されてしまった何て事が知られてしまつては大騒ぎになりかねない。

じゃあ何て呼ぼうかな、と守越尊は顎に手を当てる様に数秒考えて、

「それじゃあ、みーちゃんです」

バチン、と前方で火花が散つたと思うと

「だ・れ・が、みーちゃんよ！！」

瞬間、守越尊の足元に電撃の槍が突き刺さる。

「ちよ、ちよつと待て！ わ、分かつた美琴にするから、それ以上電撃を飛ばさないでくれ！」

バチバチと髪の毛の辺りから電気を飛ばす御坂美琴を宥める様に、守越尊は両手を前に出して交渉する。

その様子を見ている白井黒子は再び軽いため息をつく。

ふと一秒前までビリビリしていた御坂美琴が耳を傾けた。

「ねえ黒子。猫の鳴き声がしない？」

「猫、ですか？」

と、白井黒子も同じように暗闇の先に耳を向ける。

すると確かにみゃーみゃーと何か助けを求める様な猫の鳴き声が聞こえて来る。

「すぐ近くですわね」

ぱっ、と白井黒子は体を反転させてその声の方向へと走り出す。

続く様に御坂美琴と守越尊も後を追う。

数十メートル走っただけで猫の声が大きくなり、地下街の一角を曲がった先に見えて来たのは

何やらもつれ合う様に地面に倒れる上条当麻とインデックス、そ

してそれを見つめる一人の女の子だった。

「アンタ、こんなトコで一体、何やってる訳？」

「……、あらあら。こんな時間から大胆ですこと」

「当麻……時と場所を考えろよ」

御坂美琴は再び髪の毛の辺りからバチバチと火花を散らし、白井黒子は微妙に冷たい声で言葉を発する。守越尊に関しては最早冗談交じりだった。

「あれ？ とつま、みことがいるんだよ」

と、守越尊に気がつくが、インデックスは特に退く素振りも見せずに上条当麻の上に乗りっぱなしだ。

「あゝ、インデックス？ とりあえず退いてあげた方がいいんじゃないかな？」

チラつと横を確認すると、やはり御坂美琴は少し、いや、かなりご機嫌斜めの表情で二人を睨みつけている。

インデックスは守越尊の視線を追って御坂美琴に目を向けると、ムムと言う効果音付きで立ち上がる。

「あなた、とつまと知り合いみたいだけど一体どんな関係？」

「か、関係って言っても別に……そんなんじゃない……て言うかアンタは何なのよ？」

「……ええっと、命の恩人だったりする」

「もしかして頼んでないのに駆けつけてくれたクチ？」

二人はほとんど同時に力が抜けたようにため息をつく

「……とつま！ どう言う事が説明して欲しいかも！」

もう一人その様子を見ているのは太股くらいまである長い髪に眼鏡姿の女の子。頭の横からは束ねられた髪が一房伸びており、かけている眼鏡は何故か微妙にズレ落ちている。

守越尊はその女の子が着ている制服がどのモノであるかなんて事は分からなかったが、二人と一緒にいたって事はどちらかの友達で有る事は間違いない。

その少女はオドオドと挙動不審気味に辺りを見回して、御坂美琴

の近くにいる白井黒子に元へと近づいて手を伸ばしたが、ボソボソと独り言を言う白井黒子の異様なオーラに負けてその手を引っ込めてしまう。

再びキョロキョロと辺りを確認して、ふと守越尊とその少女の視線があつた。そして守越尊に近づいてきて

「あ、あの……助けてあげなくても大丈夫なんですか？」

少女の指差す方向には、噛みつき魔とビリビリ魔、二つの脅威の威圧に押し潰されそうな上条当麻の姿があつた。

どうやら少女は上条当麻を助けてあげたいみたいだが、あの中に割って入るだけの勇気がないみたいだ。

確かにあの修羅場とも言える中に入り込む事はこの少女には難しいかもしれない。

「そうだな、そろそろ助けてあげないとな」

そう言つて守越尊は気合を入れて三人の中へと割り込んでいった。

10

「じゃあ白井、先に風斬とインデックスを頼む」

二つの脅威から開放された上条当麻は簡単な事情の説明した。色々な情報を交換した結果、ジャッジメント風紀委員の白井黒子の判断によつて避難を優先させる事になったのだが、

「とうま、つまりこの短髪ともっと一緒にいたいって事なんだね？」

上条当麻は幻想殺しの力の影響で空間移動出来ない為に残る事が決定している。イマジンブレイカー

どうやら白井黒子に能力は同時に二人を空間移動させるのが限界らしく、テレポート空間移動する順番を決めているのだが、色々と問題発生中のようだ。

「じゃあ……風斬と美琴でいいや」

「ほう。アンタはその小っこいのと残りたいてって訳ね」

暗闇の中でビリビリと御坂美琴の前髪の辺りで火花が散る。対す

るインデックスもいつでも準備万端の様に犬歯がキラリと光っている。

「ああ分かった！ 白井、インデックスと御坂を先にやってくれ！」
白井黒子はスツといがみ合う二人の肩に手を置くと

「それではお二方いいですね」

瞬、と言葉が終わると同時に三人の姿は一瞬にして消えた。何やら消える間際にいくつ言葉が聞こえた気がしたが、余韻すら残っていないかった。

フウ、と息を漏らす上条当麻に守越尊は、当麻、と軽く呼びかけて
「両手に花も色々大変だな」

「はあ？ 何言ってるんだよ尊。毎度毎度噛みつかれるわビリビリされるわ、こっちの身にもなってみるよ」

鈍感と言うか、実際の所こう言ったモノが当麻の本当の不幸なのかもしれないな。

「それより当麻、やっぱり外部からの侵入者って事は」
「ああ、どうやら魔術師みたいだな」
「やっぱり、と守越尊は呟く。」

白井黒子や御坂美琴が言うには外部に天然の能力者がいても不思議ではないみたいなのだが、政府のUFO陰謀説と同じくらい信憑性に欠けるみたいだ。

そう言った事から考えるとしたら魔術師しかなかった。

ゴガン！ と大きな揺れが地下街を襲う。

共に爆発音や銃声が暗闇の向こうから聞こえて来た。

「お出ましてみたいだな。尊、お前はここで風斬と一緒に白井を待っててくれ。俺はあれを止めて来る」

そう言うの上条当麻は二人に背を向けて走りだそうと足を踏み出す。

しかし、次の一步を踏み出す前に視界の端に何かが入り込んだ為にその体は止まってしまう。

「悪いが当麻、それは出来ない。俺もあの女に用があるんだ。それ

に何でも一人で解決しようとするなよな、少しくらい俺も頼ってく
れてもいいんじゃないか？」

上条当麻の前を行くように既に守越尊は歩き出していた。

上条当麻はその行動を止めるどころか逆にへへっと笑い

「それじゃあ仕方ねえな。まあ味方は多いに越した事はねえし」

その言葉に守越尊は振り返り少しだけ笑みを見せると闇の中へ向
かって走り出す。

「悪いな風斬。お前は白井が来るのをここで待っていてくれ」

「え……でも……」

ゴン！ と再び大きく地下街が揺れる。先ほどよりも震源は近い。
上条当麻は暗闇の先を見つめた。銃声や爆発音はさっきよりも鮮
明に聞こえて来るようになっていた。

そして後ろには風斬氷華がいる。その更に後方には逃げ遅れた他
の学生達が塞がれた入口の近くに殺到していた。

もしも魔術師がここまで来てしまったら大勢の犠牲者が出てしま
う。それだけではどうしても避けなければならぬ事だった。

「俺たちはあれを止めて来るから」

そう言って上条当麻は暗闇の中へと走って行った。

1
1

一足先に行った守越尊は暗闇を走りながらあの女が発した言葉を
思い出していた。

『まさかテメエがあのカミゴエナツキの子供だったとはね』

何故あの女が母の名前を知っているのか？ それは守越尊にとっ
ての二番目の疑問だった。

（つまりあの女は母さんの知り合いなのか？ それとも名前だけ？

いや、あの言い方は会った事のある口調だった）

そして何と言っても一番の疑問は、

何故『魔術師』が母の名前を知っているのか

と言う事。

自分の母親にどんな交友関係があったかなんて事は知らない。正確には知る機会が無かったと言うのが正しいかもしれない。

なぜなら

「尊！」

思考の間を縫う様に声が聞こえる。

後から追ってきた上条当麻が守越尊に追いついたのだ。

すでに銃声や地面を叩きつける様な振動のすぐそこまで来ていた。目の前に見える角の先で大きな爆発と共に黒い煙が風に乗って宙を舞って来る。

「当麻、あの向こうみたいだぞ」

「ああ分かってる。無理すんじゃないぞねえぞ尊」

「それはお互い様だろ」

何かの合図の様にお互い僅かに笑みを作ると、同時に曲がり角の先へと突き進む。

その先は戦場だった。

3 - 4 「戦場へ」（後書き）

今回は特に発展が無かったような……

やっぱり物語を作るのは難しい。2次でこんなに難しいのに……やっぱり作家の方って言うのは凄いですね。

感想や意見お待ちしております。

アドバイスやご指摘もよろしくお願いします。

3・5 「風斬氷華」(前書き)

お気に入り93件、どうもありがとうございます。

評価を頂き始めているのに、
不調から抜け出せない……

今回、ある意味駄文です。

12

そこは戦場だった。

何か爆弾の様なモノが爆発した後みたいに、黒煙が辺りを覆っている。その煙の臭いと同時に銃弾に使われたであろう火薬の臭いも辺りに充満していた。

そして、時折鼻に突き刺さる様な血の臭い。風に流される様に引いた煙の隙間から見えて来たのは、床や壁に倒れている十数名の警備員^{アンチスキル}だった。

彼らが持っていたであろう拳銃は地面に転がり、相手の進路を防ぐために作られたバリケードは無残にも真ん中から破壊されている。「その二人！ 一体ここで何をしてんじゃん！？」

バリケード^{アンチスキル}に寄りかかる様にしていた警備員の一人の怒号が聞こえる。

その声に周りに倒れていた警備員^{アンチスキル}もその方向へと目を向けた。

「守越と月詠先生んトコの悪ガキじゃん、逃げ遅れたのか？」

その警備員^{アンチスキル}は守越尊の担任の黄泉川愛穂だった。

「黄泉川先生！ 大丈夫ですか！？」

守越尊は黄泉川愛穂に駆け寄る。彼女は頭を切ったらしく、額の上から血を流していた。それでも自分の怪我を其方退けにして

「何してるじゃん！？ 逃げるなら方向が逆。時間は私たちが稼ぐから早く逃げるじゃん！」

彼女の言葉に反応する様にその場にいる警備員^{アンチスキル}はボロボロの体にも関わらず、地面に倒れる者は地に手をつき、壁に寄り掛かる者は壁を支えに立ち上がるようにする。

黄泉川愛穂もバリケードを支えにして立ち上がるようにするがそれが出来ない。体が言う事を聞かない。その場にいる警備員^{アンチスキル}皆がそん

な状態だった。

それでも誰もが動く事を諦めない。

その為に志願し厳しい訓練を重ねて来た。

子供たちを守りたいと言うその気持ち^が彼らを動かしていた。

上条当麻と守越尊は無言で頷くと破壊されたバリケードの隙間からその先へと歩を進める。

「お前たちどこへ行くこうとしている！ ええい、くそ、体が動かないじゃん！」

黄泉川愛穂は二人を止めようと手を伸ばすが傷ついた体はそれすら儘ならない。

二人は既にバリケードを越えて、十メートルほど先の暗闇に光る紅い光りを視界に捉えていた。

瓦礫、鉄パイプ、タイル、蛍光灯、そう言ったモノを全て織り交ぜて造られた石像が暗闇の中に立っていた。それを盾にする様に漆黒のドレスに金色の髪の毛の女が笑みを浮かべる。

「ふふ、こんにちは。おや、^{イマジンブレイカー}幻想殺しとカミゴエのガキか。虚数学区の鍵は一緒ではないのね」

「あんた、何でこんな事する必要があるんだ？ それに何で母さんの名前を知ってる！？」

「あんたではない、シェリー・クロムウェルよ、カミゴエのガキ。そうね、カミゴエナツキとは古い知り合いと言ったトコかしら。ね

？ エリス」

シェリー・クロムウェルはオイルパステルを横一線に振るう。

その動きに合わせる様に石像が片足で地面を踏みつけた。ガゴン

！ と激しく地面が揺れて二人は大きく体勢を崩す。破損している地下街の天井からは震動と共に小さな瓦礫や砂がパラパラと降り注ぐ。

シェリー・クロムウェルは薄く笑みを浮かべて

「戦争を起こすんだよ。その火種が欲しいの。だからできるだけ多くの人間に私がイギリス清教の手駒だって事を知ってもらわないと

いけないのよ」

なに？ と二人は僅かに眉をひそめた。

イギリス清教と言えばインデックスと同じ組織の人間だった。

「インデックスと同じ組織の人間が何で!?」

「ふふ、だから言ったでしょ。戦争を起こすつて。その為に殺すのはデメラでもあのガキでも構わないけど　　おやおや、言ってる傍からノコノコと現れるなんてね」

カツ、と二人の後ろから小さな聞こえる。

「あ、あの……」

先に振り向いたのは上条当麻だった。

「風斬!?　何で白井を待ってなかった!?」

それを追う様に守越尊も振り返ろうとしたが、それより先にシエリー・クロムウエルがオイルパステルを横に振るった。

それに反応する様に石像が右腕を振り上げてそれを地へと叩きつけた。爆発するように地面が割れ、辺りに瓦礫が吹き飛ばす。

守越尊はその風圧に耐える様に腕を交差させて顔を庇う。

既に振り向いていた上条当麻は風斬氷華の元へと駆けだしていた。

「風斬、伏せろ！」

未だに状況が掴めていないのか、風斬氷華はキョトンとした表情を見せている。

くそ、と上条当麻は風斬氷華に手を伸ばして

ゴン！　と目の前で彼女が顔から後ろに大きく飛んだ。

上条当麻は一瞬何が起こったのか理解できなかったが、離れた所にいた守越尊は彼女の頭に瓦礫が当たる瞬間を見ていた。

フレームの千切れた眼鏡が宙を舞い、肌色の何かが飛び散った。

「風斬!!!」

上条当麻は慌てて近くに駆け寄るが、

それを離れた場所で見えていた守越尊は信じられない様なモノを見て愕然としていた。そして上条当麻もそれを見て一瞬動きが止まる。地面へと倒れた風斬氷華の顔の左半分は目から上が吹き飛ばされ

ていた。しかし、それよりも問題なのはそれが空洞だったと言う事。

脳も骨も無いただの空洞。

傷口からは血すら流れていない、明らかな異常。

空洞の真ん中には無重力の様に小さな物体が浮かんでいる。それは肌色の三角柱だった。その三角柱が徐々に回転し速度を上げる毎に力チカチとキーボードの様な表面が激しく動き出す。

「う……」

「かざ……きり？」

小さなうめき声に上条当麻は我に返った。

風斬氷華は上半身を起こし、片方しかない目で上条当麻を見つめる。

「あ……れ？ めがめは……どこ、です……か？」

自分の眼鏡を探す様に目元に手を当てて、そして気がつく。

「な、に……これ？ い、や……いやあ！」

すぐ側にあるウィンドウが彼女の姿を捉えていた。そこには左上部分が欠けてしまった自分の顔が映し出されていた。その姿に恐怖し、それから逃げる様に叫び走り出す。

その先に魔術師の作り出す石像がある事も気付かずに。

シェリー・クロムウェルはオイルパステルを横へ一閃する。それに合わせて石像の腕が大きく横に唸り、風斬氷華を側面を捉える。宙を舞う様に壁へと激突し地面へと倒れる風斬氷華。しかしそれでも彼女は蠢く。

腕は捻じれて割れた中はやはり空洞。

「いや、いやあああああああああああああ」

相手への恐怖、巨大な石像への恐怖。そう言ったモノではない。自分自信に対する恐怖。それが彼女の頭を駆け巡る。

全てのモノを振り払う様に風斬氷華は暗闇の中へと逃げるように走って行く。

ふふ、とシェリー・クロムウェルは静かに微笑むと石像の名を呼

ぶ。

「さあエリス。無様で滑稽な狐を狩り出しましょう」
手に持つオイルパステルを回すと石像は天井に拳を振り上げ、そこから建物の破片が上から降り注いだ。

クルリと向きを反転させた石像は魔術師と共に闇の中へと消えて行く。

恐らくは風斬氷華を追うために。

それを分かっているとしても、二人は今見た光景があまりにも鮮烈過ぎてその場を動く事が出来なかった。

13

「そんな事って……本当にあるんですか？」

『あくまで先生の推測ですが、この学園都市には二三〇万人もの能力者がいて、常に微弱な力を放出しています。それらがいくつも重なり合って一つの意味を成し力ザキリヒョウカさん作ってしまったと思われるのです』

あの後すぐ、上条当麻の携帯電話に着信があった。アンテナが設置された場所が近くに無いのにどうして電波が届いたのかと云う疑問があったが、恐らく天井に開けられた穴からこの一帯だけに電波が届いているのだろう。

本来ならば、すぐにシエリー・クロムウエルの後を追って風斬氷華を助けに行かなければならないのだが、電話の相手は月詠小萌でそれはとても重要な内容だった。

携帯電話はスピーカーモードに設定されているのでその内容は守越尊にも届いている。

「でも、どうして今になってそんな事が起きたんですか？」

『それは分かりませんが、以前から不完全な力ザキリヒョウカさんの目撃談があったそうなのです。それが何らかの影響で完全な形となって上条ちゃん達の前に現れたのです。そしてこれらの仮説が正

しければカザキリヒヨウカさんは人間ではありません」

生体電気の発生と磁場の形成。酸素の消費、二酸化炭素の排出。そのような人間を形作っているデータが全部揃っていれば、そこに人間がいる事になる。

人間がいるから体温を感じるのではなく、体温が計測されるからそこに人間がいる。

その体温は発火能力者バイロキネシスが、生体電気は発電能力者エレクトロマスターが、そうやって気付かない内にそれぞれが人間としての情報の担当をし、様々なAIM拡散力場が折り重なる事によってカザキリヒヨウカを作り出してしまっている。

信じ難い話した。
でも

「でも小萌先生。その仮説が正しかったら確かに風斬は人間じゃないかもしれないけど、それでも風斬は俺の、そしてインデックスの友達である事に変わりはないですよね！」

『うふふ、それでよいのです。先生は真つすぐな方向に育つてくれる子羊ちゃんは大好きなのですよー』

決まった。

例え風斬氷華がAIM拡散力場によって作られてしまったとしても、例え触ると消えてしまいうような幻想に過ぎなくしても、

友達である事に変わりはない。

「なあ、尊。手伝つてくれるか？」

「訊くまでも無いだろ。それに、俺一人じゃないみたいだな」

守越尊が指さす方向に上条当麻は振り向く。そして軽く笑みを作り、言葉を発する。

「俺の友達を助けてほしい」

声を向けられた内の一人が、今さら何を言っている、と言わんばかりの表情で答えた。

「ふ、そんなの当たり前じゃんよ」

「何なのかしらねえ、これ」

シエリー「クロムウエルは目の前に横たわる風斬氷華を見つめていた。その体は足がねじ曲がり、割れた腕の中は中身の無い空洞。

しかし、それはまるで足りないパズルのピースを埋める様に開いた空洞が塞がれていく。ねじ曲がった足も何事も無かったかのように元に戻り、破れた衣服や眼鏡も元通りの形へと直って行く。

「虚数学区の鍵と言うからどんなモノかと思ったら、こんなモノだったとは笑えるな！」

「ど、どう……して、なんで……こんなヒドイ、事……っ」

「別に誰でもよかったの、ただあなたが一番手っ取り早そうだったから。な、簡単な理由だろ？ まあ今となっては、あなたみたいな化け物は一番手がかかるだろうけどな」

「なっ……ば、化け……」

あん？ とまるで呆れた様な顔をして

「おいおい、まさか自分が人間だと思っちゃいねえよな？ あなたがしている事ってこういう事でしょ？」

シエリー「クロムウエルはオイルパステルを軽く人差し指で叩く。瞬間、石像は腕を横に振るい壁へと叩きつけた。その腕は弾ける様に先が吹き飛ぶ。

「あ……ああ……」

絶望する風斬氷華の目の前で石像の腕は辺りにある瓦礫やコンクリートを巻き込んで再生されていく。

それは自分自身の体が治っていく時と良く似ていた。

「分かったでしょう？ 今のあなたはエリスと同じ化け物。こんなモノを受け入れてくれる所なんてねえんだよ！」

シエリー「クロムウエルはオイルパステルを横へ一閃する。

石像はゆっくりと歩を進め、オイルパステルの指示するままに腕を振り上げる。

風斬氷華は上半身を起こした状態でそれを見つめていた。

逃げなければならぬ、しかしどこへ逃げるのか？ 帰る場所も無い、受け入れてくれる者もいない。

そしてあの子も自分のこんな姿を見たら、きつともう一緒に写真なんて取って欲しくない。一緒にご飯なんて食べて欲しくない。

一緒に笑ってなんか欲しくない。

風斬氷華の瞳から涙があふれた。

「泣くなよ、化け物。あなたが泣いても気持ち悪いだけでしょ」

振り上げられた腕はそのまま風斬氷華へと振り下ろされる。彼女は目を閉じ顔を逸らしてこれから襲いかかるであろう激痛に身を固めていたが、

その腕が風斬氷華を襲う事は無かった。

「待たせて悪かったな」

その声に反応するかのようには風斬氷華は恐る恐る目を開ける。

涙でぼやけた視界を手でゴシゴシと擦り、焦点が次第に合って行く。

そこには上条当麻が立っていた。

自分の武器である右手で石像の腕を掴み、亀裂が入った石像はガラガラと崩れていく。

「く、エリスッ！」

シエリー・クロムウェルは壁に向かってオイルパステルを走らせる。

抜刀術の様な速さで殴り書いた線や言葉は一つの模様を成し、崩れ落ちた壁は粘土でも作る様に形を整え、ものの数秒で石像を完成させた。

「ははっ、喜べ。どうやら化け物を助けに来るバカがここに一人いたみたいだからね」

「一人だけじゃねえぞ」

ガチャガチャ、と拳銃を構える音が辺りからいくつも聞こえて来た。

風斬氷華はその声の方向へと目を向ける。

そこには守越尊と、傷口を包帯で固め、腕や足を引きずりながらもこの場に駆け付けた警備員達アンチスキルがいた。

「どうして……？」

風斬氷華は問いかける。

彼らが自分の正体をどこまで知っているかは分からないが、人間でない事くらいは理解しているはずだ。

それなのに目の前の少年は、三人で遊んでいた時と同じような顔で「俺はただ頼んだだけだ、友達を助けてほしいってな」

「ふ、こんな化け物を友達だって？ 笑わせるんじゃないよ」

シェリー・クロムウエルは鼻で笑う。

それでも彼らの姿勢は変わる事はない。

「まあいいわ。別に虚数学区の鍵でなくてもいいんだし」

シェリー・クロムウエルは床にオイルパステルを走らせ、その模様や線はやがて形を作り魔法陣へとなる。

「二体目を作る気か！？」

「残念だけど二体同時には形を維持できないの。でもそれを活用すればこういう事も出来るのよ？」

瞬間、シェリー・クロムウエルを中心として半径一メートルほどの穴をあけて地面が崩れ落ちた。それと同時に側の石像も形を維持できずにガラガラと崩れる。

「くそっ！」

上条当麻は慌てて駆け寄るが、その穴は深く底がどのくらいの深さなのかも分からない。

闇の底からは空気の流れの様なモノが感じられる。

守越尊もその場に駆け寄り空洞を眺める。

「逃げたのか？」

「いや、そうじゃない」

上条当麻はシェリー・クロムウエルの言葉を思い出していた。

『別に虚数学区の鍵でなくてもいいんだし』

つまりは逃げたのではなく、狙いを変えたと言っ事？
そしてその可能性があるとすれば
「くそ、インデックスか!!」

3・5 「風斬氷華」(後書き)

原作を短縮しただけじゃん!?

私だって頑張ったんですよ。でもうまくいかなかったんです。話しの流れ的に飛ばす事も出来ず、こんな駄文になってしまったんです。

次回はそうはいきません。

今回の分も取り返して見せます。

どうぞご期待下さい!

と自分でハードルを上げる作者……

3 - 6 「秘められし力」(前書き)

さて前回の後書きでハードルを上げてしまった作者であります、
今回はどうなんでしょうか

前回よりは増しになっているとは思いますが……たぶん

いよいよ、尊の力が明らかに!?

なるのかな?

また焦らせるなんて事は……

3 - 6 「秘められし力」

15

守越尊は地下街を走っていた。

シェリー・クロムウェルは逃げたのではなく、ターゲットを変えただけ。そして次のターゲットであるインデックスは既に地上に避難してしまっている。

アンチスキル
警備員に頼んで無線等で地上に連絡が取れば一番早いのだが、インデックスは学園都市の住人ではない。

ただでさえ外からの侵入者を探しているのに、学園都市の系列とは別の組織に属しているインデックスを放っておくはずがないのだ。ここから先は警備員アンチスキルに頼らずにインデックスを助けなければならなかった。

その為に守越尊は走っていた。

これは上条当麻以外の者でなければならぬ。

上条当麻を右手、イマジンプレイカー幻想殺しはあらゆる能力を打ち消してしまう。つまりある方法では地上へ出る事が出来ない。

だからこそあの時残ると言ったのだから。

「白井！」

地下街と地上とを繋ぐ出入口は封鎖されている為、逃げ遅れた学生達がその出入口へと殺到していたのだが、今ではその人数もあと数名になっていた。

「守越さん、一体今までどこに行っていましたか？ それにあとのお二方はどこに？」

膝に手を当てて、深呼吸を数回して呼吸を整えてから守越尊は言葉を発した。

「二人なら別の方法で外へ出ようとしてる」

「でしたら私がそちらへ行つて空間移動テレポートした方が早いのでは？」

「いや、ダメなんだ。時間がない。俺を今すぐに地上へ空間移動してくれ！」

状況が今一つ理解できない白井黒子であったが、あまりの守越尊の真剣な表情に何かを察した様で、

「分かりましたわ。準備はよろしいのですか？」

ああ、という言葉と同時に守越尊と白井黒子の姿が地下街から消えた。

16

「こら、スフィンクス！ あんまり聞き分けられない事言ってるよ！ ホントにお仕置きしちゃうかも！」

インデックスは三毛猫の首の根っこを掴んで上へ持ち上げた。

白井黒子によって御坂美琴と一緒に地上へと空間移動させられた

インデックスは、ほんの数分前まで御坂美琴と街中で皆が来るのを待っていたのだが、突如の三毛猫の逃走によりその捕獲作戦を成功させた所であった。

みゃーみゃーと鳴く三毛猫を胸に抱いたインデックスは辺りを見回す。

追いかけていくつもの裏路地を抜けて来た場所はまさに廃墟だった。

周囲にあるビルは既に取り壊しが決まっているようで、看板は下ろされ窓は全て外されていた。その窓からは内装がなくむき出しにされたコンクリートの柱が見える。

「ほらスフィンクス、短髪の所に戻るよ」

未だに腕の中で暴れる三毛猫を宥めながら向きを変えた所で、パラパラと頭に何か落ちて来た。インデックスがその何かを手で触ると、それはコンクリートの粉だった。

インデックスは首を傾げて空を見上げる。すると今も尚廃墟と化した建物からコンクリートの粉が降り注いでいた。

さらに足元にあるマンホールがカタカタと震えている事に気がつく。

僅かに震える程度だったそのマンホールは次第に大きく飛び跳ねる様に震えだし、

「!?!」

瞬間、巨大な腕が地面から生える様に伸びる。平手を打つように腕は地面を叩き、その衝撃でインデックスは尻餅をついてしまった。まるで墓場から這い出る亡霊のように巨大な石像が姿を現した。

「久しいな禁書目録。まああなたは初対面だろうけどね」

聳え立つ石像の陰から薄汚れたドレスを引きずる様に金髪の女、シエリー・クロムウエルが姿を見せる。

「あなたが侵入したって言う魔術師？」

「まるで自分は違うみたいない方だけど、あなたも同じようなモノじゃない。まあテメエはここで死ぬんだから関係ねえけどな！」

シエリー・クロムウエルがオイルパステルを横に振ると、石像はゆっくりと振り上げた腕を振り下ろす。

インデックスはとっさに後ろへと飛んだ。

突き刺さった腕が撒き散らした道路の破片が周囲に飛び散る。三毛猫をお腹の下に抱える様に身を屈めると、その上をいくつもの破片が通り過ぎた。

腕を引き抜いた石像は再び腕を振り下ろさんとゆっくりと動き始める。

(基礎理論はカバラ、主要用途は防衛・敵性の排除、抽出年度一六世紀、オリジナルにイギリス清教術式を混合、言語系統はヘブライから英語へ変更)

「エリス」

言葉と同時に石像は空気を切り裂く様に腕を振り下ろす。

(外からの妨害に対処してるけど、いける)

「TITL左方へ歪曲せよ」

瞬間、石像の放った拳は無理やり軌道を逸らされた様に建物を叩

きつける。

「エリス何をしてる！」

オイルパステルを一閃すると、その動きに合わせる様に石像は振り向きざまに腕を横殴りにするが、

「^{C R}右方へ変更」

インデックスの鼻を掠める様に拳は空を切り、そしてその拳はシエリー^{II}クロムウエルへと向かって行った。

く、とシエリー^{II}クロムウエルは横へ飛び、地面を転がる様に避ける。拳は遠心力で止まらなくなったハンマーの様に地面へと突き刺さった。

起き上がったシエリー^{II}クロムウエルはドレスに付いた埃を掃う様な仕草をすると、

「なるほど、^{スヘルインターセプト}強制詠唱か。私の命令を混乱させているのね。敵に回すと厄介な力だ」

その呟きに、でも、を付け加えて

「こうしちまえばいいんじゃないかねえか？」

パチン、と何かが切り替わった様に石像は雄叫びを上げる。

シエリー^{II}クロムウエルはオイルパステルを振るわない。石像はそれでもまるで行動をインプットされたロボットの様に歩を進める。

「^{PIOBTL}左足を後ろへ」

しかし石像はそのまま前進する。

(自動制御に変更された！？)

ドン！ と踏みつけた足は地面を震動させ破壊し、瓦礫を飛ばす衝撃がインデックスを襲う。

「きゃあ」

インデックスは突き飛ばされた様に後方へ飛ばされる。

胸に^{スフィンクス}三毛猫を抱えたまま見上げた先には巨大な石像はインデックスを見降ろす様に立ち塞がっていた。

石像はそのまま腕を天上に振り上げる。

インデックスの^{スヘルインターセプト}強制詠唱は人間を騙すのであって心の無い無機物

を騙す事はできない。

スベルインターセプト

強制詠唱も効かず、魔術も使えないインデックスに石像の攻撃を止める手段はなかった。

「終わりのようね、禁書目録」

その攻撃は容赦なく振り下ろされた。

17

白井黒子によって示された場所には御坂美琴しかいなかった。どうやらインデックスは逃げた猫を探すために裏路地へと入っていつてしまったらしく、正確な居場所が分からない状態だった。

インデックスの後を追うためにその裏路地へと足を踏み入れて間もなく、守越尊は大きな揺れに襲われる。

「くそ、もう見つかつちまったのか！」

辺りに鳴り響く轟音や地響きは既にインデックスが襲われていると言う事を示している様なモノだ。

守越尊はとにかくそういつた音や振動を頼りに走る。

いつくもの裏路地を抜けて辿りついた場所は廃墟の様な所だった。その直後、近くで大きな衝撃が起きた。

それは地面に何か巨大で硬いモノが激突した様な衝撃。轟音と地響きでビルの壁からコンクリートの粉がパラパラと上から降ってくる。

「近い！」

守越尊はその衝撃の元を探して、数十メートル先の角を曲がった所で目にしたのは、

魔術師シエリー・クロムウエルと腕を天上へと上げ、今にもそれを叩きつけそうな巨大な石像。

その足元には白い修道服を纏った少女が地面に倒れている。

「終わりのようね、禁書目録」

シエリー・クロムウエルがそう言葉を発した。

考えるよりも先に行動していた。

体中に熱い何かが駆け巡り、心臓が高鳴る。

地面を力強く蹴り飛ばし、空気を切り裂く様に地面を走る。

ガゴン！ 振り下ろされた拳は大きな轟音と衝撃を伝える。

しかしその衝撃はインデックスに伝わる事はなかった。

「当麻じゃないけど、助けに来たぞ。インデックス」

インデックスが目を開くと、そこには守越尊の姿があった。

目の前の少年は石像と同じように拳を突き出して、その巨大な腕を受け止めている。

「なっ、エリスを素手で受け止めるだど！？ カミゴエのガキが！」

受け止めるだけでなく、振り下ろした石像の腕は大きく後ろに弾き飛ばされる。それはボクシングで拳と拳がぶつかって力負けした方が押し負ける感じに似ている。

押し負けた腕は破壊されるのではなく、先からボロボロと崩れ始めていた。

「チイツ！ 『神の如き者』 『神の薬』 『神の力』 『神の火』！」

四界を示す四天の象徴、正しき力を正しき方向へ正しく配置し正しく導け！」

オイルパステルを走らせ、空気中に歪んだ十字架を書き現す。

崩れた建物の残骸が吸い込まれる様に石像の腕へと集まり粘土を継ぎ足す様に修復されていき、数秒足らずで石像は元の姿へと戻った。

石像は治った腕を再び守越尊に対して振り下ろす。

守越尊もそれに対して地面を蹴って、右手を突き上げる様に振り切る。

実際に石像の体はコンクリートや鉄パイプ、タイルそういったモノが織り混ざって作られている。そんなモノを生身の体で殴っているのは人間の体が負けるに決まっていた。増してその塊が自ら動いて攻撃を加えればその衝撃は凄まじいモノである。

ゴドン！ と衝撃波に近いさざ波が空気を震わせ、交わった拳は

ギシギシと音をたてた。

普通なら巨大な石像が小さな拳を飲み込んで地面を叩きつけるだろうが、

しかし、小さな拳は巨大な石の塊を打ち砕いていた。

石像はポロポロと支えが無くなった様に崩れ去っていく。

(ゴーレムを素手で打ち崩すなんて……いや、違うかも。

基礎理論はカバラ、それに相手オリジナルのイギリス清教の術式まで混合させてる。まさか……同じ術式をぶつけてゴーレムを相殺した!?)

インデックスは自分の持ち合わせている膨大な知識で目の前で起こる光景を分析し整理する。

シェリー・クロムウェルはポロポロと崩れていく石像の向こうに立ちふさがる少年を見つめて驚愕を露わにしていた。

その少年の右の瞳は青に染まり、そしてその目に浮かび上がる光の線は

「バカなッ、魔法陣!? ありえない、ありえないわ。科学側の人間が魔術を使うなんて、そんな事は絶対にありえない!」

それは自分自身が一番分かっている事。能力者が魔術を使うとどうなるか、それは肉体の破壊を意味する。かつてその為に友を失ったシェリー・クロムウェルには目の前で起きている事が理解できない。

「くッ、エリス! 禁書目録を殺れ!」

オイルパステルを殴る様に走らせると、巨大な腕が地面を飲み込む様に生える。それは初めから行動を決めていたかの様にすぐさまインデックスへと拳を振りかざした。

シェリー・クロムウェルがオイルパステルを一閃する姿から自動制御でない事を確認したインデックスは、再び強制詠唱をかけようとして、

不意に腕の中の三毛猫スライククスが暴れた。

(しまった、間に合わないかも……ッ)

ワンテンポ遅れた事によって強制詠唱を唱える前にその巨大な腕は弧を描く様にインデックスを襲った。

轟音と共に衝撃が走る。

振り下ろされた腕は地面を砕き、亀裂が走り、しかしそこにインデックスの姿は無い。

地面が割れたその数メートル隣でインデックスは守越尊に抱えられた状態でいた。

「言つたろ？ 助けに来たって。当麻が来るまでは俺が守つてやる」
目をパチパチさせて驚いた様な表情をするインデックスを地面へと下ろし、守越尊はインデックスの前に立つ。

インデックスはその少年の後姿を見つめたまま時間が止まった様に立ちつくしている。

それは助けられた事に驚いているとか、驚異的な身体能力に驚いているとか、そういうモノではない。

確かにあの状態からインデックスを助けた驚異的な身体能力には驚かされるが、問題はその後目にしたモノだった。

インデックスは自分の頭の中にある膨大な知識から僅かな情報を取り出し、そして呟く。

「まさか　か、神の目……！？」

青く光を放つその目の先には巨大な石像が地面から全身を現した所だった。

3 - 6 「秘められし力」(後書き)

感想やご意見お待ちしています。

アドバイスやご指摘もよろしく願います。

これからもよろしく願います！

3・7 「神の目」(前書き)

今までで一番長い文になってしまった。
それでも後半は端折り過ぎたかも……
2つに分けた方が良かったかな？

そして、うまく書けた……のかな？

お気に入り1000件突破

総合評価400突破

ありがとうございます！

先に動いたのは巨大な石像だった。

オイルパステルの動きに合わせる様にコンクリート、鉄パイプ、標識、瓦礫、そう言ったモノを折り重ねて作られた巨大な右腕を天上へと掲げて一気に振り下ろす。一直線ではなく緩いカーブを描く様に振るわれた腕は横殴りをする感覚で守越尊へと放たれた。

しかしその塊が近づく中、守越尊はその場から動く事無く静かに左手を横へ出し、小さく呟く。

目には目を歯には歯を

ゴドン！ と小さな腕は巨大な鉄の塊を受け止めた。

ギシギシと骨が軋む様な音が響く中、打ち負けたのは石像の方だった。全身に亀裂が走り、ガラガラと地面へと崩れ落ちる。

(やっぱり全く同じ術式をぶつけて相殺してる。『目には目を歯には歯を』理論的には聖書よりもハムラビの方をモチーフにされてるけど、根本的にちよつと違うかも)

一瞬にして崩れ落ちる石像を前にシェリー・クロムウエルは表情を歪めた。

「こんな所で止まる訳にはいかねえんだよ！」

彼女がオイルパステルを走らせようとして、

視界から守越尊が消えた。

「な!？」

気がつけば、その拳は既に頬に向けて放たれていた。

「悪いけど時間がないんだ」

ゴン！ と拳は頬へと突き刺さった。地面を転がる様に飛び跳ねた体は建物の扉へと激突し、もたれ掛る形で漸く止まる。

掴んでいたオイルパステルは彼女の手はから零れ落ちて体のすぐ

隣に転がっていた。体はピクリとも動かない事から、気を失っているみたいだ。

守越尊はインデックスへと駆け寄った。安全ピンだけで繋ぎとめている修道服は破れている箇所はほとんどないが純白とは言い難く、所々に汚れが目立つ。露出している部分が顔だけなので他の部分がどうかは分からないが、頬は地面を転がった際に切ったらしく僅かに血が滲み出していた。

「見た感じ、大丈夫そうだな」

「私は大丈夫だけど……」

インデックスはそう言いながら再度守越尊の顔を覗き込むように見る。その右の瞳は今も尚青に染まっていた。

「うん、やっぱり『神の目』で間違いないんだよ」

神の目？ と守越尊は首を傾げる。

「気付いていないんだね、自分の中にあるモノに」

神の目って言うのはね とインデックスが言葉を続けようとした直後、守越尊は何かを感じ取った様に後ろを振り向く。

インデックスもそれを追う様に視線を向けるが、

瞬間、辺りを大きな揺れが襲った。

地面から生え伸びる様に巨大な塊が姿を現す。

それはシェリー・クロムウエルの魔術によって生み出されし石像だった。

守越尊は今一度シェリー・クロムウエルへと視線を向ける。その手にはオイルパステルがしっかりと握られており、地面には数多の線が織りなす模様が映し出されていた。

既に自動制御へと切り替えられてある石像はシェリー・クロムウエルの操作なしに両腕を合わせて守越尊とインデックスの二人へと叩きつける。

瞬時に守越尊はインデックスを抱えて横へ跳んだ。

巨大な腕が地面へと刺さり道路の破片が四方八方へと飛び散る。

(くそっ……もう来ちゃったのかよ)

守越尊を下にして地面へと倒れるインデックスはその身を退ける。明らかに先ほどとは状態が違っていた。

地面に転がった守越尊は打って変わって動きが急激に落ち、その体を起こす事さえ困難な状態に陥っている。

「当たり前よ、能力者が魔術を使って、無事で済むはずがないの」壁にもたれ掛ったまま顔だけをこちらに向けたシエリー「クロムウエルは地面に倒れる守越尊を見てそんな言葉を発した。

違う。

インデックスは心の中でそう呟いた。

（膨大な力を完全に制御出来ていない。だからすぐに体が限界を超えてしまってるのかも）

震える体をようやく起こした守越尊の視界には、目の前で心配そうに見つめるインデックスの姿が映し出される。そして、それと同時に映し出されたモノは

「く、……インデックス。逃げるんだ」

ハッとインデックスが振り返った先には既に石像が巨大は腕を振り上げた所だった。

遠隔操作なら術者の命令を混乱させる強制詠唱で石像の攻撃を捌く事が出来る。しかし自動制御に切り替えられた石像ではインデックスにはどうする事も出来なかった。

空を切り裂く様な轟音と共に巨大な塊が二人へと放たれる。

守越尊はインデックスだけでも、と体を突き飛ばそうとしたが思う様に体が動かない。

そうしている間にも石像の腕は二人へ突き刺さる。

グシャリ、と何かが潰れる様な音が辺りに響く。

しかしそれはインデックスと守越尊が潰れる音では無かった。

その音は石像にとび蹴りを喰らわせた少女から放たれた音だった。

「ひょう、か……？」

石像は衝撃と共に後方へと大きく傾き地面へと倒れた。

ふわりと宙を舞い、風斬氷華は地面へと着地する。インデックス

はその後ろ姿に声を掛けようとした所で動きが止まった。

風斬氷華が蹴りを放った右足は膝上から木端微塵に吹き飛んでいた。重量数トンの塊をなぎ倒す一撃。守越尊は相殺する事である巨人を打ち崩したのに対して、風斬氷華はただ力だけで巨体をなぎ倒した。

そんな衝撃を生身の体が受け切れるはずがない、と思っていたのだが。

インデックスはその傷口を見る。しかしそこにはあるはずの骨が無く、神経が無く、全くの空洞。

膨大な知識の中に死者をも操る魔術の技術や知識が詰め込まれている。インデックスはそれでも目の前にある光景を説明する事が出来なかった。

その足は壊れたパズルを直すかの様に修復されていく。

「その人と一緒に逃げて」

彼女は振り向かず言葉を放つ。

目の前では起き上がった巨体が傷を修復するために、辺りのモノを片っ端から吸収し始めた。

「どうやら……シエムを掠っちまったようだな。再生機能の暴走か……フフ、殺っちまいなエリス。それで私の目標は達成だ」

腹部の再生に必要な量を超した吸収は石像を二倍もの大きさにまで膨れ上がらせた。その石像は自動制御で動いているのにも関わらず、シエリー「クロムウエルの声に反応するかのように動きをみせる。

「ひょうかも逃げなきゃダメだよ！」

「私は……あの化け物を止めないと」

「無理だよ、ひょうか！ あんな化け物と戦おうと思っっちゃダメだよ！ そんな事したらひょうかはお助けからない！」

彼女はそんな叫びに笑みを浮かべる。うれしさの笑みでは無い。

今にも泣きだしそうな表情でも彼女は笑って振り返った。

「大丈夫……私も、人間じゃないから」

何かを覚悟したように彼女はギシギシと奥歯を噛みしめる。

石像は弾けんばかりに膨れ上がった腕を振り下ろした。

轟！ と空気が押しつぶされ、まるでビルが飛んできているかのようなイメージさえ連想させる巨大な塊。

少女が受け止めるにはあまりにも違いすぎる大きさ。

ゴガン！ と巨大な衝撃と轟音が響き、風斬氷華はその塊を受け止めた。

ギギガガガ、とその小さな腕が悲鳴をあげる。巨大な力によって押しつぶされそうになった腕はガラスに罅が入った様な亀裂が走る。しかし離す事は出来ない。彼女の後ろには守りたいと思った少女がいる。

化け物の相手は同じ化け物がしなくてはならない。

少女はこんな自分をみたらもう二度と一緒に歩いてはくれない。

一緒に笑ってくれない。そして一緒に過ごした時間はもう帰って来ない。

(だからって……見捨てられるはずがない……ッ！)

その想いに答える様に小さな体が巨体を僅かに押し返した。

力を込めた体は外から押しつぶそうとする石像の力と内から傷を治そうとする力がぶつかり合い、ギシギシと不気味な音をたてる。

ギギギ、と石像が軋む音が響く。

それはもう一つの腕を天上へと掲げた音だった。

一つの腕を支えるのが一杯の風斬氷華にもう一つを防ぐだけの余裕が無かった。

「ひょうか！」

少女の叫ぶ声が風斬氷華の耳に届く。

(守って……みせる！)

この身を盾にしても守ると彼女は決意を固めた。

守越尊はインデックスに体を預ける様な形で上半身を起こしている。

言う事を聞かない体をどうにか動かしたかったが、どうにもうまくいかない。だからその光景を見ている事しか出来なかった。

しかし、どうしてここまで自分自身が冷静でいる事が出来たのか理解できない部分がある。それは助からないと言う開き直りなのか、もしくはこの状況を覆す何かを知っているのか、

その答えは一つの全力疾走の足音と共に導き出される。

(まあ、ヒーローってのは遅れて登場するモノだけど……)

僅かに笑みを作り、

「これほどそれが似合うヤツはあんたくらいだよ、当麻」

「風　　斬イイイイイイイイ！」

振り下ろされた石像の腕目掛けて上条当麻は飛び出す。

呆然とする彼女の隣を槍の様に駆け抜け、自分の最大の武器である右手を天上へと突き上げる。

ガゴン！　と二つの拳が激突する。

通常の二倍以上の大きさに巨大化した石像はビルが倒壊するように大量の土砂と粉塵を巻き上げて崩れ落ちた。

「エ……リス。くそ、まだよ。私はまだやらなくちゃならない！」
守越尊の一撃によって未だに体の自由が聞かないシェリー・クロムウエルは壁伝いに立ち上がり、再びオイルパステルを走らせようとしたが、それよりも先に上条当麻が動いていた。

彼女の右手に握られてあるオイルパステルを右手で触つたのだ。

シェリー・クロムウエルは壁に手を当てたまま数歩後退りをする。しかし、その目に光はまだ失われていなかった。

「何でお前はそこまでして戦争を起こす必要があるんだ？　今はまだ科学も魔術も均衡が取れてんだろ！？」

彼女は壁に体を預けて言葉を発する。

「能力者が魔術を使うと、肉体が破壊されてしまう。聞いた事はないかしら」

かつてインデックスが口にした言葉だ。才能の無い人間のために作られた魔術を才能のある能力者が使う事は出来ない。それは脳の回路が違うから、と言う事らしいが。

「不思議に思わなかったのか？　一体、どうしてそんな事が分かる

のかつて。……試したんだよ、今から二〇年ほど前にイギリス清教と学園都市の一部の人間がな。ある施設に集まって魔術と能力、二つの力を持った新たな術者を作るためにね」

スツとシエリー「クロムウエルは視線を超越尊へ向けると

「カミゴエのガキ、あなたは母親から何も聞かなかったのか？ 学園都市から連れて来られた超能力者の一人がエリス、彼は私の友達だった。そしてその中にはカミゴエナツキ、あなたの母親もいたのよ」

（母さんが……超能力者だった……？）

インデックスに体を預けたままその言葉に驚く超越尊だったが、シエリー「クロムウエルはそのまま話しを続けた。

「エリスは……エリスは私の教えた術式によって血まみれになったわ。そして施設を潰そうとやって来た『騎士』から私達を逃がすためにエリスは……棍棒メイヌで打たれて死んだの」

シエリー「クロムウエルはまるでその光景を思い出したかの様にギリ、と奥歯を噛みしめる。

だから戦争を起こす必要があった。手を取り合うと言う思いすら時に牙となる。その思いすら浮かばなくなる様に科学と魔術を遠ざける必要があった。

その為の戦争。

お互いの領分を決めて住み分けをして、互いのエリアから他勢力を締め出すしか悲劇を防ぐ方法はない。彼女はそう言い放った。

「だからって、風斬やインデックス、尊が何をしたって言うんだ！？ 矛先を他人に向けちまったらそれこそメエ防ぎたいと思ってる戦争が起きちまうじゃねえか！」

「どうすればいいかなんて分かんねえんだよ。エリスを殺した人間は憎くい……憎くてみんな殺してやりたいと思ってるわよ！ 科学者も魔術師もみんなぶっ殺したくなるんだよ！ でも……もう二度とあんな悲劇を起こしたくはないとも思ってる！ 本当に魔術師と能力者を争わせたくないとも思ってたよ！ 信念なんて星の数ほど

ありすぎて、始めから頭の中なんてぐちゃぐちゃなんだよ！」

まるで苦痛に身を引き裂く様な声で彼女は叫んでいた。体は言う事を聞かず、そしていつの間にか心も引き裂かれた様な状態で。

「何で分からねんだよ？」

「何……？」

「確かにお前の言ってる事は正反対で、想いも沢山あって、やりた
い事も沢山ある。でもお前の根本的な信念って言うのは、一つだけ
なんじゃねえのかよ。お前は、大切な友達を失いたくなかっただけ
なんじゃねえのか？」

シエリー「クロムウエルの根本的なモノはそれだ。

様々な信念が交差し、それが矛盾した内容であっても、友達に対
する想いだけは揺るがずに心の中にあつたのだ。

「そこを踏まえて考える。テメエの目には俺とインデックスが住み
分けしないとイケない様に見えたのかよ！？ そうしないと争いを
起こす様に見えたのか！ 俺達はな、そんな事しなくても一緒にや
って行けるんだ！ お前は知ってんだろ？ 大切な友達が失う悲し
みを。だから」

俺から大切な友達を奪わないでくれ！

シエリー「クロムウエルの肩がびくりと震える。

彼女自身の願いはもう叶わなくても、それがどれだけ大切なモノ
だったは覚えている。そしてそれが失われる痛みも。

シエリー「クロムウエルの表情は苦痛に耐える様に歪んでいた。

彼女は寄りかかる壁から離れると懐から何かを取り出した、それ
は所持している最後のオイルパステル。

その少年が放った言葉がシエリー「クロムウエルに届かないハズ
が無かった。何故ならそれはかつて自分自身が叫んだ言葉であつた
ハズだから。

「 Intimus 115!! 」

放たれたるは魔法名。

我が身の全ては亡き友のために

振りかざしたオイルパステルが閃きを放つ。

瞬間、彼女のすぐ横のビルの壁に紋様が走り、その部分がガラガラと崩れ落ちた。

粉塵が視界を遮る中、灰色のカーテンを切り裂く様にシエリー「クロムウエルがオイルパステルを手に上条当麻の懐へ飛び込もうとする。」

「死んでしまえ、超能力者！」

それは最後に残しておいた切り札の様に、しかしその顔は今にも泣き出す寸前の子供の様に見えた。

上条当麻は右の拳を握りしめながら思う。

恐らくこれは切り札でも何でも無い。彼女は常にゴーレムを操っていた。それ以外の方法で仕留める事が出来るなら初めからその方法を取っているはずだ。

（ああ、そうか。信念が星の数ほどあるって事は）
「自分の中にある、自分を止めて欲しいって気持ちも理解出来るって訳か」

ゴン！ と上条当麻の右手はオイルパステルを粉々に砕く。その拳は軌道を僅かに歪めて、シエリー「クロムウエルの顔面へと突き刺さった。

ゴロゴロと地面を転がったシエリー「クロムウエルは瓦礫の塊に当たった所で漸く止まる。その瓦礫はゴーレム・エリスを作り出していた残骸だった。

19

上条当麻とインデックスは姿を消した風斬氷華を探しにとあるビルへと入って行き、守越尊はその二人の姿を見送る形で地面へと座り込んでいた。

本来ならば一緒に行つてあげるべきなのかもしれないが、正直普通に歩くだけで一杯一杯の状態だ。

未だに悲鳴を上げている体に鞭を打ってようやく地面から立ち上がる。

目の前には巨大な石像を作り出した大量の瓦礫とその隣で体を預ける様に横たわる魔術師シエリー「クロムウエルの姿があった。守越尊はその近くまでゆっくりと歩を進めた。

「カミゴエの……ガキか」

「あなた、意識があつたのか」

それは意識の途切れる寸前の弱々しい声だった。それでも警戒を
して守越尊は言う事を聞かない体で構えようとするが

「もういい……最後のオイルパステルを壊された今の私には、何も出来ないわ。止めても刺しに来たのか？」

「そんな事はしない。……意識があるなら聞きたい事があるんだ」

なに？ とシエリー「クロムウエルも今にも途切れそうな声で答える。

「俺の……俺の母さんってどんな人だったんだ？」

「どうして、そんな事を訊くのかしら？ 直接本人に」

そう言いかけてシエリー「クロムウエルの声は止まった。彼女の脳裏に浮かんだのは、

「母さんは俺を産んですぐに死んだんだ。だから……俺は母さんがどんな人だったかを知らない」

少しの間沈黙が続く、そしてシエリー「クロムウエルは静かに言葉を発した。

「カミゴエナツキは……暖かい女性だったわ。全ての人を温かく包み込んでくれるような、そんな優しさを持っていた。エリスも姉の様に慕っていたわ。当時の私からすれば……それに嫉妬していたのかもな」

「そっか……」

シエリー「クロムウエルは改めて守越尊を見た。

（よく見りゃ……面影あるじゃない。なるほど……あの女の……想いは変わらなかつたって……事ね。つまり……このガキは……アイ

……ツらの……)

守越尊はシェリー・クロムウエルに目をやるがどうやら真正正銘今度こそ気を失ったようだ。まだ訊きたい事はあったが、それも無理そうだ。シェリー・クロムウエルが気を失ってしまったと言う事もあるが、どうやらこちらの方も限界の様だった。

ガク、と全身の力が行けたように膝が折れて地面へと倒れる。緊張が解けた所為か津波の様に押し寄せた疲労は瞬く間に守越尊の意識を奪って行った。

20

「よう、目覚めたみたいだな」

守越尊が最初に目にしたのは良く見なれた白い天井。そして一番に耳に入って来たのはどうやら今回はベッドに横たわずに済んだ上条当麻の声だった。

窓の外から入って来る光りはオレンジ色に染まっている事からどうやら数時間だけ眠っていたようだ。

「そっか俺、意識失って……あの魔術師はどうしたんだ？」

「俺が戻った時にはお前しかいなかった。でも捕まってどうこうされる心配はないと思う」

ガラガラ、とドアを開ける音が部屋に響いた。

そこには、白い修道服を纏ったインデックスがどうしてか目の周りを少し赤らめた状態で入って来た。

「もう良いのかインデックス」

「うん、もう会えない訳じゃないから」

インデックスは上条当麻の横にある椅子に座ると、スイッチを切り替える様にキリツとした表情で守越尊を見つめた。守越尊もインデックスが座るなり上半身を起こして座る形でインデックスと視線を合わせる。

何を言いたいのか伝わったらしく、インデックスはゆっくりと話

し始めた。

「みことが聞きたい事は分かっているんだよ。『神の目』についてだよね?」

神の目? と、聞きなれない言葉に上条当麻は首を傾げる。

「うん。みことの中にある力の事だよ」

上条当麻は初めて聞く言葉だったが、思い当たる節はある。それは一方通行戦で見た力であろう。
アクセラレータ

「聖人って言っても分からないよね?」

はい! と上条当麻が授業中の優等生の様に挙手をした。

「聖人ってのはあれだろ、世界に二〇人ほどしかいなくて、一時的に人間を超えた力が使えるってヤツだろ?」

ムツとインデックスは上条当麻に視線を移して、

「とうまにしては上出来だけど、そもそもどうしてとうまが聖人について知っているのかが知りたいんだよ」

それはちよつと色々とありまして……

などと弁解しているがこのままではまた痴話喧嘩が始まりそうだったので、守越尊は意図的に咳をして無言で仲裁に入る。

「聖人っていうのは生まれながらにして神の力を宿した人間の事を言うんだよ。神の子に似た身体的特徴や魔術的記号を持つ人間で、世界に二〇人といない存在なの。そして聖人の証『ステイクマ聖痕』を開放する事によって一時的に人間を超えた力を使うことが出来る」

ここまで話して守越尊は自分の体を眺めた。

(この体のダメージは人間の限界を超えてしまった為に受けたモノって事か?)

「って事は、俺は聖人なのか?」

と言う、分かりきった質問を投げかけたが、返って来た答えは意外なモノで、インデックスは首を横に振った。

「ううん、違う。みことは聖人じゃないんだよ。聖人は神の力を宿しているけど、みことに宿っているのは『神の目』、それは神の体

の一部って言われてるんだよ。そしてその神の体の一部を宿した者はこう呼ばれているの」

天人^{てんじん}

21

「これで満足か」

ドアも窓も廊下も階段も無いビルの一室で土御門元春は巨大なガラスの中に逆さに浮かぶアレイスターに呟いた。

「これで虚数学区・五行機関を掌握するための鍵の完成に近づいたと言っ訳だ」

虚数学区・五行機関

「まさかその正体がA I M拡散力場そのものだなんて誰も思わぬだろう。そんなモノに幻想殺しを使って自我を与えるなど正気の沙汰とは思えない。そして、まさかあんなモノまで手中に収めているとはな。正直、オレにはお前が化け物に見えるぞ」

男にも女にも見え、大人にも子供にも見え、聖人にも凶人にも見えるアレイスターは静かに口を開いた。

「あれは偶然見つけたモノに過ぎない。」

何が偶然だ、と土御門元春は吐き捨てる。

「あんなモノを偶然見つけられる訳がない。それに何故あんなモノが科学側にある？ 魔術側の人間が脳開発を受ければどうなるかわからない分かつているだろう？」

魔術師が能力を使えば肉体が破壊される。能力者が魔術を使えば肉体が破壊させる。それは二〇年前にある実験において証明された事。

しかしアレイスターはそんな事は分かっていると云わんばかりにうつすらと笑っている。

「そもそもあれが魔術側のモノと言っ保証はない。それにそうであったとしてもあれの事なら心配する事はない。考えてみたまえ、簡

単な事であろう」

実際に土御門元春は魔術師でありながら能力者でもある。その能力は無能力者の^{レベル。}肉体再生^{オートリパース}。魔術を使用した際に起こる拒絶反応。それによって破壊された体をその能力によって僅かであるが修復させる事が出来るからこそ土御門元春は魔術を使用できる。しかし危険な事には変わりない。一度の魔術で体全体が破裂する様な拒絶反応が起こってしまったえばそれで終わりだからである。

(待て、よ……)

土御門元春はしばらく考えた後に微かな可能性を見出す。

「まさか……二〇年前の事件はそんな事まで考えて起こされたのか!?」

「さてね」

アレイスターは表情一つ変えずに素っ気ない口調で答える。

「ふ、そんな事がイギリス清教に知れたら即開戦だな」

土御門元春はそれでも眉一つ動かす事の無いアレイスターを見つめ、数秒沈黙した後言葉が続ける。

「オレにはお前の考えている事など分からない。だがオレの考えている事が本当に正しいのであれば、あれの存在に魔術サイドが気づいた時、黙ってはいないぞ」

「まだ不完全とは言え、あれはそんな柔なモノではなからう」

土御門元春は巨大なガラスに背を向けるとゆっくりと歩き出し、そして去り際に言葉を放った。

「幻想殺し、そしてあの『神の目』すら利用しようと言つのなら気を付ける事だ、魔術師アレイスター「クロウリー」」

3・7 「神の目」(後書き)

感想やご意見お待ちしております。

アドバイスやご指摘もよろしく願います。

こんな作品ではありませんが、これからもどうぞよろしく願います。

ようやく20巻を読み終えて興奮気味の作者でした。

4 - 1 「アイテム」(前書き)

いつもとある魔術の天の住人をありがとうございます。

お陰さまで第4章突入です。

未熟者の作者の作品ですので暖かい目でこれからも見守ってやって下さい。

さてさて、原作を壊さないかどうか心配ではありますが、今章はオリジナルが混ざります。

4 - 1 「アイテム」

1

第七学区のとあるファミリーストランのテーブル席に四人は陣取っていた。

「この日替わりランチは没確定ね。今度から弁当買って来ようかな？」

店内と言つのに秋物らしい明るい色の半袖コートを着込み、ストッキングに覆われた足を徐に組み変えている彼女、麦野沈利は目の前の半分ほどになったランチセットを眺めながらそんな事を呟いている。

「結局、冷凍レトルトフリーズドライのオンパレードって訳ですよ。そうとなればカレー、カレーが最高」

麦野沈利の横に座っている金髪碧眼のフレンドと言つ女子高生はカレーにスプーンを突きながら口へと運んでいる。つまり同じレトルトならカレーが一番と言つ事をアピールしているみたいだ。

「あのDonald Mーン監督のウルトラC級の大作が近日公開……前回の作品は超駄作でしたからね、今回は逆に超気になります」

要チエック要チエック、と何やら映画のパンフレットに目を通していているのは絹旗最愛。フワフワとしたニットのワンピースを着た一二歳くらいの少女だ。

そしてもう一人、窓際で日光浴でもしているかの様にソファアームの椅子に身を委ねているのが滝壺理后と言つ脱力系の少女。

『アイテム』

学園都市の非公式組織で、主な業務は統括理事会を含む『上層部』暴走の阻止。

たった四人で、この街を左右させるメンツでもある。

「んでね」

と、没確定の日替わりランチを食べ終えた麦野沈利は話を切り出した。

「今日は珍しく二つも依頼が来てしまっているんだけど、ギャラは悪くないし両方やっちゃおうって話しな訳。どう？」

「まず二つがどんな内容なのか超知りたいですね」

麦野沈利は服のポケットから携帯電話を取り出して、

「一つはいつもながらって感じ。まあ掃除と言ったところね。もう一つはある人物の確保。こっちは不明瞭なモノだけど、要するに一人捕まえてくればいって話し」

そう言っただけの三人に情報を転送する。

「で、結局どつちから手を付ける訳？」

カラン、と使い終わったスプーンを皿に置いて、フレンドは携帯電話に送られてきた情報を見ながら呟いた。

「二つまとめてでいいんじゃないかな？ やる事は二つとも単純だし」

「つまり、二組に分けるって事だね」

ソファ一状の椅子に身を委ねていた滝壺理後はぼんやりした声で続いた。

「私は捕獲よりも掃除の方がいいから、あと一人は」

麦野沈利は三人の顔を順に見回す様に視線を移動させて、滝壺理后と目が合う、絹旗最愛と目が合う、フレンドと……

「フレンド掃除確定ね」

「結局私な訳!？」

「私と目合わさなかったでしょ」

……

「それとも、私とじゃ嫌なのかしら」

ぶんぶん、と左右に高速で首を振るフレンド。

「じゃあ決まりね。それじゃ出発しましょうか。時間もつたいないし」

フレンドは麦野沈利に押し出される様に席を立ち、首根っこを掴

まれた子猫の様に連れて行かれる。そこへ滝壺理后は一言、
「大丈夫だよフレンド。私はそんなフレンドを応援してる」

二人の姿が見えなくなった所で絹旗最愛は映画のパンフレットを揃えると携帯電話を開いた。そこには麦野沈利から送られてきた確保すべき人物の画像が映し出されている。

机に伏せた状態で顔だけを向けた滝壺理后は

「この学生、何なのかな？」

「さあ？ 私たちが余計な詮索をした所で超無駄なだけです」

さて、と絹旗最愛は腰を上げると

「私たちも動き始めましょう。超めんどくさそうな事は早く終わらせるに限ります」

2

九月一日

辺りには未だに学生たちで賑わっているが、早くも空は夕暮れへと変わるうとしている。

「くそ、腹が減ったなあ」

そんな言葉を口から漏らしながら守越尊は寮へと帰る途中であった。本来ならば既に寮へ着いていてもよい時間なのだが、今は大覇星祭一週間前と言う事もあってその準備をしていたのだ。

そんな帰り道、何故か腹の虫がよく鳴いている。全ては昼飯を食べ損ねたのが原因だ。

そしてその原因を作ったのは言うまでも無く上条当麻の一言だった。

『尊、男の勝負をやらねえか？』

わざわざ隣のクラスまで呼びに来たのだから何事かと思いきや、それは単なる昼ご飯を掛けたジャンケン大会だった。

参加者は守越尊、上条当麻、さらに上条当麻のクラスメイトであ

り『クラスの三バカ』として有名だと言う、あだ名青髪ピアスと金髪に何故かサングラスをかけた土御門元春と言う生徒だった。

しかも四人の内、昼ご飯を持参しているのは守越尊だけと言う始末。最近また入院したと言う上条当麻曰く、インデックスにすべて摘み食いされてしまったそうだが後の二人の理由は不明だ。ちなみに守越尊の弁当はコンビニで購入したモノである。

ルールは簡単。先に三回勝った者が弁当を食べる事が出来ると言うシンプルなものだ。そして唯一の持参者である守越尊には予めポイント与えられると言う特典付きでジャンケン大会は始まった。

今さらであるが、どうしてこんな事に参加してしまったのかと後悔していた。何故なら、弁当を持参している守越尊にはジャンケンをする理由など無かったからだ。一つあるとすれば『男の勝負』と言われて引く訳にはいかなかったと言う変な理由が存在するかもしれない。

ただ、結果として守越尊は危なげなく勝利し、賞品として出されていた弁当は無事に守越尊の手に戻って来るはずだったのだ。そう、はずだった。

上条当麻の一つの行動。ジャンケンに負けて「あゝあ」と椅子の背もたれに体重を乗せた瞬間、恰も漫才を見ているかの様に体勢を崩した上条当麻の大きく跳ね上げた足が弁当へと直撃し、みごとな弧を描いて窓の外へと飛び立ったのだ。

手を伸ばすが時すでに遅く、弁当はウルトラD難度級の回転技を決めながら宙を舞っていた。後は言うまでもなく、弁当は華麗な着地を決める事なく無残な最後を遂げてしまったのである。

つまりは守越尊は昼飯に在り付けていないのだ。
「絶対にいつか当麻に奢ってもらおう」

そんなこんなで現在に至る守越尊であったが、何気に振り向いたファーストフード店のガラスには自分の姿が映し出されていた。ガラスに映る姿を眺め、自分の右目へと手を当てる。

『神の目』

それは神の体の一部とされ、それを宿した人間を『天人』と言うらしい。

インデックスにその事を告げられてから一〇日ほど経過しているが、一向に実感が湧かない。

「って言うか、そんな事いきなり言われてもなあ」

右目に当てていた手をそのまま頭へと持っていき、指で数回頭をかく。今に思つて見れば、神裂火織に会った次の日の全身の痛み、アクセラレータ一方通行との戦いで頭の中に流れ込んできた膨大な情報や信じられない様な身体能力。そう言ったモノは全て『神の目』によるモノだった訳で、片鱗は前々から見せ始めていたのだ。

ただ改めて自分の中にあるモノがそんな代物だと考えてみると、どうして自分にそんな力があるのか疑問に思う部分もある。別に幼い頃から学園都市で能力開発を受けていた訳でもなく、かと言って魔術を知っていた訳でもない。普通の少年として生きて来た自分に宿る力とは思えない。

気になる事としては、母親である守越無月が超能力者であったと言ふ事実。

（母さんが能力者だったつて事が影響しているとか？ でも俺はレベル0だし。ああ麻も無能力レベル0の扱いだつたよな、それと似たようなモノなのか？）

うーん、とその場で考え込んでいる守越尊はそこで腹の虫が鳴いている事を思い出した。

「腹が減つては頭の回転も悪いに決まつてるか。とりあえず軽く何か食べるかな」

そう言つて守越尊は目の前のファーストフード店へと入つて行った。

店内は完全下校時刻が近いと言ふ事もあつて客足は少なく、注文の際にも待つ事無くすんなりと食べ物確保する事が出来た。後は席について食べるだけとなつた所で、

「ねえお願いだよ。たった一〇〇円なんだからさあ」

何やら隣で一人の少女が前のめりになって店員にお願いをしていた。

「困りますお客様。きちんとお金は払って頂かないと」

「どうかしましたか？」

3

「いや、ありがとうございます！ お陰で無事に食事に在り付けたよお。今度絶対に返すからね」

目の前に座っている少女は、腰の所まで伸びた髪はどちらかと言つと赤みがかつた茶色で、服装は半袖のブラウスに青色のスカート。さらには赤いネクタイを付けた格好だ。どうやら注文した品物の代金に残金が一〇〇円ほど足りなかつたみたいで、値下げの交渉を行つていたみたいだ。

「ああいいいいよ一〇〇円くらい」

別に知り合いでもなかつたが、何故かああ言つた場面では声を掛けずにいられないのは性格上の問題らしい。

「うう、一〇〇円をバカにすると一〇〇円に泣くんだぞ。私みたいだね、って私は君のお陰で無事に助かつたんだけど」

そう言つて少女は御馳走を頂く様な満面の笑みでハンバーガーを口へと運んでいる。一〇〇円をバカにしている訳でもない。もちろんたつた一〇〇円と言う事もあるが、こんなにもおいしそうに食べている姿を見ていたら、逆に一〇〇円出してあげて良かったと思えて来る。

食事を終えた少女は何やら話を切り出そうとした所で口の周りに付いているケチャップを指摘され、にやははは、と少し顔を赤らめながらそれを拭き取つた。

「自己紹介がまだだよ？ 私は和音^{わおん}。見た目同様ピチピチの女子学生、ちなみに高一だよ」

「ええつと、俺は守越尊。あんたと同じ高一」

「へえ、尊君かあ、よろしくね」

何とも明るいい子だなあ、なんて思いながら守越尊は改めてその姿を見ていると

（そう言えばこの制服、この前に風斬氷華が来ていたモノと同じ制服だよな？ って事は同じ学校って事か？）

「所で尊君、どうして君はこんな所でご飯を食べ様と思ったの？ 時間も中途半端だし、まさかこれで夕食終わりって言う寂しげなパターン？」

氷の残ったジュースのパックをクルクルと回しながら和音はそんな事訊ねて来た。

「いや、ちよつと理由で昼飯を食べ損ねたから、まあ軽い間食ってところかな。そう言うあんたはどうなんだ？」

「ん、私？ 私は、『幸せ』を探してる途中にお腹が空いちやつて、尊君と同じ間食ってヤツですな」

「幸せ？」

守越尊は少し首を傾げる。

「そう『幸せ』。それはどんな小さなモノでもいいの。例えば占いの運勢で自分の星座や血液型が一位だったり、道端で一〇〇円を拾ったり。あ、でも学園都市じゃドラム式ロボットが清掃してるから拾えたら超ラッキーかも。それに今だって尊君に一〇〇円貸して貰えてこつやつてご飯が食べれてる、これも小さな幸せだよな」

周りには小さな幸せが沢山隠れている。ちよつと意識して探せばすぐに見つかるくらい。

「そんなに近くにあるんだつたらそんな出歩いて探さなくてもいいんじゃないか？」

それは違つよ、と和音は首を横に振る。

「幸せはやつて来るなんて言うけどそんな事無い。幸せ自分で見つけてあげないとダメなんだよ、ううん、気付いてあげないといけないの。例え幸せが傍に来ていてもそれに気がつかないたらそれは

幸せじゃないんだよ。そう、悲しみや苦しみって言うのは望まなくてもやって来るのにな」

一瞬和音の表情が暗くなった気がした。しかし見間違えと思うほど一瞬にしてその表情はかき消されて明るい笑みを取り戻していた。「まああまり気にせず趣味と思っておくんなせえ」

あ、片付けるね、と和音はテーブルに置かれてあったゴミを自分のトレイに乗せ、守越尊の分も合わせてゴミ箱へと捨ててに行く。

その後も少しの間テーブルに腰をかけて雑談をしたが、和音の明るさが消える事はなかった。

だから守越尊の記憶にインプットされたのは、和音と言う少女は明るくて、そしてよく笑う女の子というモノだった。

話を終えた二人は店を出る事にした。

空は日が落ちて始め、街灯の光や店の明かりが道を照らしている。辺りには颯爽と歩くカップルの姿や仲間で騒いでいる学生の姿もちらほら見えていた。

そんな中、守越尊の目に入ったのは違う人影だった。カップルでもなく、仲間で騒いでいる訳でもない。二人の女の子らしい人影。

その二人はある程度近づくと守越尊と和音を見て

「見つけました。抵抗しないでもらえると超助かります」

4-1 「アイテム」(後書き)

感想やご意見お待ちしています。

アドバイスやご指摘もよろしく願います。

4-2 「和音」(前書き)

総合評価500ポイント突破しました！

ありがとうございます！

この1週間忙しかったものでなかなか投稿出来ずに申し訳ありません、

それから、前話においての時間軸を少々変更させて頂きました。

9月13日ではなく、9月14日になっておりますのでよろしくお願いたします。

一人はふわふわしたニットのワンピースに身を包んだ中学生くらいの少女。そしてもう一人は短髪にジャージ姿の高校生くらいの少女。二人は『アイテム』の一員でもある絹旗最愛と滝壺理后であるが、守越尊と和音がその事を知る由も無い。

「思った以上に超早く見つかりましたね」

そう言つて絹旗最愛は徐に携帯電話を取り出してなにやら画面を確認するように目をやる。

何の事が全く分からない守越尊は問い返そうと喉から言葉が出かけて、ふと背中感触に気がついた。

先ほどまで隣にいた和音が身を隠す様に守越尊の後ろへと回り込んでいたのだ。体半分だけ出す様にしてその手は守越尊の袖辺りを掴んでいる。

（なるほど。見つけたって事はこの二人は誰かを探していたって事だよな）

パタン、と携帯電話を閉じる小さな音が鳴る。絹旗最愛は携帯電話をしまう

「さて。さっきも言いましたが抵抗しなくてももらえると超助かります」

「あんたら何者なんだよ」

「教える義務なんてありませんし、義理なんてモノも超ありません。そうか、と守越尊は呟き

「ならこつちもあんたに従う義理はねえ」

守越尊は吐き捨てると同時に和音の手を掴んで走りだした。当の彼女も突然の行動に一瞬慌てたが、引かれるままではなく自分で走り始める。

「まあ、素直に従ってもらえるとは超思っていませんでしたけどね」
ワンテンポ置く様に二人の少女も後を追いつめた。

街に人がいるといつても歩道にちらほら見える程度であつて、人ごみに紛れるなんて事は出来なかつた。

守越尊は首だけを返して後方を確かめる。一〇メートルほどの距離を開けて二人の少女はやはり後を追いかけて来ていた。

「くそつ、どうやって振り切れれば!？」

このままただ道を逃げていては逃げ切れる保証はない。ここは学園都市。相手が何らかの能力を持っている可能性は大きい。

そして辺りには少ないが人の姿も見えている。万が一巻き込んでしまつては大変な事になってしまう。

思考の最中、前方二〇メートル先に裏路地への入り口が見えた。

(あそこなら……ッ！)

入り組んだ裏路地なら相手の目も誤魔化せるかもしれない。そう思つて再び後方を確認しようと目をやると、

「なっ!？」

ワンピースの少女が立ち止り、近くに止めてあつた小型自動車を容易く持ち上げていた。

(怪力少女か!？ いや、あれが能力か!)

まるで発泡スチロールを投げる様に放たれた車は、低い弧を描いて二〇メートル以上ある距離を容易く飛び越えて来た。小型と言つても五〇〇キログラム以上ある鉄の塊が当たれば一溜まりも無い。

守越尊は和音と共に裏路地の入口へと駆けこんだ。

ガゴン、と音を立てて車は地面へと落ちて数回地面を転がり、車体をボコボコにして止まつた。

その音だけを聞いて守越尊は和音と裏路地を走る。

相変わらず裏路地には様々なゴミがいくつもあり、時折瓶ケースから零れ出た液体だ地面に流れていたが今は気にしている余裕はなかつた。

後方を確認する限りでは二人の姿は見えない。しかし、見えない

だけであつて後ろにいないと言う保証はどこにもないのだ。

表通りに出て相手の姿が無い事を確認するまでは気を許す事は出来なかった。

「なんで追われてるか分かんないのか？」

走りながら守越尊は和音に問いかけるが、和音は一瞬変な間をおいて首を横に振った。

先ほどの和音の隠れる仕草からは何か理由を知つていそうな気がしたのだが、守越尊はそれ以上は詮索するのを止める。

そんな事は逃げ切った後にでも十分出来る事だ。

とにかく追われている事に間違いはないのだから、今は逃げる事だけを考えるべきだ、と守越尊は改めて前方を確認する。

二人は裏路地から表通りへと出た。

先ほどの場所と違い一転してその道路には人氣が無かつた。

時間的な問題もあるだろうがもともと人通りの少ない場所なのだろう。その通りには店は無くあるのはただ立ち並ぶビルばかりで、中にはまだ建設途中の建物も見える。

「一先ずあの中で様子を見よう」

まだ作業用の機材や機械などが置かれている建設途中の建物の敷地内へと足を踏み入れる。

しかしその半ば辺りに来た瞬間に何かの影が二人を通り越し、

前方に落ちたそれは、轟！ と爆音と共に炎を上げた。

「く……っ！」

逃げ込む予定だつた建物の入り口を塞ぐように落ちて来たそれは炎上している。

「そろそろ超観念時です」

守越尊と和音が振り返る先にはふわふわニットのワンピースを着た少女が一人でこちらに歩いて来る途中であつた。

一人と言う事はどこかにもう一人がいる、と守越尊はチラチラと辺りを確認するが、

「超心配いりません。滝壺さんは補助専門みたいなものですから。」

それに私一人でも超十分ですよ」

そう言った直後にもう一人の少女が建物の影から姿を現した。

目の前の少女は明らかに場慣れしている様に見えた。

確かに守越尊は一方通行と戦い、シエリー・クロムウエルと戦い、そして自分の右目には「神の目」なんてモノが宿っている。しかしそれらは守越尊にとって非日常的なモノに入る訳であって、戦う事に慣れていく訳でもなく、五〇日ほど前まではそんなモノには無縁であったのだ。

それに比べて目の前の少女はどうだろう？

普段やり慣れていない事と言うモノはどうしても行動や表情などに出て来るモノだが、この守越尊よりも三つ四つ歳の離れていそうな少女はこんな事が当たり前かのように振る舞っている。

「ただ正直、超驚きました。まさか滝壺さんの能力追跡で追跡できないなんて、さすが依頼が来るだけの何かがあるみたいですね。全くの無能力者レベル0って落ちもありますが、まあお陰で追いかけるのが超難しかったですよ」

徐々に距離を詰めて来る絹旗最愛に対して守越尊は再び逃走しようと考えたが、それでは同じ事の繰り返しになってしまう場合の可能性が高い。やはりここでどうにかして相手の動きを封じるか何かをしない事には逃げ切れる事は難しいだろう。

守越尊の右目には『神の目』がある。それを使えば逃げる事は出来るかもしれないが、未だに制御できない力である上に使用後に倒れてしまったては元も子もない。

「（私が良いって言うまで耳を塞いでおいてくれるかな？）」

そんな思考の最中に、和音が囁くように言葉を発した。

「（何をやる気だ？）」

「（あの二人の動きを封じるんだよ）」

「（どうやって？）」

「（いいから耳塞いじやって。尊君まで動けなくなったら意味ないでしょ）」

そう言って和音は自ら数歩前へと出て、守越尊は言われるがままに自分の両耳を塞いだ。

「今さら何をするつもりですか？ 超無駄だと思いますよ」

和音の行動を気にする素振りも見せずに絹旗最愛は歩を進める。

そんな少女を裏腹に和音は自分の胸に軽く手を当てると徐に口を開いた。

「

守越尊は耳を塞いでいるので何を言っているか分からないが、何か言葉を発しているには違いなかった。

そして変化は見て取れる様に現れた。

ガクン、と前方の少女二人が頭を両手で押さえて膝を着いたのだ。絹旗最愛は片手を頭から離して近くにある機材へと手を伸ばすが、更なる異変に気がつく。

彼女は怪力なのではない。彼女の能力オフエンスターマー窒素装甲は空気中の『窒素』を自在に操り、圧縮した窒素の塊を制御することで自動車を持ち上げたり弾丸を受け止める事すら出来てしまう。

しかし、目の前の機材は一ミリたりとも動く気配を見せなかった。

（そんな、能力を使えないなんて……超理解できません）

ドサ、と絹旗最愛の後ろで滝壺理后が地面へと倒れた。

「滝壺……さん」

薄れて行く意識の中で絹旗最愛は呟くがそれは届かない。既に滝壺理后は意識を失っているからだ。

そして絹旗最愛もまた意識を失った。

口を閉じた和音はそのまま地面へと座り込む様に崩れた。

それを見た守越尊は合図を待たずに耳から手を離し和音へと駆け寄る。

「おい、大丈夫か！？」

彼女は全力疾走をした後の様にひどく汗をかいていた。また、呼吸も荒く疲れ切った顔をしている。

「大丈夫、だよ」

和音は深呼吸をするように息を整えながら言葉を続けた。

「多分少しの間は、大丈夫だけど、きつとすぐに目を覚ますから、すぐに逃げない」と

明らかに疲労の色が見えるが、彼女は少し時間を置いた方がいい、と言つ守越尊の意見を拒んだ。

「歩くくらいなら、大丈夫。だから早く行こ」

そう言つて歩き出す和音に速度に合わせて守越尊も歩き出した。

5

本の数分前、とある学生寮の一室で今にも飛びかかって来そうな噛みつき魔事インデックスを宥める為に上条当麻は戦っていた。

「だから謝つてるだろ!？」

「うううう、いくらとうまが悪くないと言つても夕食がそばだけつて言うのはさすがに納得できないかも！」

「確かに買い物帰りにスーパーの袋が中身諸共無残な姿に変わっちゃまったのは俺が悪いかもしれないけどさ。俺なんて昼飯もろくに食べてないんだぞ！人がトイレに行つてる間に誰かさんが弁当の中身を摘み食いで全部食べるから」

「それは私が全て悪いって言ってるんだね」

犬歯を剥き出しにして準備万端のインデックスはボタン一つで発射可能な状態なミサイルの如く標準を上条当麻の頭上へと合わせている。

ちなみにスーパーの袋は、上条当麻が帰宅途中にぶつかりそうになった子供を避け、そして避けた場所の地面に落ちていた野球ボールに足を取られ、宙へと舞った袋が地面へと叩きつけられて、そこへ掃除ロボットが来てゴミとして処分されそうになり、慌てて回収するものの食べれる状態の物が一つも無かった、と言つのは不幸少年上条当麻ならではの出来事だ。

「だああ分かった、尊におかずに余ってないか訊いて来ればいいん

だろ！」

ああなるほど、とインデックスもそんな簡単な方法があったのかと言わんばかりに納得し、我先にと部屋を出て隣の部屋へと向かった。

上条当麻も後を追う様に部屋を後にして守越尊の部屋へと行くが「とうま、部屋誰もいないんだよ」

インデックスが開けたドアの向こうは電気がついていても関わらず、人の気配もせずに静寂な空気に包まれていた。

「残念、尊はお出かけみたいだな」

「でも明かりがついてたから夕食の準備くらいはしてるかも」

何て言いながらインデックスはスタスタと守越尊の部屋へとお邪魔する。

しかし、インデックスの予想に反する様に夕食の準備などと言うモノを今の守越尊が出来るハズも無く、部屋の真ん中に配置されているテーブルの上にもプリントが数枚置いてあるだけで、インデックスの期待する様なモノは何一つなかった。

「ほらインデックス、尊もいないみたいだからさっさと部屋出るぞ」

そう言われてインデックスは部屋を出ようと入り口へと向かう最中にふと一枚のプリントが目に入った。それは守越尊が転校初日に受けた身体検査の結果用紙だった。

その中に書かれてある一文をインデックスは呟くように読み上げる。

「レベル……0?」

アイン

「おい、インデックス何やってんだ、って御坂妹!？」

突如廊下の向こうから走って来たミサカに上条当麻は一瞬驚いたが、

「お願いがあります」

その言葉に上条当麻は表情は真剣なモノになった。

「ミサカとミサカの妹達の命を助けて下さい、とミサカはあなたに向かって頭を下げます」

ブルブルと体に震動が伝わった。耳から入って来るのは初期設定のままの着信音。

その二つによって意識が戻った絹旗最愛はゆっくりと起き上がり徐に携帯を開いた。

『そっちはどうなったのかしら？ もう終わっちゃったって所？』

電話の相手は二人の所属する『アイテム』のリーダーである麦野沈利。彼女は今別件でもう一人のメンバーのフレンドと共に別の依頼をこなしていた所であったが、会話の内容から既にその仕事は済ませてしまったみたいだ。

「超油断しました。まさかあんな能力を持っていたなんて超予想外です」

『……要するに失敗したって事ね』

麦野沈利はミスを嫌う人間である。それ故に一瞬ビクッと震える絹旗最愛であったが

『まあ今回はいいわ。何か上から依頼のキャンセルが来たって言う連絡があったから、ターゲット捕まえても意味ないのよね。だからそっちに車送るからさっさと帰って来ちゃっていいから』

要件だけ済ませた麦野沈利はさっさと携帯を切ってしまった。

「麦野なんて？」

ほぼ同時に目を覚ましていた滝壺理后は絹旗最愛へ問いかける。

「何か依頼のキャンセルが来たみたいです。このままやっても報酬も何もないんで超意味ありません。だから早く帰って来るようにだそつです」

「キャンセルなんて珍しいね」

「超迷惑な話ですよ。私たち超無意味でしたね」

服に着いた砂を払う様な仕草を見せると、絹旗最愛はまるで能力の確認をするかのように側に置いてある機材を持ち上げて軽く放り

投げる。

「それにしてもあの女子学生の能力は何だったんでしょ？ 超気になりますね」

そう、確かにあの一瞬能力が使用出来ない状態であった。全てはあの女子学生が放った一種の音の様なモノが原因と考えられる。

「上が何を考えているかなんて超分かりませんが、あんな男子学生なんかよりも一緒にいた女子学生の方が超価値がありそうな気がしますけどね」

4 - 2 「和音」(後書き)

はい、またエリスの時の様に作者の想像妄想全開の部分がありましたね

感想やご意見お待ちしてます。

アドバイスやご指摘もよろしくお願いします。

4 - 3 「私利私欲」(前書き)

ご指摘がありました様に、間に一話盛り込みました。
これで前回よりは少し自然な形になったと思います。

4 - 3 「私利私欲」

7

時間は三時間ほど遡る。

第七学区の南西端に存在する、常盤台中学を含む五つのお嬢様学校が作る共用地帯。

『学舎の園』

並みの学校の一五倍以上の敷地面積を持ち、内部は極めて小さくはあるが「街」となっている。

周りは大きな柵が張り巡らされており部外者を寄せ付けず、道路標識や信号機も外とは違うデザインという徹底ぶりだ。

その『学舎の園』の一角を御坂美琴と白井黒子は歩いていた。

「ああ、お姉様とお久ぶりのデート。黒子は感無量ですわ」

そう言って白井黒子は両手を胸の前で組み、目をキラキラと輝かせている。

「そんな大層なモノじゃないでしょ、ただ買い物に付き合っただけじゃない」

ジャッジメント

ここ最近、風紀委員の仕事が忙しく、御坂美琴と遊びに行く時間すら取れなかった白井黒子にとって祝福の時間でもあった。

「それにしてもお姉様。せっかく常盤台中学のエースとして相応しいお繕いをするチャンスでしたのに、お姉様ときたら子供染みた下着しか見ませんし、拳句の果てには意中の殿方の為にパットにまで手を出そうとするなんて」

「だからアレは違うって言ってるでしょ！」

と、ここで携帯電話の着信音が辺りに響いた。

音を発していたのは白井黒子の携帯電話。しかし携帯電話と言っても従来の携帯電話のイメージとは異なり、直径一センチ、全長五センチほどの口紅を連想させる様なモデル。

白井黒子が上部のボタンを押すと着信は止まり、スリットの部分から紙の様に薄い透明な本体が滑り出て来る。

「もしもし、ああ初春ですの。お姉様とのデートを邪魔に入れるとは何事ですの?」

『白井さん、今からは私とデートですよ。と言う訳で至急一七七支部まで来て下さい』

電話の相手は同じ風紀委員ジャッジメントの同僚である初春飾利。飴玉を転がす様な甘ったるい声に、これが風紀委員ジャッジメント関連の電話でなければすぐにでも切っているのに、と本気で思う。

「一体何事ですの?」

『新人の私だけでは対処出来そうにない問題なので、ベテランの白井さんに意見を仰ぎたいなあって。詳しい事は支部に来てから説明しますので、三〇分以内にお待ちしますよ』

「ちよつと初春!?!」

白井黒子が言葉を発する前に一方的に電話は切られてしまった。

せつかくのデートを邪魔されて少しご機嫌斜めになりかけた白井黒子だったが、これも風紀委員ジャッジメントの仕事。これがもしも私事なら金属矢の一本や二本、体の中に埋め込まれていたかもしれないと言うのはここだけの話し。

「申し訳ありませんのお姉様。せつかく付き合っただけなのに、風紀委員ジャッジメントのお仕事が入ってしまった……」

「いいのよいいのよ、満面の笑顔で見送ってあげるから」

「……わたくし、本気で涙流しますわよ?」

そう言うて渋々ではあったが白井黒子はバスターミナルへと向かって歩き始める。

「あ、黒子。今日は早めに帰って来なさいよ。何か夜になったら天気が崩れるみたいだから」

その言葉に多少の違和感を覚えながら白井黒子は御坂美琴に対してペコリと頭を下げた。

御坂美琴はそんな白井黒子の姿が見えなくなるまで見送ると、徐

にポケットから小型の端末を取りだし近くの電話ボックスへと足を運ぶ。

「さてと」

そう言っつて御坂美琴はハッキングを開始した。

8

「何なんだよこの渋滞は!？」

黒いスーツを着込んだ男達は苛立ちを隠せなかった。

普段では絶対に起こる事のない渋滞。監視衛星から送られてくる情報を元に交通量を分析、そしてコンピューターで信号機を操り渋滞を回避出来る学園都市の技術において、渋滞と言うモノは無縁に等しいモノであった。

だが、現に今こうして渋滞に巻き込まれているのは大掛かりな停電、もしくは機械のトラブル、そう言っつたモノしか考えられない。

「くそッ! こんな時に限って渋滞なんてツイてない」

後部座席に乗っていた男はチラッとトランクに目を向ける。そこにはとある重要なモノが入っており、それを運ぶ事が彼らの役目だった。

「チッ、作戦変更だ。車を置いて行くぞ」

トランシーバーを取りだした男はそこに向かって吐き捨てた。車を運転していた仲間が路肩へと車を止めると同時に後方にいたもう一台の車も同じ様に車を寄せた。

扉が開かれて中に乗っていた男達は飛び出す様に外へと出る。

一人の男がトランクを開けて中から取り出したモノは白いキャリーケースだった。

「行くぞ」

一人がそう呟くと男達は裏路地へと駆けこんで行く。

と、

じゃり、と言っつ足音。

「さて、アレはそのキャリーケースの中に入ってるんでしょ。ならそれをさっさとこっちに渡しなさい」

男達の前に一人の少女が道を塞ぐように立っていた。

「誰だか知らんが、邪魔するなら痛い目見んぞ！」

そう言つて一人は体に電気を纏い、それを解き放つた。数十万ボルトに及ぶ電撃を浴びれば確かに一般の人間なら無傷で済むはずが無いのだが、

「ふん、電撃使用の頂点の私に電気に対抗するなんていい度胸ね」

バチン、とその電撃は少女の前で吹き飛んだ。まるでより大きな力にねじ伏せられたように辺りに飛び散る。

「まさか……常盤台中の超電磁砲^{レールガン}!?」

半袖の白いブラウスにサマーセーター、灰色のプリーツスカート姿に肩までの茶髪の先にバチバチと火花を散らして御坂美琴はそこに立っていた。

「素直に渡してくれたらいいんだけど、そんな雰囲気じゃないわよね」

なら、

と御坂美琴はポケットから徐に一枚のコインを取り出す。指で弾かれたゲームセンターのコインは宙をゆっくりと回転しながら御坂美琴が親指の辺りまで落下し

「この場で壊すまでよね！」

瞬間、オレンジ色に光る槍が男の持っているキャリーケースへと突き刺さり、地面へと激突した光は爆音と共にアスファルトを砕き、砂塵を巻き上げた。

巻き上げた暴風が御坂美琴の髪やスカートを靡かせる。

「大丈夫よ、手加減はしてあるから」

モクモクと噴煙の立ちこもる目線の先に御坂美琴はそう呟く。

御坂美琴は男達を傷付けようなどとは思っていない。ただ彼らの持っていたキャリーケースの中身だけを破壊する事が出来れば御坂美琴の目的は達成出来るのだ。

しかしいくら経っても物音一つしない煙の向こうに、少しやり過ぎたかな？ などと思ってしまう。確かに手加減はしたが、モノがモノな故に感情が高ぶってしまったのかもしれない。

キャリーケースの破壊と男達の安否を確かめる為に御坂美琴は歩を進める。同時に立ちこめていた噴煙も風に流されて視界が良くなる。

そこで御坂美琴は異変に気がついた。

「何も……ない？ ……ハッ!?」

視界の晴れたそこには地面に転がっているはずだった男達の姿も、壊れて粉々になっているハズのキャリーケースも見当たらない。

その代わりと言わんばかりに出て来たのは、御坂美琴の頭上へとまるで空間移動をして突如と現れたコンクリートの塊。

御坂美琴は咄嗟にポケットからコインを取り出してそれを頭上へと音速の三倍にも及ぶ速度で打ち出す。コンクリートを貫いたそれは空気摩擦によって五〇メートル先の上空で消え去り、粉々に砕けたコンクリートは御坂美琴を避ける様に地面へと落下した。

「さすが第三位の超電磁砲^{レールガン}ね。この程度ではさすがにやられないか？ 誰!? 出て来なさい！」

ギギイ、と古びたトビラが開く様な音と共に、裏路地を挟むように聳え立つ建物の三階の裏口から一人の少女が姿を見せた。

「初めまして、常盤台の超電磁砲^{レールガン}」

「アンタがあんなモノを盗み出した首謀者ね。アレをどうする気!? 一体何を企んでるの！」

「私達を阻止しに来たって事は大方調べはついているんでしょ？ そうよねえ。貴方にとってアレは悪夢でしかないものね」

御坂美琴の体がビクンと震えた。

「アンタ、まさかあの実験の関係者じゃないでしょうね」

「ふふ、残念だけど違うわ。まあ、私はある関係上そう言った情報を手ししやすい所にいるだけよ」

別にそんなモノに興味はないと言わんばかりに手を軽く横へと広

げる。

スツと御坂美琴は右腕を上空へと翳した。その握られた拳の親指の部分にはコインが挿入である。

「そんな物騒なモノ向けないでほしいわね。あの外部の人間はあんまり役に立ちそうにないから私が直接運びに行きたいんだけど、そろそろいいかしら？」

「答えなさい。あの男達がどこへ行ったのか」

「さあどこへ行ったんでしょねえ？ 今頃地下道でも走っているんじゃないかしら」

バチン、と髪の上に火花が散ったと思うと親指で弾いたコインはゆっくりと回転しながら宙を舞う。そのコインが落ちて来た瞬間、そのコインは音速の三倍で空気の中を走る事になるのだが、それは御坂美琴の力が加わらなければただのゲームセンターのコインではない。

「危ないから没収よ」

「な!？」

一秒前まで宙を舞っていたコインは、次の瞬間御坂美琴の元へと落ちて来る事は無くその少女の手中に納められていた。

「じゃあね、常盤台の超電磁砲レールガン」

「待ちなさい！」

直後に御坂美琴の電撃の槍が少女の足場目掛けて放たれるが、既に建物の中へと消えた少女に当たる事は無く、金属の足場を貫くだけであった。

9

それから一時間ほど経過し、御坂美琴は常盤台中学の寮へと戻って来ていた。

あれから再び端末を使ってハッキングした御坂美琴は入手出来る限りの情報を集めた。

（あの女の素性は分かったわ。それに過去の情報とさっきの行動、外部の人間が関係している事とあの中身から逃走ルートは大方予測出来た。あとは ）

カチャ、と自室の扉を開けた。

常盤台中学学生寮、二〇八号室。御坂美琴と白井黒子、二人の部屋である。

扉を開けた先は電気がついておらず誰もいない様子ではあるが、扉の隙間から僅かに光が漏れて来ていた。

「黒子？」

光が漏れて来ていたのはバスルームの方からだった。

御坂美琴はバスルームの扉の手前まで行き、確認するまでもないが中にいる人物を問いかける。

「何ですのお姉様？」

その声は白井黒子だった。当たり前と言っては当たり前。ここは二人の部屋なのだから御坂美琴以外にお風呂に入っているとしたら白井黒子しかない。

ただ、多少不可解な部分がいくつか見受けられる。

「なに、お風呂入ってんの？ 帰って来てるなら部屋の電気くらい点けなさいよね」

そう部屋の灯りがついていなかったのだ。

「省エネと言うヤツですよ。黒子は自然に優しいんですの。お姉様は今までどちらに？」

「ん、買いそびれたアクセサリを集めにつてトコかしら。なかなか見つからなくてね」

御坂美琴はウソをついた。

正直に話せる内容でもないし、何と言っても白井黒子を巻き込む訳にはいかない。この部屋に戻って来た大きな理由は二つ。まずはレーザーガン超電磁砲の弾補充。と言ってもゲームセンターのコインを数枚ポケットに忍ばせるだけ。そしてもう一つは、

「これからまたちょっと出かけて来るわね」

出かける事を伝えに来る事。

以前から色々な事で出かける事がよくあった。今回だけではないだから「出かけて来る」それを伝えればまたいつも通りだと思ってもらえる。そう思っていたのだが、

「そうですの。でしたら雨、降らないと良いですわね。最近では天気予報も当てになりませんから」

ビクンと御坂美琴の体が震えた。

「……そうね。心配してくれてありがとう。なるべく早く帰る様に努力するわ」

そう言っ御坂美琴はドアから離れて自分の机へと向かう。取りだすのはゲコ太の貯金箱。中にはゲームセンターのコインが数十枚保管されている。その中から数枚を取り出しポケットへと入れて行く。

その間、ギシギシと何かが擦れるような音が僅かに部屋に響いた。それは御坂美琴が歯を食いしばる音。

巻き込んでしまった。

自分自身が蒔いた種にまた他人を巻き込んでしまった。

思えば不可解な事は電気が消えていた事だけでは無かった。返事をする白井黒子の声は何か無理をして痛みを隠している様に弱々しかった。

そして改めて机の下を見る。そこにはあるはずの応急キットが無い。

恐らく白井黒子はバスルームで気付かれる事の無い様に怪我の手当てをしているのだろう。

御坂美琴は無言のまま部屋を出る。

体の中から押えきる事の出来ない何かが今にも爆発しそうだった。寮の門を出た御坂美琴の足取りは歩きから早足、早足から駆け足と徐々に速まり、いつしか全力で走っていた。

場所は大方予想出来ている。

御坂美琴は静まり始めている街中を全力で駆けて行った。

建設途中のビルの敷地内に十数人の男女と一人の少女が集まっていた。

「これで全員かしら？」

「ああ、あつちを除けばこれで全員だ」

「なら大丈夫ね」

そう言つて少女は自分が座っているキャリアケースを撫でる仕事をする。その中身を外部にまで運び出す事、それが今回の目的。

「正直、あちらの信頼性は完全では無いわ。だから確実にこれだけは運ばなければならぬ。貴方たちも分かっているわよね？」

その場にいた全員が一斉に頷く。

「それじゃあ行きましょう」

敷地内にはマイクロバスが止めてあるが、ここから先は移動に車を使う事は出来ない。学園都市外部まで逃走するためのルートはセキュリティに引つかからない様に組んである為、車を使うとそのルート通りに移動できなくなるのだ。そのマイクロバスは仲間がここに来るために使ったモノでしかない。

と、先に敷地の外へと出ようとした数人の様子が変わった。

「何だお前は！？ う、うああああ」

瞬間、轟！！ と言う爆音と共にマイクロバスが宙へと舞つて地面へと叩きつけられた。周囲にいた数名はその爆発に巻き込まれて地面へと倒れている。

咄嗟に建物近くにいた者達は建物の隠れる様に身を潜め、それ以外は、ある者は銃を構えある者は能力がいつでも発動出来る様に身構えた。

「無駄よ、アンタたちじゃ私を止める事はできない」

御坂美琴は敷地内へとゆっくり歩を進める。その横には先ほど超レ電磁砲で吹き飛ばしたマイクロバスが転がっている。

相手の一人、恐らく発火能力者と思われる能力者が炎を作り出し御坂美琴へ向けて放とうとしていた。それに合わせる様に銃を持つ者達も引き金へと掛かる指に力を込める。

しかしそれよりも速く御坂美琴はコインを弾いていた。

音速の三倍で打ち出されたそれは地面に向けて放つだけで良い。その地面に当たった衝撃だけで目の前にいた数人の男女は宙へと舞って地面へ叩きつけられる。

「出て来なさい卑怯者。いつまでコソコソと隠れてるつもり!？」

数人の男達が建物の影から飛び出し銃口を御坂美琴へと向ける。

しかしそれに対して御坂美琴は再び超電磁砲レールガンを放つ。地面へと激突したコインは大きな爆発と衝撃波を撒き散らし男達を吹き飛ばした。「ふふ、随分と焦っているのね。そんなにこれが組み直されるのが怖いのかしら?」

建物の二階部分。まるで特等席から全てを眺めている様にすら見えるキャリーケースに座った少女。

「そうよね、これが組み直されればまた悪夢が始まるかもしれない。貴方は自分の為に戦ってるんだから。そう、自己満足の為に戦ってる。まあ別に悪い事じゃないわ」

私欲の為に能力を使っているのお互い様と言わんばかりに少女は笑う。

確かに言う通りなのかもしれない。

「そうね」

御坂美琴は小さく笑う。

「あんなモノを掘り返されたり、それを私欲の為に強奪するバカが現れたり、やっとこさみんなで治めた『実験』を蒸し返されそうになつたり。それにムカついている」

何よりも

「私の時いた種に大事な後輩を巻き込んでしまった事に、私はムカついている!」

御坂美琴の声は止まらない。

「ええ、確かに私利私欲よ。それはアンタと変わらないかもしれない。だから私はアンタを止めるわ。この一件が私から始まり、後輩が傷ついたのもアンタが後輩を傷つけてしまったのも、全てが私の所為だつて言うのなら、私は私の義務と権利を全て使ってアンタを止める！」

御坂美琴の周りに渦を巻く様な火花が散る。

「貴方が私利私欲の為に私を止めるつて言うなら、私は私の私利私欲の為に逃げ延びさせて頂くわ」

「……アンタのちっぽけな大能力者^{レベル4}で、私の雷撃から逃げ切れると思うつ？ それにアンタは自分自身を移動する事を躊躇う。その僅かな時間を私が逃すつても思つてんの？」

そう。彼女は過去のある経験から自分自身を転移させる事にある種のトラウマが潜在する。しかし、それがどうしたと言うの？ と少女は笑う。

確かに自分自身を移動させる事に多少のラグが生じる。だがそれは自分自身の場合だけだ。

つまりは、

他人の場合は何の躊躇いも持たない。

瞬時にして御坂美琴と少女の間に数十人の人間が集められる。視界を隠す様に集められたそれは御坂美琴の攻撃によって気絶していた者達だ。

「そんな スツカスカな盾！」

いくら視界を隠すために何十人と集めようが必ず隙間が生まれてしまう。御坂美琴はその隙間を突こうとしたのだが

「さて問題、この中に関係のない一般人は何人混じっているでしょう？」

その一言に御坂美琴の反応が一瞬遅れてしまう。そのラグは少女が自分自身を転送させるラグを埋めるには十分な時間だった。

瞬間、少女はキャリーケースと共に虚空へと消えた。

御坂美琴は辺りを見回すが、空間移動は点と点を移動するため移

動場所を特定する事が出来ない。当然ながらここからでは見えない様な場所に移動しているだろう。

一瞬下を向いて拳を握りしめるが、再び前を向いた御坂美琴は再度夜の街に駆けだした。

11

丁度その光景を見送る様に少女は建物の中から窓の外を眺めていた。

「私が自分自身を転送させる事はないと油断したわね」

うつ。と腹の底から押し上げて来るモノを堪える。確かに自分自身を移動させる事は出来るが、彼女にとってそれは危険を伴うことだ。

二年ほど前、ある能力の実験中に彼女は座標計算を誤り、予定座標値よりも数メートルずれた位置へと自分自身を空間移動テレポートさせてしまった。その際に片足が壁へと突き刺さる形で移動してしまった為に彼女は重傷を負った。

それ以降、彼女にとって自分自身を空間移動テレポートさせる事にトラウマを持ってしまったのだ。

「でも、その気になればいつだって出来るのよ。その気になればトラウマなんて」

ドブツつと少女の右肩をコルク抜きが突き刺さった。

「あッ……がは……ッ！」

「そうそう克服出来ないからトラウマと言うのではなくて？」

ドストドスツ、と連続して三つのコルク抜きが貫通する。それも見覚えのある所ばかりに。

声のする方へと振り向いた少女はあまりの痛みに膝をつくが、睨む様に視線を上げる。

「白井……黒子」

そこには見降ろす様に机に座わる白井黒子の姿があった。

4 - 3 「私利私欲」(後書き)

本来ならば、御坂美琴は以前から結標淡希と幾度か交戦していた様ですが、この物語では今回初めて交戦したと言つ事になっておりますので、ご了承ください。

4 - 4 「残骸へレムナント」 (前書き)

4 - 3を付け加えたので新たにアップしました。

4 - 4 「残骸へレムナント」

12

学園都市のとある建物の一室において、二人の大能力者^{レヘル4}が向かいあっていた。

「お返ししますわ。あまりにセンスが無いので私が持っていても白い目で見られるだけです」

ツインテールに常盤台中学の制服を身に纏った白井黒子は机の上に座り、目の前の少女を見降ろす様に眺めていた。その目線の先には地面に膝をついて、顔を見上げる様に白井黒子を睨みつける少女が一人。

結標淡希。赤みがかった髪は頭の後ろで二つに束ねてあり、身に纏う服は冬物のブレザーだが腕を通さずに肩に掛けるだけの格好になってある。さらにブレザーの下にはブラウスは無く、代わりに胸の部分にはピンク色のインナーの様なモノを巻いてあるだけだ。

その掛けるだけのブレザーの隙間を塗ってポタポタと赤い液体が地面へと流れ落ちていた。

右肩、脇腹、太股、脹脛。それぞれ一本ずつコルク抜きが突き刺さっている。それらは本の数時間前に結標淡希の能力である座標移動^トによって白井黒子へ突き刺すと言う形で差し上げた、まさに自分の所有していたコルク抜きだった。

「慌てる必要はありませんわよ。急所はハズしてありますの。まあ、やられた所にそのままお返ししただけですけど」

白井黒子はそう言ってポケットからなにやら取りだすと、それを徐に結標淡希へ向かって軽く指で弾いた。

「止血剤ですの。どうぞご自由にお使いになさって？ それでやっとおあいこですのよ」

服を着ていて分からないが、白井黒子の体も全く同じ場所にコルク抜きが刺さった状態だったのだ。それを止血剤で血を止め、包帯を巻き、そしてこの場に立っているのだ。

「……やってくれたわね。でも、こういう子供みたいな仕返しは、嫌いじゃないわ」

結標淡希の後ろには白いキャリーケースが置かれてある。

そもそも同じ系統の大能力者、空間移動と座標移動の二人がこうして向かいあっている根本の原因はそのキャリーケースの中にある。

『レムナント残骸』

人工衛星おりひめ一号に搭載されていた世界一のスーパーコンピュータで予測を超えた予言を可能にした予言機械である『シュミレーター樹形図の設計者』

しかし、その『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』は既に何者かによって破壊されてしまっており、その中枢部である『レムナント残骸』がキャリーケースの中に入っている。

結標淡希はその残骸レムナントを使って新たな『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』を作り出すとしていたのだが、

「随分と常盤台中学のエースを心酔しているようね。そんなに超電磁砲ルガンが身勝手に思い描く世界を守りたいのかしら？」

それを最も望まないのが常盤台中学のエース、御坂美琴。

かつて一方通行を絶対能力者へと移行する為に行われた絶対能力進化計画。それは『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』が導き出した、妹達を二〇〇〇回殺害する事で最強の能力者は絶対能力者へと進化する、と言う事から行われていた。

しかし、八月二一日「最強の超能力者が最弱の無能力者に倒される」という事態にプランの見直しも考えられたが、既に『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』が失われていたため再計算が不可能な事もあり、計画は無期凍結されたのだ。

つまりは『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』が復元される事があれば実験は再度計算され、再開される恐れがある。だからこそ、御坂美琴は首謀者

である結標淡希の計画を阻止するために行動を起こしていた。

結標淡希は既に数分前にも御坂美琴からの攻撃を受け、その攻撃から逃れるためにこの建物へと逃げ込んだ所を一度は撃退した白井黒子に心理を読まれ、追い打ちを受けたのだ。

「守りたいに決まっていますの」

白井黒子は、コルク抜きが刺さっているのにも関わらず何事も無い演技をする様にキャリアケースの上へと座り直す結標淡希に向かって言い放った。

「本当ならコイン一つで全てを粉々に出来る力を持っているはずなのに、だからこそそれをしない。こんな状況においても、お姉様は私たちが争わなくても良い状況を望んでいますの。そんなお姉様の想いを私が蹴るとでも思いですの？」

「大した友情ね。最早、愛なのかしら？」

スツと、腰に据えてあつた軍用懐中電灯を横に払うと、体に刺さっていたコルク抜きが地面へと転がった。傷口から栓を抜いたために新たに血が流れ落ちる。

「ねえ白井さん。こんな話しは知っているかしら？」

結標淡希は徐にスカートの裾を破ると「同じ状態にさせてもらうわ」と言わんばかりに傷口を覆い始めた。

「昔、ある所に強大な能力者と組織があつたの。その組織はその強大な能力者の数を増やせば莫大な力が入ると考え、沢山のクローンを拵えたわ」

太股が終わると脇腹、脹脛と順を追って傷口を縛って行く。

「しかし結果は散々。出来あがつたクローンはオリジナルの1%にも満たない出来そこないだったの」

「……何が言いたいんですの？」

最後に右肩を縛って傷口の応急処置は終了。しかし結標淡希は話を続ける。

「ねえ白井さん。同じ遺伝子レベルを持ち同じ能力開発を受けたと言つのに、どうしてクローン達はオリジナルのレベルになれないの

かしら？ 同じ脳を使って同じ結果が出ないと言う事は、脳の構造以外に別の何か関わっているってことでしょうか？ つまり、それを見つければ人間以外でも能力を使えるって事にならない？ 人間と同等かそれ以上の頭脳。それなら案外近くにあるのかもしれないわよ」

そう言つて結標淡希はキャリアケースをそつと撫でる仕草をする。「まさか、そんな機械の心臓部に能力が宿るとでも言いたいんですの？」

いいえ、と結標淡希は首を横に振る。

機械は所詮機械でしかない。しかしこの『レムナント残骸』があれば予測が出来る。

あらゆる現象を完全に再現する予言機械。シュミレーターそれさえあれば、人間の代わりに超能力を扱える個体が存在するかどうかも完全にシュミレートする事が出来るのだ。

「知りたいとは思わない？ 何故人間でなければならなかったのか、何故自分にこんな力があるのか、何故自分である必要があるのか。私は、それが知りたい」

「その為に、外部の組織と接触しましたのね」

「ええ、いくら『レムナント残骸』を手に入れても私一人では修復出来ないわ。だからそれを組み立てられる知識と技術が必要だった」

『レムナント残骸』を手に入れ、そこから新たな『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』を生み出す。それが結標淡希の目的。

それを知つた白井黒子は、ならば、と思う。

(どうしてお姉様はそれを阻止しようとしてましたの？)

八月二一日にあつた事を白井黒子は知らない。二〇〇〇〇人もクローンが生み出され一〇〇〇〇〇人にも及ぶ人間が殺害された事実を、それを二人の少年が救つた事を、白井黒子は知らない。

故に御坂美琴がこの事件に深くかわる理由を考えた所で正解にたどり着くはずはないのだが、

しかしそう言つた思考は結標淡希の発言によって遮断される。

「でも、こんなモノは保険でしかないのよ」

「保険……ですって？」

「『レムナント残骸』は保険よ。あるモノを入手出来なかった時のサブみたいなモノでしかないわ」

あれだけ『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』の必要性を語った結標淡希からの一言に白井黒子は理解不能だったが、一つだけ思ふ事がある。

結標淡希の目的は恐らく変わらない。何故能力を扱うのが人間でなくてはならなかったのか？ 人間以外に可能性はないのか？ それらの答えを知りたい。

それは間違いのない事である。

つまりは、

(『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』を超える何かがあると言う事ですか？)

結標淡希は笑う。

「別に『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』を超えるモノがあるって訳じゃないわ」
まるで思考を読んだ様な答えが返ってきて白井黒子は一瞬驚いたが、よくよく考えれば驚く様な事では無かった。

話しの流れ的に白井黒子が考えた答えにたどり着く事は大方予想できない事も無いからだ。

「では、一体他に何があると言うんですの？」

エル計画

「白井さんにとっては聞き慣れない言葉かもしれないわね。まあ私の場合、あの人の近くににいるから色々な情報が耳に入る訳なんだけど。表に出る様な話してはないわね」

一握りの者しか知らない情報を知っている事に、優越感を覚えているかの様に結標淡希は言う。

「何の目的で始められた計画かなんてモノはどうでもいいの。重要なのは中身。私の目的を達成するためにはその結果が手に入れば解決へと向かう」

白井黒子はまだ理解出来ていなかった。何故なら結標淡希の言葉にはまだ核心が含まれていない。まるで、焦らす事を楽しんでいる

かの様な振る舞いを見せる。

「分からないかしら？ 私は『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』の演算能力を必要としているのよ？ そんな私が『レムナント残骸』をサブに回して手に入れたいモノなんて一つしかないわよね」

白井黒子もバカではない。そこまで言われて回答の一つや二つ思いつかない訳がないのだが、この考えはあまりにも単純。この学園都市の科学をもってすれば不可能では無い事。

「つまり……もう一つ『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』が存在するとでも言いたいんですの？」

態々『レムナント残骸』を回収して復元しなくとも、既に完成しているモノを手に入れば良いと言うとても単純な考え。

しかしそうになると、白井黒子には理解出来ない部分がいくつか見えて来る。

仮にもう一つ『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』が存在するのなら、ここ最近による天気予言から天気予報への衰退はどうなるのか？

もしもそんなモノが存在するならば、予言ではなく予報に成り下がったままでいる理由は何か？ 結標淡希が言う様なモノが実は存在しない可能性もある。あるいはまだ機能出来ない理由があるのか。白井黒子の頭をさまざまに思考が駆け巡る。

うふふ

そんな思考を遮るように結標淡希の小さな声が響く。

「もう一つの『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』ねえ。合格点をあげたい所だけど、本当は少し違うわ。そんな『機械』があれば既に衛星軌道上に浮いているはずよ」

結標淡希は付け加える様に話しを続ける。

「そう、『機械』じゃないわ。それは歴とした『人間』なのよ」「な!？」

白井黒子は驚きを隠せなかった。つまり結標淡希が言いたい事は、簡単に言えばもう一つの『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』は機械ではなく人間、と言う事になってしまふ。

「『エル計画』それは『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』の頭脳を持った能力者を生み出す事」

「ありえませんか。仮にそんな能力者が存在するならば、間違いない超能力者^{レベル5}として知られていますもの」

白井黒子の言い分は正しい。

もしもそんな頭脳を持った能力者が存在するのならば、その演算能力は人知を超えるモノだ。能力の強さは演算能力の高さで決まる。つまりはその能力者は超能力者^{レベル5}、下手をすれば絶対能力者^{レベル6}として学園都市に君臨していても不思議ではない。

しかし今現在そう言った能力者はこの学園都市で確認されていない。白井黒子が知らないだけ、と言う可能性も無くはないのだが、噂くらいは流れるハズだ。

「だからこそその保険なのよ」

結標淡希は手に持つ軍用の懐中電灯でコンコンと軽くキャリアケースの表面を叩く。

「私も全てを信用している訳ではないわ。だからこの『レムナント残骸』だけは確実に入手しなければならぬ訳。そんな能力者が存在しなかった場合に備えて、ね」

そう言つと結標淡希はキャリアケースの上から地面へと降りた。クルクルと軍用の懐中電灯をお手玉の様に、投げては掴み投げては掴みを数回繰り返し、そしてグツとそれを握りしめる。

「お話しが過ぎたわね。そろそろ仲間も能力者とコンタクトをとっている頃だろうし、私たちも決着をつけましょうか？　ねえ、白井さん」

そうして再び二人の大能力者^{レベル4}は拳を交えた。

4 - 4 「残骸へレムナント」 (後書き)

これからもよろしく願います。

ご意見や感想、お待ちしています。

ご指摘がありましたらそちらの方もよろしく願います。

4・5 「原子崩し」(前書き)

久々の投稿になります。
お待たせいたしました。

そして、スランプの淵にまっしぐらです。

守越尊と和音は大通りを避ける様に裏路地を使って移動していた。あれから三〇分以上は経過しているが、離れたと言っても二キロと言った所だろう。それほど見るからに和音は疲労していたが、隣を歩く彼女の顔色はあれから少し良くなっていた。

「ごめんね。出会ったばかりの君にここまで付き合わせちゃって」「別に気にしなくてもいいさ。それにあんたの力で逃げれた様なもんだし。さっきのはあんたの能力なのか？」

守越尊は耳を塞いでいたので一体どうやってあの二人の動きを封じ込めたのかは分からなかったが、彼女が二人に向かって口を開いた瞬間に変化が現れたと言う事と、自分に対して耳を塞ぐように指示した事から、音が関係しているとの予測を立てていた。

和音は一瞬変な間をおいて口を開く。

「簡単に言っちゃえば、ある特定の周波数の音を発する事で演算能力を阻害するんだけど、相手の脳にも負担がかかるから意識を失っちゃうし、私自身にも負担がかかっちゃってこんな状態になっちゃうの」

いつもの事だから心配しないで、と和音は付け足したがやはりどこかで休んだ方がいいと守越尊は思う。しかしこんな裏路地で休む事はやはり女の子にとっては避けなければならない、と考えた守越尊は一先ず裏路地を出る事にした。

正確に言えば出るしかなかったと言うべきか、元々都市部の端にいたにも関わらずさらに都市部から離れる様に逃げていたために裏路地が無くなってしまったのだ。

一〇〇メートルほど先には大きな川が流れている。とりあえず守越尊はその河原まで移動する事にした。

川沿いには朝のジョギングがピツタリな道が続いており、風力発電用のプロペラが数十メートル間隔で並び立っていた。また、その川には長さ一〇〇メートル以上の大きな鉄橋が架かっているの見える。

二人はちょうど河原の斜面に並ぶようにして腰を下ろした。

芝生へ座ると同時に守越尊の口からフウと息が漏れる。ピリピリした状態から解放された為か、どっと疲れが溢れ出て来た気がした。和音はと言うと何やら自分の周りの地面をグルグルと眺めて

「あつた！」

そう言つて徐に何かを掴まんで目線まで拾い上げる。

「見て見て尊君、幸せを呼ぶ四つ葉のクローバーだよ」

守越尊が見つめる和音の表情は先ほどまでとは打つて変わって、まるで少年がカブトムシでも発見した時の様な笑顔だった。

「こんな時にまで幸せを探さなくてもいいんじゃないかな？」

「こんな時だからだよ。ほら、幸せを見つけたから疲れなんてどこかに行つちやつたでしょ？」

笑顔でそう答えて来る和音を見てると確かに疲れが軽くなった気がしていた。

四葉のクローバーを手に持ち、それをクルクルと回す和音の髪を風が靡く。

都市部とは違い人工的な光は少なく、夜空から降り注ぐ月や星の光に照らされながらクローバーを見つめる和音はとても幻想的なオーラを放っていた。

その横顔の眺めていた守越尊の胸が一瞬、ドキツと高鳴る。

「どうしたの？」

振り向いた和音と視線が重なり、守越尊は慌てて視線を逸らした。（気を緩め過ぎだろ、まだ逃げてる途中なんだからしっかりしろ！）と、自分自身に言い聞かす。

これは一時の休憩であつて、ときめく様な場面ではない。

幸いこの場所は見晴らしが良く三六〇度視界良好である為、万が

一あの二人が追ってこの場所へ近づいて来たとしても、いち早く行動を起こす事が出来る。その為には一応周りに気を配っていなければならぬのだが、

そう思考を改めた所で、ようやく気がついた。

普段、都市部には聞こえない様な音。あるいは裏路地なら聞き取る事が出来るかもしれないが、

カツン、と言うヒールが地面を叩く様な音。小さな音のハズなのに、物静かなこの場所では何故かやたらとそれは耳に届いて来る。

和音もその音に気がついたようで、二人してその音の方向へと顔を振り向いた。

瞬間、

轟!!! と暗闇を白く輝く閃光が走り抜けた。

二人の横を通り抜けた光は遙か後方の風力発電用のプロペラを貫き、落下したプロペラは地面へと突き刺さる。

「さて、あの二人を振り切ったって言うから興味本位で来てみたけど、それが無駄足なのかそうでないのか」

その人影はある程度近づいた所で立ち止まり、

「どっちを示してくれるのかしら？」

暗闇の向こうから現れたのは一人の女だった。

先ほどまでの二人とは打って変わり、秋物らしい半袖のコートを着込み足にはストッキングを着用。背中の辺りまで伸びた茶色い髪に全身から放つ独特のオーラはお嬢様を想わせる。

守越尊は息を飲んだ。先ほどの一撃は明らかに威嚇。巨大なプロペラをいとも簡単に破壊してしまう威力だ、それがまともに生身の人間に当たった時点で人生は幕を閉じるだろう。

「さっきの二人と言い、あんたと言い、一体何なんだ!？」

「別に大した事じゃないわ。単に依頼が来たっただけだし。まあ、結局はキャンセルなのよね」

闇の中から現れた女は質問には答えたが、それは聞こえる様に返答した訳では無く独り言を呟く様に発した為、守越尊は完全には聞

き取れなかった。

(依頼? キャンセル? 何なんだよそれ)

訊きたい事はあったが、そんな間もなく女は言葉を続ける。

「で、どっちを示してくれる?」

思案している時間はない。今も尚、女との距離は縮まって来ている。

守越尊は和音だけでも逃がさなければならぬと思った。彼女が狙われているなら自分が時間を稼ぐ事によって彼女の逃げ切れる可能性が大きくなる。

しかし隣にいた和音も同じような事を考えていたようで、視線は敵に向けたまま小声で呟く。

「(尊君、また耳を塞いでおいてもらえるかな)」

「(なッ!? それじゃあんたに負担が掛かるじゃねえか!)」

和音は再び自分の能力を目の前の女に使おうとしている。たとえ自分自身にもリスクが生じる事であっても、和音はそれを使って女の動きを封じようとしていた。

「(ダメだ。あんたは逃げてくれ。今回は俺が時間を稼ぐ)」

「そうそう、言い忘れたけど」

二人の会話に割って入る様に女は言葉を発する。そして、

「逃げるって選択肢はないから」

女の手の平から白く輝く光の筋が放たれた。

守越尊は咄嗟に和音を押し出す様に横に飛んだ。光の筋は一秒前まで二人のいた場所を通過し、数十メートル先の河原の地面を爆発させる。

二人は芝の斜面を下り、平地になった所でも数回転がりようやく止まった。

女は優雅に階段を使って斜面を下りて来る。

守越尊は膝に手をつけて立ち上がった。

「くそっ……おい、しっかりしろ」

一メートルほど隣に倒れている和音に駆け寄り守越尊は声を掛け

る。

「大丈夫……それより早く塞いで、君も巻き込んだじゃうから」

立ち上がった和音の白いブレザーは土で汚れ、手にも多少の擦り傷が見れた。

「ダメだ。あんな事になるのが分かってて使わせるハズがねえだろ」

「そんな事言ってる場合じゃ」

「お喋りなんて余裕ね」

瞬間、守越尊は和音を横へ突き飛ばした。

守越尊の方を見ていた和音は分からなかったが、階段を下りて来る女が再び白い光の筋を放っていた。それに気がついた守越尊は和音を突き飛ばしたのだが、ワンテンポ遅れた自分自身は地面の爆発に吞まれる。

「が、ああああ！」

直撃は免れたが、地面から吹き上げる衝撃に数メートル宙を舞って後方へ飛ばされた。

「尊君！」

「女の子を庇うなんて、男の鏡ね」

「くっ、貴方ね、許さない！」

地面から立ち上がった和音は女を睨みつけた。

対して女は階段を下り終えると、鼻で笑う様に和音を見る。

（尊君、ゴメン）

そして彼女は右手を胸に当てて口を開いた。

それは歌だった。

ただ、音階が分からないほど複雑な音色をしている。高音なのか低音なのか、或いはその両方が混ざっているのか、それすら分からない音は不思議な旋律を奏でる。

結果は目に見える様に現れた。

あれほど優雅に立っていた女が頭を押さえて膝をついたのだ。

地面に倒れながらも咄嗟に耳を塞いだ守越尊からはその姿がハッキリと見えていた。

しかし変化はすぐに起こった。

女は頭を押さえながらも立ち上がり、和音へと手を向けてその先端が光ったと思うと、そこから光の筋を放ったのだ。

「きゃああー！」

放たれた光は直撃こそしなかったが、地面を爆発させその勢いで和音を吹き飛ばす。

「くそッ」

歯を食いしばりながら立ち上がった守越尊は地面を蹴り駆けだした。

地面へと倒れた和音の息はやはり荒かった。早く浅い呼吸を繰り返し、それでも「大丈夫だよ」と言う和音を見て、守越尊は歯噛みする。

「さすがに大能力者^{レベル4}二人を封じ込めただけの力はあるけど、超能力^{レベル}者を抑え込むには及ばなかったみたいね。それにしても頭が痛い。

ああ痛い。くそ、嫌な気分になったわね」

女は頭を押さえながらそんな事を呟く。

「何だよ……なんでここまでこの子を狙う必要があるんだよ」

「は？ 何言ってるの。まさか今の今までその女が狙われているとも思っていたとか？」

「何……だと？」

実際に確認した訳ではなかったが、守越尊は和音が狙われていると思っていた。つまりはそれは勘違いで、本当に狙われていたのは、「その女を巻き込んだ事にも気が付かないなんて。男の鏡は取り消しね。男として最悪」

本当に最悪だ。

今回、巻き込んだのは自分だった。

あの二人もこの女も狙っていたのは守越尊、自分自身であり、その場に偶々いた全く関係のない和音を巻き込んでしまったのだ。

「でももういいわ。嫌な気分にしたからその女も処分確定ね。貴方にも魅力感じないし、二人揃って塵にでもなっちゃえば？」

言葉と同時に光の筋が手の平から放たれた。

（他人を巻き込むってのは嫌な気分だな。……初めて当麻に会った時のアイツの気持ちが良い分かる）

その光は地面に倒れる和音とそれを無防備な状態で見つめる守越尊へと一直線に向かう。

（でも、巻き込んでしまったならやる事は一つしかないよな）

正直、呆気な過ぎたと女は思っていた。

攻撃を放った瞬間、確信していたのだ。全く避ける気配すらない目の前の二人にこの攻撃が外れる事はないと。

だからこそ、目の前で起こった事に驚きを隠す事が出来なかった。光の筋が二人の直撃する直前、膝を着く少年が払った手に弾かれる様に、閃光は横へと向きを変え二人を逸れて川の中へと突き刺さり、爆発と共に大量の水しぶきを巻き上げたのだ。

「私の「原子崩し」を弾いた……！？」

驚くのも当然である。

彼女、麦野沈利は学園都市に七人しかいない超能力者の第四位、

「原子崩し」なのだ。

かつて超能力者の超電磁砲と戦った際に、電子を操ると言う能力の性質上の関係で原子崩しを曲げられた事はあったが、それは同じ電子を操作する能力で自分を上回る超電磁砲であるからこそ原子崩しを曲げる事が出来たのだ。

電子を粒子と波形のどちらでもない中間の状態にする原子崩しは、外部からの反応で動く事のない「留まる」性質を持つ故に電場や磁場によって曲げる事は出来ない。

つまり、その原子崩しを正面から弾くとなれば、自分と同等の能力、或いは超電磁砲の様に電子を操作する能力において自分を上回るかどちらかである。

「守ってみせるさ」

守越尊は立ち上がる。右の眼を青に染めて。

「巻き込んでしまったなら、全力で守る。例えばあなたが超能力者で

あってもな！」

へえ」と声を発して麦野沈利は笑う。

「さすがに上層部から依頼が来るだけの何かはあるみたいね。でも気に入らないわ、その正義感ぶった態度も言葉も、気に障るのよね。だから」

貴方も死亡確定ね

引き裂く様な笑みを浮かべて学園都市第四位は牙を剥いた。

4・5 「原子崩し」(後書き)

まだまだ先は長そうだ。

原作沿いの関係で色々と壁にぶち当たりそうですが、めげずに頑張ります。

感想や意見をお待ちしております。

4 - 6 「力の制御」(前書き)

気がつけば総合評価が600ポイントを越えていました。本当にありがとうございます。

久々の更新となつてしまいました事をお詫び申し上げます。

薄い文になってしまった感がありますが、それでもいいと言う方は読んでやって下さい。

4 - 6 「力の制御」

14

先に動いたのは麦野沈利だった。

彼女の放つ『原子崩し』^{マルチタウナー}は「留まる」性質により擬似的な「壁」となった。曖昧なまま固定された電子』を強制的に動かすことで物体に接触しても減速することなく、放たれた速度のまま対象を貫く特殊な電子線と化し高速で叩きつけることで絶大な破壊力を生み出す。

白く輝く光線は守越尊を容赦なく襲った。

しかし、守越尊が前に出した右手によってそれは弾かれる様に方向を変える。

(やっぱり同じ系統の能力か?)

再び攻撃を弾かれた麦野沈利はそう推測する。

麦野沈利の『原子崩し』^{マルチタウナー}は特性上、それを曲げるとなると同じ能力であるか、電子を操作する能力者しか考える事が出来ないからだ。守越尊は同時に地面を勢いよく蹴り、間合いを詰めにかかる。ただそれは一〇メートルはある距離を一步や二歩で詰める様な驚異的なモノではなく、極一般的なスピード。

しかし守越尊の中では一つの手応えの様なモノを感じ取っていた。インデックスとの会話でもあった様に、守越尊は自分の中にある力を制御出来ていない為に能力使用後はその反動を受けていた。

それは一種の力の暴走に近いモノであり、必要以上に酷使された体が悲鳴を上げていたのだ。

それに比べて今回はどうだろうか?

守越尊は『神の目』を発動しているにも関わらず、その動きは普段と変わらないのである。しかしながら、麦野沈利の『原子崩し』^{マルチタウナー}を防いだ。

(これがインデックスの言つてた制御つてことか！)

以前までが発動した力の成すままに力を使つていた状態であるならば、今回は発動した力を意図的に調節し、身体能力は抑えて『神の目』の力を発揮する為の必要最低限だけの『知能』のみに限定している状態である。

麦野沈利は手から『マルチタワー原子崩し』を放つが、守越尊はそれを僅かに逸れながら上空へと弾き飛ばす。

「うおおおおお！」

懐へと飛び込む様に守越尊は引ききつた右拳を前に突き出した。

拳は麦野沈利の頬へと放たれたが

「正直、『マルチタワー原子崩し』を弾く事には驚かされたわ。でも」

麦野沈利は体を傾けるける様に拳を避けると、守越尊の腹部へと拳を一発。更に、ヨロめいた所へ回し蹴りを放つ。

「がは……っ」

守越尊は横へと飛ばされ地面を転がった。

「こっちはまるで素人ね」

(こいつ……能力だけじゃない)

ビリビリと響く左腕を押さえながら守越尊は片膝をつき前を見る。

麦野沈利は何かを確認するかの様に『マルチタワー原子崩し』を放つが、やはりそれは守越尊によつて弾かれ方向を変える。

「へえ、本当に効かないのね。ならこんなのはどうかしら？」

懐から取り出した一枚のカード。それを徐に宙に投げるとそこへ

『マルチタワー原子崩し』を撃つ。

カードへと当たった『マルチタワー原子崩し』は弾ける様に拡散し、無数の閃

光の筋となつて守越尊を襲った。

放たれた閃光の筋は守越尊の周りを巻き込み地面を爆発させ、辺

りには砂塵が舞い上がる。

麦野沈利が使用したのはシリコンバーン拡散支援半導体と言う物だ。

三角形のパネルが組み合わさった形状をしており、このカードに

電子線を当てるとパネルが分散し光線を拡散させると言う仕組みに

なっている。

「さすがにあの数を捌くのは無理だったみたいね」

腰に手を当てて、満更でもない表情で麦野沈利は煙りの立ちこめる場所を見つめていた。

しかしそれとは裏腹に守越尊は空気を切り裂くように煙りの中から飛び出す。

「しぶとい奴」

そう吐き捨てて麦野沈利は『マルチタウナー原子崩し』を放つが、守越尊は腕を払いそれを弾く。弾かれた光線はそのまま麦野沈利へと向かった。

「ふっ、自分の能力でやられるバカがいると思う？」

麦野沈利の言う様に光線は彼女の目の前で弾ける様に消し飛ぶ。

「でも隙は生まれるだろ？」

間髪入れずに守越尊は拳を突き出した。

拳は直撃こそしなかったが、麦野沈利の頬を掠める。

（くそ、掠っただけか）

勢い余った守越尊は前転で地面を転がり、起き上がるとすぐさま反転し反撃に備えた。

しかし麦野沈利は立ったまま動かず、徐に頬へと手を当てる。切れた頬からは僅かながら血が滲むに出ていた。

瞬間、守越尊はどこからかブチツツと言う何かが切れる様な音が聞こえた気がした。

「顔に傷を入れるなんていい度胸ね」

振り向いた麦野沈利は切り裂く様な笑みを浮かべて、

「ブチコロシ確定よ」

麦野沈利は両手を前に挙げそこへ光が集まりだしたと思うと、先ほどまでとは比べ物にならないほどの光線の筋が放たれる。

「威力や大きさを変えた所で、同じ能力に変わり無いだろ」

守越尊の右目が青く輝いたと同時に目の前に光の壁の様なモノが現れた。麦野沈利の放った『マルチタウナー原子崩し』はその壁に阻まれその場で消滅する。

「何の能力か知らないけど、ホント超電磁砲レールガン以上にムカつくヤツね」
ゴキゴキと言う効果音が似合いそうに拳を中途半端に握り、麦野沈利は守越尊を睨みつける。

麦野沈利にとってこれほど腹立たしい事はなかった。

あの超電磁砲レールガンですら麦野沈利の『原子崩し』マルチタウナーの軌道を逸らす程度だったにも関わらず、この目の前の男は『原子崩し』マルチタウナーを麦野沈利へと跳ね返すどころか、その場でまるで相殺する様に打ち消してしまったのだ。

と、ここで麦野沈利は守越尊意外にモゾモゾと動く影を視界に捉える。それを見つけた麦野沈利は再び切り裂く様な笑みを浮かべて静かに口を開く。

「ハハツ、私としたことがすっかり忘れていたわね」

額に軽く手を当てて鼻で笑うかの様に言葉を発すると、

「私がブチコロシたいのは貴方だけじゃなかったのよね」

麦野沈利は無造作に腕を斜め前方へと挙げた。

その方向へと顔を向けた守越尊は驚愕する。

(しまっ)

「もう遅いよ」

麦野沈利の腕が向く方向には一人の少女、地面から体を起こしたばかりの和音の姿があった。

瞬時に守越尊は大きく地面を蹴り駆け出す。しかしそれとほとんど同時に麦野沈利は『原子崩し』マルチタウナーを放っていた。

ドゴン！ と言う爆音と共に地面が爆発する。

金属すら一瞬にして破壊する白く輝く光線が和音の周辺ごとその場を吹き飛ばした。

「あれだけ言っつてこの様、笑えてくるわね」

巻き上げた砂利がパラパラと落ちてくる中、麦野沈利は煙の幕に覆われた場所を眺める。

「結局お前はあの女すら守れない様なクソ野郎なんだよ」

瞬間、煙幕の中から空気を切り裂く様な一筋の風が煙を突き破り、

一瞬にして麦野沈利の前に現れた。

「な!？」

「だから言つたら、守つてみせるって」

守越尊の振り抜いた拳に反応する間もなく、頬を打ち抜かれた麦野沈利は大きく後ろに吹き飛び、ゴロゴロと地面を転がった。

乱れた息を整える様に守越尊は立ち尽くす。

(そうだ、あの子を連れて早くここから)

そう思い一歩前へ踏み出した所で、不自然に体がヨロメいた。片膝を地面に着き、整え様としていた息が再び荒くなる。

(くそ、体が……)

徐々に痛みを増す体に鞭を打ち、守越尊は立ち上がり歩きだした。例え自分の体が動かなくなったとしても動かさなければならぬ。視線の先に横たわる少女の為にも。

「おい、大丈夫か？」

「……尊……君？」

「ごめん、無理させちゃうけどここから逃げないといけない。立てるか？」

和音は軽く頷くと、上半身を起こす。

「あの女の人は……？」

「大丈夫。アイツならあっちの方で伸びて」

ゾクツと、殺気立った気配に守越尊は身震いし後ろを振り向く。瞬間、背後から白く輝く光線が二人に襲いかかった。

「クッ！」

咄嗟に振り払った守越尊の手によって光線は方向を変えて上空へと消えて行った。

守越尊は再び輝きを放った右目で先を見つめる。

「言ったハズよ。逃げる選択肢は無いつて」

目の前から迫って来る女はブチブチと引き裂く様に笑っている。

「テメエらは私がブチ殺すんだからさあ!!!」

これはマズい、と守越尊は直感した。

目の前の女は明らかにブチ切れの状況で、何をしてくるか分からない。それに最早守越尊の体は再び戦える様な状態ではなかった。

「そんな顔して、私が簡単に逃がすとても思っていた訳？」

拳で打たれた衝撃で口の中に溜まった血を地面へと吐き捨て、お気に入りの服を汚された麦野沈利は二人へと迫ってくる。その一歩一歩はまるで時限爆弾のカウントダウンの様だ。

(どうにかして逃げないと……)

だが目の前の敵がそう易々と逃げるタイミングを与えてくれるはずがない。

しかし守越尊は一瞬の隙さえあれば、残りの力をすべて使い切つて動けなくなつてしまったとしても逃げる、と言う事を心に決めていた。

そうしている間にも今までとは比べ物にならないほどの殺気を放ち、麦野沈利を距離を縮めて来ている。

と、辺りに小さな着信音が流れた。その着信音は麦野沈利のポケットから聞こえて来る。

軽く舌打ちをして麦野沈利は視線をポケットへと移した。

(今だ!!!)

その一瞬を守越尊は逃さなかった。

すべての力を振り絞り和音を抱えると地面を力強く蹴り、飛ぶように地面を駆ける。

「逃がすと思つてんのか！」

瞬間、再び前を見た麦野沈利を中心に白く輝く光線が四方八方へと放たれた。爆風のように飛び出した光の筋は守越尊と和音の二人りへも襲い掛かる。

しかし、守越尊は逆に放たれた『メルトダウナー原子崩し』を利用し、地面へと弾き返す事によって砂塵を巻き上げて麦野沈利の視界を封じた。

「調子にのるんじゃないやねぞクソ野郎!!!」

そんな状態においても麦野沈利は拡散支援半導体を使用し『シリコンバースト原子崩し《メルトダウナー》』を放つ。

一部の光線が守越尊と和音を捕らえるがそれらが二人に当たる事はなかった。何故なら二人を覆うように半透明な光の壁がそれを防いだからだ。

しばらく砲撃していた麦野沈利だったが、あまりの手応えの無さに攻撃を止めた。

「チツ、逃げられたわね」

煙の晴れていく方向を見つめながら麦野沈利はそう吐き捨てる。

そして未だに鳴り続ける携帯電話を取り出し耳へと当てた。

「で、何か用な訳？」

「何か用じゃないでしょ！ アンタ今どこにいるのよ！？ もうとつくに依頼は完了してるハズよね？」

電話の相手は女性で、いつも『アイテム』に指示を出してくる謎の人物だ。

「なに？ 一々完了の報告とかしないといけなかったっけ？ そんな連絡なら掛けて来んっつーの。逃げられたでしょ」

「アンタ、キャンセルの依頼までこなしてるんじゃないでしょうね！？ 怒られるのこっちなんだから勘弁してよね。徒でさえキャンセルの依頼が来るようによく分からない一件なんだから」

「そんな依頼なら最初から連絡してくるな」

「こいつときたらー！ こっちだって連絡したくて連絡してる訳じゃないんだっつーの！」

耳元でぎゃあぎゃああとうるさい声に麦野沈利は携帯電話を少し耳から話してため息を吐く。なにやらすっかり気持も冷めてしまい、少し冷静さを取り戻していた麦野沈利は

「分かった分かった。戻ればいいいでしょ、戻れば」

「くー、何その面倒くさそうな発言の仕方。大体アンタは」

説教くさそうな話が続きそうだったので麦野沈利は通話を切った。徐に携帯電話をポケットをしまうと、ついでに服についていた汚れを両手で掃う。麦野沈利一人だけになった河原に再び静寂さが戻った。

改めて辺りを眺めながら、ふと違和感を覚えた。

「それにしても被害が少ないわね」

容赦なく放った『原子崩し』^{マルチタワー}で風力発電用のプロペラは地面に突き刺さり、河原の地面は地雷が爆発した様に小さなクレーターの様なものがあちこちに出来ているが、それだけだ。河原沿いにある建物には一切の被害が出ていないのだ。

（あいつまさか……）

フフ、と麦野沈利の口元が緩んだ。

「守越尊、か」

煙の晴れた方を眺めながら麦野沈利は呟く。

「その名前、覚えといてあげるわ」

4 - 6 「力の制御」(後書き)

学園都市第四位、『原子崩し』から逃げ切った守越尊と和音。しかし、力を使い切った守越尊の前に数名の男たちが立ちふさがる。迫り来る敵、動かぬ体。そんな中、二人の前に現れた人物とは!?

次回、とある魔術の天の住人

「計画は闇の中で」

感想やご指摘よろしくお願ひします。

4・7 「計画は闇の中で」（前書き）

いつもとある魔術の天の住人をありがとうございます。

さてさて、今回は少々無理やりな部分が目立ってしまった感じがあります。

ホントそろそろ、今回はなかなかの出来です！ っていうのを書かなければならないと思っているのですが、うまく行きませんね；

4 - 7 「計画は闇の中で」

15

守越尊は学園都市第四位、『マルチタワー原子崩し』の麦野沈利から逃げ切るために建物の屋上は飛ぶように移動していた。

移動すると言っても、裏路地を挟んだ所でも建物と建物の距離は細い所で二メートルはある。大通りを挟めばその幅は十メートルは超えてしまっただろう。

そんな距離も守越尊は一步で飛び越えてしまう。

一般の人間からしてみればそんな光景を目の当たりにしたら驚きを隠せないだろうが、ここは学園都市だ。

例えば空間移動能力者。

彼らが移動する際にその能力を仕様すれば、まさしく今の光景を同じ様に建物の屋上を伝って移動する事は容易い。

ただ、空間移動能力者と異なる点は、守越尊がそう言った能力ではなく身体能力だけで移動をしていると言う所だ。

華麗に建物から建物へと飛び移っているかの様に思えた守越尊だったが、建物の屋上へと飛び移ろうとした瞬間、ガクンと力が抜けたように体制を崩した。

「しまっ……」

次の建物までは大通りを挟んでいる為、十メートルほどの距離を残している。増して、両腕に和音を抱えた状態ではどうする事も出来なかった。

半分飛び出してしまった体は十メートル下の地面へ見る見るうちに落下して行く。

（あと少しだけ持ってくれ　！）

ダン！ と、しゃがみこむ様に着地をした守越尊。抱え込んだ和音を地面へとゆっくり降ろすと、そのまま横へドサツと倒れた。

「…………あれ？　ここは…………？」

(痛ッ…………まだ頭がズキズキする)

朦朧とする意識の中で和音は上半身を起こす。

つい先ほどまでは河原の芝に倒れていたハズが、今は大通りの真ん中に座り込む姿勢になっている。

「…………そうだ、起きた瞬間あの女が攻撃してきて…………尊君は」

と、後ろから聞こえてくる呼吸音に気がつき、和音は振り返った。

「尊君！」

すぐ後ろで守越尊は地面へと倒れていた。

その姿は衰弱しきっており、呼吸も荒く、そうまるで自分自身が能力を使った後と同じような症状だった。

「くそ…………まだ動かなくちゃいけないのに…………あんたを守らなくちゃいけないのに…………」

痙攣を起こしている腕に力を込めて地面につくが、糸の切れた人形のように崩れ落ちる。

「尊君は十分私を守ってくれたよ。だからこれ以上無理しちゃダメ！」

学園都市の都市部。その端にいる為か、大通りにも関わらず人の姿は見えない。

だからこそ、ちょっとした音でも二人の耳にはしっかりと届いていた。

カツン、と言う足音。革靴とアスファルトがぶつかり合う音。それも一つではない。じゅり、と言うスニーカーや運動靴が地面と擦れる様な音も混ざっている。

「ようやく交渉の場を設けられたって感じだな」

「おい、本当に大丈夫なんだろうな？」

「心配ない。見てみる、もう虫の息だ」

「もう…………追っ手が来たのか」

守越尊が顔を向けた先には、四人ほどの男たちが大通りの中央をこちらに向かって歩いて来ていた。二名は思い思いの私服を身に纏

ついでに学生に見えるが、残りの二人はスーツを纏い少し大人びたイメージが持てる。

徐に言葉を発しながら男たちは二人の五メートルほど出前で立ち止まった。

「お前が守越尊だな」

「だとしたら……何だっけ言うんだ」

震える両手を地面について守越尊は顔を上げる。

「ふっ、やはり先ほどの戦いで力を使い果たしている感じだな」

「やっぱりあんたら……あの女の仲間か!？」

しかし別の男は首を横に振って

「正直あんな化け物までお前を狙っていたのには誤算だったけど、嬉しい事にそのお陰でお前はこんな様。こちらはスムーズに交渉が出来るって話だ」

男の一人はスツと手を差し出して

「お前の頭脳を、その『樹形図ツリーダイアグラムの設計者』に匹敵すると言われる頭脳ツリーの力を俺たちに貸して欲しい」

「何を言ってる……」

『樹形図ツリーダイアグラムの設計者』その名前は聞いた事があった

学園都市が打ち上げた人工衛星『おりひめ一号』に搭載され、あらゆる現象を完全に再現すると言う性能を誇ったスーパーコンピュータ。

かつて学園都市最強の一方通行を絶対能力者へと進化させる実験アクセラレータ、レベル6、シスターズの妹達を二〇〇〇回も殺害すると言う恐ろしい計画もこの『樹形図ツリーの設計者』によって導き出されたモノだ。

さらに男は続ける。

「お前が『エル計画』の被験者だと言う情報は既に入手している。別に危害を加えるつもりは無いし、悪用すると言ったものでも無い。ただ協力して欲しい、それだけだ」

(こいつら……何を言ってるんだ? エル計画? 俺が被験者?)
まったく聞き覚えの無い情報に守越尊は多少困惑する。一体そん

な情報をどこから入手したのか？ 増して守越尊はそのような計画の被験者どころか、計画名も初耳だった。

と、守越尊の視界を隠すように男たちと守越尊の間に何か割って入った。

「ダメだよ、尊君」

それは和音だった。

「もし仮にそんな力を尊君が持っていたとして、この人たちがそんな力を手にして悪用しない保障がないよ」

「女、聞き捨てならない言葉だな」

「大丈夫だよ、今度は私が尊君を守ってあげるから」

ただ、和音も無事なハズが無かった。和音の能力は自分自身にも負担を大きく掛ける。それをこの短時間の間にすでに二回も使用しているのだ。守越尊にはそれがどれほどのダメージなのかは分からないが、和音も動くことが精一杯であろうと感じ取っていた。

しかし、自分は動く事が出来ない。

動きたくても体がまったく反応してくれない。

本来、前に立つべきなのは自分自身なのに。

「女は邪魔だな」

男の一人がそう呟いた瞬間。

突風が和音を襲った。

「きゃっ……！」

突風というよりも風の塊と言うべきか。何か見えない壁の様なモノに当たった和音は数メートル後ろへ飛ばされた。仰向けで地面へと倒れた和音は、それでも立ち上がるうと地面に手をつけて上半身を起こす。

「恐ろしいと思わないか？」

男は自分の手を見ながら続ける。

「なぜ自分にこんな力があるのか。なぜ自分でなければならなかったのか。なぜ、人間でなければならなかったのか。こんな……こんな力を持っているから人を傷つけてしまうんだ」

男はその拳を握り締めて

「だからこそ俺たちは『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』の力を使いその答えを導き出す必要がある。さあ守越尊。『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』に匹敵すると言う頭脳でその答えを示してくれ」

「貴方たちだけだと思っっているの？」

和音はよろよろと立ち上がると一歩一歩前進する。

「どうして自分にこんな力があるのか。私だってそう考えた事はあ
る。でもそれは誰だって一度は考える事だよ」

フラフラした足取りだが、その眼差しはまっすぐ前を見て

「能力が恐ろしい。能力があるから人を傷つける。……確かに能力は使い方によつて人を傷つけてしまうし、恐ろしいモノかもしれない。でも使う方向さえ間違わなければ能力で人を傷つける事はないし、誰かの為にその能力を振るえばそれは恐ろしいモノじゃなくなる」

和音は地に伏せる守越尊の前に再び立つ。

「だから、尊君が私を守ってくれた様に、私は私の力を使って尊君を守ってみせる！」

言葉を発していた男は歯を食いしばり、拳を握り締める。

心に刺さるような言葉だった。心の片隅で少しは考えていたような、だからこそ自分を否定されているようで何か別の感情の様なモノが溢れ出してくる。

「黙れ、黙れ黙れ！ お前に俺たちの何が分かる！？ 例えそうだとしても俺たちは答えにたどり着いてみせる！ 邪魔をするな！」

男がとつた行動は能力の使用ではなかった。それはある意味能力よりも恐ろしく、人を簡単に傷つけてしまうモノ。

ずしり、と大きさに似合わぬ重さが男の腕へと伝わる。

「なっ！？」

守越尊の視線の先で男がポケットから取り出したのは小型の拳銃だった。

力の込められた指は何の躊躇もなくその引き金を引ききった。

銃声と共に火薬の焼ける匂い、そしてグシャリという皮膚を貫き肉をえぐる様な生々しい音が辺りに響いた。

ポツリポツリと腕を伝って落ちる赤い液体。

激痛は少し遅れて体中を駆け回った。

「があああああ」

打ち抜かれた肩を押さえながら、のた打ち回るように地面を転がる。

「……あんたの言う通りだ」

地面を這う男を見下ろすように守越尊は呟く。

「……確かにどうしてこんな力が自分に与えられたか分からない。

それに……この力で今あんたを傷つけてしまった」

その右の瞳は青に染まり、浮かび上がる光の線は円から三角形へと変形していく。

「……でもあんたが和音を傷つけようとするなら、俺はあんたを傷つけてでも和音を守ってみせる！」

和音をかばう様に立ち上がった守越尊だったが、状態が悪くなった訳ではなかった。顔からは冷や汗の様な冷たいものが流れ落ち、少し気を抜いただけで崩れ落ちてしまうそうに震える足を抑えながら立っている状態だ。それは相手から見ても一目瞭然なほどだった。

「はは、はっはっ笑わせるな。そんな状態で何か出来るハズがない」
別の男は自分に言い聞かせる様に発するが

「……試してみるか？」

守越尊の発言に地面に倒れる仲間へと目をやる。

明らかに分が悪い。相手は『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』に匹敵する頭脳の

持ち主と言われているのだ。今まで強気で来れたのも河原での戦闘を一部始終見た後、明らかに能力が使えない様な状態に陥っていたからに過ぎない。能力が使えるのなら全く話が変わってくる。

「ガキが付け上がりやがって！」

動いたのはスーツを着込んだ男だった。

スーツの彼らは学園都市の人間ではなく、外の組織の人間だ。

つまり彼らの武器はただ一つ。拳銃だ。

胸ポケットから取り出した銃を二人へと向け、引き金を引く。特に確信があったわけでもない。外部の人間の為に能力に関する警戒心が薄かったのだろうか、ただ逆上して発砲したに過ぎない。

しかし守越尊は和音を押し倒す様に倒れ込んだ。

それを見た男は、ははなるほど、と笑みを浮かべる様に

「ハツタリだったか。そうだよな、はは」

男が言う様に守越尊はハツタリだった。既に守越尊の体は立ち上がったことが奇跡に近いほど反動でボロボロになっていた。

男は再び銃口を二人に向けた。

「正直、お前は絶対に必要な訳じゃない。そうだ、あっちが残骸さえ手に入れさえすれば問題ないハズだ」

「……俺にやらせる」

地面へと倒れていた男が打ち抜かれた肩を抑えながら立ち上がる。最早目的すら忘れてしまった様な表情で二人を見つめていた。

(何で動いてくれないんだ……さっきは動いてくれたじゃないか!)
守越尊の思いも空しく、その体は一ミリたりとも動いてはくれなかった。

最早意識すら朦朧としていく中、視線の先には銃口を向けた男がまさに引き金を引こうとしている所だった。

ドサ、と地面に倒れる音だけが響いた。

派手な銃声音は聞こえずにただそれだけが響く。

何が起こったのか分からない守越尊だったが、もつと何が起こったか分かっているのは男たちだ。一瞬にして仲間の一人だ倒れた。目の前にいる守越尊が何かした訳ではない。何の前兆も無く一人で倒れたのだ。

「一体何が……?」

トス……ドサ。と男が呆気にとられている間にスーツの男が、今度は小さな音の後に地面へと倒れた。

「おい、どうした」

ドサ、ともう一人のスーツの男も倒れる。

よく見てみると、倒れた男たちの首筋には針の様なモノが刺さっている。

「まさかどこからか射撃を」

・ ・ ・ドサ、と言葉の途中で最後の男を地面へと倒れる。

そして男たちの背後からコツコツと足音がしたかと思うと

「よかった。間に合ったようです、とミサカはホッと胸を撫で下ろします」

そこには軍事用のゴーグルを着用し、銃を抱えるミサカの姿があった。

「ミサ……カ」

「心配はいりません、麻酔弾です。とミサカは命に別状の無い事を保障いたします。しかし恐らく彼らは一日ほどは目を覚まさないでしょう、とミサカは補足説明します」

その言葉を聞くと同時に意識は薄れ、守越尊は意識を失った。

16

次に守越尊が目を覚ますと見慣れた天井が視界に映っていた。

「さてさて、君も余程病院が好きなのかな？ それともやつぱりナ

ース目当てなのかい？」

視線をずらすと、そこにも見慣れた男性の姿が見える。

「あ……そうか、俺はまた意識を失って」

「本当、どうやってそこまで体を酷使できるのか教えてもらいたいね？」

カエル顔の医師はポケットに手を入れたままため息交じりに息を吐く。

「まあ、君もあの少年の様に頑丈みたいだし、ものの数日で日常を送れるようになると思うけどね？」

「そつだ……先生！ 一緒にいた女の子は！？」

「フム、説明する必要はないと思うんだけど、何の問題もないよ。念のために今日一日は安静が必要だろうけど、まあ実際に会って確かめた方がいいね?」

ガラガラ、と部屋のドアを開ける音が聞こえる。

それと同時にカエル顔の医師は、それじゃ僕は失礼するよ、と部屋を出て行く。入れ替わる様に一人の少女がベッドへと近づいてきた。

「尊君大丈夫?」

「ああ、大丈夫。数日で元通り生活できるみたいだし。それよりもあんたが無事でよかった」

「よかったー」

何よりもこうして無事に和音の笑顔を見れたことに守越尊はホッと胸を撫で下ろしていた。

「あの後何もなかったのか?」

「んー、あの後は尊君をこの病院まで運んだくらいかな? お礼言ってた方がいいよ。あの子、一人で尊君を背負ってここまで来たんだから」

と、再び病室の扉がガラガラと開けられる。

恐らく、カエル顔の医師から守越尊が目を覚ましたと言っ情報を聞いたのであろうミサカが病室へと入って来た。

「目が覚めた様ですね、とミサカは貴方が無事だった事を再度確認します」

守越尊がミサカとこうして会うのは二週間振りになる。

九月一日に病院に見舞いに行つて以来だ。その後は調整に専念すると言っ事で会う事はなかったの、こうして元気な姿を見る事が出来て正直うれしいと感じていた。

「ありがとなミサカ。ミサカがここまで俺を運んでくれたんだろ?」

ありがとと言っ言葉に少し顔を赤らめたミサカだったが、

「はい。それはもう大変でした、と実は調整の最終段階にあったにも関わらず無理していた事をミサカはちよっぴり打ち明けたりして

みます」

「えええ！ だ、大丈夫なのか??」

ベッドの向かいに立っているミサカはペコリと頷いて

「今回の件は貴方だけではなくミサカ達にとっても重要な事件でしたので、とミサカは説明します」

と、その言葉を聞いてハツとした守越尊は

「そもそもどうしてミサカはあんな所に？ ミサカ達にも重要な事
つて」

「レムナント残骸と言っても分からないと思うので、『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』の残

骸と言えば分かると思います。とミサカは補足説明を付け加えます」

ミサカが言うには、学園都市の一部の人間と外部の人間がレムナント残骸を盗み、それを復元させようとしていたそうだ。

ミサカ達にとって『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』を復元されることは、実験の再開を意味するものでもある。それが緊急を要する事件だったのはそう言う事。

しかし、そのレムナント残骸の件に関しても、御坂美琴や上条当麻たちの活躍によって無事に解決されたみたいだ。

説明を終えたミサカは、それから、と付け加えると

「貴方が狙われていた理由ですが」

「エル計画……. だろ?」

守越尊はミサカが言い終わるまでに切り出した。

もちろん、守越尊はそんな計画に参加している記憶は無い。しかし、いざ考えてみると心当たりが無い訳ではない。

『神の目』だ。

可能性があるとするればそれしかない。

守越尊はそう考えていたのだが、

「ミサカネットワークを閉じて調べてみましたが、そんな計画は存在しません。とミサカは確かな情報を提示します」

「ど、どういう事だ??」

「はい。どうやらどこからか誤った情報が流れていた様で、その為

に貴方が狙われてしまったようです」

「なんだそれは？ と守越尊は思う。先ほどまで頭の中をグルグルと回っていた思考も一瞬にしてどこかへ消え去ってしまった。

「ハア、と深々とため息を吐く。

「そんな間違った情報の所為で和音を巻き込んでしまったのか、と考えると申し訳なくなってきました。」

「守越尊はベッドの横で立っている和音へ顔を向けると

「ごめん。そんな事に巻き込んだじゃって……」

「大丈夫だよ。ほら、こうして無事だった訳だし。まあ何か私にはよく分からない事はわかりだったけど、その事件つてのも解決したし、もう尊君が狙われる事もないって事だよ。なら終わりよければ全てよしだよ。それにそのお陰で尊君とも親しくなれた訳だしね？」 と笑顔で言葉を返してくる和音。その笑顔を見ているとより一層巻き込んでしまったことを申し訳なく思うのだが、心の何処かでは親しくなれた事に喜んでいられる自分が居ることには気がついていないようだ。

「ところで」

「と、なにやら今思い出しましたがと言う様な口調で

「貴方はこの方とどういった関係なのでしょう？ とミサカは少し強めの口調で尋ねます」

「か、関係って別に何も無いよ。ほら昨日会ったばかりだし、強いて言うなら一緒にご飯を食べた事くらいだよ。そう言う君は？」

「み、ミサカは……ミサカも一緒にご飯を食べました。とミサカは事実を述べます」

「……あれ？ 何かこんな風景を前に一度見たような……」

「ミサカにとってこの方は命の恩人です。とミサカはさらに事実を述べます」

「私だって守ってやるって言われたもん」

「守越尊の寝ているベッドを挟むように、先ほどまでとは違う少し陰悪やムードが立ち込めてきていた。」

「ようするに、尊君って誰にでも声かけるし、誰にでもそんな事言っちゃう人なんだね」

「少々がっかりしました。とミサカは率直な感想を述べます」

「……あの、お二人さん？」

にらみ合う様に対峙していた二人だったが、いつの間にかその視線は二つともベッドに座る守越尊へと向けられていた。

じつと守越尊を見つめる二人。和音は笑ってこそいるが、その笑いの質が全く違ってしまっている。向けられた側は怖いと感じてしまふ様な少し引きつり気味の笑顔だ。ミサカはミサカで怒っているのかそうでないのかどちらか分からない中途半端な表情が逆に怖い。「おや、こんな所にこんなものがありました。とミサカは偶然を装ってみます」

「ってそれ拳銃だよな!？」

「大丈夫です。ゴム弾ですので、とミサカは安全性を伝えます」

「ゴム弾でも痛いから!」

助けを求めるように和音へと視線を送ったが、和音は満面の笑みで

「大丈夫。尊君、丈夫だって先生が言ってたよ」

「ちよつと待て、何か当麻の属性がうつってないか？俺はこんなキヤラじゃないハズだぞ!」

「問答無用です。とミサカは躊躇いもなく引き金を引きます」

「ミサカやめ」

瞬間、珍しくもいつもと違う音色の悲鳴が病棟へ響き渡った。

17

ドアも窓も階段も廊下もエレベーターもないビルの一室で、男にも女にも見え大人にも子供にも、聖人にも囚人にも見える『人間』、アレキスターは赤い液体に満たされた円筒の中に逆さで浮かびながら僅かに笑みを浮かべていた。

「エル計画、か」

アレイスターはぼそりと呟く。

「かつて『樹形図ツリーダイアグラムの設計者』を作り出す際に建てられた計画を、改ざんし流すだけでこれほどうまく行くとは。正直私自身も驚いている」

巨大な部屋の四方の壁は全て機械類で埋め尽くされ、そこから伸びる数十万ものコードが地面を這っている。

「二度にもわたる超能力者レベル5との戦闘、特に今回の成長は著しいものだな」

出任せの情報を流し、暗部への依頼を途中でキャンセルする。これらはプランを短縮する為のモノだ。全てはアレイスターの手の上で踊っていたに過ぎない。

「それに比べ幻想殺しイマジンブレイカーの成長が乏しい。やはり、あれを手に入れておいて正解だったようだ」

アレイスターは暗闇で笑う。

壁を覆いつくす機械から放たれる赤や緑のランプがアレイスターの浮かぶガラスの円筒を不気味に照らし出していた。

4・7 「計画は闇の中で」(後書き)

感想やご意見お待ちしております。

5 - 1 「九月二十九日」(前書き)

前回、予告で「子午線の町」となっておりましたが、思った以上に一話が長くなってしまったのでサブタイトル変更です。申し訳ありません。

次回が「子午線の町」になりますのでご了承ください。

5 - 1 「九月一九日」

1

大覇星祭。

九月一九日から二五日の七日間にわたって学園都市で催される行事で。簡単に言ってしまうえば大規模な運動会だ。学園都市の存在する全ての学校が集まる訳だが、何しろ人口二三〇万人、その八割が学生と考えるだけでスケールの大きさが分かるだろう。

今日、九月一九日はその開催日。

大覇星祭期間は生徒の関係者やただの一般客も学園都市に入る事ができる為、平日の早朝にもかかわらず既に町の中は人で溢れかえっていると言う状態だ。

本来なら全ての学生が参加する事になっているが、中には病気の為に競技に参加できない学生や、何か特別な理由の為に参加できない学生も存在する。

守越尊のそんな学生の一人だ。

彼の場合は前者ではない。確かに五日ほど前に入院しなければならぬほど体を痛めつけた事はあったが、カエル顔の医者曰く「あの少年並にファンタジーな体の持ち主」らしく三日後には通常の生活が送れるまでに回復していた。

九月一九日。この日は守越尊にとってどうしても外す事の出来ない特別な理由があるのだ。

学園都市で大覇星祭の開会式が始まるうとしていた頃、守越尊が学園都市の外にいた。

「やっぱり二〇年三〇年の技術の差つてのは大きいんだな」

そんな事をぼそりと呟きながら守越尊は駅から見える風景を眺めていた。日本の都心と言えど、やはり学園都市に比べると見劣りする感じがある。それほど学園都市の中と言うものは数十年先に進ん

でいると改めて実感していた。

手には大きな荷物はなく片方の肩に提げられるくらいの小さな鞆が一つだけ。服装がなぜか学校指定の制服なのは、担任の黄泉川愛穂の指示だ。

『学園都市の外に行くなら制服じゃんよ』

そんな事から制服姿で駅のホームに立っている守越尊であったが、辺りにほとんど人の姿が見られない。逆に今西から到着した新幹線からは大勢の人たちが通勤ラッシュの如く溢れるようにホームへと飛び出していく。

（大霸王祭を見に行く人が多いみたいだな）

大霸王祭期間は普段出ていない学園都市行きの臨時バスがあるため、恐らく今階段を駆け足気味に下りて行く人たちもそのバスに乗るのだろう。

そんなこんなでようやく守越尊の待つホームにも新幹線が到着する。この駅から発車の為もちろん降りてくる人はいない。

守越尊は小さな鞆を背負い直すと車内へと入っていった。

（ええっと、一三のこは……ああここか）

指定された席に座った守越尊は小さな鞆を棚へと上げ、リクライニングシートを本の少し倒して深く腰掛けた。ホームで見たようにやはり人は少なく、この車両にはどうやら守越尊しか乗っていないようである。

（まあ、他の駅でまた乗って来るだろうな）

そんな事を思いながら守越尊は少し離れた窓から外の風景を眺め発車の時間を待った。

ちょうど時を同じして二人の男女が守越尊と同じ新幹線の乗り込んでいた。

「しかしまあ、イギリス清教も急な指令を出すもんよな」

一人は細い線の割りに体に合わない大きなＴシャツとジーンズを穿いた二〇代中盤の男だ。わざわざ染め直した様に黒い髪はワック

スか何かで意図的に毛先を尖らせている。首には革紐の様な素材のネックレスが掛けてあり、そこには直径十センチほどの小型扇風機が数個ぶら下がっていた。さらに肩には竹刀でも入っていそうな長い袋を担いでいる。

「仕方がないですよ。今回は事がだけに急を要しますから」

もう一人は十五歳くらいと思われる、肩まである黒い髪に二重まぶたが特徴的な少女。服装はピンク色のタンクトップに膝上ぐらいまでの長さのパンツを穿いている。手荷物が細長い袋だけの男と違い少女の肩には少し大きめの鞆が提げられていた。

「縮図巡礼が使えればもつと早く到着出来るんですけどね。ところで、どうして今回の付き添いが私なんですか？」

車内の通路を歩きながら少女は男に対して質問する。

対して男はニヤリと軽く歯を見せて微笑むと

「まあ、せつかく時間もある事だ。色々と積もる話でもあるのよな
ー、五和ちゃん」

頭に『？』を浮かべながら首を傾げる五和と言う少女。男の「ところで席はどこだったか？」と言う質問に対して

「ちよつと待つてくださいね。ええつと、七号車一三のAとBです」

2

程なくして駅を出発した新幹線だが、はてはて、なぜこの広い車内の中空いている席なら沢山あると言うのに、この席だけ三つ埋まってしまっているのだろうか？ と守越尊は少し疑問に思ってしまう。

隣に座っているのは体に合わないくらい大きめのTシャツとジーンズを穿いた男性で、なにやら細長い袋みたいなものを体の肩の部分に預けるようにして置いて座っている。窓側に座っているのは肩まである黒い髪にピンク色のタンクトップ姿の少女だ。

（二人で乗ってきたって事は何だ？ デート……って感じには見え

ないしなあ)

などと思っていると、隣に座っていた男が徐に口を開いた。

「なあ五和。なんか噂ではあの少年の事が気になってるらしいじゃないのよ」

ぴくつと反応した少女は

「ど、どうしてその事を!？」

「ふふ、この建宮斎字の耳を甘くみてもらっちゃ困るのよな」

(恋話し? じゃあ仕事の上司と部下とかそんな関係か?)

盗み聞きをするつもりはないのだが、席が隣という事もあって話しの内容が勝手に耳に入ってくるのだ。

「しっかし、あの少年と言うのなら五和、お前にはライバルが多そうなのよな」

と男は手を頭の後ろに組みながら

「この建宮斎字の予想では、あのオルソラ嬢も気がありそうなのよ」

「え、オルソラさんが!? ……確かにあの人はオルソラさんを助ける為に二五〇人もシスターに立ち向かっていった訳ですし、そういう感情が出てきてもおかしくはないですが」

(盗み聞きはしない盗み聞きはしない)

と思いつつもやはり自然と耳の中へと吸い込まれるように会話が入ってくる。

「まあ、当然の如くあのシスターちゃんの間違いないのよ。これだけでも元女教皇様プリエステス以外にも既に二人いるのよな」

「確かに元女教皇様プリエステスが相手では分は悪いかもしれないですけど、私にも少しくらいはチャンスがある……はずです……」

膝の上に置いてある鞆を軽く握りながら少女は少し俯いてしまう。もちろん守越尊は前を向いているのでそんな光景は視界に入っ来ないが

「でも考えてみるのよ。他にもきつと学園都市の中にも狙っている奴がいるのよ」

(へえ、相手は学園都市の中にいるのか。ってダメダメ、聞いてな

い聞いてない)

と、車内へと持って入っていたペットボトルを口へと運んで

「あの上条当麻って男にはな」

「ぶーっ」と口に含んだ飲み物が勢いよく飛び出した。

「上条当麻だつて!？」

勢いよく飛び出した飲み物と勢いよく発せられた言葉に建宮齋字は多少驚いた様だが、

「何よお前さん、つてその服……上条当麻と同じ制服じゃねえのよ」

「あ、ああ上条当麻とは同じ学校だし知り合いだけど、まさかこんな所でそんな名前が出てくるなんて……あいつ一体何やってんだよ」
恐らくはまた何か事件に首を突っ込んだって話だろう。

(そういえば、二五〇人相手に立ち向かったって言ってたよな?)

……どれだけ無茶やってんだよあいつ)

「で、どうなのよ?」

何が? と守越尊は首を傾げたが

「話を聞いてたんだろ? 上条当麻だよ上条当麻。学園都市で上条当麻を狙っている奴はいるのかどうかなのよ」

ああ、と守越尊は頷く。

この五和という少女は上条当麻が気になっているらしく、この建宮齋字の質問に対する回答を真剣に聞くように少し身を乗り出す体勢になっている。

守越尊は本当の事を伝えてしまっても良いのか悩んだ挙句、

「ん、一〇〇〇〇人くらいかな」

「「な!？」」

その回答に二人同時して驚いた。

「そ、そんな……一〇〇〇〇人も……」

乗り込む形になっていた五和は肩を落とすようにドサッと座席の背もたれに倒れるようにもたれ掛かる。

「お前さん、一〇〇〇〇人はちとばかし大げさ過ぎじゃないのよ?」

確かに一〇〇〇〇人などと言う言葉を聞けば疑いたくもなるが、

実際約一〇〇〇〇もの妹達シスターズが上条当麻に気がある事は確かな事な訳で、

「まあ、色々とあってそれくらいの人数が恐らく上条当麻に気があるかと」

なんてこつた、と建宮齋字は頭に手をやるが

「なら、お前さんから見てこの五和はどう思うのよ？」

「た、建宮さん！？ 何を急に！？」

肩を掴まれてクルッと回転させられた五和は突然の事にオドオドする。

「この五和はお前さんから見て付け入るチャンスはあるかって話しなのよ」

守越尊の方へと振り向かされた五和は守越尊をジッと見つめた。なにやら審査結果を待つ人みたいにドキドキとした雰囲気伝わってくる。

率直な感想、二重まぶたの印象的なかわいい子だと素直に思った。歳はちょうど同い年くらいだろうか？ 胸元の膨らみも十分過ぎるほど発達している。

対するはツンデレ中学生とその妹達約一〇〇〇〇人。常に傍にいるインデックスは特に強敵かもしれないが、

「多分大丈夫なんじゃないかな？ 多分あいつはそいつらの事そういう対象では見てないと思うから」

瞬間、五和の表情はパツと明るくなり

「ほ、本当ですか！？」

「でも当麻は鈍感だからな。ちょっとした事じゃアピールにならないかも」

それなら、と五和ははにやらごそごと膝の上に抱えていた大きな鞆から徐に取り出した。建宮齋字と守越尊はその取り出されたモノに『？』を浮かべながらもそれを見つめていた。

「一つ聞くが五和」

「はい？」

「それは何なのよ？」

「見て分かりませんか？ おしぼりですよ」

五和が差し出した手の上には真っ白なおしぼりが一つ。よく見てみれば、取り出した袋の中には複数のおしぼりが入っていた。

「いや、おしぼりなのは分かってるが……それをどうするのよ」

「これを使つて少しづつ覚えて貰おうかと。おしぼり作戦です」

あちゃーと建宮齋字は再び額の部分に手を当てるようにして背もたれにもたれ掛かる。

「お前さん、分かっているのかつて話しなのよ。相手にはあの元女^{プリエス}ス^{ステス}ス教皇様も含まれとんのよ。そんな小さな作戦では勝てるわけないのよな」

確かに、と守越尊は同時に頷いた。その元女^{プリエス}ス^{ステス}ス教皇^{プリエ}つて人がどんな人なのかは分からないが、多分そんな事ではあの上条当麻には全くの無意味なんじゃないかと思う。

その後も建宮齋字が様々な作戦、例えば手料理作戦だったり、コスプレ作戦だったり、などなどを提案していったが、どうも五和の中にも色々と思う事があるらしく、どうやらコツコツとジャブを打つ様に少しづつ作戦を実行していくようだ。

しかし、相手はあの上条当麻だ。そう簡単にうまくいくとは思えないが、正直頑張つてほしいと気持ちはある。

それにしても上条当麻め、……やるじゃないか。

「ところであんたらは上条当麻の知り合いみたいだけど、インデックスの事も知ってるみたいだし……もしかして魔術師か？」

びっくり、と二人は守越尊へと顔を向ける。

「ほおお前さん、学園都市の人間にもかかわらず魔術師の存在を認めるとはな」

「まあ、そりゃ炎を操つたり、二メートルくらいの刀を振り回したり、巨大な石の巨人を操つたりと色々と見てきてるからなあ」

ステイル、マグヌスだったり、神裂火織だったり、シェリー、クロムウェルなどの魔術師と戦い、おまけに身近にはインデックスが

いる。そんな状態で逆に魔術を信じるなと言う方が難しいと守越尊は思う。

「ニメートルの刀って七天七刀？ まさか、フリエステス元女教皇様とも面識があるなんて……」

「お前さん、案外事の中心部分にいるんじゃないかって話しなのよな」

え？ フリエステス元女教皇ってあの神裂火織なの？ と思っていたと、少し呆気にとられていた建宮斎字が今度な逆に守越尊に質問してきた。

「で、学園都市の人間でありながらそこまで魔術側と関わりのあるお前さんが、どうしてこんな所にいるのよ？ 今、学園都市では大覇星祭が行われているはずよな」

そう、先に話した様に本来学園都市の人間なら大覇星祭に参加しているはずなのだ。それなのに学園都市とは正反対に移動しているこの新幹線の中にいるのは不自然な事であり、そういう質問が来る事は不思議な事ではない。

ああ、と守越尊は呟き言葉を続ける。

「そりゃ、俺だって大覇星祭に参加したいけど、今日は……九月一日はダメなんだ」

九月一日、守越尊には大覇星祭を休まなければならない特別な理由があるのだ。

「今日は俺の……育ての親の命日なんです」

5 - 1 「九月二十九日」(後書き)

感想やご意見お待ちしています。

5 - 2 「子午線の町」

3

「建宮さん」

一瞬静まり返っていた空気を五和の声が切り裂く様に発せられる。

「いや、だってほら」

「そんな事答えて嬉しい人なんているはずがないじゃないですか！」

上条当麻の話をしていた時の様に前に乗り出す形で五和は建宮斎字に迫る。

「し、しかし、考えてもみるのよな。あの上条当麻とも知り合い、科学側の人間にも関わらず魔術の存在を認め、しかも今は大覇星祭の真っ只中。そんなヤツがこんな所にいたら疑いたくなるのも当たり前よな？」

「それでもです！ とにかく謝ってください」

建宮斎字が頭を下げるのと同時にその後ろで五和もぺこぺここと頭を下げる。

「そんなに気にしないで下さい。おじさんが死んだのは数年前だし、少しは慣れましたから」

確かに建宮斎字の言う事には一理ある。

学園都市の者で魔術の存在を認め、学園都市の一大イベントの一つでもある大覇星祭初日に学園都市を離れていては、魔術師にとつては疑いたくなるのかもしれない。

と、ここで守越尊は疑問に思う。

何を疑ったのだろうか？

「じゃあこつちも一つ訊くけど、あんた達も何でこんな事に？」

守越尊は学園都市で過去に三人の魔術師と出会っている。

ステイル＝マグヌスはインデックスを回収する為に、神裂火織は守越尊に忠告する為に、シェリー＝クロムウエルは戦争の火種を起

こす為に。 それぞれの魔術師は目的を持って行動していた。

そんな経験からか、この二人も何かしらの目的があつてこの新幹線に乗り込んでいるのだらうと守越尊は思う。

それを訊いてどうするのか、と言われてしまえばそれまでの話しなのだが。

「まあ詳しくは話せないが、明石に用があるのよな」

「……明石は俺の育った町ですけど」

何か、話しの流れ的にありそうな予感はしていたが、念のためにもう一つだけ質問してみる事にする。

「ちなみに……明石のどこまで？」

4

子午線の町、明石。

面積四九・二五平方キロメートル。東西一五・九キロメートルを海岸線に面した町で漁業が盛んな町だ。

三人は明石駅へと降り立つ。まず初めに見えたのは駅前広場にある小さな時計台だ。小さいと言ってもその高さは五メートルほどある。三本の長さの違う柱の一番高い柱に時計が設置され、残りの二本には柱に埋め込むようにベルが五つほど取り付けられていあり、各時間ごとにそのベルの音が様々な音楽を奏で、噴水が巻きあがる仕組みになっている。

「何も変わってないな。まあさすがに二ヶ月程度では風景が変わる事もないか」

改札を通り西口から出た守越尊は歩道を道沿いに南へ下って行く。バスターミナルの傍を通り一分ほどで交差点に差し掛かる。道路を挟んで向かいには『明石銀座』などとかかれた標識が見える。ただ、首都にあるようなものではなく、少し大きな商店街と捕らえてもらった方が良くもされない。

中央の片側一車線の道路を挟むようにして洋服店や雑貨屋、書店

などが並んでおり、その中でも観光地としても重要な位置を占めているのが魚の棚つおのたなと呼ばれる市場だ。ちょうど西の通りに入り口があり距離は一〇〇メートルはあるだろうか、ずらりと並ぶ店の七割以上が名前からも分かるように鮮魚店だ。昼時の今、地元の海で取れた新鮮な魚を購入しようとする客足も増え、賑わいを見せ始めている頃だろう。

しかしそちらは目的地の方角ではない為、正直少し寄って行きたいと言う気持ちもあったが、守越尊は目的地へと向かうために交差点を東へと歩いていく。

交差点は車通りも多く、乗用車の乗って出かけている人やトラック等での配達業の姿も多く見える。そんな風景を見ながら守越尊の後を建宮齋字と五和が並ぶようにしてついていっていた。

「それにしても工事をしている所が多いですね」

五和は率直な感動を口にした。

「ああ、この辺りは交通量の割りに車道が一つずつしかないんで二車線にする予定みたいだから。もう土地の買収も完了してるみたいだし」

ある所では建物を取り壊し、別の所では道路を舗装。さらには電信柱の移動と言う様に色々な所で工事が進められているが、二ヶ月ほど前まで住んでいた守越尊にとっては見慣れた風景だった。

さらに二〇〇メートルほど歩いて今度は北へと進路を変える。見えてきたのは長い坂だ。右へ左へカーブを描きながら伸びる坂を一〇〇メートルほど上ればそこが目的地だ。

「近くで見ると大きいし綺麗な建物ですね」

天文学館。

東経一三五度日本標準時子午線の真上に建つ天文学をテーマとする建物。東西に長く作られた建物は西に高さ五〇メートルにもなる塔が立ち、その天辺部分には町やつり橋の中で世界一と言われる明石海峡大橋、瀬戸内海を見つめるように巨大な時計が設置されている。東側はドーム状に作られており、ここではプラネタリウムを見

る事が出来る。

「一応、この町のランドマーク的な存在だからね。数年前に大掛かりな塗装工事で新しくしてたし」

そんな事を言いながら、守越尊はその前を通り過ぎて坂を更に上る。

「どこまで行くんですか？」

「あんたらは観光目的じゃないんだろ？ それにそっちにはあんたらの探してる人はいないよ」

こっちこっちと守越尊に言われるがままに建宮斎時と五和は後に続いて細い道へと入っていく。ちょうど天文学館の裏に位置するその道は大人が二人並べるかどうかくらいの幅しかない。左手に天文学館、右手には木が生い茂り、その枝が小さなトンネルの様なモノを作り出している。

突き当たると今度は北へと上がる階段。その五〇段ほどある階段を上りきれば、そこには木々に囲まれた大きな空間が現れた。

その空間の真ん中に小さな一軒家が建っていて、ただその家は一階の部分だけが後から改装したかの様に広いのが印象的な建物だった。

そんな部分を五和や建宮斎時が見ていると

「お帰りなさい。尊ちゃん」

頃合を見計らったように一人の女性が玄関から姿を現した。

「ただいま、洋子おばさん」

「そろそろだと思って玄関で待ってたのよ」

白色のカットソーTシャツにベージュのニットベストを羽織り、黒色のズボン姿の女性は優しい雰囲気を持っていて、五和は第一印象をシスターみたいな人だと思った。

「あら、そちらの方々は？ 尊ちゃんのお友達？ あらそうなの？ せっかくだから中に入ってお茶でもいかがかしら？ もう尊ちゃん、お友達が来るなら前もって言ってくれば良かったのに」

さあさあどうぞ、と女性は中へと案内する。

「いや、あの、私たちは」

「早とちりと言うか、持て成したいタイプなんで持て成されてやってもらえます？ お茶を飲みながらでもあんた達の用件は済ませる事が出来るだろうし。まあ何で魔術師がおばさんに用があるのかは分からないけど」

そう、建宮斎時と五和、この二人の魔術師がこの子午線あひなせの町に来た目的はこの施設の保母でもある先ほどの女性、新風洋子にいふうに用があるのだと言う。

守越尊は嫌な予感しかしなかった。魔術師がわざわざこんな場所にまでやってきた事、そしてそれが自分の育ての親である事。

しかし、守越尊には分からない。なぜ魔術師が新風洋子に用があるのか。

（おばさんが、魔術師だとも言うのか？）

十数年間一緒に生活してきた訳だが、思い出してみても思い当たる節は出てこない。

「とりあえず、訊く事は山ほどありそうだな」

そう呟き、守越尊は建物の中へと入っていった。

5

施設の中は普通の一軒家とは違う様な作りだった。

玄関の靴箱にはそれぞれ名前が書かれて振り分けられたスペースがある。そこには数名程の名前が書かれてあり、その中には守越尊と搔かれたスペースも存在する。二ヶ月程前まで守越尊が使っていた靴箱だ。守越尊は自分の使っていた所へと靴を置き、建宮斎時と五和は来客用と書かれた所へと靴を置いた。

中へ入り、メシメシと音のなる廊下を歩いていくと、明らかに壁の作りが変わっている部分に差し掛かった。外見からも分かっていた様に後から改装された部分だろう。

スライド式のドアを開けると、そこは少し大きなりビングみたいな所だった。フローリングの床にはカーペットが敷かれ、中央には細長い長方形のテーブルが一つ。六人程が囲める様な大きさの物だった。部屋の端には同じようなテーブルが立てかけてある。

「適当に座ってください」

と、奥の方から新風洋子の声が聞こえてくる。奥は台所に繋がっているらしく、どうやらお茶の準備をしている様だ。

建宮斎時と五和は言われた通りに座布団の敷かれてある場所に座り、守越尊は二人に向かい合う様に腰を下ろした。

程なくして、新風洋子は円形の盆にお茶の入ったコップと蛸煎餅と書かれたお菓子をに入れてやってきた。

「すみませんねえ。今あるのはこれくらいしかなくて」
お茶を目の前において回ると新風洋子は守越尊の隣へと座る。

と、五和が何かを思い出したように持ってきた鞆をゴソゴソとあざると、

「よかつたらどうぞ」

取り出したのは、今後上条当麻へのアピール作戦で使う事が決まっているおしぼりだった。

「あら、本当ならこつちが用意しないといけないのに、ごめんなさいね。あなた、なかなか良いお嫁さんになれそうだわ」

両手を頬へと当てて言う新風洋子に対して、何やら、やっぱりこれは使える、と確信を得たような顔をする五和だったが。そもそもおしぼりを持っていたくらいでは良いお嫁さんかどうかは分からないし、こういった場面に出くわさないとおしぼり作戦は効果を発揮しない訳であって、どうやら建宮斎時も同じような事を思っていたらしく、「一緒に食事をする場面にも出くわさんと使えないのよな」などと五和に対して言葉を発していた。

「おばさん、俺先に線香あげてくるね」

「あら、そう？ そうよね、その為に帰って来てくれたんだからね」
そう言って守越尊は廊下へと出てすぐ隣の部屋へと向かう。そこ

は六畳程の部屋で畳が敷かれてある和室だ。守越尊は部屋へと入り、そして仏壇の前に座り込んだ。そこには一枚の写真が飾られてある。新風正一あまなほ せいいち。新風洋子の夫であり、守越尊の育ての親でもある。時には叱り、時には優しく、施設の子供たちを本当の自分の子供のように接してくれた父親的存在だったが、数年前に病気で他界してしまつた。

守越尊が数十秒の間手を合わせ目を閉じていると、後ろで襖を開ける音が聞こえてきた。目を開けて守越尊がそちらに目をやると「まあこんな時に来ちまつたら俺たちもあげるのが普通よな」

建宮齋時と五和の姿があり、二人は順に仏壇に線香をあげて手を合わせていった。

部屋に戻ると、座っていた新風洋子が「二人ともありがとうね」と頭を下げる。

いえこれくらい普通ですから、とぺこぺこ頭を下げながら五和は座り、建宮齋時も腰を下ろした。

「ところで尊ちゃんのお友達って事は、貴方たちも学園都市のお住まいで？」

「いやおばさんその事だけどね、この二人は俺の友達って訳じゃなくて、おばさんに用があるみたいなんだ」

「あら、私に？」

と、新風洋子は少し驚いた表情を見せる。

「で、俺も詳しく教えてもらってないから訊くけど、あんたらは一体おばさんに何の用があるって言うんだ？」

気になる部分はまずそこだった。

建宮齋時は手に持っていたお茶を飲み干し、テーブルへと置くと「それじゃあまあ、こつちも時間があまりないので本題に入らせてもらつのよな」

五和、と建宮齋時が手を出すと五和はその手に一枚の紙を渡す。「これが何なのか、あなたになら分かるよな？」

テーブルへと置かれた紙には何やら英文で書かれた文章がズラリ

と並んでいる。新風洋子はそれを手に取り、文字を目で追いながら読み始める。

と、見る見る内にその表情が真剣なものへと変わっていった。その表情は長年一緒にいた守越尊もほとんど見た事がないようなものだった。

文章を読み終えた新風洋子は一度深く深呼吸をすると

「なるほど、貴方たちの用件は大体分かりました。ただ、ここでは……」

チラツと新風洋子は守越尊へと目をやる。その目はここでは話しが出来ない、と言うような目だったが、

「心配しなくてもいい。そいつは既に魔術の存在を認めているのよな」

「な!？」

驚いたのは守越尊だった。何故こんな所でも魔術などと言う言葉が出てくるのか? やはり守越尊が考えていたように新風洋子も魔術師だったのか? そんな事を考えていると

「そんな日が来るのではないかと思っていました、まさかこれほど早いとは思っていませんでした」

「おばさん、まさかおばさんも魔術師だったのか?」

「心配する必要は無い。その女は魔術師ではなく一般の人間なのよな」

安心できる一言。とは守越尊には思えなかった。なぜなら建宮斎時が言っている事は、魔術師でもないのに魔術を知っている、と言う事。それは寧ろ魔術師だったと言う事よりもっと特別な事なのかもしれない、と守越尊には思えた。

その考えはある意味で正解だったのかもしれない。建宮斎時の放つ言葉に守越尊は後にそう思った。

「問題ないと分かったところで早速用件を済ませようじゃないのよ。管理人さんよ」

5 - 2 「子午線の町」(後書き)

ネットにはいろんな事が載ってるんですね、としみじみ思いました。調べても分からなかった部分は想像ですので、その辺りはご了承ください。

ちなみに施設はまったくのオリジナルです。

5 - 3 「管理人」(前書き)

総合ポイントが700突破です。ありがとうございます。
これからも頑張りますので暖かく見守ってやってください。

5 - 3 「管理人」

6

「まあとりあえず現状報告でもしておこうじゃないのよ。五和、説明を頼む」

「はい。その紙の書かれている様に学園都市で『スタッフノート 刺突杭剣』なるものが取引されようとしています。主犯はローマ正教のリドヴィア・ロレンツェッティと運び屋オリアナ・トムソン。現在オリアナ・トムソンが学園都市内でスタッフノート 刺突杭剣を持って逃走中との事、魔術師二名と協力者一名が追跡を行っています」

「ちよつと待てと守越尊は思う。」

「ちよつと待てよ。学園都市つて、今は大覇星祭中だぞ!？」

「だからなのよな」

建宮斎字は静かに言う。

「学園都市は現在大覇星祭中だ。だからどうしても警備が甘くなつちまう。そこを突いての今回の行動なのよな」

「それに学園都市となると、私達魔術師は無闇矢鱈と手を出すことが出来ないんです。そしてもちろん科学側の人間も手を出す訳にはいきません。現在追跡している魔術師も大覇星祭で知人に会いに来たとする名目で行動しているに過ぎませんので」

「そう言えば、と守越尊は思い返す。」

（確か、シェリー・クロムウェルは魔術師の自分が科学側の人間、あるいは魔術側の人間が科学側の人間に倒された、と言う事になれば戦争が起きるって言ってたっけ？）

つまりは学園都市内に侵入した魔術師を科学側の力で倒す事は出来ない、しかし学園都市と言う科学のど真ん中が故に魔術師は手を出すことが出来ない。だからこそ現在追跡している魔術師も魔術師としてではなく、学園都市内にいる知人に会いに来た一人の人間と

して侵入していると言う訳だ。

「その刺突杭剣スタフソードつてのはそんなに危険なモノなのか？」

「まあ、普通の人間には何の被害も及ばない霊装なのよな。ってお前さん、霊装は分かるのか？」

「いやご生憎、と守越尊は首を横に振る。

「霊装つてのは、まあ簡単に言つちまえば何らかの魔術的な効果を持つた道具や装備を指すんだが」

「で、刺突杭剣スタフソードつて霊装は人間には何の被害も無いんだろ？ だつたら何でそこまでする必要があるんだ？」

人間には被害がないと言う事は、何かを破壊する為の物なのか、それとも他に特別な力があるのか、そんな事を考えていると、

「勘違いしてるようだが、俺は普通の人間と言つたのよな」

「刺突杭剣スタフソードはある特定の人間を殺す為に作られたと言われています」
五和が建宮齋字の付け加えるように言葉を続けた。

普通の人間には害はなく、特定の人間にだけ害を及ぼす。

「その特定の人間つてのが、聖人なのよな」

「聖人つて、確か神の力を身に宿す事が出来る人間だよな？」

建宮齋字は目の前のお茶を一杯啜り、

「刺突杭剣はその聖人を一撃で即死させちまうモノなのよ」

守越尊はそれがどれだけの事なのかある程度想像がついた。

聖人は聖人の証である『聖痕ステイクマ』を開放した場合に限り、一時的に

人間を超えた力を使うことができる。守越尊に宿る『神の目』も同じように『神の目』発動時には人間の超えた力を使う事が出来る。

かつて学園都市一位である一方通行と互角以上に戦つたこの力。それと同じような力をたつた一撃で倒してしまう。

考えただけで背筋がゾツとした。

「聖人つてのは科学側で言えば核兵器みたいなものなのよな。そんなモノをいとも簡単に破壊できる力を持つていてるつて事だけでも、魔術界の動きが大きく変わってきちまうつて話なのよ」

「だからこそ、イギリス清教はあれを手元に置いておこうと言う訳

ですね」

今まで話を聞いていただけだった新風洋子は言葉を発した。手に持っていた湯飲みを机へと置くと、一つ深い息を吐いて徐に立ち上がった。

「用件は急いだ方が良いでしょう？　ならばそろそろ動きましよう。説明は移動しながらでも出来るでしょうから」

「そう言う事だとよお前さん。悪いが続きは歩きながらだ」

続くように建宮斎字と五和も立ち上がり部屋を出て行く。守越尊も今一事情が掴みきれないまま同じように部屋を後にした。

7

四人が向かったのは施設の裏に位置する場所だった。

建物のすぐ裏一〇メートル程に位置するのに守越尊にとっても初めて立ち入る場所だ。その目の前にはおよそ一〇〇段以上はあるような階段が続いている。

「こんな場所……どうして今まで気がつかなかったんだ？」

「人払いが刻んであるからよ」

先頭を歩く新風洋子は静かに答える。

「この場所を知らない者にはこの場所に近づけない様に大昔から魔術がかけられてあるの。ここに来るためにはこの場所を知る者の後に続いて行くしかない。そうなつてあるの。それは魔術師とて例外ではないわ」

そんな事を平然と言つてのける新風洋子は自分の知っている新風洋子ではないような錯覚に陥りそうになっていた。しかし、目の前にいるのは自分の育ての親であり十数年間生活を共にしてきた事実は決して嘘なんかではない。ただ単に守越尊が知らなかっただけ。たつたそれだけの事なのだ。

「なあ、質問の続きいいかな？」

守越尊は前を歩く建宮斎字へと声をかける。

「ああ構わんよ」

「ローマ正教つてのは？」

「ローマ正教つてのは魔術側に存在する十字教の三大勢力の一つなのよな。イギリス清教、ロシア成教、そして二〇億の信徒を持つ最大勢力のローマ正教」

二〇億。たしか日本の人口は一億二〇〇〇万人くらいだったハズ、
と思い出しながらその数字の大きさに守越尊は驚愕した。

「まあ二〇億つて数字は確かにすごいが、全てが魔術を使える訳じやねえ。その辺に關してはローマ正教もイギリス清教も変わらないのよな。ロシア成教が若干劣っている分イギリス清教とローマ正教二つの力が均衡しているつて考えた方がいってことなのよ」

「だからローマ正教に^{スタブソード}刺突杭剣なんて物を手中に収めさせちゃいけないつて事でいいのか？」

「ローマ正教は他の十字教宗派も含め全てを『異教徒』と思つてい
る。中には『異教徒』であれば何ら処刑も躊躇わなつて者もいる
くらいなのよな。極めつけには同教の者さえも強引に『異端』の烙
印を押して処刑してしまう事すらあるつて話なのよ」

確かにそれは危険だと守越尊は少し状況が理解できた気がした。
ただですね、と後ろを歩く五和が付け加えるように話し始める。

「現在学園都市内を逃走中のオリアナ^{ルトテイスタープ}とトムソンは追跡封じの異名
を持つ運び屋です。正直なところ、イギリス清教も一〇〇パーセン
ト^{スタブソード}刺突杭剣がローマ正教へ渡ることを阻止できると思つていない
んです」

つまりどういう事だ？ と守越尊は考える。

（ローマ正教は魔術側の三大勢力の一つで、実質はイギリス清教と
ローマ正教の二つか。そこに聖人を一撃で即死させてしまう霊装を
渡すわけにはいかない。でもそのオリアナと言う運び屋を捕まえる
事が出来るかどうかイギリス清教には正直分らない、と）

ならば、イギリス清教は何を考える？ ローマ正教に^{スタブソード}刺突杭剣な

んで物が渡ってしまった場合、イギリス清教はどうするのか。

「均衡している力を保つ為に同じ力を持つとする？」

「ご名答。そういう事なのよな」

ちよつと待て、と守越尊は思う。

「話しの流れるのここにそんな物があるって言うのか!? それで

おばさんはそれを管理している管理人って事なのか!？」

「物分りがいいじゃないのよ。つまりそう言う事だ」

こんな何も無いところに?? と疑いたくなる。

「お前さんは魔術が使えないだろうから分かんと思うが、この場所ってのは特別な所なのよ」

そんな話しをしている間に階段を全て上り終え、見えてきたのは小さな祠だった。

特別な場所と言われても祠以外に何かがあるわけでもなく、上空には青空が広がり見るからにそんな物を保管しておける様な場所に見えなかった。

「説明しますと、日本って言うのは四つのプレートから成り立っています。大陸には大陸ごとに地脈と言う物がありつまりこの日本にはその大きな地脈が四つ流れ込んできています。そしてこの町が何と呼ばれているかももちろんご存知ですよね？」

子午線の町。

「経緯一三五度線から導き出される天球座標でこの一帯に四つの地脈の流れを集中的に集める事によってこの場所に神殿を構築しているんです。恐らく先ほど言われていた人払いもこの神殿に予め組み込まれた魔術の一つだと思われます」

つまりここは保管するために最適な場所だったという事でよいのだろうか。と守越尊は考える。長年過ごしてきた施設の目と鼻の先にそんな場所があったなんて事は未だに信じがたい事なのだが。

「たった一度この場所に入っただけでそこまで見極めるなんて、さすがイギリス清教が使いに出した事がありますね」

そうこうしている間に四人は祠の前へとたどり着いた。

高さは二メートルほどで奥行きは一メートルもない小さな祠。観音開きの扉に小さな鳥居まで備え付けられたその祠にも魔術的な要素があるのだろうか？

この中に建宮齋字が言う刺突杭剣スタブソードに匹敵する物が保管されている。そう考えて、守越尊は一番肝心な事をすっかり忘れていた。と思う出すように言葉を発する。

「そう言えば、刺突杭剣スタブソードに匹敵する物つて一体何なんだ？」
今更というべき質問なのだが、中身を知らない守越尊にとってはやはり気になる。

「一つ言える事はそれは霊装なのよ。まあ詳しい事は管理人に直接聞いた方が早いつて話しなのよな」

新風洋子は祠を見つめたまま、静かに語るように話し始める。

「私も見るのはこれで二回目でしょうか。代々管理人として役目を相続する時にのみ見る事が許されていきましたからね」

そう言いながら新風洋子は一人で祠へと近づいて行き

「伝承ではこの霊装が表に出されるのは約五〇〇年ぶりでしょうか。そんな場に尊ちゃんがいるのは想像もつきませんでしたか」

観音開きの扉へと手をかけた。

「霊装の名は『思考の剣』 またの名を『剃刀の剣』レイザーソードと言います」

5 - 4 「剃刀の剣」(前書き)

最近、スランプ気味でして、何と言っても文章がひどい。正直誰かに代わりに書いてもらいたいくらいです。抜け出せるように頑張りますので、文章のレベルの低さは少々多めに見てやってください。

5 - 4 「剃刀の剣」

8

新風洋子はそれを両手に持ち、祠の中から取り出した。

「スタブソード 刺突杭剣は切っ先を向けただけで聖人を殺せてしまおうと言う霊装らしい。その霊装に引けをとらないと言われていた霊装。

正直一体どんな物が出てくるのかと思いきや。

「それが、レイザーソード 剃刀の剣」

驚くべきはその大きさだ。

全長が五〇センチほどで、ショートソードと言える様な大きさしかない。

そしてその形も際立っている。四〇センチの刀身は幅が六センチ、剣にも関わらずその刀身には反りが入られており、さらに刀身には刃が無く刃先は尖っていなかった。鍔がやたらと飛び出していると思っただけでなく握りの部分と刀身の中心が合っており、片側に刀身が大きく偏っている。

「一体、こんな小さな剣にどれだけの力があるって言うんだ？」

守越尊は呆然と呟く。

それは小さく、そして刃すらない。剣と呼べる様な代物ではないのは見て一目瞭然だ。魔術師ではない守越尊はそう感じた。

「見た目だけで判断しちゃあダメなのよな」

隣に立っている建宮齋字は言う。

「形が小さいとかそんな物は関係ないのよな。問題なのはその霊装にどんな効果が込められているかって話なのよ。まあ、レプリカなんて物には大きさや形が大きく関わって来るんだが」

と、建宮齋字は一呼吸置いて

「レイザーソード その剃刀の剣は全てを切り裂くと言われていたのよな」

「全てって……」

「ある時は山を、海を、大地を、そして空をも切り裂く剣。それが
剃刀の剣」^{レイザード}

そう五和が言う。

こんなモノが？ と驚くような目で守越尊は再びその剣へと目をやる。新風洋子が両手であるが軽がると持つていることから重さはそれほどないのだろう。大きさからも大体予想がつく。

もし、この剣が巨大で重く、それ故に大地を切り裂き海をも切り裂く、そう言われれば何となく理解できたかもしれないのだが、この様な小さなそして刃すらない剣でそんな事が出来るとは想像が来ない。

建宮斎字が言う様に、見た目ではなく霊装にどんな効果があるのか、なのだが。

「でもどうやってそんな事が？」

学園都市には風力使いと呼ばれる能力者がいる。大能力者にもなると風の力でコンクリートなどを切り裂く使い手がいると聞くが、そう言った類の能力だろうか、と守越尊は考えていた。

(それなら空を切り裂くと言う説明と合わない部分があるか。でも風なら空気が切れたりするのかな？)

「削ぎ落とすのですよ」

新風洋子はそのまま話しを続ける。

「先ほども言いましたが、この剃刀の剣にはもう一つ『思考の剣』^{レイザード}と言う名があります。その名前の通り、ここにはある一人の魔術師の思考の全てが詰め込まれています」

「その魔術師って言うのは？」

「魔術師の名はウィリアム。かつてローマ正教の魔術師だった男です」

え？ と一瞬守越尊は戸惑う。

「ちよつと待ってよおばさん。それを作ったのがローマ正教の魔術師って事は、その霊装もローマ正教のものって事じゃないの!？」

「焦らず話しを聞くのよな。ローマ正教だった、と言ってるだろ」

あ、と守越尊の口から声が漏れた。

「魔術師ウィリアム」

隣にいる五和が咳くように応える。

「ローマ正教でありながら、その独自の考えによって異端のレッテルを貼られてしまった魔術師」

「ええ、必要なれば神さえも不要とする、などという彼の考えは、神を主とし自分達こそが真の教徒としているローマ正教にとって異端でしかありませんでしたからね」

「つまり神様なんていらないうって言ったって事なのか？」

「まあ一存にそうとは言えないのよな。簡単に説明するとだな」

建宮齋字は徐に足元に落ちてある小石を拾うと、三步ほど横へと歩き守越尊から距離をとり、無造作に手に持っている小石を守越尊へと投げた。

咄嗟に守越尊は受け取るような姿勢をとったが、その小石は顔横三〇センチほどの所を通り過ぎて後方の地面へと落ちた。

ん？ と守越尊が首をかしげていると

「お前さんなら今のをどうとらえる？」

「どつって？」

「何故外れたかって事よ」

どうして小石はあたらなかったのか、

「そんなのあんたのコントロールの問題だろ？」

「まあ普通はそう考えるよな」

建宮齋字はそう言いながら元いた位置に戻ると

「だがそこに神の加護なんてものがあるとしたら、お前さんはどうする？ 俺が投げた石が神の計らいによってお前さんに当たらなかった。そんな考えがあるとすれば」

つまりはこういう事だ。

例えば今回の例、建宮齋字の投げた小石は守越尊に当たらなかった。それはもちろん建宮齋字のコントロールの問題であるが、当時のローマ正教では異なる思考に行き着く。

この場合、建宮齋字の投げた小石は神の計らいによって守越尊に当たらなかつた、と。

「ただウィリアムは違つた」

五和が建宮齋字に続くように話し始める。

「教徒達が全ての事柄に神の加護を信じていたのに対して、ウィリアムはその部分を省いてしまつたんです。神の計らいで小石が当たらなかつたのではなく、ただ単に小石が当たらなかつた。説明できる事柄に不要な物はいらぬ。この場合ですと神の計らいという部分は説明では不要だ、としたんです。そしてその考えの所為で異端のレットルを貼られてしまつたんです」

「そんな事で？」

「ローマ正教からしてみれば、説明に神が不要つて事は主である神も不要つて事になるのよな。そんなヤツは教徒ではない、そう思われちまつたのよ。主である神の存在を否定している訳でもないのにな」

こじつけじゃないか、と守越尊は思った。

要するにローマ正教は自分達に悪影響を及ぼすかもしれない芽を取り除きたかつたのだ。本当に主を否定する者が現れ、混乱を招かぬようにと。

「でも異端なら処刑されてしまふんだろ？ 今の中には霊装なんて出てこなかつたけど」

「逃亡したのよ。そして当時ローマ教皇と対立していた神聖ローマ帝国に亡命し皇帝の保護を受けたの。その後には皇帝へと献上したのがこの剃刀レイザーソードの剣。説明に不要な物を全て削ぎ落としてしまふ、と言ふ魔術師ウィリアムの思考が詰め込まれた霊装なの」

魔術師ウィリアムの思考を極限にまで増大、凝縮させた霊装は結果的に、物事が結果にたどり着くまでの過程を削ぎ落としてしまつた。

例えば山を切る、と言う事柄に対して、その山までの距離、その山の大きさ、硬さ、そう言う過程があつたとしても、剃刀レイザーソードの剣はそ

れらを削ぎ落としてしまつ。

たとえ距離があつたとしてもそれを削ぎ落とせば山は切れる。大きさがあつたとしても硬さがあつたとしても、それらを削ぎ落とせば山は切れてしまつ。

結果的に、剃刀レイザーソードの剣を振るえば山は切れる。となるのだ。

「そんな霊装つてありなのか？」

「いいえ、だからこそ当時の神聖ローマ帝国皇帝は使用することが出来なかつた。ローマ正教は最大勢力です、その規模や力は歴然でしたから、いくらローマ正教と対立しているからと言ってその力を振るい、戦争になる事は避けたかつたのでしょうか。後に霊装はイギリス清教へと渡される事となりましたが、それはイギリス清教とて同じ。当時力の差があつたローマ正教との戦争を避けるために、この遠い地日本へと持ち込まれ、長い間封じられて来たのです」

そして今はその逆だ。

ローマ正教とイギリス清教、二つの力が限りなく均衡しているからこそローマ正教が力を持つならそれと同じだけの力をイギリス清教が持つ必要がある。

つまりは牽制しあっているのだ。

同じ位の力がぶつかり合えば互いにただでは済まない。

話を聞いて、守越尊は少し考えていた。

今回の首を突っ込む形となつた一件、あまりにも事が大きすぎると。

いや、今思つてみれば過去にもあつた。例えばシエリー・クロムウエルの一件。彼女は戦争を起こす為に学園都市に侵入していた。あの時は母親の名前を出されたこともあり、流れるままと言つわけではなかつたが、後先も考えずに突っ走る形となつた。だが一歩間違えれば科学と魔術の戦争なんて事に発展していた可能性もあつたわけだ。

そして今回は魔術側同士の戦争になるかもしれない。さらにはその中の重要な霊装なんてモノが長年暮らしていた場所の目と鼻の先

にあった。

新幹線の中で建宮齋字に言われた事を思い出す。

「お前さん、案外事の中心部分にいるんじゃないかって話しなのよな」

本当にそうかもしれない、と守越尊は心の中で呟いた。

「さて、話しが過ぎましたね、霊装が霊装です。イギリス清教では保管するための術式が準備されているとの事ですし、早く貴方達に運んでいただいた方が良さそうです」

そう言っつて新風洋子は手に持つ霊装を建宮齋字へと渡そうとしてピクリ、とその手が止まった。

考え事をしていた守越尊は新風洋子が動かない事に気がついて、その視線が自分達の後ろへと注がれている事が分かった。

五和や建宮齋字も不思議に思ったらしく三人がほぼ同時にその視線の先に目を向けると

「へえ、それが剃刀レイザーソードの剣？ 意外と小さいのね」

「「なっ!?!」」

驚きの声をあげたのは守越尊では無く、建宮齋字と五和だった。

「管理人さん下がって！」

新風洋子を守るように二人は中央へと瞬時に寄る。

「こりゃ参ったのよな。まさか今の今まで存在に気づけねえとはな」
視線の先にいたのは一人の少女だった。身長は一六〇センチくらいだろうか、肩までほどの長さの赤い髪にこめかみの部分だけに細く一本だけ束ねられた髪が胸元くらいまで垂れ下がっていた。

髪の色に反するように着込まれている服は真っ黒の修道服のようだったがかなり違っていた。上部はタンクトップの様に肩までではなく胸元のフアスナーは首元までしっかり締められている。腰の部分には白いベルトの様なモノが巻かれてあり、下部は膝上くらいまでのズボンの周りを前部分が無くなったスカート様なモノがマントの様に脹脛の辺りまでひらひらと舞っていた。

少女は束ねられ垂れ下がっている髪を徐に触ると

「へえ、貴方達優しいのね」

・・・わざわざ背中を向けてくれるなんて

瞬間、ずぶりと軟らかい何かが切れる音が背後から聞こえてきた。
なに……が？ と振り向くと同時にドサ、とその人物は地面へと倒れた。

「へえ、意外と軽いんだね」

視界に入ってきたのは先ほどまで目の前にいた少女で、その少女は祠の上へと立ち、その片手には霊装が、もう片方の手には血がポタポタと垂れ落ちるナイフが握られていた。

そして地面には背中に血まみれにし倒れる新風洋子の姿があった。

5・4 「剃刀の剣」(後書き)

霊装に関しては少し無理やり過ぎたでしょうか？

はい、そうですね。自分でもちよっとムリあるって思っちゃってます。

何が起きたのか。

それを理解するために数秒必要だった。

数秒前まで目の前にいた少女は、次の瞬間背後へと移動していた。そして左手には剃刀レイザースイードの剣を持ち、右手には血の滴り落ちる小さなナイフ。

その血は一体誰の……

「五和！」

建宮斎字の声で守越尊は目が覚めたように理解した。

メートル先の地面へとぐったりとうつつ伏せに横たわる新風洋子の姿。その背中斜めに赤い血の線が走っており、周りのベージュのニットベストはその血を吸い込みどす黒い色へと変わり始めていた。

「あ……あ……」

新風洋子は斬られたのだ。

「お……おばさん！」

「落ち着いてください」

駆け寄った守越尊に声をかけたのは既に新風洋子の傍に寄っていた五和だった。

「今、回復魔術をかけますから」

地面に転がる石や小枝を集め、おしぼりを取り出しポケットから財布を取り出す。

建宮斎字や五和の所属する天草式十字凄教は呪文や霊装を扱わない。用いるのはどこにでもある日用品だ。

五和が行おうとしている回復魔術もそうした日用品の中からオカルト的な残滓を組み直す事で、出血を止め傷を塞ぎ、失われた生命力を充填させようとしている。

魔術を知らない人間、いや、魔術師であつたとしてもその術式の意味を理解する事は難しいだろう。

五和は手際よく回復魔術を発動させた。

薄く淡い色の光の玉が舞い、緑色の光は蛍の様にも見えた。それらの光は引き裂かれた皮膚の間に潜り込み、その隙間を埋めようとする。

「へえ、回復魔術」

ぼそり、と上から声が聞こえた。

「そんなことしなくても大丈夫だと思っただけ？ 別に殺す気はなかつたし」

少女はそう言いながら右手に持つナイフを斜めに振るう。刀身に纏わり付いていた血が振り払われ、ビシャッと地面へ落ちると、そのナイフを懐へとしまい込む。

「大人しくするのよな！」

同時に建宮齋字は持ち歩いていた細長い袋から大剣を取り出していた。

フランシユベル。

全長一八〇センチにも及ぶ一七世紀フランスの両手剣。刃の表面が波打っているのが特徴的で、その波型刃によって傷が広げられる作りになってある。

その剣を建宮齋字は片手に持ち地面を蹴り飛び出した。

「どこへ行くのかな？」

「な、に……！？」

その声は再び後ろから、聞こえた。

建宮齋字その声に気を取られ、再び目線を戻した時には祠の上に少女は居らず、先ほどまで建宮齋字が経っていた場所から数メートル離れた場所にその姿はあつた。

空間移動するかのよう^{テレポルト}に場所を移動する少女。

建宮齋字は祠の上へ着地すると振り返り、少女へと目線移す。

「争う気はないわ。これさえ手に入ればいい訳だし。まあ貴方達が

その気なら話しは別なんだけど？」

左肩へと剃刀レイザーソードの剣を担ぐように持ち、こめかみを通り垂れ下がる髪をいじりながら少女は言葉を発する。

「空間移動って訳でも無さそうなのよな。……重複分身ドッベル魔術か」

「へえ、いとも簡単に私の魔術を見破るなんてさすがね」

新風洋子の治癒は五割ほどが完了していた。絶えず蛍の様な光が傷口の隙間へと入り込み、その間を塞いでいる。心なしか、青ざめていた表情も少し生気を取り戻している様にも見えた。

「霊装を狙い、重複分身ドッベル魔術使いの魔術師……マリリー＝アンソワ
ージュ」

五和が思い出すように呟いた。

大当たり〜、とパチパチ拍手をするマリリー＝アンソワージュ。

「でもご褒美は無しだよ？」

祠から飛び降りた建宮齋字は守越尊と五和の前に立ち、剣先をマリリーへと向ける。

「お前さん、その霊装が一体何なのか分かっているのよな？」

マリリーは相変わらず垂れ下がる髪をいじりながら

「分かっているわよ。全てを切り裂くと言われる霊装、剃刀レイザーソードの剣。何かも分らない物をこの私が盗むと思ってる？」

「なら、それをどうする気だ」

「どうするかって？ 理由が無いわけじゃないんだけど、そんなのこの私が言うと思う？」

チツと建宮齋字は舌を鳴らすと、ジリジリと地面に足を滑らせてフランシュベルを構える。

「ならば大人しくそれを返すのよな！」

ゴッ！ と建宮齋字が踏み込んだ地面から爆発した様な音が響いた。それほどの勢いを持って建宮齋字は前へと飛び出していく。

フランシュベルを片手に、一〇メートルも無い距離を一気に詰めにかかるが、

「どこを狙ってるのかな？」

声は瞬時にして横から聞こえた。

突如として現れたマリリーは宙でぐるりと回転するとその勢いに合わせて踵落としを放とうとする。

（対衝撃術式は予め張ってあるのよ、それ以前に）

「重複分身魔術だと分かっていたら対処の仕様などいくらでもあるのよ」

「だから、どっちを向いてる訳？」

（な、に……っ）

目の前のマリリーが重複分身魔術だと踏んでいた建宮齋字は予想通り現れたマリリーに対してすばやく反応し、フランシユベルを横へとなぎ払おうとしていた。しかし、実際は相手にその裏を読まれてしまったのだ。

踵落としを繰り返してきたマリリーが偽者。元々目の前にいたマリリーが本物だった。

ガキン、と鉄と鉄がぶつかるような音が辺りに響く。

懐から取り出した小型ナイフで建宮齋字の脇腹を斬りつけたマリリーだったが

「へえ」

建宮齋字の脇腹には傷一つ付いていなかった。

「さすがにこの程度の武器じゃ対衝撃術式にはムリみたいね」

脇腹の部分を確認する様に触りながら、ややこしい、と建宮齋字は歯噛みする。

本物だと思えば偽者、偽者だと思えば本物。重複幻覚魔術をつまく使いこなすマリリーの実体を掴む事が出来ない。

（術式を分析できれば何とかなるんだが）

「ムリだね」

まるで建宮齋字の心を読んだようにマリリーは言葉を発する。

「天草式がいかに洞察力に長けていたとしても、私の重複分身魔術を短時間で見極める事など不可能よ。この魔術師マリリー＝アンソウージュがそんな柔な術式を作ると思ってた？」

マリリーは笑みを浮かべながら言う。

「それにしても、私はこのまま逃げたいのに貴方達はまた厄介なモノを張ってくれちゃって」

マリリーは何かを確認するかのようになりを見回すと

「核を見つければ良いって話しだけど、うまく隠してあるか神殿の外って落ちでしょ」

ああ面倒くさ、とマリリーは軽く横へ手を上げる。

「魔術師が数手先を予想して準備するのは当たり前よな。それに今回ののはちとばかり特別製でな、ここに流れ込む地脈を利用して貰ったって訳よ。そう簡単には逃がさんのよな」

苦笑いにも見える表情で建宮斎字は答えた。

人払いと言う魔術があるが、それはその一帯に人を近づけさせない為の魔術である。今回はその逆でその場に留まらせてしまふ魔術と言ったところか。

この地に築き上げられた神殿の力を利用し数倍にも増大された術式は、この一帯から標的を逃す事は無い。

それが破られる方法は二つ。

術式となる核そのモノを破壊するか、術者を倒す事。

「術者はそこに座り込んでるのを除いて貴方達二人のどちらかよね。まあ私の専門は『殺し』じゃなくて『盗み』なんだけど、この際仕方ないよね」

マリリーは細く微笑みながら、

「盗む為に殺すんだから」

10

時間は二分ほど遡る。

新風洋子の治療を終えた五和は鞆から数本の棒を取り出した。一つが七〇センチほどの棒を五和は手際よく接続部アタッチメントのガスの元栓のよ

うなソケットをカチカチとはめ込んでいく。すると一本の長い棒になり、その先端に鋼の刃を取り付ければ槍が完成する。

フリウリスピア
海軍用船上槍と言われるその槍は先端の刃が異様に長く、さらに二枚のウィングが外側に反り返っている。

（管理人さんの容態は安定してる。傷を負ってから治療を始めるまでの時間が短かったのが良かったみたいです）

五和は新風洋子見ながら考える。

（マリリー＝アンソワージュが再び管理人さんを傷つけない保証はありませんが……）

視線を移し、建宮斎字とマリリーへと目をやる。ちょうどマリリーの小型のナイフが建宮斎字の脇腹を捉えた所であったが、対衝撃術式のお陰でその部分には傷一つ付いていなかった。

（やっぱりあちらをどうにかしないとイケないですね。守りながら戦うのは難しいですが、それでも）

五和は立ち上がると、槍の調子確かめるように一振りする。

「守越尊さんでしたよね。管理人さんとそこにいて下さい」

建宮斎字とマリリーに目を向けたまま、目の前座り込む守越尊にそう呼びかけるが反応が無い。

無理も無いか、と五和は思う。自分の親が目の前で斬られたのだ。気が動転して言葉が耳に入ってこないのも納得できる。

と、考えていた五和の耳へと会話が聞こえてきた。

「術者はそこに座り込んでるのを除いて貴方達二人のどちらかよね。まあ私の専門は『殺し』じゃなくて『盗み』なんだけど。この際仕方ないよね、盗む為に殺すんだから」

フリウリスピア
その言葉と同時に五和は海軍用船上槍を構えた。

（何としてもあの霊装は取り返します！）

槍を握る手に力を込めて、足を開いて重心を落とすいつでも飛び出せる状態を作り上げる。

が、その視界を遮るように何かが立ち上がった。

「おばさんを、お願いできますか？」

ユラリと立ち上がった守越尊は静かにそう呟いた。

五和は槍を握る力を少し緩めると、

「何をしようとしてるんですか？　ここは私達がどうにかしますから、貴方は」

「いいから！！」

背を向けていると言つのに、ビクンとその気迫で五和の体が震えた。

守越尊はそのまま何を言わずにゆっくりと歩を進めていくが、五和は声を出して止める事が出来なかった。

おや？　とその気配に気が付いたマリリーが目線を守越尊へと向けた。同じ様に建宮斎字の視界にもその姿が見えていた。

「お前さん何をしてんだ！」

しかし、守越尊は何も答えずに僅かに下を向いたまま前進する。

「ほんと、別に術者でもない貴方には何もしないつもりでいたんだけど、そんなに近づいて巻き込まれてもしらないよ？」

「冗談混じりの発言をしてマリリーは視線を逸らす。

その発せられた言葉の所為か、守越尊の拳は一段と強く握り締められた。

「……ざけるなよ」

ん？　とマリリーは再び守越尊へと視線を戻した。

「ふざけるなって言っただよこのクソ野郎！！」

五和は勘違いをしていた。守越尊が五和の声に反応しなかったのは気が動転していたのでも無くシヨックだったからでもない。

あまりの怒りで声すら出なかったただけなのだ。

「クソ野郎……ですって」

今まで笑いが混じっていたマリリーの表情が変わった。歯噛みし、何か思い出すのを押し殺しているような表情。

「その霊装がすごい物だったのは分かった。でもそれ一つで世界がどうなるかとか、あんたが何のためにそれを盗んだのかなんて、もうどうだっていい」

食いしばる齒はあまりの力にギシギシと齒軋りの様な音を立てる。
「あんたがおばさんを斬ったって事実だけで十分だ。今まで散々流
れで来た部分もあったけど、今回は違う」

まるで怒りをぶちまけるような声で

「自分の親を殺されかけて黙っていられるほど、俺はお人よしじゃ
ねえぞ！！ このクソ野郎が！！」

『このクソ野郎』

その言葉に引きつりそうになる顔を抑えながら

「いい度胸ね」

そうゆつくりと呟き、マリリーは左肩に担ぐ^{レイザーソード}剃刀の剣を下ろした。

「お前、まさか……っ」

その行動に何かを感じ取った建宮齋字だったが、

「せっかく手に入れたんだから、試し斬りしてもいいわよね！」

霊装には魔術を流し込むことによつて起動するものもあれば、何
もしなくとも持続するタイプのモノがあるが、この剃刀^{レイザーソード}の剣は前者
だ。

マリリーは霊装を両手で持つと魔力を流し込む。魔力を帯びた霊
装は、まるで日光を浴びた花が開くように刀身が姿を変えた。

5・5 「マリリー＝アンソワージュ」（後書き）

分かる人にはわかってしまいましたが、五和の使用している武器、海軍用船上槍は、リウリスピテC文書の際によく持ち運びが出来るようになったと記載されています。ですから、九月一九日の段階で持ち運びが出来るように改造が施されてあるのかは不明でしたが、今回は既に改造済みだったという設定にさせて頂いています。

5・6 「新たなる影」(前書き)

ユニークが20000突破です。ありがとうございます。

折りたたんでいた剃刀が開かれる様に本来の姿を現す。それはまさしく剃刀の様だった。

刀身は開くことによってその長さが倍になった。握りの部分と刀身の中心が合っていないかったのは折りたたんでいた為で、開くことによって鍰は左右均等の幅になっている。

弧を描いていた刀身はS字のカーブを描き、その外面に見えるのはそれまで見えなかった刃だ。刃が無かったのではなく折りたたむことによつて内側へと隠れていたのだ。それが展開することによつて外面に現れた。

「へえ、ちゃんとそれらしくなるのね」

マリリーは手に握る感触を確かめるように軽く動かした後、何かを見つめ素振りをするように上下にそれを振るう。

瞬間、一〇メートルほど離れた位置にある祠が縦に真っ二つに斬り裂かれた。まるで豆腐を包丁で切るような感覚で。

「なるほどね。目標との距離があるうが、それが巨大であるうが強度があるうが、余分な物を全て削ぎ落とす事で結果的に『斬る』と言う部分だけが残る。まさにその通りね」

マリリーは霊装を見つめながら不気味に笑う。

先ほどまでの遊んでいる様な笑みではなく、狂った様に笑う。

「アハハハッ、そうよ、これさえあればあいつに従う必要もない！ アイツも馬鹿ね、私が使うなんて事は考えなかったのかしら」

マリリーはそれを横殴りに振るう。守越尊や五和を通り越してこの空間を囲んでいた木々が一瞬にして数百本切り崩された。

「チッ。こりゃ少しマズイのよな」

建宮斎字の頬を冷たい汗が一滴流れ落ちる。顔には皮肉にも笑み

を浮かべているが、内心はそうではなかった。もしもあんなモノを人に向けて放ったとすれば防ぎ様がない。例え魔術的な防御で防ぐ他の霊装で防ぐ、どちらかの行為をしたとしても、それらの項目を全て削ぎ落とされてしまえば剃刀レイザーソードの剣の刃に身を斬り裂かれてしまっただろう。

避けるという選択肢もあるかもしれないが、そもそもあんなモノを避ける事が出来るのかは分からない。

五和も同じようなことを考えていた。

あんなモノをどう対処すればいいのか。防いでもダメ、避けてもダメ、もしかすると周囲に張った結界すらも一撃で破壊されるかもしれない。

唾を飲み込む音が普段よりも大きく聞こえた。

しかし、その中で眉一つ動かさずに立っている存在がいた。

マリリーもその様子に気が付いたようだった。

「でさー、こんなモノで人を斬ったらどうなっちゃうんだろうね？」それは脅し言葉の様に発せられた。もはや彼女の中に『盗んで逃げる』と言うセオリーは無かった。盗む為に殺すと言う思考は、たった数分の間に殺す為に盗んだと言うべきモノに変換されてしまっている。

霊装を使用すれば恐らく周囲に張られた結界を破壊し逃げる事は容易かったのかもしれないが、それ以上に目の前の少年をどうにかしてやるうと言う気持ちの方が勝ってしまった。

「試してみればいいだろ」

なに？ とマリリーの表情が変わる。

「試したければ試せばいいだろ！」

こいつは馬鹿だ、単刀直入にマリリーはそう思った。

自ら斬られる事を望むなんて思いもしなかっただろう。が、しかしそう望むのであれば話しは簡単だ。

「なら、お望み通りにしてあげるわよ！」

瞬間、守越尊の後方でそれを見ていた五和は衝撃波の様なモノを

感じた。何か巨大なモノ同士が衝突しあつた様にビリビリと空気を伝わって五和の髪を靡かせた。

（なに、が……？）

剃刀レイザーソードの剣を振り下ろしたままマリリーは目の前で起きた事を理解しようと思いを繰り返していた。

（確かに私は振り下ろした。例え対衝撃の術式を張ってしようとして境界を構築しようとしてそれらを削ぎ落とし標的を貫くはず……）

驚愕していたのはマリリーだけではない。それを見ていた五和も建宮斎字も目の前の光景を疑ってしまった。

（なのに、どうしてこいつは　　）

「言わなかったか？」

両足を前後に開き、両手を前に突き出した姿勢で守越尊は立っていた。その体には傷一つなく、まるで本来届くはずだった斬撃を受け止めたかの様な体勢で。

「俺はオマエを許さないって」

何かの間違いだ、とマリリーは雑念を振り払うかのように頭を横に振る。

「そんな……そんなハズはないわ！」

マリリーが叫ぶと守越尊の周りを囲むように新たに三人のマリリーの姿が現れた。

守越尊を囲む四人のマリリーは同時に剃刀レイザーソードの剣を振りかざし、守越尊を標的としそれを振り下ろした。

ゴン！ と鉄球が壁にぶち当たる様な音と共に、衝撃波が巻き起こった。守越尊の横方向に生えそびえる木々たちの葉がガサガサと音を立ててなびいている。

「まさか……私の重複トックスレ分身魔術まで……」

守越尊は右手を横に突き出す姿勢で止まっている。辺りを囲んでいたマリリーの重複トックスレ分身魔術は消え、その方向には本物のマリリーが霊装を振り下ろした姿勢で固まっていた。

「気は済んだのか」

ハツとマリリーは守越尊を見つめる。そしてようやく気が付いた。「その目は……」

守越尊の右目が青く染まり、そこに瞳には三角形の模様が浮かび上がっている事に。

それと同時にマリリーの脳裏に入ってくる一つの言葉。

『このクソ野郎』

「お前も……」

ギシリ、と奥歯を噛むマリリーの顔に浮かぶのは恐怖や驚愕ではなかった。そこにあるのは憎悪に満ちた表情。

「そんな目で私を見下すか……!」

全てを吐き捨てるように叫ぶと、マリリーは再び重複分身トッセル魔術を発動する。

守越尊を囲むように四人のマリリーが現れると、

「アアああああ」

あろう事か四人同時に守越尊との距離を詰めにかかった。その距離は一〇メートルも無く、ものの二秒か三秒でその差は詰められるだろう。

しかし、そもそも剃刀レイザーソードの剣には距離も大きさも強度も関係ない。例え距離を詰めて放ったとしても削ぎ落とさせる項目に『距離』がなくなるだけである。

そんな事も忘れてしまったかの様にマリリーは悲鳴にも似た声を上げながら走る。

守越尊は本の一瞬、何かを確かめる様に目を見開くと、ドン、と地面を蹴って一方に飛び出した。拳を振り上げ、その目が見つめる先には、

(ああ……やはりこいつには……)

「悪いけど、『あんた達』では俺には勝てない!」

振りぬいた拳はマリリーの頬へと突き刺さった。

掴んでいた霊装は手を離れて宙を舞い地面へと突き刺さる。マリリーはアンソワージュも地面に叩きつけられ、まるで糸の切れたマ

リオネットの様に手足を投げ出しながら地面を転がり、俯いたまま動かなくなった。

その様子を見つめていた五和と建宮斎字はあまりの出来事に声を出す事が出来なかった。

思考で理解するためにはあまりにも時間が短すぎた。まさに一瞬の出来事。

自分達が一体どうやって倒そうかと考えていたマリリー＝アンソワージュをたったの数分で倒してしまった。

「お前さん……一体何なのよな」

よつやく口に出てきた言葉がそれだった。

それに対して守越尊は空を見上げ嘆くように呟いた。

「そんなの、俺が知りたいくらいだ」

12

今回、学園都市で起こった^{スタブソード}刺突杭剣の事件は潜入した^{スタブソード}魔術師と上条当麻の活躍もあって事無きを得ていた。そもそも^{スタブソード}刺突杭剣自体が伝承の交差による間違いであった為、聖人を一撃で殺してしまう^{スタブソード}霊装などは存在せず、別の^{スタブソード}霊装だったのだ。

ただ、その別の^{スタブソード}霊装と言うモノも学園都市を破壊してしまうほどの^{スタブソード}霊装だったみたいだが、先ほども言ったように、上条当麻等によって防ぐ事が出来た。

「本当に大丈夫？」

一夜明けた九月二〇日。建宮斎字と五和は昨日の間に^{スタブソード}霊装を持ってこの地を後にしていた。

本来ならば、^{スタブソード}刺突杭剣の対抗策として挙げられた^{レイザード}剃刀の剣だったが、神殿を構築する為の中心であった祠が破壊された為、地脈を集中させる力が弱まりつつある事と、今回のマリリー＝アンソワージュの一件でイギリス清教は管理を目的の届く範囲で行うと決めたら

しい。

「ええ、大丈夫よ。まだ風邪っぽい症状が出てるけど、こんな事で休んでちゃ保母は務まらないわ。あの子達がいるんだから」

ここは親のいない子供達が暮す施設であり、つまりは守越尊以外にもここで暮らしている子供は他にもいる。あの子達というのはその子達の事を示していた。

すでにその子供達は学校へと行き、施設には守越尊と新風洋子の姿しかない。守越尊も学園都市へと帰る為の支度を整え玄関にいた。

「連絡すればあと一日くらい大丈夫だと思っけど」

しかし、新風洋子は静かに首を横へと振る。

「心配してくれてありがとう。でも尊ちゃんだって本当なら大覇星祭に参加してるんでしょ？ 昨日の今日でなかなかそうはいかないかもしれないけど、せっかくだから楽しまなくちゃ」

本当に昨日は色々あった。

まだ、完全に心の整理がついた訳ではなかったが、体調の万全ではない新風洋子を心配させる訳にはいかなかった。

「そうだね。楽しんでくるよ」

本当に聞きたい事は色々あった。昨日発覚した事はもちろんの事、それ依然に自分自身の事についてももしかしたら新風洋子は何かを知っているのかもしれない。

でも、守越尊はそれ以上は何も言わず笑って見せた。

それはぎこちない笑顔だったかもしれない。それでも新風洋子は学校へ行く子供達を見送る時を同じ笑顔で微笑み返した。

そんな新風洋子に守越尊は背を向け、一步前へ進んで

「シェリー」

え？ と守越尊の足が止まった。

「イギリス清教のシェリーと言う女性を訪ねなさい」

シェリー＝クロムウェル。

かつて学園都市の侵入し、科学と魔術を想うがあまり二つの間に戦争を引き起こそうとした魔術師。そして守越尊の母、守越無月の

知人でもある。

「おばさんは何か知ってるのか!？」

しかし、新風洋子は首を横に振る。

「私が言えるのはそれだけよ」

「いや、でもっ」

守越尊は気がついた。新風洋子の笑顔がぎこちなかった。いつも見送ってくれていた笑顔とは違う。

優しさはあるが無理をして作っている、そんな感じがした。

何かを知っていて言う事の出来ない辛さなのか、それとも昨日の傷の所為なのか、守越尊には分からない。

「分かった、訪ねてみるよ。ありがとう、おばさん」

ただ、例え新風洋子がか何かを知っていたとしても、これ以上の何かが出て事はない。それにもしも体調が優れていないのにムリをしているなら、自分がここにいる限り元気な姿であるうとするだろう。守越尊はそう思っていた。

「でも、あと一つだけ言わせてちょうだい」

新風洋子は笑顔を崩さずに言う。

「例えどんな困難があつたとしても負けちゃだめ。尊ちゃんならきつと大丈夫、貴方は私の自慢の息子なんだから」

「うん……それじゃあ、また少しの間行つてきます」

そして守越尊は振り向くことなく施設を後にした。

その後姿が見えなくなるまで、新風洋子は見送った。

「無月ちゃん……あの子ならきつと大丈夫、きつと……」

13

バチカン、聖ピエトロ大聖堂。ローマ正教の総本山たる世界最大の聖堂の一角。

「で、君は結局失敗して戻って来たって事か」

男の見つめる先には、窓から入り込む月夜に照らされる一人の少女の姿があった。

髪の毛の長さは肩までで色は赤。俯き加減の顔からは細く一本だけ束ねられた髪が地面に向かつて垂れ下がっている。

「それに『妹』を見捨ててくるなんて、以外に無責任なんだ。ね？
マリー＝アンソワージュ」

少女は何も言えない。一度しかないチャンスに失敗した揚句、妹はイギリス清教に捕まってしまった。

「まあ正直に言えば、君達みたいなクソ野郎にはあまり期待はしてなかったけどね」

ピクリ、と少女の肩が動く。

「でもせっかくのチャンスを失敗しちゃってさ。あの霊装を取ってきたら解放だったのに。まあ、いくら追い込んでも所詮はクソ野郎に変わりないって事か」

垂れ下げであるだけだった腕に一段と力が入る。ギリギリと歯がこすれ、足の指で地面を掴むように力が入る。

「……じゃない」

「ん？ 何か言い分でも？」

「私達はクソ野郎なんかじゃない！」

少女は大きく横に腕を振った。

「チャンスを与えてもらった身でそんな大口が叩けるね」

男は皮肉に笑う。

「前にも言ったと思うけど、俺は役立たずのクソ野郎が一番嫌いなんだ。それに元はと言えば君達がローマ正教の霊装を狙ったのがいけなかったって言うのに」

男は一瞬間をおいて

「本当にクソ野郎だな」

暗闇で男の姿は見えない。しかし、少女には分かる。自分達を捕らえ、虫けらを見るように笑っていた切り裂くような笑みとあの目が、少女には想像できた。

「クソ野郎クソ野郎って……お前に私達の何が分かるって言うんだ！」

少女は懐から小型ナイフを取り出し、男に飛びかかった。たった一秒ほどで届いてしまう距離だが、少女は重複分身魔術ドッベルを使用しその男を後方から狙う。

グジュ、と皮膚を貫き身を切り裂く音が夜の静かな建物内に聞こえ、ドサツと人影が地面に崩れ落ちた。

「他人の事が分からないのはお互い様だろう。それに二人で敵わなかった相手を一人で倒せるとでも思ったのかい？ 所詮君達はミラーツインを利用して術式を組み立てているに過ぎない。つまり二人揃って初めて一人前の魔術師って事さ」

ポタ、ポタ、と床へと滴が零れ落ちる。

「いかに死角に入り込む魔術や存在を薄くする術式を織り込んだ所で、一人では並以下の魔術師でしかない君の力なんて高が知れている」

しかし、と男は思い、

「ジユウユーズ。幾度も試したけど、フランスの王家で無ければ扱えないか」

ブン、と刃に纏わりつく血を払いのけ、前へと翳す。鏢から先が月の光を浴びる場所へとでると、刀身は鮮やかに白から血の様な赤へと色彩を変える。

「デュランダルに對を成すと言われるだけあって使えば良いと思っっていたけど、やはり無理か」

男は刀身を再び引き戻すと、暗闇の中で剣と鞘が当たる音だけが辺りに響いた。

「柄頭に埋められた聖槍とデュランダルに似た性質は惜しい気もするけど、使えないならまだトスカナガルガーノの聖剣のレプリカのが使い物になるし。フランスに恩を売る意味で返還しておくか」

と、男は何かを思い出したように

「やれやれ、大聖堂の床を汚したとなれば上が怒るからな。まあ後

で誰かに掃除させとけばいいか」

男は自分の後ろにある二度と動く事の無い塊に目を向けながら言う。

「まあ、あの霊装はその内俺自ら取りに行くという事で、それまではトスカナガルガーノの聖剣のレプリカで我慢しよう」

窓から入り込む月夜の光とは別に、暗闇から一つの青い小さな光が不気味に光っていた。

5・6 「新たなる影」(後書き)

まだまだ未熟者の作者ではありますが、これからもどうぞよろしく
お願いします。

とある少女の大覇星祭 1 (前書き)

今回は章間みたいな感じで書いてみました。

とある少女の大覇星祭 1

1

「さあ、貴方のすぐ傍に幸せが落ちてるよお！」

場所は移り、大覇星祭真っ盛りの学園都市。大通りに面した歩道に建てられた一つの屋台。ベニヤ板と角材と釘で作られたいかにもお手製たっぷりの屋台に少女はいた。

「そこのお姉さん！ 来場者ナンバーズはいかがかな！」

来場者ナンバーズ。大覇星祭期間中の総来場者数を予想するイベントだ。やり方は簡単、お金を払って専用カードを購入。そこに大覇星祭期間に訪れる来場者数を予想して書き込むだけ、と言うシンプルなものだ。その後実際の来場者数に近い予想から順に順位が決まっていく。

補足説明としては、大覇星祭中ならいつでも購入可能という事。

つまりは初日に買っても最終日ギリギリに購入しても大丈夫なのだ。もちろん同じ数字で当選した場合は購入日が早い人が優先される為、早く購入した方が良くと言うメリットがある。ただその分予想は難しく、ほとんどは無難に期間の後半に購入する人の方が多い。

「ん〜、やっぱり初日に購入する人は少ないなあ」

白い半そでのブラウスに青色のスカート、赤いネクタイに何故か額に『当選祈願』などと書かれた鉢巻をつけた和音は一度椅子へと腰を下ろした。

目の前の大通りは人で埋め尽くされている。各々の学校制服や体操着を着用した学生だけではなく、私服姿の大人の姿が異常に多い。そのほとんどが学生の親だったりする。

大覇星祭期間中は学生以外の一般人の入場が許可されているため、学園都市を一目見ようと毎年沢山の人が訪れる。

そんな人の流れを見ながら何気なしにフと上を見上げると、自律

制御のアドバルーンが縦長に垂れ下がった特殊薄型スクリーンに『第七学区・高等学校部門・第一種目・棒倒し。競技開始まで九分四〇秒です』と表示しながら上空を飛んでいた。

（確か、尊君の学校って第七学区だったよね）

取り出した携帯電話で時間を確認すると交代まで一〇分もない。

（会場までは、ここから何分くらいかな？）

ゴソゴソっと店内の棚からパンフレットを取り出しそこに書かれている競技場の場所と地図を確認する。ちょうどここが第七学区と言う事もあって、意外に競技会場までは五分ほどしか掛からないようだ。

「他校の生徒を応援しちゃいけないルールなんて、ないよね？」

大覇星祭は基本的に学校対抗で行われ、勝敗に応じて得点が増算されていく。本来なら他校を応援している余裕はない。特に常に上位争いをしている超エリート校の『五本指』にもなるとなお更になってくる。

が、

「よし、行っちゃおう」

自分一人くらい大丈夫、と和音は拳に力を込める。

と、ここで机から頭しか見えない小さな少女がこちらを覗き込んでいる事に気がついた。

「ここは何する所？ ってミサカはミサカは質問してみたり」

茶色い髪の女の子だった。瞳も同色で頭の天辺からは立派なアホ毛がアンテナの様に一本伸びている。

おっと、と和音は握った拳を慌てて後ろに隠して、

「ここは来場者ナンバーズの会場だよ〜お嬢ちゃん」

「来場者ナンバーズ？ ってミサカはミサカは首を傾げてみる」

和音は何かどこかで見たことある顔だなあ、などと思いつつながら、「大覇星祭期間中の来場者数を予想しちゃおうって事だよ。そして何と！ 見事一等賞になれば豪華北イタリア旅行プレゼント！」

ジャーン、と言う効果音が似合いそうに和音は壁にかけられたプ

レゼント一覧をアピールした。

そこにはこれまたお手製たつぷりの字で大きく『一等・北イタリ
ア五泊七日ペア旅行』と書かれてある。二等には伊豆旅行、その他
にもお食事券や音楽プレイヤーなど色々な商品が用意されているよ
うだ。

「おお、ミサカも当てる旅行に行ってみたいかもってミサカはミ
サカはわぶっ」

ペチっと小さな頭に軽いチョップが放たれた。

「おいガキ。勝手にうるちよろすんじゃねエぞ」

「うう、後ろから突然攻撃するなんてフェアじゃないかも、ってミ
サカはミサカは抗議してみたり」

少女が頭を抑えながら振り返ると

そこには真つ白な少年がいた。

肌も白、髪も白、服は白い服に黒のラインが数本入り、首にはア
クセサリーの様なモノが付けられてあるが、何か小さな機械に見え
なくもない。足でも怪我をしているのか、トの字の杖を右手に持つ
て体を支えていた。

「どうしてもつつつからついて来てやってるってのによオ」

「ミサカはこれがやりたいかも、ってミサカはミサカは目を輝かせ
てみたり」

あん？ と少年は少女を睨む。

「つつか、人の話しを最後まで聞きやがれ」

「たく、などと呟きながら少年は屋台へと目を向ける。

「来場者ナンバーズだア？ 霧ヶ丘はまだこんなしけた事やってん
のかよ」

「これでミサカは一等賞を取るのですってミサカはミサカは勝利宣
言を試してみたり」

少女はビシッと腰に手を当てながら商品を書いてある一覧を指差
す。

「おいクソガキ。オマエはこんなモンが本当に当たると思ってやが

ンのかア？」

少年はため息雑じりに言う。

「へへーん。ミサカの演算能力をなめてはいけないのだあ、ってミサカはミサカは胸を張ってみる。一万の脳を使えばそんな計算くらいちよちよいのちよいつて」

「その一万もオマエも大覇星祭は初めてだろうが。どうやって予想するつもりだア？」

「そ、それは……過去のデータを調べればいくらでも計算は出来るよなつてミサカはミサカは反論してみたり」

「調べ終わるまでオレにここで待てと？ ふざける、却下だ」

「うう、やりたいやりたいつてミサカはミサカは机にしがみついてみたり」

少女は小さい体を精一杯広げて屋台正面の机に載りかかっている。それこそまさにスーパーで母親にオヤツをせがむ子供の様に足をバタつかせながら少女は体を使って訴える。

「あー」

と、そのやり取りを見ていた和音は痺れを切らした様に間に入り込んだ。

あん？ と睨みを利かす少年に、ピクつと体が反応するが

「や、やるのかな？ やらないのかな？」

「「やらねエ！」」

同時にこちらを向き言葉を発すると両者は再び向き合う。

「おいクソガキ、もう一遍言ってみろ」

「何度でも言うのだったつてミサカはミサカは宣戦布告。やりたいやりたいやりたーい」

「せつかくだからやらせてあげてもいいんじゃないかな？ かわいい妹さんがやりたいつて言ってるんだし……」

「てめエにはこれが妹に見えんのかツ？ あア！？」

「や、やっぱりそうだよねえ、さすがに似てないなあって思ったけど……あれ？ 兄妹じゃなかったら一体何？」

兄妹にしては似ていないと思っていたが、じゃあ一体どんな関係なのか？ 無難な考えとしてはいいとこと考えるのが一番の安全策なのだが、はたまたもしかして……

などと和音が想像を膨らませている間にも、少女は「やーりたいやーりたい」といいながら少年の周りをクルクルと行進している。

「いい加減にしるよクソガキ。聞き分けがねエンなら　ごがつ。今後におきまして事後となりうる可能を持って俺を演算能力を巻き上げはお助けですかっつってんだろ！！」

途中から訳の分からない言葉を放ち少年は激怒する。

ちなみに本人は『また勝手に人の演算能力を取り上げんな』的な事を言っているらしいが、もちろんそんな事は和音には分からない。「ミサカは貴方の能力を人質に取ってかわいい交渉を持ちかけてみたり、ってミサカはミサカは刑事さんからの交渉術を披露してみる」

「何が交渉だ、一方的な脅しじゃねエか」
チツと少年は舌打ちすると

「わアったよ、やりやいいだろ」
ペアっと少女の顔が笑顔になった。

「わーい、ってミサカはミサカはお祭り騒ぎー」
まるで子犬が飼い主の周りを駆け回る様に少年の周りをクルクル走る。

「よかったねお嬢ちゃん」
「うん。ありがとうお兄ちゃん、ってミサカはミサカは驚愕の事実を明らかにしてみたり　ってごあ！？　いったーい。どうして頭を叩くかなってミサカはミサカは……あれ？　どうしてそんなに本気の目なの？　ってわわわわ、もうお兄ちゃんなんて言わないからその杖だけは止めてってミサカはミサカは　」

「さっさとやりやがれ、このクソガキがア！」
なんとも賑やかな二人組みの相手を終えたところで、和音は交代時間を迎える事になった。

とある少女の大覇星祭 2

2

「なるほどね。君達の要望は分かった」

第七学区のとある病院の一室で、カエル顔の医者は同じ顔をした四人の少女と向かい合っていた。シスターズ妹達と言われる彼女達は全員が茶色の短髪、常盤台中学指定の白いブラウスにサマーセーター、灰色のプリーツスカートと言う具合に同じであるためシリアルナンバー検体番号によって個体識別がなされている。

ミサカー〇〇三二号、一〇〇三九号、一三五七七号、一九〇九〇号の四人は何やら真剣な面持ちでカエル顔の医者の前に横一列で並んでいた。

「正直に言わせて貰うと、君達のリハビリを兼ねた外出はあと一〇日ほど経ってからの予定だったんだけどね？」

カエル顔の医者は少し困った様子で答える。

シスターズ妹達、レディオノイズ欠陥電気、レベル5超能力者軍用増産モデル、様々な名称のある少女達は、遺伝子操作や薬物を用いた成長促進技術の影響によって寿命を大幅に削られてしまっている存在でもある。それを打破するために病院で様々な治療を受けている最中なのだが、

「お願いします、とミサカー〇〇三二号はここぞとばかりに頭を下げます」

「まあ、初めての⁵大覇星祭だから参加したい気持ちは分からなくはないけどね？」

現在九月一九日、午前一〇時十二分。学園都市は大覇星祭の開会式真つ只中の時刻。

シスターズ妹達のお願いと言うのは、大覇星祭に参加したいと言うものだった。さらに今日は何と言っても、

「今日はA B型のミサカにとっては大チャンスとの情報を入手して

いるのです、とミサカー〇〇三九号は今日の血液型占いの結果を提示します」

一人のミサカは雑誌を取り出しカエル顔の医者へ見えるように広げる。そこには

『今日のA B型のラッキーポイントはイベント。イベントに参加すれば恋愛運は急上昇！ 気になるあの人との距離が縮まる事間違いない！』

などと書かれてある。

他にも金運や総合運など細かく書かれてあるが、少女達は恋愛運しか興味が無いようだ。

「それなら超A B型であるミサカにはさらにチャンスなのでは？ とミサカー三五七七号は大覇星祭への参加をさらに要求します」

「前回も同じような事を言い合いましたね。とミサカー〇〇三二号は結局は皆同じA B型である事を補足しておきます」

「まあ、今日一日くらいなら外出を許可してあげてもいいんだけどね？」

その言葉に四人のミサカは一斉にカエル顔の医者に視線を集めるが「ミサカー〇〇三二号さんと一九〇九〇号さんは悪いんだけど辛抱してもらえるかな？」

「ど、どうしてでしょうか！？」 とミサカー一九〇九〇号は意義を申し立てます！

「まさか、一〇〇三九号と一三五七七号が賄賂などと言う姑息な手を使用したのでは！？ とミサカー〇〇三二号は真相の追究を求めます！」

納得のいかないミサカー〇〇三二号と一九〇九〇号はカエル顔の医者に詰め寄る形で講義する。その後ろでそれを見ているミサカー〇〇三九号と一三五七七号の立っている姿は、まるで勝ち誇ったかの様にも見える。

「理由を説明させてもらうけどね？」

「半端な理由なら容赦はしません、とミサカー〇〇三二号は鞆から

ライフルを取り出し……どうやら鞆は部屋に忘れたようです、とミサカー〇〇三二二号は自分に落胆します」

「ミサカー〇〇三二二号さんと一九〇九〇号さんは以前、治療の途中で抜け出した事があったよね？」

そう言われてみれば、と二人のミサカは思い出す。

九月一四日。残骸を巡る事件の際に、ミサカー〇〇三二二号と一九〇九〇号は治療中にも関わらず病院を飛び出していた。

「その時の分、君達の治療は他のミサカ君達に比べて遅れているのは分かるね？」

彼女達は急速な成長を促すホルモンのバランスを整え、細胞核の分裂速度を調整する治療を行っているが、ミサカー〇〇三二二号と一九〇九〇号はその途中段階、つまりホルモンのバランスを整えている最中に過激な運動によって体に負荷をかけてしまった為、他の個体に比べて治療が遅れていると言う。

「つまりミサカはこのチャンスをただ指を咥えて見ているしかないのですね。とミサカー〇〇三二二号は落胆ぶりを露にします」

露にすると知っているが、これと言って表情が大きく変わる事は無い。ただ、多少しょんぼりとした雰囲気は醸し出したりはしている。

「今回の事はミサカ達に任せて治療に専念して下さい。とミサカー〇〇三九号は体の心配をしているとみせかけて腹の中でこっそり笑ってみます」

「大丈夫です。あの方と出会った際には情報をミサカネットワークを通して配信しましょう。とミサカー一三五七七号は妥協して情報公開を宣言しましょう」

「み、ミサカは……どうなるのでしょうか？ とミサカー一九〇九〇号は素朴な疑問を述べてみます」

ミサカー一九〇九〇号が何やら困った様子で小さな声で訴えている。「そう言えば、一九〇九〇号の想い人はもう一人のあの方でしたね。とミサカー一三五七七号は思い出します」

「また極秘で入手した情報ですが、どうやらライバルらしき人物が現れたようです。とミサカー〇〇三九号はここぞとばかりに言い放ちます」

例えミサカー〇〇三九号と一三五七七号の情報がミサカネットワークと通して配信された所で、ミサカー一九〇九〇号の望む情報はその中に含まれていない。

「つまり一九〇九〇号はこのチャンスを使ってそのライバルに差をつけたいと言う事ですね。とミサカー〇〇三二二号は情報を元に分析します」

「そもそもライバルなどと言う新たな語学情報を使用していますが、要するにミサカ達にとってはお姉様の様な存在と言う事でいいのでしょうか？ とミサカー一三五七七号は問いかけます」

システムズ 妹達の共有情報は元は学習装置によって強制インストールされたモノだ。もちろん新しい情報を入力してはミサカネットワークを通して配信される訳だが、ここ最近ライバルなどと言う言葉が新たに入手されたようだ。

「ライバルとは力量が同程度の競争相手とあります、とミサカー〇三九号は情報を再度確認します」

「ですが、ミサカ達ではお姉様のオリジナルパーセントの力しかないのでは？ とミサカー一三五七七号は事実を述べてみます」

オリジナル 御坂美琴は超能力者であるが妹達の能力、システムズ 欠陥電気は異能力者か大目に見積もって強能力者程度しかない。レベル3 つまりは力量が同程度とは言いがたいのだが、

「ライバルにはもう一つ意味合いがあるハズです、とミサカー〇〇三二二号は指摘します」

『恋敵』

オリジナル 「つまり、ミサカ達にとってお姉様はあの方に対する恋敵と言う訳ですね。とミサカー一三五七七号は改めて再認識します」

オリジナル 「いえ、それならお姉様よりもあのシスターの方がライバルなのでは？ とミサカー〇〇三二二号は冷静に判断してみます」

「そう言えば、一〇〇三二号の情報ではあの方とあのシスターは同居と言うモノをしているそうです。とミサカ一〇〇三九号はお姉様オリジナルよりも強敵の存在を再確認します」

「み、ミサカの事は結局どうなるのですか!? とミサカ一九〇九〇号は脱線した会話を元に戻してみます」

「そう言えばその様な話でしたね、と三人のミサカは立った今思い出したように呟いた。

ミサカ一九〇九〇号は何かを訴えるようにカエル顔の医者へ顔を向ける。

カエル顔の医者も四人のミサカ達の会話を聞いて少し困った様な顔をしていたが、

「まあ、君達が色々と大変なのは分かっているつもりだけどね? こは医者としてはつきり言わせて貰うよ? 一〇〇三二号さんと一九〇九〇さんの外出は認められないね」

ミサカ一九〇九〇号はガクリと肩を落とした。ミサカ一〇〇三二号は、あの少年の情報がネットワークを通して入ってくる、と言う事から納得したらしく特に反発する素振りは見せなかった。それ以前に、自分が妹達シスターズの中であの少年に会った機会が一番多いと言う部分も影響しているのかもしれない。

と、ここで何やら思いついたようにカエル顔の医者は

「それなら一九〇九〇号さんの代わりにその想い人さんに会いに行ってもらえばいいんじゃないかな? 二人外出できる訳だからね?」

「……!」

バツとミサカ一九〇九〇号はミサカ一〇〇三九号と一三五七七号へと振り向いた。

カエル顔の医者はその言ってみたものの、正直それが良いとは思ってはいない。ただ、今回に限ってはそういう方法もあるという事を述べたに過ぎないのだが、

「お願いします、とミサカ一九〇九〇号は一三五七七号へ懇切丁寧に頭を下げます」

「……そもそも、そんな事をミサカがやってミサカに何の利益があるのでしょうか？ とミサカ一三五七七号は疑問を口にします」

確かにその通りなのだ。

ミサカ一三五七七号が会いたいのあの少年であり、ミサカ一九〇九号が想うもう一人の少年でない。

しかし、ミサカ一九〇九号はここぞとばかりに言う。

「これを見てくださいと、ミサカ一九〇九号は雑誌の一部分をここぞとばかりに提示します」

ミサカ一〇〇三九号の持っていた雑誌を頂戴し、指差す部分は先ほどまでと同じページ。気になるあの人との距離が縮まる事間違いないし、と書かれてある続きの部分だ。

「つまり、一九〇九号はミサカが人の為になる事をすればミサカの運気がアップすると言いたいのですね。とミサカ一三五七七号は確認をとります」

運気が上がると具体的にどのような事があるのかミサカ一三五七七号には今一理解できなかったが、

「あの少年と出会う可能性が増えると言う事でしょうか？ とミサカ一三五七七号は心の中で呟いてみます」

（まあ、そんな事でうまくいく訳がないんだけどね？）

こっそりとかなりそんな現実的な事を思ったカエル顔の医者であったが、彼女達の夢を壊さない為にも心の中にその思考をそってしまい込んだ。

（それにしても前々からだだが、彼女は他の個体と比べて感情表現が豊かだね？）

同じクローンだとしても食事や運動によって体格が変わってくるように性格にも差が出てきてもおかしくは無いのだが、ミサカ一九〇九号だけは明らかに他の個体よりも感情表現が豊かなのだ。

それはミサカ一九〇九号が唯一人間の感情データをインストールされている個体だからなのだが、カエル顔の医者はその事を知らない。

ただ、例え知っていたとしても同じことを思うだろう。

「他のみんなもそうなってくれると僕もうれしいんだけどね」

カエル顔の医者が発言が聞こえて「？」を浮かべるミサカ一〇〇

三二号。その傍らに交渉を成立させて安堵の表情を浮かべるミサカ

一九〇九〇号の姿があった。

とある少女の大覇星祭 3 (前書き)

お気に入り200件突破、と思いきや199になってました……ま、いいか。

ミサカー一三五七七号は大通りを歩いていて。

「やはりこの様な事は引き受けなければ良かったのかもしれませんが、とミサカー一三五七七号は愚痴を零します」

現在の時刻は一〇時五七分。あと三分もしない内に第一種目である『棒倒し』の開始時刻になってしまおうのだが、そもそもミサカ達はその種目にあの少年達の学校が参加する事を知らない。

（そもそも、大覇星祭に関する情報が不足しすぎでは？ とミサカー一〇〇三二二号は今日一日を懸念します）

シスターズ妹達はミサカネットワークにおいて情報を共有しているがミサカ達の知らない事は知らない。

（本当にあの方に会えるのでしょうか？ とミサカー一九〇九〇号は不安を露にしてみます）

つまりは誰一人として大覇星祭の競技日程や競技場を把握していなかったのだ。

「速急にプログラム、パンフレット等を入手すべく行動を開始します。とミサカー一三五七七号は報告します」

（同じく、とミサカー一〇〇三九号は行動を開始します）
ミサカー一〇〇三九号と一三五七七号は別々に行動している。

探し人が異なると言う事もあるが、同じ顔、同じ服の少女が揃って行動していれば大覇星祭の大人数であっても目立ってしまうであろう、と言うカエル顔の医者からの忠告だった。

それにしても、とミサカー一三五七七号は辺りを見回す。

「よくもこれだけの人数が集まるものですね。とミサカー一三五七七号は少々驚いてみます」

各々の制服や体操服に身を包んだ学生達が行き交いしていると思

えば、それ以上に明らかに学生ではない一般客が分厚いパンフレットのような物を持って、建物や風景とパンフレットを交互に見ながら大通りを歩いている。

ムム、とミサカー三五七七号の目が何かを捕らえた。

（どうしましたか？ とミサカー〇〇三二二号は確認をとります）

「発見しました、とミサカー三五七七号はターゲットとの距離を急速に詰めます」

今ミサカー三五七七号は大覇星祭のプログラム及びパンフレット等を入手する為に行動している。そして、目の前にはそのパンフレットらしき物を持って行き交う一般客の姿がいたる所に見られる。

ミサカー三五七七号は他のモノには一切目もくれず、一歩一歩それとの距離を詰めて、そして

「みゃー」

「黒猫を発見しました。とミサカは緊急報告します」

目線の先には道の端に置かれたベンチの上で、気持ちよさそうに日向ぼっこをする黒猫の姿があった。

（一三五七七号、現在の最優先事項は黒猫などではないはず、とミ

サカー〇〇三九号は間髪いれずに言います）

「しかし、この黒猫を見ているともうどうでもいいのでは？ とミ

サカー三五七七号は投げやりになります」

ミサカネットワークを通して妹達シスターズ（特に一九〇九〇号）が『投げやりになつてはダメです、とミサカー一九〇九〇号は懸命に呼びかけます』などと言っているが、ミサカー三五七七号はそんな事よりも目の前の黒猫に夢中だった。

しかし、忘れてはならないのが彼女達の能力だ。

あっ、とミサカー三五七七号が声を出す前に黒猫は何かを嫌がるように、背伸びすらせずに起き上がるとさっさとその場から立ち去ってしまった。

レディオノイズ
欠陥電気。

シスターズ
妹達の体は常に微弱な磁場を形成している。それは人間には分か

らない程度だが、敏感な動物達は違う。黒猫もその磁場を嫌い、近づいてきたミサカー一三五七七号から離れる為にその場から移動したのだ。

「あっ、すみません」

ミサカー一三五七七号がいなくなった黒猫に肩を落としていると、何やら後ろから声が聞こえた。どうやら学生が一般客とぶつかったらしく、学生の少女は地面へと落ちたパンフレットを拾って相手へと渡していた。

ムム、と振り向いたミサカー一三五七七号は再び何かを見つけた。

（どうしましたか？ とミサカー〇〇三二二号は再度確認をとります）
（また黒猫を発見したと言うのなら承知しません、とミサカー一九〇九〇号は予め警告しておきます）

確かにもう一度猫を発見できればよかったのかもしれないが、そうではない。

「残念ながらそうではありません。とミサカー一三五七七号は一九〇九〇号からの情報を元に再度確認します」

その学生は、白い半袖のブラウスに青色のスカートを穿いている。首からは赤いネクタイを垂らし、髪は長髪の茶髪だが、赤みがかつた茶色だった。

「何やらどこかへ急いでいる様に見えます。とミサカー一三五七七号は現状を報告します」

（あの少年の所へ行くのではないのでしょうか！？ とミサカー一九〇九〇号は追跡を要求します！）

（その可能性は十分にありえます、とミサカー〇〇三二二号は指摘します）

（ミサカは引き続き情報入手のための行動を続けます。とミサカー〇〇三九号は確認をとります）

「分かりました。とミサカー一三五七七号は優先事項を変更し、ターゲットの追跡を開始します」

和音は学生用応援席へとたどり着いていた。

(やっばー、もう始まつてる?)

一般用の応援席とは違い日差しを遮るテントの様なモノは無く、ただ地面に青いシートが敷いてあるだけと言う、科学の最先端の学園都市にしてはとても原始的な場所となっている。

しかしそこから見えるモノは一味違う。まるで映画の特撮を思わせる様に光の球が飛び交い、地面は地雷が爆発するかのように砂を撒き散らす。

激しくぶつかり合う二つの学校。その中からあの少年を見つけようと目を凝らして、

「煙でとうまが見えないんだよー！　ねえ短髪とうまはどこ？」

ふと、声のする方向へ目を向けると、そこには真っ白の修道服を着た少女がいた。腕の中に三毛猫を抱えているが、そもそもあんな制服の学校が学園都市にあったらどうか？　と和音は首を傾げる。

「ち、ちよつと、アンタの所為で私まで見失ったじゃないのよ！」

どうやら誰かの応援をしている様なのだが、その人物を見失ってしまった様だ。と、和音はその修道服の少女が話している相手を見て

「あー！　貴方は！！！」

ん？　とその声に気がついた短髪の少女が和音の方へと顔を向けた。

「なに？　私？」

「もしかして、貴方も尊くんの応援に！？」

茶色い髪に短髪、常盤台中学の体操服。多少雰囲気は違うが、今の和音にそこまで観察した情報を分析するだけの時間はなかった。

「みことつて、私はみことだけど……『君』つて事は……もしかして守越尊の事？」

「やっぱり、貴方も尊君の応援に来たんだね！」

以前病院で会った時から親しい仲だとは思っていたし、自分よりも前から交流がある様で、やはり応援に来て正解だったと和音は思う。

そんな思考の最中に一言、

「あれ？ 短髪はみことの応援に来てたの？」

修道服の少女からも少年の名前が出た。

「違うわよ。私はあのツンツン頭を……」

と、言いかけて短髪の少女は顔を赤らめた。手荷物パンフレットをパタパタと団扇代わりにして熱を冷ますように扇ぎながら「ってなんで勝負してるアイツを応援しなくちゃならないのよ。それにアイツのあのやる気……って、ああああ、この件はさっきやったでしょ！」などと髪をくしゃくしゃしながらぶつぶつ呟いている。

「貴方も尊君を知ってるの!？」

「みことってあのみことだよな？ だってみことはとうまの隣に住んでるし」

とうま、と言うのが誰なのか和音には分からなかったが、

(この子、尊君の家を知ってる……!?)

その発言に短髪の少女は和音以上に反応していた。

「問題発言よね、それ。ってか前々から思ってたんだけど、なんでアンタはアイツの家を知ってる訳？ 前にも『帰ってきてくれる』なんて言い方してたけど、どういう事なのよ!？」

パンフレットでパタパタしていた状態から一転、修道服の少女に詰め寄るように問う短髪の少女であったが、当の少女は

「それより、お腹減った……短髪、さっきのお菓子でいいからもう少し分けて欲しいかも」

「……何やら取込んでいるようです。とミサカ一三五七七号は状況を報告します」

和音を見つけて後をつけて来たミサカ一三五七七号は三人の行いをほぼ一部始終見ていた。特に隠れていると言う事はなく、三人との距離は五メートルほどしかないが、三人はその存在に気づく様子

はなかつた。その内の一人はミサカー三五七七号と同じ能力系統である為気づいても不思議ではないのだが、そんな余裕すらないのだらう。

（現在のシスター及びお姉様、オリジナル一九〇九〇号の恋敵が口論中との事ではよろしいのでしょうか？ とミサカー一〇〇三二二号は情報を分析してみます）

（その情報ですと、あの方々はその競技場にいると解釈してもよろしいのでは？ とミサカー一〇〇三九号はプログラムの入手を中断してそちらに向かいます）

この競技に参加しているのでしょうか？ とミサカー三五七七号は運動場を眺めるが、能力による激しい攻防と人数の多さ、巻きあがる砂埃でうまく少年達を見つucker事が出来ない。

そんな間にも彼の三人の方からは『こら！ 空腹に紛れて話しを変えない！』『尊君とはどんな関係なの！？』『お、お腹減ったあー』などの口論？ が飛び交っている。

「まるで、ミサカが萱の外の様です。とミサカー三五七七号は率直な感想を述べてみます」

（萱の外と言うよりも、これはミサカ達が大きく出遅れていると言う証では？ とミサカー一〇〇三二二号は簡潔に分析します）

（そ、それなら、その遅れを取り戻さなければなりません。とミサカー一九〇九〇号は口論への参加を要求します）

ただでさえ話しかみ合っていない三人にミサカと言うキャラを投入すれば、余計にややこしくなる事間違いないのだが、そんな事はミサカ達には関係なかった。

「それでは、戦場へと乱入を試みます。とミサカー三五七七号は覚悟を決めました」

応援に来ているという事を忘れていたのかの様に三人が言い合つ中、ミサカと言うさらなる火種が投入されて益々悪化していく四人の乙女達。

運動場では学校の意地と意地がぶつかり合っていると云うのに、

応援をそっちのけで『あつ、いつかのクールビューティーなんだよ』
『ちよつと、何でアンタがこんな事にいるのよ!』 『ミサカだけ萱
の外は許しません。とミサカは代表として口論に飛び入り参加しま
す』 『なな!?! 姉妹だったのか!』 などと言い合っている。

ちなみに、和音とミサカー九〇九〇号(ミサカネットワークを通
して)が大覇星祭初日にあの少年がいなかった事を知るのもう少
し経ってからであった。

とある少女の大覇星祭 3 (後書き)

次からはちゃんと本編に戻ります。
作者の思いつきの章間をすみませんでした。

6 - 1 「ランベス」(前書き)

再び本編に戻ります。

九月一九日から二五日までの七日間に亘って繰り広げられてきた大覇星祭も終わり、賑わいを見せていた学園都市も静けさを取り戻しつつあった。ちなみに、本年度も長点上機学園が常盤台中学を破り、昨年度に引き続き優勝している。

現在、九月二九日一三時二十三分。学園都市は大覇星祭の片付け、業者による設備の撤収や警備体制の移行などにより学生達には数日間の休日が与えられる。今日はその最終日であり、それでも明日は衣替えによる午前中授業の為、学生達にとってはウツハウハな気分であつたりもするのだが、学園都市の街中にはは学生の姿はあまり多く見られない。

なぜなら、学園都市ではあと一時間ほどで日付が変わろうとしている時刻だからだ。

ロンドンのランベス区。

人口は約二六万人でインナーロンドンの一三ある区バラの中で、最も个性的な地域の一つと言える。その中心地ブリクストンには、カリブ海の匂いのするストリートマーケットが賑わいを見せており、そこに集まる人々の多くはカリブ系やアフリカ系などの有色の人々で、ここを訪れる日本人にとっては、この地がイギリスであることを一瞬信じさせないほどのある種の熱気とともに、何かしらの魅惑と不安感を覚えるであろう。

「ここ……か」

彼、守越尊はそのランベス区にある建物の前立っていた。見た目はここにたどり着くまでに見てきた、通りに面する石造りのアパートと差ほど変わらない。一般人が住んでいると言われてもそのまま納得してしまいそうなくらい、何の変哲も無い建物。

ここが、イギリス清教『必要悪の教会』ネセサリウスの女子寮だと言う事は素性を掴んだ魔術師くらいにしか分からないだろう。

そもその事の発端は十日ほど前に新風洋子が発した

『シエリーと言う女性を訪ねなさい』

と言う一言。

一刻も早く事実が知りたいと言う思いから、大霸王祭後の休日を使って訪ねようと思ったのだが、大霸王祭後の休日は業者の撤去作業に加え、訪れていた一般客の為に用意された意味合いが大きい。何しろ七日間で数千万人と言う来場者が訪れるのだ。たった一日や二日で全ての一般客が帰宅するのは難しい。

そういった部分も踏まえて数日間の休日を設定して効率よく帰すのが目的らしいのだが、その為守越尊が学園都市を出発できたのは二九日の朝方になってしまった。

そしてロンドンのヒースロー空港に到着したのが一〇時頃、そこから交通機関を利用してこのランベスへとたどり着いたのだが、二一時には再びヒースロー空港から飛び立たなければならぬと言うハードスケジュール。それでも学園都市の到着予定は三〇日の一八時と言うから仕方が無い。

もちろん、守越尊にとつて海外は始めてあつたが、ここまでスムーズに来られたのは出発前に新風洋子が送ってくれた資料のお陰だろう。ここ『必要悪の教会』ネセサリウスの女子寮までの道のりや利用する交通機関までが事細かく記されていた。

「ここにシエリー、クロムウエルがいるんだよな」

玄関の近くまでやってきた守越尊は肩に背負うスポーツバッグをかけ直すと、傍にあるチャイムを鳴らした。

キンゴーン、とアンティークの様な音が鳴り響く。

(ちよつと待てよ、イギリス清教の寮って事は他にも魔術師がいるって事だよな? ……言葉、通じるのかな……?)

と思つている間に扉が開いた。

出てきたのは漆黒の修道服を着た少女だった。髪は赤毛で鉛筆く

らしいの太さの三つ編がフードの隙間からチラホラと見えている。修道服の袖は指先が隠れてしまいそうなほど長いのだが、それとは真逆にスカート部分は太ももが見えてしまいそうなくらい短い。

あっ、と守越尊はとりあえず片言の英語でもいいから挨拶をしようとして口を開きかけた所で、

「日本人みたいですけど、こんな所に何か用で？」

とても上手な日本語が聞こえてきた。

「日本語……よかつたあ」

フウと息を吐いて、そう言えば、ステイル「マグヌスもシエリー
「クロムウエルも日本語を喋ってたっけ？ などと思いい出している間にも少女は何やら訪問者の見極めを行っているようだ。

「ひよっとして観光の道とか尋ねにやって来たとかですか？」

「へ？ あ、いや」

「すいません、昨日来たばかりでこつちの地理はまだ疎いんですよ。ちよっと待つてください、代わりを呼んできますんで」

少女の目には突然訪ねてきた観光客にでも見えたのだろうか、一言も観光と言う言葉を発していないのに淡々と勝手に話しを進めてしまっている。

確かにせつかく来たのだから観光もしたいという気持ちは少なからずあるが、今は優先事項を変えるわけにはいかない。

だから、まずは確認をと思って

「ここつてイギリス清教の女子寮ですよね？」

ピクリ、と建物の中へ入ろうとしていた少女の動きが止まった。

そして、バツと振り返ると同時に後ろへ大きく距離を取った。開けたままのドア越しに守越尊を見つめる目が鋭くなっている。

「あなた、何者です！」

「え？」

その声を聞いて数人のシスターが来たと思うと、ドタドタとつられるように、同じ漆黒の修道服を来たシスター達が何だ何だと言わんばかりに玄関に集まってくる。

その数はパツと見て五〇は下らないだろう。

「シスター・アニエーゼ、どうかしましたか!？」

声をかけたのは背の小さな金髪三つ編の少女だった。その他にもシスター達が「何かありましたか!？」シスター・アニエーゼ」「何事です!？」シスター・アニエーゼ」と連呼している事から、どうやらこの少女はアニエーゼと言う名前らしい。

そのアニエーゼと呼ばれる少女は

「この男、ここを探りに来た敵の可能性がありません、捕えちまってください!」

とてもユニークな命令を発した。

「は? いや、ちよつと待った! 何でいきなりそうなる!？」

すぐさま建物から離れようとした守越尊であったが、それよりも早く動き出した数十ものシスターに引つ張られ建物の中へと引きずり込まれた。

ヘッドスライディングする様に地面へと倒れると、辺りからがちゃがちゃと金属の擦れる様な音が聞こえた。

「意外とあっさり捕まってしまいやしたね」

周りを剣や槍なども持つて武装したシスターが囲み、その中心にアニエーゼが腕を組みながら守越尊を見下ろしていた。

「シスター・アニエーゼ。この人は一体何なのですか?」

問いかけたのは先ほどの小さな金髪三つ編のシスターだ。アニエーゼとは違い漆黒の修道服に手首から足首まできっちり収まっている。

「分かりませんが、この男、ここがイギリス清教の女子寮である事を知った上でやって来たようです。見た感じローマ正教の追っ手つて事はなさそうですね、まあどこの組織の者なのかは本人から聞き出すとしゃしょう」

神裂火織は部屋の中でワナワナと震えていた。

仮にも世界で二〇人といない聖人である神裂火織が震えている理由は恐怖や寒気と言ったものではない。

「あの」

神裂火織のプルプルと震える手には一通の手紙が握られている。

手紙と言ってもそこには短くただ一言書かれてあるだけである。

『幸運を祈るぜい、ねーちん。グッドラック』

「義妹マニアがあああ！」

ビリッと手紙が真つ二つに引き裂かれた。

ぜえぜえと息の荒い神裂火織はチラツとベッドの上に置かれたダンボールに目をやる。

荷札の名義には送り主は土御門元春となっている。そしてデカデカと

『墮天使メイド一式』

などと書かれてあった。

「本当に送って来るなど冗談にも程があります。それもわざわざ速達で送ってくるなんて」

神裂火織にはある少年に大きな貸しがある。何でも、メイド服で一日ご奉仕程度では収まりがつかないほどらしく、その打聞案として土御門元春が提示したのがこの墮天使メイドと言う訳である。

「馬鹿げています。そもそもこんなものであの少年が本当に喜ぶんでも思っているのでしょうか？」

確かにあの少年には禁書目録の件から天草式の件にいたるまで数多くの恩がある事は間違いない。いつかはその恩を返さなくてはならないと思っっているのは確かだ。

それでも、

「こんなモノでなくても恩を返すことは出来るハズです」

神裂火織はダンボールから目線を逸らすと、雑念を払うかのよう壁に立てかけてあった七天七刀を手取る。

ブン、と鞘に収めたままの七天七刀を一振りし、再び立ち尽くす。
(しかし、一体どうやって恩を返せば良いのでしょうか……)
と言うのが今の現状であった。

堕天使メイド服など着ないと誓ってはいるが、正直それ以外に何か方法があるのか、と聞かれれば即答できる様なモノは何一つ思い浮かばない。

神裂火織はチラッとダンボールへと目を向ける。

(そもそも堕天使メイド服なんてものは一体どんなモノなんでしょうか?)

以前にも一度想像してみたが、やはり天使と言っくくらいなら頭の上に輪がついているのだろう。しかし実際にどうなのかは見てみると分からない。

神裂火織は自分の部屋であるのにも関わらず周りをキョロキョロと見回し、誰もいない事を確認すると、

「決して着るわけではありません。い、一度確認をするだけです」

自問自答しながらゆっくりとダンボールへと手を伸ばして

ドドドッと廊下を走る音が不意に聞こえた。

ビクッと神裂火織の体が跳ねると同時に一瞬にしてダンボールからメートルほどの距離を取る。確認するまでも無いのだが、部屋に誰もいない事を確認してホッと小さく息を吐く。

「まったく、驚かせないで下さい」

と、何やら外の方が騒がしい事に気がついた。

(何かあったのでしょうか?)

神裂火織はドアの前でブーツを履いて部屋の外へ出た。長い木の廊下を歩いていると玄関の所で人だかりが出来ていた。よく見るとほぼ全員が昨日引越しをしてきたシスターばかりだ。

「何かあったのですか?」

神裂火織はその中心へと進んで行った。

2

神裂火織が見たのは、一人の少年が地面へ押さえ込まれている光景だった。周りを剣や槍を持って武装したシスター達が囲い、その中心でアニエーゼが腕を組みながら少年を見下ろしていた。

「何をしているのですか？」

声と同時に神裂火織に気がついたシスター達は道を譲っていく。

神裂火織が中心までやって来るとアニエーゼも気がついたように、「ここをイギリス清教の女子寮と知った上で乗り込んできた男がいたんで、捕獲しておきました。どうします？」

振り向かずにそのまま答えた。

神裂火織はその少年へと目を下ろす。

どう見ても、かつて禁書目録の件で学園都市を訪れていた際に会った少年にしか見えない。

名前は確か……

「守越尊、でしたか？」

地面に押さえつけられていた守越尊は自分の名前を呼ぶ声を聞いて、頭だけを上に向ける。目に入ってきたのは、かつてポコポコにやられた事のある人物の姿だった。

「か、神裂火織！」

「へ？」

と何とも可愛らしい声を上げたのはアニエーゼだった。

「ご無沙汰しています、と言いたい所なのですが……」

神裂火織は再びシスター数人に押さえつけられる守越尊を見た。

何とも情けない姿だ。

「貴方はこんな所で何をしているのですか？」

何をしているのか、と言われたら取り押さえられているとしか言

いようが無い。何も悪い事はしていないハズ。ただ、訊ねただけなのだ。

「ここがイギリス清教の女子寮なのか訊ねたら何か取り押さえられたんだけど」

しかし、もう訊ねる必要もないだろう。神裂火織がいるという事はここはイギリス清教の寮である事は間違いなさそうだ。

「管理人はどうしたのですか」

額に手を当てて神裂火織は誰かに問いかけるのではなく、呆れたように言った。

「管理人さんなら、先ほど買い物に行つて来ると言つてお出かけになられました」

金髪三つ編のシスターがそう答えた。

あの管理人は、と神裂火織はため息を吐いた。どうもこの管理人は居眠りをしていたり、大事な時にいない事が多い。そもそもきちんと管理人がいてそれなりの対処を取っていればこんな事にならなかったのだが、

「とにかく、その方は私の知人です。放してあげてくれませんか？」

神裂火織の言葉を聞いて守越尊を押さえていたシスター達が一斉に手を放した。

フウと安堵の息を吐いて守越尊は立ち上がった。玄関は綺麗に掃除されてあったのだが、何となく埃を払うしぐさをする。

「申し訳ありません。彼女達が何か勘違いをしていたようで」

神裂火織は守越尊に対して一礼する。

「いや、こつちも急に訪れたのが悪かったみたいだし。あんたが謝るような事じゃないよ」

と、隣にいたアニエーゼが少し気まずそうな様子で

「あの、神裂さんのお知り合いでいらっしやいましたですか？」

何とも華麗な日本語に早変わりしていた。

勘違いで捕らえようとしてしまった事に対して申し訳なさそうにしているのか、あるいは神裂火織の知人に手を出してしまったと言

う恐怖からか、アニエーゼはピクピクと震えている様にも見える。

「ええ、学園都市にいる私の数少ない知人でもありますし、あの上条当麻とも接点がある方です」

上条当麻の名が出た瞬間、辺りのシスター達が少しざわついて「あの少年と?」「あの方はやはり向こうでも有名なのでしょうか?」などヒソヒソと声を飛ばしている。

当麻お前はどこまで有名なんだよ、と守越尊は心の中で突っ込んでみた。

「で、貴方は一体こんな所に何をしに来たのですか?」

「あ、そうだそうだ。ここにシエリー・クロムウエルがいるって聞いたんだけど」

シエリーですか? と神裂火織はそんな名前が出てくるとは思いもしなかったのか、少し驚いたような表情をしていた。隣にいたはずのアニエーゼはいつの間にか壁に近づいて肩を落とし「やっちないました……」と呟いている。

「はい。確かにシエリー・クロムウエルはここにいますけど」

「良かった、それなら」

と守越尊が言いかけた所で、

「真昼間から何騒いでんのかよ」

噂をすれば影がさす、とはこの事だろうか。

ライオンの様な金色の髪にボロボロに擦り切れたゴスロリの黒いドレスの女性。

シエリー・クロムウエル。まさに彼女が現れた。

「お出かけのようですね、シエリー」

神裂火織は彼女の服装を見てそう答えた。

シエリーはいつも寮にいる時はネグリジエを纏っている。女子寮という事もあり、いつもならネグリジエで行動している彼女がゴスロリの黒いドレスを身に纏ったという事はイコール外出という事になる。

「ああ、英国図書館にな。講義に使う資料をまとめなくちゃなんね

えんだよ」

シエリーは魔術師であると同時に優れた彫刻家としても知られており、その技量から王立美術院の管理者として次の時代の担い手を養成する為の講師でもある。その際にもゴスロリの黒いドレスのまま教壇に立つのだから少々驚きだ。

「で、これは何の集まりだ？ 武器まで持ち出してきやがって」

「その件に関しては今無事に解決した所ですよ」

そう言いながら神裂火織がアニーゼの方を見ると、アニーゼも無言で上下に首を振った。

「それはそうとシエリー、貴方にお客のようですよ」

客だ？ とシエリーが目線を神裂火織の先へ向けると見知った姿がそこにあった。忘れるはずもない。かつて学園都市に侵入して戦争を引き起こそうとした自分に立ちはだかった少年の一人であると同時に、

「カミゴエのガキじゃねえか」

その少年の母親はシエリーにとって古い知人でもあったからだ。

3

守越尊とシエリー「クロムウエルは英国図書館の一角にいた。

シエリーを訪ねてイギリス清教の女子寮を訪れたものの、何でも講義の為の資料を作成しなくてはならないらしく、その場で目的を達成する事が出来なかった。その為、シエリーと共に英国図書館へとやって来た守越尊は長方形のテーブルに座っていた。

本来なら図書館は研究目的等でしか利用する事は出来ないみたいなのだが、なんでも古今東西の情報の集まる英国図書館の管理はその特性上、記号に詳しい者に任されるそうだ。

イギリス清教内での暗号解読のスペシャリストであるシエリーにはまさに適任であり、全く関係の無い守越尊もこうして難なく利用

する事が可能となっている。

現在、守越尊の向かいに座っているシェリーは何冊かの分厚い本を机の上に広げて何かを書きとめている。守越尊はチラッとその内容を見てみようとしたが、二秒ほどで諦めた。何が書いてあるかチンプンカンプンだった。

代わりに守越尊は改めて周りを見回した。

イギリスの国立中央図書館としても機能していると言っただけに、本棚には見渡す限りの本がぎっしり詰まっていた。天井から照らす黄色っぽい光が白い壁や木製の本棚の通して何とも不思議で静寂な空間を作り出している。

「で、話したのは何なのかしら？」

そんな空気を切り裂くようにシェリーは言葉を発した。

「まさか何も無しにこんな所まで来た訳じゃないでしょ」

聞きたい事は決まっている。

ただ、自分自身の中にそれを拒否しようとしている自分が僅かに存在していた。知りたいと言う反面、説明できない何かがあるのを止めようとしている。だからこそ自ら口を開いて問いかける事が出来ずにいた。

「まあ、私を訪ねてきたって事自体で大方予想はついてんだけどね」と、シェリーはとりあえず手に持っていた本を畳んで机へ置くと、

「知りたいのは母親の方かしら？ それとも」

静かに淡々と言葉を発する。

「父親の方かしら？」

「父……さん？」

守越尊のキョトンとした反応にシェリーは、おいおい、と呆れた様に

「習わなかったのか？ 子供が出来るには父親と母親とがな……ってこんな所でこんな話しをさせんじゃねえよ」

もちろんそんな事は知っている。重要なのはそんな事ではない。

(俺の……父さん?)

そもそも自分がいて、母親がいて、父親がいない訳がないのだ。考えてみれば、守越尊は父親の事を何も知らなかった。どんな人であったかも名前すら知らない。母親の事はある程度は知っていたが、父親の事はまるつきりだ。

今の今まで存在すら忘れていた様に疑問にすら思わなかった。それとも自分の中の何か知らないフリをしていたのか、定かではない。

「見た感じ、何も知らないみたいね」

シエリーは静かにそう答えた。

何も知らない。思い出してみても幼い頃から新風洋子に教えてもらったのは母親の事だけだった。元々、守越無月も同じ施設の出であるという事からかもしれないが、聞かされたのは母親の話しだけだった。

そして、もし新風洋子が自分の父親に関して何かを知っていて、それでなおシエリー「クロムウエルを訪ねなさい」と言ったのであれば、そこに守越尊自身に関する何かがあると言う事も十分に考える事が出来る。

「あんたは何を知ってるんだ？」

シエリーは手のひらを上に向けて方の高さほどまで上げると、

「まあ守越無月が亡くなつた事も知らなかった訳だし、当然私の知っている事なんて高が知れてるわ」

それでも、とシエリーは少々真剣な面持ちで続ける。

「あなたが何も知らないんだつたら、それはあなたの今後を左右する事になるのは間違いないわ。それでもあなたは知りたいのかしら？」

その言葉に冗談は一切含まれていなかった。

シエリーの真剣な表情や自分の中にある何か守越尊を躊躇させる。知りたいと言う心と知らないままのがいいと言う心が、まるで天秤の上に乗っているかのようにフラフラと思考の中を行き交いし

ていた。

しかし、こんな所まで来て何も聞かないとなれば、何をしにここまで来たのか分からない。

守越尊は数秒間目を閉じて大きく息を吐いた。そして、

「ああ、教えてくれ。あんたの知っている事を」

「なら、遠まわしは止めて簡潔な方がよさそうね」

そう言つとシェリーは一度目を閉じた。そして開くと

あなたの父親は魔術師よ

ただ一言、静かにそう告げた。

6 - 2 「英国図書館」(後書き)

最近、またとあるの2次が増えてきましたね。
負けずに頑張りたいです。

6・3 「交わる二つの力」(前書き)

今回は原作を参考にいつもと違った書き方に挑戦してみました。ですから少し短めです。あと、文章は多めにみてやって下さい。

6 - 3 「交わる二つの力」

4

守越尊は帰りの飛行機の中だった。

上空一万メートル。既に離陸から二時間以上が経過し、シートベルト着用サインも消えていた。隣にいる乗客が注文したドリンク（どうやらコンソメスープ）が微かにコップに残っていたのか、僅かな匂いが鼻を突付いてくる。

中央に設置されているモニターにはいつの時代のモノだったか、お酒を飲むとやたらと強くなる拳法の達人が主人公の映画が放映されている。確か悪役に殺された師匠の為に主人公が仇を討つ、みたいな映画だったはずだ。音声は手元のヘッドフォンを着用しないと聞こえないので、ただ見ているだけでは単なる口パクの映像ではない。

守越尊が乗っているのはスカイ○○335などとチケットに書いてあったかもしれないが、そんな事はもう覚えていない。一時間以上も前にキャビンアテンダントが隣の乗客にドリンクを受け渡しする際に気を利かせて、お客様はどうされますか、などと営業スマイルで訊ねてきたがそんな事も耳に入ってはいなかった。見つめるのは窓から見える夜空の景色。正確にはそれすらピントは合っていない。

守越尊の思考を埋め尽くしているのは数時間前に英国図書館でのシエリー・クロムウエルとの会話だった。

『あなたの父親は魔術師よ』

『魔術師……？』

窓から見える星は地上から見える時とは違い綺麗に見えると思いきや、旅客機の巡行高度より高い所に薄い雲がかかっている為そうでもない。そもそも守越尊は星を見ようとは思っていないので関係

の無いことなのだが。

『魔術師って、でも、あれ？ 母さんは能力者なのにどうして？』

『前に言わなかったかしら？ 二〇年ほど前、学園都市とイギリス清教の間で行われた実験の事』

『……能力者と魔術を組み合わせた術者を生み出そうと行われた実験。母さんも学園都市から連れて来られた能力者の一人だったって話し、だったっけ……』

中央のモニターでは主人公が師匠の下でもと厳しい訓練を行っているシーンが流れていた。腕立て伏せの姿勢から手首の甲と平を交互に反して手首の強化を図っているのだろうか、見ているだけで痛そうである。

『その時生き残ったのは科学側が一人、魔術側が二人の僅か三名って事は、言わなかったかしら？』

『三人って……』

『私と守越無月、そして天城三門あましろみかど。イギリス清教に所属していた数少ない日本人の魔術師よ』

窓側の席だった守越尊は通路へと出るために隣の男性に声をかけた。四〇歳くらいの男性はちょうど仮眠をとっている所だったので起こされて少々不機嫌そうであったが、守越尊は軽く会釈して男性の前を通り抜ける。

『天城、三門……』

『まあ、恐らくあの男があなたの父親だと思っわ』

『思っつて、どういう事だよ？ それにイギリス清教に所属しているんならこの近くにいてるって事だろ！？ だったら』

『それは無理よ』

考え事をしていた守越尊は通路で小さい子供とぶつかった。身長が自分の腰ほどまでしかない小さな男の子だ。大丈夫？ と守越尊が手を差し出すが尻餅をついた少年は何かを落としたらしく、頻りにキョロキョロと床を見回している。

と、近くにいたキャビンアテンダントが自分の足元に転がってい

る何かを見つけて、それを拾うと少年に差し出した。

昔から続いている戦隊モノの人形だろうか、それを受け取った少年はキャビンアテンダントと守越尊にペコリと頭を下げ、今度は走らないように通路を歩いていった。

守越尊もキャビンアテンダントに対して軽く頭を下げると、いえいえ、と会釈をすると気をつけてくださいねと一言だけ言って通路を戻って行った。守越尊も数秒その場に立ち尽くして再び足を進める。

『天城三門は既にこの世にいないわ。……殺されたのよ、魔術師達の手によつてな』

『殺された……なんで!』

『二〇年前の実験は騎士派の奴らによつて……生き残ったのは私達三人だけだったわ。逃げ延びた私達は清教派によつて一時保護された。まあ元々は清教派と学園都市が始めた実験だった訳だし、当たり前と言っちゃ当たり前なんだけどね。だから本来は殺される必要なんて無かった。私もこうして生きてるわ』

『じゃあ何で天城三門は……父さんは殺されたんだ!?』

『幼かった私は直ぐに別の部署へと一時的に移されてしまったのよ。だから私もずいぶんと後になってからだったわ。天城三門が裏切り者として魔術師達に殺されたと言う事を知ったのはね』

守越尊がたどり着いたのは洗面所だった。特にお手洗いに行きたかったわけでもないが室内へと入って鍵をかける。ほとんど無意識に近い状態で守越尊は洗面台の前に立った。他の乗客からすれば迷惑な話であるがそんな事を考えている隙間は守越尊の頭にはない。

『魔術師だった私達はある程度安全は確保されていたでしょうが、そつでない守越無月は違った。記録では天城三門は能力者と共に逃亡し魔術を裏切ったとされているわ。恐らく科学側の人間が安全に保護されるなんて保障がないと天城三門は思ったんでしょうね。それから五年後に魔術師の手によつて殺されたとあつたわ』

『そんな……じゃあもしかして母さんも!?』

『守越無月に関する情報は記載されてなかったわ。でも違うわね。それじゃあ、あなたが生まれたいわ』

ギョツとレバーを押すと水が流れ出た。飛行機内に貯蔵できる量には限りがあるので一定秒水が出る仕組みになっている。レバーを押すと同時に両手に水を貯めるとそのまま顔を濯ぐ。目には見えな
い何かを洗い流すように水が流れる一定秒、三度ほどその行為を繰り返す。

『守越無月が死んだ原因はあなたよ』

『……俺が？ な、なんで！？』

『能力者が魔術を使うと体が破壊されてしまう。二つの力が混ざり合うと拒絶反応を起こしてしまう。なら、魔術師との間に子を授かった能力者はどうなのかしら？』

『あ……、俺を生んだから母さんは……死んだのか……俺が殺したのか……』

『あなたが守越無月を殺したなんて言わないわ。あんなモノを間近で見たあの二人ならそうなる事は分かっていただろうさ』

『……』

洗面台の端に両手をつき、下を向く顔から水滴が垂れ落ちる。

『憎いのかしら？ 父親を殺した魔術師が？ 母親を殺してしまっ
た自分が？』

『……』

『そんな事を考えているのなら貴方は間違っているわ』

守越尊は右手を見た。手の平に水滴が落ちる。

『あなたの親はあなたがそんな事を思う事を望んではないわ。あの二人は純粹に魔術と科学が手を取り合う事を願っていた、それだけ
は確かよ。まあ、私もあんな事をやらかした身だから言える立場
ではないんだけどさ、それでも根本的な気持ちは二人と一緒だった
わ。あんたとあのイメージブレイカーが思い出させてくれた想いは
ね』

顔を上げると、鏡に自分の顔が映し出された。右手が右目の周り

を覆う。そこにあるのは神の体の一部とされる『神の目』。魔術と科学が交わった結果なのだろうか、それとも別の何かなのだろうか。守越尊には分からない。

『それでも言うなら私は構わないわ。どうするかは自分の勝手にしな』

顔も見つた事がない父親は魔術師でありながら、母親を守るために魔術の裏切り者とされて魔術師によって殺された。能力者だった母親は自分を生んでしまったばかりに死んでしまった。

それぞれにあったのは魔術と科学が手を取り合うと一つのこと。い。

自分は父親を殺した魔術師を憎んでいるのだろうか？ それこそ流れている映画の主人公が殺された師匠の仇を討つ様に仇を討ちたいと思っっているのだろうか。

或いは母を殺してしまった自分自身を憎んでいるのだろうか？

「勝手にしろって……分かんねえよ……」

鏡に映る自分に聞いたところで返事は返ってこない。

「くそ、どうすればいいんだよ……」

重たい想いを乗せたまま飛行機は飛ぶ。向かうは学園都市。

室内で飛行機のエンジン音だけが異様に耳に響いた。

6・3 「交わる二つの力」(後書き)

シエリーの口調が難しい……

戦闘中なんかの口調は以外と書けるんですが、普段の口調が難しい。

6 - 4 「異変」(前書き)

とある魔術の天の住人の画像を貼り付けてみました。
分かる人には分かると思いますが、原作のタイトルの色がそうであるように、赤は科学を、青は魔術を、表しています。
画像があると、気分的に変わりますね。

学園都市第二三学区は一学区全てが航空・宇宙開発の為に用意された特別学区だ。つい先日までごった返していた空港ロビーも今は所々に人が見える程度に静まりかえっていた。全面ガラス張りの壁からは雲に包まれた夜空が顔を覗かせている。

守越尊の足取りは重たかった。

肩に背負っているスポーツバッグの中に鉛でも仕込んでいのではないかと感じるほど、足が重い。歩くのを拒んでいるかのように足が地面から離れない。

それでも守越尊は無駄に広いロビーを歩いていった。

一八時に学園都市へと到着した旅客機の乗客は少なかった。

この国際空港も学会などの際に外からやってくる客の為に作られた物だ。先ほどの飛行機内にいた乗客も学園都市に何らかの関係を持った人達だったのだろう。守越尊の隣にいた中年の男性は恐らく研究者か何かか、ぶつかつた少年も能力開発を受けている子供だろう。

その為セキュリティ等に差ほどの時間が掛からず、現在一八時一五分。

完全下校時刻は既に過ぎてしまっているが、二三学区からは各学区へ向けての電車が運行されている。もちろん第七学区へと到着してからには多少歩く必要はあるのだが、もはやそんな事すら考える思考は守越尊にはなかった。

頭の中をグルグルと回っているのはシェリー・クロムウエルとの会話だ。

それが守越尊の思考の大半を奪い去っている。駅へと向かう、切符を買う、電車に乗り込む。それらの動作を行っている間もつねに

シエリーとの会話が頭を過ぎる。

『父親は魔術師に殺された』

『母親は守越尊を産んだ為に死んだ』

自分に神の目なんてものが宿っている事や、新風洋子が自分自身で確かめさせる為にシエリー「クロムウエルに会いに行くように言った事から、ある程度の覚悟でイギリスへといったつもりだった。しかし明らかになった事はその許容範囲を軽くオーバーしてしまった。ていた。

電車のつり革を待ち車内に佇む姿はまるで会社帰りのサラリーマンの様に疲れ果てている様だった。

各車両に数人しか乗せていない電車は真つ暗な地下を走り抜ける。ドアのミラーに反射して映る自分の姿に問いかけてやりたい、そう守越尊は思う。

「……オマエはどうしたいんだ？」

答えは返ってこない。ここでコメディーっぽい漫画なら頭の近くで小さな天使と悪魔なんてものが出てきて自分の代わりに何かと言いつけてくれたりするのだろうか、そんな非現実的な事など起こりはしない。

いや、

「もう非現実な世界にいるじゃないか」

超能力や魔術。普通に生活しているだけなら決して踏み込む事の無い世界。そして、守越尊にはその二つの血が流れている。交わる事の無い二つの力。

ハハ、と皮肉にも笑いがこぼれる。

近くに人がいたら変な人と思われたかもしれないが、生憎この車両には守越尊を含めて三人ほどしか乗り込んでいない。場所も離れている。失笑など電車のかき消されてしまっているだろう。

考えても考えても答えは出てこない。

顔も知らない父親の仇を取りたいのか？ 母親を殺してしまった自分が許せないのか？

自分を知るためにイギリスへ行ったと言つのに余計に自分が分からなくなった。

案外、ここで一発誰かに殴ってもらった方がすつきりするのではないだろうか。この馬鹿ヤロウ！ 優柔不断！ そう言つて殴ってもらった方が答えが出てくるのではないか。そう思いたくもなる。

「……分かんねえよ」

その一言で自分自身をごまかそうとする。

逃げているだけでは答えは出てこない。そんな事すら気がつかずに時間と電車だけが進んでいく。

今、学園都市で何が起こっているかも知らずに。

6

第七学区に到着した守越尊は雨に打たれながら大通りを歩いていった。

現在時刻は一八時五〇分。完全下校時刻を過ぎた大通りは静かだった。雨が降っていると言ふ事もあつて辺りには一〇メートル感覚くらいでポツリポツリと人影がちらつく程度でしかない。大方建物の中にはある程度の人はいると思うが、それにしても静かだった。

コンビニに寄れば傘くらい直ぐに購入できるが、濡れてしまったら傘を差そうが一緒であると言ふ事と、とりあえず自宅に帰ればこの自分でもよく分からない思考回路がどうにか治まるのではないか、と言ふ気持ちから傘を購入すると言ふピースは守越尊の頭には存在しなかった。

ただ家に帰る。それだけの為に歩を進めていると、人だかりが見えてきた。

学生達の集まりだろうか、五人ほどの少年達が何かの店の前で雨宿りをするように屯している。少年達は一人の携帯を覗き込むようにして、

ドサドサ、と一斉に倒れた。

「！！！」

その異常な光景に考えていた事は全て吹き飛び、守越尊は少年達へと駆け寄った。

まるで糸の切れたマリオネットの様に地面に倒れている。

「おい！ どうしたんだ！？」

守越尊は一人の少年に体を揺らしたが、ウンともスンとも言う気配が無い。意識がなかった。

夜の街で屯する少年達、そして意識を失う。

（まさか、クスリか何かをやったのか？）

しかし、辺りを見回してもその様なモノは何一つ見当たらない。そもそも少年達はただ携帯電話を眺めていただけのハズだ。確か、ちようどこの少年を囲むようにして、

と、守越尊はその少年の握っている携帯電話に目を向けた。しかし画面にはノイズが走っている。何かの番組を見ていたのか、それとも映像を通して催眠術の様なモノをかけたのか守越尊には分からなかったが、守越尊一人ではこの状態をどうにかする事は出来ない。（とりあえず、救急車呼んだ方がいいよな）

守越尊は携帯電話を取り出すと、三桁のボタンをプッシュしてコールセンターへと接続した。

（状況はなんて言えばいいか）

五人の学生が意識を失っている。それだけで良いのか、それか可能性を考慮して情報を伝えるべきなのか。しかし、気がつく。

（ 出ない……？）

ツーコールほどの間に繋がるハズの電話から呼び出し音が絶え間なく続いている。

数秒間続く呼び出し音。緊急用の番号のハズなのに携帯電話の向こうからは声が聞こえてくる気配が無い。

ピッとボタンを押して携帯電話をポケットにしまい込んだ。

（何で繋がらないんだ？ くそ、どうすれば……）

守越尊は少年の一人に声をかけるがやはり目覚める気配が無い。再び携帯電話を取り出して同じ番号にかけ直すが結果は一緒。数秒間呼び出し音が耳に入ってくるだけだった。

守越尊は辺りを見回した。例え雨の降る夜の街でもいつもならもう少し人だかりが出来ていてもおかしくは無いのだが、

(ここに置いて行く訳にはいかないよな)

周りに誰かいれば協力してもらおうと思ったが誰もいない。と、

(あつ)

黒い影がちらついた。

積層プラスチックや耐衝撃ウレタンなどの防具満載装備に身を固めた警備員達^{アンチスキル}だった。角から姿を現した五人ほどの警備員^{アンチスキル}達はヘルメットに手を当てて肩に顔を近づけるようにしている。どうやら何か通信を行っているようだ。

ちようど良かった、と守越尊は思った。

何故か緊急用の番号が使えないが、警備員^{アンチスキル}に無線で救急車を手配してもらえば良い。何かの行動中みたいだが手を貸してもらえらるう。

守越尊は警備員^{アンチスキル}に聞こえるように近づきながら声を出して

「すみませ

「^{アンチスキル} バタリ、と警備員の一人が地面に崩れ落ちた。

何の前触れも無く突如意識を削ぎ落とされたように。

「な………?」

守越尊に視線が凍りついた。

連鎖反応を起こすように他の警備員^{アンチスキル}が次々と倒れていったからだ。吊るしていた糸が切れたようにバタバタと体に着込んだ重装備が地面にぶつかる音が聞こえる。

慌てて駆け寄った守越尊は一人の体を揺すがやはり反応がない。まるであの少年達のように意識がなくなっている。

「何が………どうなって………!?!」

倒れた拍子に落ちたのだろうか、足元に無線機を思われる四角い

機械が転がっているのを見つけた。守越尊はそれを手に取ってマイクを口に近づける。

「すみません！ 誰か聞こえますか！？」

無償に声だけが当たりに響いた。無線機から聞こえてくるのはザザアと言うノイズ音だけ。反応がない。同じ周波数の無線機と繋がっているはずなのだが誰からも反応がなかった。

何が起きているのか守越尊には把握し切れなかった。

「まさか、能力者が？」

この学園都市ではそう考えるのが一番無難だろう。人の精神に干渉できる能力者もこの学園都市に存在する。ここまで何人も意識を奪えるほどの能力者がいるのかは不明ではあるが。

ただそうなると自分に何の影響もないのは何故か？ 近くでこれだけの人間が気を失っている。人物を特定できるのか、無差別にそうしているのか、或いは

「それ以外に考えられる事……まさか」

ゴン！！ と遠くて爆音が鳴り響いた。

ハッとそちらに目をやると空に向かってモクモクと煙が立ち昇っている。何かが爆発した。建物が爆弾が爆発したのか、或いは能力の類か守越尊の位置からでは分からなかったが、

次の瞬間、

スパンツと一瞬にしてその煙が消えた。

風に流されるにしてもあまりにも早すぎる速度。既に煙の一つも見えない。

「やっぱり能力者が、最悪の場合……魔術師か！？」

クツと守越尊は歯噛みした。ここでの出来事とあの爆発が関係しているのなら、問題を解決するためにはあそこに行ってみるのが一番だろう。だが、このまま少年達や警備員達アンチスキルを置いて行く事も気が引ける。それに

「クソ、まだ心の整理がついていないってのに！」

能力者、魔術、これらの単語を元に数分ほどまで思考を埋め尽く

していたモノが蘇る。

『父親は魔術師に殺された』

『母親は自分を産んだ為に死んだ』

そんなワードが再び頭を駆け巡る。

あの場所で何かが起きているとして、こんな状態の自分に何が出来るのか。

それでも、

「何かが起きてるのに放って置ける訳ないだろ、守越尊！」

自分に訴えるように言葉を吐き出すと、守越尊は爆発が起きた方向へと走り出した。

6・5 「事件の中心へ」(前書き)

難しい巻ではありますが頑張りたいと思います。

守越尊は小さな通りを走っていた。雨は先ほどから小降りになっていたが、絶え間なく学園都市に振り続けている。水を吸い込んだ服が多少重く感じてきていた。

「くそ、酷すぎる」

大通りや小さな通りを含めて、全てが異常な光景に包まれていた。雨に打たれる街中には人がいない訳ではなかった。ただ、無事に立っている人が一人もいない。地面に倒れているのはほとんどが学園都市の治安を守る警備員アンチスキルだった。

積層プラスチックや耐衝撃ウレタンを使用した装備に身を固めた警備員アンチスキルは、集団催眠に掛かったようにあちらこちらの地面に転がっている。外傷は見当たらない。もしかしたら目に見えない傷が何処かにあるのかもしれないが、だれも逃げたような形跡はない。

もしこれらが何者かによる奇襲であるとするならば、最初に攻撃を食らった者以外はそれらの行動に気がつくはずである。が、誰もが自分に何が起きたか気がつく前にやられたようだった。

（やっぱりこの学園都市で何かが起こってる……）

その原因を突き止めるために守越尊は走っている訳だが、向かう場所にその答えがあると言う確信はなかった。ただ、あの爆発の際に発生した煙の消え方は明らかに何かの力が働いていたのは確かだ。風に流される訳でもなく、その場でかき消した。それは能力、或いは魔術の類である可能性が非常に高い。

（確か、この辺りだったはず）

小さな通りを抜ければ大通りに出る。

恐らく先ほどの爆発はこの辺りだったはずだ、と守越尊は大通りに飛び出そうとして、

(ツ!?)

慌てて踏みとどまった。

壁に背をつけて角から覗き込んだ先では陸橋の下に二台の車がひっくり返り、その向こうには一台の黒いワンボックスカーが止まっている。その近くでは装備に身を固めた数人が何やら機械を使って作業を行っていた。

アンチスキル
(警備員……か?)

よく見ると、地面にも同じ服装の人間が倒れていた。

(倒れた仲間を救助しに来た? それにしても何か警備員とは違うような……あツ!?)

守越尊は気がついた。彼らとは別の場所、横倒しになった車の陰に二人の人影が息を潜めていた。暗くてよく見えなかったが、その人影はもう一人をゆっくりと抱きかかえると、地面を蹴って車の陰から勢いよく飛び出した。その陸橋の影から飛び出した人物は、「当麻!?’

瞬間、武装した集団の銃口が火を噴いた。隠れていた車に数十百の銃弾が車の表面を貫き蜂の巣になる。相手の死角になる陸橋に沿いながら上条当麻は裏路地へと駆け込んで行った。

(なんで当麻があんな事に? それにあの小さな子が付けてたゴーグル、どこかで!?)

守越尊はハツとして、

(まずい!)

頭を引っ込ませ、後方へと跳んだ。瞬間、銃声と共に数十発の弾丸が角付近の壁を打ち砕き、隣の建物のガラスを次々に破壊していく。無意識に出した声が聞こえたのか、上条当麻を追いかけていった者とは別の数人が守越尊の姿を発見して発砲してきたのだ。

(クソ、一般市民が発砲してくるなんて、警備員な訳がねえ!)

守越尊は立ち上がると来た道を走り出した。

ガチャガチャと金属を擦る様な音が後方から近づいてくる。

(あいつらがこの学園都市に何かをしているのか? いや、それにし

ては何も力を使って来ない。俺が見たのは間違いなく何かしらの能力だったはずだ。あいつらが銃なんて使ってるのはそう言った力を持っていないからか？ 仲間って言う可能性も無くは無いかど（同じ様に武装した者達が倒れていた少し先には何かが発射した様に地面がめくれ上がり、ひび割れ、守越尊が目撃した爆発を思わせる様な場所があった。その近くに黒づくめの者達が倒れていたと言う事は何者かと戦ったと言う可能性もある。

その何者かが何かの力を使用したのか、或いは黒づくめ達の仲間が使用したのかは分からなかったが、ただ一つだけ分かっているのはこの黒づくめ達は良い奴らでは無いという事だけだ。

守越尊が角を曲がり裏路地へと入っていく。と同時に銃声が鳴り響いた。あのまま縦に走り続けていけば体中が蜂の巣になっている所だ。

「クソ、容赦無しかよ！」

守越尊は闇雲に逃げている訳ではなかった。裏路地へ入ったのも、幅が狭く相手も一列にやらざるを得ないと言う事と、どうにかして上条当麻と合流出来ないか、と言う事を考慮しての行動だった。

（当麻が何かを知っている可能性は高い、ならどうにかして当麻に会わないと）

裏路地をジグザグに走り相手の追跡を振り切りながらも、守越尊は先ほどの大通りを抜けて通りの反対に行こうとしていた。

裏路地に放置された自転車やゴミを避けながら守越尊は走る。途中、背負っているスポーツバッグが放置自転車のハンドルに引っかかり、近くに積んであったビンケースを巻き込んで大きな音を立ててしまうと言うミスを犯してしまうが、道一杯に広がったビンケースが返って道を塞ぐ役割を果たしてくれていた。

（そろそろ、大通りに）

裏路地の出口を見つけて守越尊は大通りに飛び出した。

そして……

和音は雨に打たれながら街中を歩いていた。

「うう、一体何が起こってるの？」

彼女が今いるのは第七学区の大通りだ。辺りには人影が全く無く、ゴーストタウンに近いイメージを持ちそうである。中には電気がついた数少ないファミリーレストランもあったが、どうした事か客を含めて従業員全てがまるで眠った様にテーブル、地面に倒れているのだ。

そもそも完全下校時刻を過ぎて一時間ほど経つ時間に和音が街中に出歩いているのには理由がある。

「こんなの『幸せ』どころじゃないよ」

彼女の日課は『幸せ』を探す事だ。それはどんな小さなモノでもいい。道端に落ちている四葉のクローバーを見つける事、ルーレット付きの自動販売機で当たりを出す事、或いは人助けをして幸せを感じる事でもいい。

塵も詰めれば山となる。その言葉がある様に小さな幸せの集まりは、やがて大きな幸せへと繋がっていく。

今日九月三〇日は衣替えの為に午前中授業となっており、現在の和音の服装は青色のブラウスに青色のスカートで首には赤い男物のネクタイを付けている。御二ユーの制服を着込んで午前中授業と言う事もあってか、「今日は一杯幸せを見つけられそう」などとテンション高めに和音は『幸せ』を探しに町に出た。

までは良かったのだが、

大通りから裏路地まであらゆる場所を歩き回った結果、どこかで携帯電話を落としている事に気が付き、それを探し回っている間に雨がちらつき始め、傘を買おうと思ったがうつかりした事に財布を自宅に忘れていると言う始末。そのまま搜索を続け、やっとの事で携帯電話を発見するも雨の影響で携帯電話は水没。

『幸せ』のしの文字も出てこない一日となつてしまった。

さらに気がつけば、辺りは異様な静けさに包まれ、警備員達アンチスキルは地面に倒れているは、公衆電話から緊急用の番号にも繋がらない。一般の学生達も同じ様な状態に陥つているのも見かける。携帯電話も使用できない状態では情報を得る事も出来ず、誰か無事な人がいないかどうか大通りを歩いていたと言う訳だ。

「なんかどこかで爆発もあったみたいだし、このまま大人しく家に帰った方がいいかな？ いや、でもまだ今日は一つも『幸せ』見つけてないし……」

一日一つの『幸せ』

それが彼女の目標だった。御ニューの制服を着たと言う時点で『幸せ』一つと数えればよい事なのだが、和音のルールでは予め与えられると分かっているモノはカウントしない事になっている。制服は今日貰えると決まっていたモノなので一にはならない。

しかし今日は幸せどころか、不幸などと呼ばれる部類の事柄ばかりが和音に降り注いでいる。ここは一つ帰るまでに『幸せ』を発見したいと思っているのだが、

「今日は危険な気がする……」

色んな意味で危険だった。まずは『幸せ』を見つけられないかもしれないと言う危険、そして今日の学園都市が危ない雰囲気であると言う危険。そもそもなぜ自分は皆の様に意識を失わなかったのか、それが気になる。

「やっぱりそうかな？ 可能性はありえるけど、もしそうだったら早く戻った方が良さそうだし……でもまだ『幸せ』を」
ドン、と横から何かがぶつかった。

「きゃっ」

可愛らしい声と共に和音は地面へと尻餅をついた。また一つ不幸な事が起こってしまったと和音は嘆く。地面は雨で濡れていて地面についた手は僅かに泥がついた。横向きに倒れたのでスカートの側面が汚れてしまったが、水溜りが無かつただけでもラッキーなのか

もしれない。

まさかこれが今日の幸せなのか、と思いながら
フと和音は思う。

(人とぶつかった……?)

肩と肩が当たるようにして何かにぶつかった。それがもしも掃除
ロボットであるなら位置が固すぎる。それに機械のような感覚では
なかった。犬や猫でもありえない。そうならば人意外に考える事は
出来ない。

和音は体を起こしながらそのぶつかった人物へと目を移して。

「み、尊君!？」

今日一番の『幸せ』を発見した。

6・5 「事件の中心へ」（後書き）

感想やご意見お待ちしています。

6 - 6 「事件の中心へ？」（前書き）

頭の中なんて始からグチャグチャなんだよ、
（シェリーの台詞から
の引用）

でも

が、頑張ります。（五和の台詞からの引用）

そして一言、難しい……

「み、尊君！？」

守越尊は大通路に出た途端に和音とぶつかった。

彼女は以前までと違い、上下青色のブラウスとスカートを着いていた。どうやら霧ヶ丘女学院の冬服の様だが、

「クツ、とにかくこつちに！」

「え？ つて、わあ！？」

こんな非常時に会っていないければ服装に対してコメントできたかもしれないが、後方からガチャガチャと言う金属のすれる音が徐々に近づいてくるのが聞こえてくる。守越尊は和音の手を掴むと大通りを横断して向こう側の裏路地を目指して走り出した。和音もいきなり手を引つ張られたのでバランスを崩しそうになったが、踏ん張りなされるまま後に続く。

「尊君！？ いきなりどうし」

瞬間、銃声が響いた。

守越尊と和音が裏路地へ入ると同時に数十発の弾丸が二人へ向けて飛んできた。

答える間も無く守越尊は和音の手を引いて裏路地の奥へと突き進む。

（反対側に渡れたのは良かったけど、あいつらはいつまで追ってくるつもりなんだ！？ それに）

「無事でよかったけどなんであんな所に！？」

守越尊は少し振り向いて和音に問いかけた。

「色々あったんだけど」

と和音はフと目線を落とす。何らかの偶然ではあるが今日一番の『幸せ』にめぐり合え、さらには手を繋ぐというおまけ付き。本来

であるならば喜びを露にしても良いシチュエーションなのだが、どうもそういう訳には行かないようだ。

「これは一体どんな状況!？」

守越尊は先ほどと同じように一直線ではなく、裏路地をジグザグに走る。

「詳しい事は分からないけど、今日の学園都市は何かが起こってる。ほとんどの人が眠ったように倒れてるんだ」

「うん、私も見たよ」

「中には俺達みたいに無事な人間もいるみたいなんだ。その中の一人に会いたいと思ってるんだけど」

「それとあの人たちは何か関係があるの？」

「あいつらは　っ!？」

守越尊が曲がった先は行き止まりだった。

「クツ、こつちだ!」

すぐさま守越尊は和音の手を引き反対の通路へと走っていく。

「そいつがあいつらに襲われてるのを目撃したんだ。そしてら俺も見つかって今こうして追われてる」

「その人も危ないんじゃないの!？」

「当麻は大丈夫だと思う。確信って訳じゃないけど、なんだかんだあいつはすごいヤツだから」

問題はこの状況をどうするかだ。

上条当麻に会うにしる、また和音を巻き込んでしまっている。

(このまま逃げてても埒が明かない……なら)

守越尊は和音の手を握っているのとは逆の右手で右目を軽く触った。

『神の目』

(切り抜ける為には使えないのか……)

守越尊に宿る神の体の一部とされる力。やはり使わなければこの場を切り抜けられそうにない。

しかし、守越尊は無闇にその力を使いたくないと思っていた。

頭に過ぎるのはやはりシエリー・クロムウエルの言葉だ。

『父親は魔術師に殺された』

『母親は自分を産んだために死んでしまった』

こんな状況に陥っていたとしてもその会話が頭を過ぎってしまう。かつては二人の超能力者^{レベル}と対等に戦ったこの力。それを言えば追ってくる黒ずくめの者達をどうにかしてこの状況を打破する事が出来るかもしれない。

しかし、この力が父と母の命を代償として手に入った力だとすれば、そんな力は使いたくないと守越尊は思っていた。

それが『神の目』を使わずに逃げていた理由。

もしも学園都市で起きている事件の犯人に会った時どうするつもりだったのかと聞かれれば分からなかったが、それでも極力この力に頼りたくなかった。

だが、今は近くに和音がいる。

再び彼女を巻き込んでしまった以上、和音を危険な目にあわせる訳にはいかない。

守越尊は裏路地を抜け出して通りに出た。

そのまま中央部分まで走り、

「和音、そのまま走って建物の影に！」

立ち止まると同時に反転し、裏路地の入り口へと目を向ける。

「でも尊君は!?!」

「あいつらをどうにかしない限りずっと逃げる事になる。だからここでどうにかする」

「私も一緒に」

「ダメだ、早く隠れるんだ!」

しかし、和音は動かなかった。

「私だって何かできるよ!」

「クソ、なら俺の後ろから離れるな!」

和音を背に守越尊は足を開いて重心を落とす。

同時にガチャガチャと金属のすれる音が近づいて、裏路地の入り

口から四人の黒ずくめ達が出てきた。カチつと銃を構え、いつでも引き金を引くだけで一秒間に何発出ているのか分からないほどの銃弾が銃口から発射される。

それらは全て守越尊に向けられていた。

背中に冷たい汗が流れ落ちる。いかに『神の目』などと言う力を持っていてようと守越尊は高校生だ。銃口を向けられればどうにかなると思っただけでも手に汗握る物がある。

しかし、そんな状態で背中から声が聞こえる。

「尊君……」

名前を呼ばれるが、黒ずくめ達から目を離してしまえばその瞬間に発砲されてしまうだろう。それでも和音は口にする。

「尊君……あれ……」

守越尊の視界にも変化が現れていた。

今の今までこちらに向いていた銃口が一緒にして別の方向へと変更されたのだ。奇しくも和音が向ける視線の先へと。

守越尊もそちらへと視線を移した。

その視界に入ってきたモノは不思議なモノだった。

まずはその姿。服装はワンピースの様な黄色い服装で髪は顔で束ねた布で覆われている。顔には鼻や目の周りにピアスが取り付けられていて顔を形が崩れるほどだった。さらにその右手には一メートルを越す巨大なハンマーが握られている。

そして極めつけは、その人物は左手で口を押さえ、その隙間からはどろりとした血液が零れ落ちている。何処かに怪我をしているのか分からなかったが、その異様な姿にその場の全員がその人物に目を向けていた。

その人物はふと立ち止まり

「おやおや、まだ影響を受けてない奴らがこんなにいたなんてね。その連中はさっきの奴らの仲間かしら？」

声色から女性と思われる人物は口元についた血を拭いながら黒ずくめ達に視線を移した。

手が退いた事によって口元が露になったが、ピアスは口元にまで及んでいる。女性であるにも拘らず顔のバランスは完全に崩れてしまっており、目元に施された強調するようなキツイ化粧の所為もあって威圧感は余計に増していた。

黒ずくめ達はその言葉に反応したのか、銃を構え直して完全に標準を超越尊と和音からその女に移行していた。

「そんな物でどうにかなると思ってる時点で甘ちゃんよね。ほら、とりあえず撃ってみれば？」

その女は挑発するような言葉を連呼していた。

その挑発に乗るように黒ずくめ達は一斉に引き金を引こうとして、バタつと倒れた。何の前触れもなくいきなり眠りに落ちたようにその場に崩れ落ちていく。一人が倒れ、そして二人三人と連鎖反応の様に地面に倒れて行き、一瞬にして四人は地面に倒れこんだ。その光景は超越尊が始めに見た警備員達アンチスキルに似ていた。

「あんたらじゃ役に立たないわね」

女はその場から一步も動いていない。まるで睨みつけただけで黒ずくめ達が倒れてしまった様に見える。

さて、と女は視線を移した。今度はそれを見ていた学生らしい二人に。

「以外にしぶといのね、この学園都市って。もう九割方侵食が進んでると思っただけだ」

「侵食って、町のみんなが倒れているのは貴方の所為なのね!？」

「だったらどうする訳？」

相変わらずの挑発するような口調で女は答える。

「他人の心配なんかしないで自分の心配したらどう？　ってもう遅いか」

なに？　と超越尊が考えた瞬間、

トン、と肩に何かがもたれかかった。サラツとした髪が超越尊の頬へと当たる。

「和音!？」

彼女はそのまま地面に落ちそうになるが守越尊はそれをギリギリで支えた。それはまさに他の人たちと同じような状態で、意識を刈り取られた様に全身の力が抜けてしまっていた。

「テメエ、一体何をした！」

女は、おやおや、と少し驚いた様な表情をして

「アンタは何ともないのね。敵意が無いわけではないし、へえ、なかなか面白いヤツね。さすがは学園都市と言ったところか」

守越尊の質問はそっちのけで女は呟く。

「まさか幻想殺しイマジンプレイカー以外に私の本命が通じないなんてね」

（幻想殺し！？ まさか当麻の事を　！？）

しかし、守越尊の思考は止まり、別の物に目を奪われた。

ゴボっと女の口から赤い塊が零れ落ちたからだ。口を覆う手の隙間を縫って大量の血が地面へと滴る。

「クソ……一体なんだ、さっきからこれは」

先ほど血を吐いていた事からどこかに傷を負っているのかと思っていたが、そうではないようだ。女の発言からも、何故そんな事になっているか自分でも分かっていないようである。

守越尊はどうすればよいか一瞬と惑った。犯人と出合ったと思いきやいきなり吐血したのだ。

「喜べ、本当なら相手をしてやろうと思ったが見逃してやる。こいつの正体も気になるし私の目的は幻想殺しイマジンプレイカーだけだ」

「やはり当麻を！？」

「じゃあね、少年」

女が口を開くと細い鎖がじゃらじゃらと落ちた。女の舌と繋がったその鎖の先端には小さな十字架が取り付けられてあった。右手に持つハンマーを横殴りに振るうと同時に、十字架のついた鎖が上下に動きハンマーと交差して火花を散らす。

瞬間、風の塊が守越尊の頭上から地面へと降り注いだ。

ガゴン、と地面が凹み、衝撃でアスファルトの破片が飛び散る。

守越尊は支えていた和音を抱きかかえて破片から守った。衝撃が

止み再び女に目をやったときにはそこには誰もいなかった。

残るのは地面に落ちている大量の赤い塊だけ。

再び、その場に立っているのは守越尊だけとなった。

6 - 6 「事件の中心へ？」（後書き）

もちろんこれで終わりではありませんので、
今後も頑張ります。

感想やご意見よろしくお願いします。

6・7 「中心点」(前書き)

最近、一話一話が少し短くなってますね。基本5000字を目標にしていたのですが、どうも文章が思いつきません。ですので今回も少し短めです。

守越尊は和音を抱えて街中を歩いていた。背中に彼女を乗せている為、前に垂らしたスポーツバッグが歩きたびに足に当たり少し歩きづらい。

街中にはやはり立っている人はいなかった。その多くは警備員アンチスキルであり中には管轄外であるはずの風紀委員ジャッジメントらしき学生の姿もあった。

とりあえず守越尊は明かりのついた店へと足を進める。ファーストフード店らしき店の中にはやはり客はいた。だが、予想していた通り全員意識を失っていた。客はテーブルへともたれ掛かり、従業員は通路で倒れていた。一応声を出して呼びかけてみたが応答はない。恐らく厨房でも同じように従業員が倒れているだろう。

守越尊は空いていた四人がけのテーブルへと近づきそこへ和音を座らせた。眠っている和音は絵本に出てくるお姫様のようだった。毒リンゴを食べて、それこそ王子様の魔法のキスによって目覚めるのであればそうしてあげたい。しかしそんな事では目を覚まさないだろう。

犯人は先ほどのあの女に間違いは無い。去り際に見せたあの十字架。あんなオカルトな物を付けている者などこの学園都市にはないだろう。なら考えれる事はただ一つ。

（あの女、魔術師か）

守越尊はスポーツバッグを和音の隣に置くと、その中から白い緑の柄が入ったTシャツを一枚取り出した。本来ならばイギリスへ行った時の着替えとして持って行っていた物だ。それを和音の胸元あたりにそっとかけた。

例え意識が無くても濡れたままの服で長時間いれば風邪を引いてしまう。しかし守越尊に出来るのは自分の持っているTシャツをか

けてあげる事くらいしかできない。精一杯の配慮だった。

そうしながら、守越尊は少しずつ今までの少ない情報で思考をまとめる。

(あの女は幻想殺しが狙いだと言っていた。つまり狙われているのは当麻か)
イマジンブレイカー

席から離れて店の出口へと向かう。途中従業員が床に倒れていた
ので近くの座席へと移動させた。

(なら、あの黒ずくめ達はなんだ？ 当麻を追っていたし、でもあの魔術師の仲間って訳じゃなさそうだ)

店の出口を出ると、雨脚は先ほどよりも弱まっていた。小雨といえる程度に収まっているが、すでに濡れてしまっている守越尊にはあまり関係がない。

(仲間じゃないけど、同じ様に当麻を狙っていたって事か?)

ならばやはり上条当麻と合流する必要がある。すでにあの魔術師と出会っている可能性もあるが、もしそうでない場合は伝えてあげなければならぬ。それにあの魔術師が上条当麻を狙っているのであれば、当麻に会えばあの魔術師とも会う事が出来ると言っただ。
(あの魔術師が魔術で学園都市のみんなをこんなにしちまつてるんなら、治す方法もあの魔術師が知ってるって事だよな)

黒ずくめ達も気にはなるが、やはり優先すべきは意識を失っている人たちだ。そう思った守越尊はポケットから携帯電話を取り出した。始からこうすれば早かったのだが、黒ずくめ達からの逃走や和音との接触、さらにあの魔術師と色々立て続けに物事が起こった為にそんな時間すら確保する事が出来なかった。

守越尊は電話帳の中から上条当麻の電話番号を探し出し、そして通話ボタンを押そうとして

ドッ！！ と、夜空を閃光が駆け抜けた。建物の向こうから放たれているであろう光は、まるで目の前でランプカーがライトを突然つけたように眩しかった。さらに、手を上げて光を防いでいた守越尊に一步遅れて音と衝撃が襲った。

「ぐあぁっ！」

その衝撃で自動ドアのガラスへと背中を打ちつけた守越尊の肺から一気に空気が吐き出される。ガタガタと衝撃で店のガラスが悲鳴を上げるように音を立てて次々と崩れていく。

(何……が?)

吐き切った息を一気に吸い込んで守越尊は地面に手をつけて立ち上がった。後ろにある自動ドアは無事のようにだが店のガラスはほとんどが碎けて店の中へと飛び散っていた。先ほどチラツと見ただけが窓側の席には奇跡的に誰も座っていなかったハズだ。多少の怪我人は出ているかもしれないが、恐らく今の衝撃で大怪我をした人はこの店の中にはいないだろう。

「クソ、一体何が？」

凄まじい閃光だった。雷の様に光が先に届き、少し送れて音と衝撃が襲い掛かった。

「まさか、これもあの魔術師がやったのか」

ありえなくはない。この学園都市の既に九割の侵食していると言っていた。つまりは二〇〇万人に近い人間がすでに意識を失っている事になる。そんな魔術を使いこなす魔術師なら、この様な魔術を使ったとしても不思議ではない。

と、

「おい……なんだよ、あれ」

守越尊は気がついた。

数十メートルある建物の向こうに見える無数の光。

その光はまるで生きている様にうごめき、それは翼の様に天へと高く広げられていた。数十もの光の翼は眩い光を放ち、そしてゴゴゴと翼を広げる毎に建物が崩れるような音が響いてくる。

「意識を奪う次は無差別攻撃かよ！」

守越尊はあの魔術師の言葉を再び思い出す。

『私の狙いは幻想殺し』
イマジンプレイヤー

上条当麻一人を狙う為にここまでする必要があるので、と守越尊

は素直に思う。確かに上条当麻の右腕にはイメージブレイカー幻想殺しと呼ばれる異能の力ならどんな物でも打ち消してしまう力がある。上条当麻もその力の影響か分からないが、数々の事件に巻き込まれて今や世界で起こっている事を中心にいる、と天草式の建宮斎字や五和が言っていたのを思い出す。

しかし、この攻撃は上条当麻を狙っているモノには見えない。意識を奪う魔術にしる、今行われている攻撃にしる、無差別としか言いようが無い。もはや学園都市の誰でもいいから攻撃する、そうにしか思えなかった。

そんな考えをしている最中にも無数の光の翼がうごめき、閃光から少し遅れて轟音が鳴り響く。

ゴッ！！と、残像を残した雷撃は守越尊の頭上を越えて遠くから音が聞こえた。

もしかしたら学園都市の外まで届いているかもしれない様な攻撃。轟音に遅れて衝撃波が守越尊を襲った。

「誰でも……いいつてのか」

衝撃波に倒れそうになりながらも守越尊は吐き捨てた。

そして湧き出てくる一つの感情。それは心の奥に押さえ込んであった小さなモノだったのかもしれない。感じていながらも無意識の内に押し止めていた小さな感情は、偶然にも思い出してしまった一つの事柄によって爆発的に巨大化していく。

『父親は魔術師殺された』

瞬間、光り輝く無数の翼が守越尊を襲った。それは狙って放たれたモノなのか、偶然ここに放たれたのか。光の中心から放たれた刃は後ろにあるファーストフード店諸共守越尊に容赦なく襲い掛かった。

地面は陥没し建物は崩れ落ち、巻き上げられたコンクリートの塊は次々と地面に落下していく。

破壊の一撃。

閃光より少し遅れて轟音と衝撃波が襲い、その場の全てを粉々に

破壊する。そこには大きなクレーターが残り、生存者すら望む事が出来ないそんな場所へと変わり果ててしまう。

そうなってしまってもおかしくない一撃だった。

「ふざけるなよ」

建物は無事だった。ガラスが割れてしまっているのは初撃による衝撃波の所為であって、今の攻撃で建物にはなんの影響も出ていない。中にいる客も従業員も、そして和音にも何の変化もなかった。

守越尊は視線を落としたまま立ち尽くす。まるで嵐が起きる前の静けさの様に俯き、しかしその握り締めた拳は振るえ、そして

「あのヤロウがあ！」

ドツと地面が爆発した。

次の瞬間には守越尊の姿は上空にあった。地面を爆発させたのは踏みつけた衝撃だ。『神の目』を発動し天人としての力を解放した守越尊は、数十メートルの高さがある建物の屋上へと降り立つと同時に再び力強く足を踏みつける。

ガコン！ と建物の屋上へと降り立つたびにコンクリートがめくれ上がり、守越尊は矢の如く移動していく。

目指すは光の中心点。

6・7 「中心点」(後書き)

こんな展開はどうでしょう？

6・8 「正当化」(前書き)

とりあえず、書きたい事を言葉にするって難しいですね。

守越尊は光の中心にたどり着いた。

第七学区の一角に位置するその場所は、本来ならばデパートや有名な企業の建物が立ち並んでいる高級感あるエリアであり、昼間の時間であれば常盤台中学や霧ヶ丘女学院などのお嬢様校の生徒が歩いていたりするハズだった。

そこが完膚なきまでに破壊されていた。

半径一〇〇メートル前後の建物は傾き、崩れ落ち、建物の一階部分だけを残して削り取られたようなモノまで存在する。

建物の中には先ほどのファーストフード店の様に魔術師の魔術によって意識を奪われた人間がいたのである。この周囲にどれだけの人がいたのだろうか、考えたくも無い光景だった。

そして、その中心に立ち尽くす一つの存在。

守越尊は光の正体はあの魔術師による攻撃であると考えていた。学園都市の人間の意識を奪った上に捻じ伏せるような力で全てを破壊する。それが一連の流れの様に思えたからだ。

しかし、その場にいたのはあの女の魔術師ではなかった。

なぜ、別の可能性を考える事が出来なかったのか。

それは予め決められていた様な事件の運び。

父親は魔術師に殺されたと言う事実を聞かされて直ぐに学園都市を魔術師が襲った事。

その魔術師によって学園都市のほとんどの人間が意識を失ってしまっているという事。

そして無差別の様な光の翼による攻撃。

偶然にも繋がってしまった事柄によって守越尊は思い込みをしまっていました。

衝撃と爆発によって出来たであろうクレーター。その場所にあつたであろう建物は跡形も無く消えてしまっている。頭上から降ってくる粉は恐らく爆発によって巻き上げられた地面や破壊された建物の残骸であろう。

その光の中心にいたのは守越尊も知る人物だった。

人物の名は、風斬氷華。

腰まである長い髪は少し茶色の混じった黒で、上下青のブレザーとスカートや赤いネクタイは霧ヶ丘女学院の制服だ。

大人しくて、気弱で、人に危害を加える事など絶対に出来ないような女の子だったハズだ。

しかし、そんな記憶を全て塗りつぶしてしまいそうなくらいの光景が目の前にはある。

「この破壊は全部あんたがやったのか」

ダラリと垂れていた頭が僅かに動いた。

半開きの唇からは舌が飛び出し、見開かれた眼球は瞬きをすることもない。その姿に以前の彼女を連想させる事が出来ない。

彼女は何も言わない。その代わりと言わんばかりにガリガリガリ、と金属を擦るような音と共に風斬氷華の頭上にある光の輪が高速で動いた。それと同時に頭につられて首から下も向きを変え、さらには背中から広がる無数の光の翼が蠢きぶつかる毎にバチン、と青白い閃光が瞬く。

頭上に輪をつけ背中からは光の翼を生やし、その姿はまるで天使のようだった。

当てが外れてしまった。

魔術師の攻撃だと思っていた光の翼は風斬氷華だった。

学園都市に存在する能力者達が発するAIM拡散市力場によって形取られた存在。それが故に風斬氷華は正確に言えば人間ではない。しかし守越尊の知り合いでもあり、上条当麻の、そしてインデックスの友達だ。

ならば守越尊はどうすればよいのか。

湧き上がってきた感情は行き場を失い体中を駆け回る。しかし向けるべきであった魔術師はこの場におらず、目の前には別人のような風斬氷華しかいない。

ズン、と低い振動が伝わってくる。風斬氷華が一步踏み出した音だ。細身の足で歩いているのにも関わらず響いてくる振動は、重量のある物体が動いていると言うよりも重圧によって生み出されているようなモノだった。背中から生えそびえる無数の光の翼はぶつかる毎に火花を散らし青白い閃光を放つ。

「なぜあんたがこんな事をするんだ？ あんたはそんなヤツじゃなかっただろ」

しかし風斬氷華は答えない。と言うよりも答えられないのかもれない。彼女が別の行動をしようとしていても無理やり修正される、そんなイメージさえ感じられる。

風斬氷華が頭の向きを変えても、その場に立ち尽くそうとしても、頭上にある輪から棒状のモノがガシガシと高速で出し入れされ、それに合わせて風斬氷華が動いているようだった。

強制的に意思とは別の行動をとらされている。

「あんた、操られてるのか？」

ピタ、と一瞬風斬氷華の動きが止まるが、ガリガリと何かが削り取られる様な音と共に再び一步踏み出す。

頭上の輪からガシガシと棒状のものが高速で動き、それに合わせて背中から生える光の翼も蠢き、そして

ドツつと光の翼の一つが頭上から守越尊へと振り下ろされた。鞭の様にしなりしかし衝撃はとてつもなく巨大なハンマーのようで、青白い光の翼は辺り一面を再び破壊するかの如く力を放つ。

ガゴン！ と両手でそれを受け止めた守越尊の足が地面に減り込み、衝撃で辺りの地面から砂塵が舞い上がった。

受け止めた時に発生した衝撃波は水辺に水滴が落ちた時の様に波纹となつて周囲へ撒き散らされた。ビリビリと倒壊しそうな建物が揺れ、コンクリートの破片がパラパラと舞い落ちる。

「あんたに手え出したら当麻やインデックスは怒るよな」

ベコ、と減り込んでいた両足を地面から抜くと守越尊は独り言の様に呟く。

「でもな、あんたが放ったそれで俺の友達が巻き込まれるところだったんだ。もちろんあんたがそんな事を望んでいない事くらい分かる。操られているみたいだしな」

守越尊は風斬氷華から一定の距離を保ちつつ彼女を中心に円を描くように歩き始めた。風斬氷華はその姿が視界から消えるたびに足を動かし向きを変える。その都度、ズンと低い振動が伝わってきた。「でも、俺にも色々あるんだ」

ザツと足を止めた守越尊は風斬氷華を正面に見る。

「あんたがこれ以上学園都市を壊すってんなら、俺もそれを守るって肩書きでこのぶつけ損なったモノをあんたに向けさせてもらう！」それに答えるように言葉の代わりに頭上の輪が高速で回転する。

それに合わせてグネグネと蠢きながら放電する光の翼は、バチバチと閃光を放ち、まるで攻撃前の慣らしにも見えた。

「だからあんたも俺だけを狙えよ！」

同時に光の翼は振り下ろされ、守越尊は砂塵を巻き上げながら地面を蹴り飛び出した。

その瞬間、窓のないビルの中で一人の人間が薄い笑みを浮かべた事など守越尊は知る由も無い。

12

『神の目』を発動している守越尊は人知を超えた力で光の翼を受け止めた。ゴン！とその衝撃波で地面や建物がビリビリと揺れる。一撃で辺り一面を破壊してしまった攻撃をただ受け止めるだけでは、恐らく神の目を発動してもただではすまないだろう。さらには、力の大きさの割りに衝撃波は巻き起こるがビリビリと伝わる

程度しかない。

シェリー・クロムウェルが生み出したゴーレムと戦った際のインデックスの分析によれば、同じ術式をぶつける事で相殺している、との事であった。

アクセラレイター
一方通行戦においても反射を貫いて一方通行へとダメージを与えていた。それも同じ事が言えるであろう。

同じモノをぶつける事によって相殺する。

光の翼も同じように相殺する事によって力を分散させ衝撃を少なくしている。

「はは、なんでこんな事になってんだろうな」

守越尊は地面を蹴り風斬氷華との距離を詰める。ガリガリと頭上の輪が高速に動き、光の翼が数十本風斬氷華の前に盾となる様に交差した。

ガコン！ と守越尊の放った拳と光の翼がぶつかり合う。ギシギシと守越尊の骨がきしむ音が聞こえるが光の翼を貫くまでには至らない。

「俺は何がしたいんだろうな。顔も知らない父親の仇を討ちたいのか？ この学園都市を守りたいのか？ 何であんたに八つ当たりしたんだ？」

バチン！、と上空で閃光が瞬いた。無数もの翼が近づく度に電光が走り、それが矢の様に守越尊へと降り注いだ。

守越尊は後方へ飛びながらそれらを避けて、最後の一つを受け止めかき消した。地面にはまるで地雷が爆発したような穴が無数空いて凸凹している。

「この力をこんな事の為に使っちゃいけない事くらい分かってる。これは自分の感情を発散させる事なんかに使っちゃいけない力って事も、これがただの正当化でしかないって事も」

ドクン、と心臓が喚いている。これ以上の酷使は体がつぶれてしまつと。所詮は人間の体でしかない守越尊が、制御もせず力解放すればどうなるかは自分自身でもよく分かっている。

「でも根本の部分が分からない。何をしたいのか、何をしなくちゃならないのか。それこそ頭の中がグチャグチャなんだ。……あん時のシェリーもこんな感じだったのかな？」

風斬氷華は何も答えない。

代わりに高速に回転した頭上の輪がガシガシと動いては、光の翼も力を微調整するようにチカチカと瞬いている。そして、

轟！ と破壊の一撃が振り下ろされた。蛇の様にうねりながら光の翼は守越尊に襲い掛かる。

ゴオン！ と光の翼と守越尊の突き出した両手がぶつかり衝撃を巻き起こし、守越尊が後方へと数十メートル吹き飛ばされた。

背中を地面に叩きつけ、肺から酸素が全て逃げていく。一秒ほど心臓が止まったかと思うような間を開けて、再び肺に酸素が戻り心臓が動いていることを確認できた。

「いつもより、早いんじゃないか……？」

地面に手をつけて上半身を起こした守越尊の目に青い光はなかった。

(……能力者も精神的要素のよって出力が変わるって授業で言ってたっけ)

「はは、感情に任せて力を使った……代償か」

振り向く先には天使をイメージさせる風斬氷華が低い振動を響かせながらゆっくりと歩を進めていた。

守越尊にはもはやどうする事も出来ない。『神の目』を発動していない今、守越尊はただの高校生でしかない。その状態で光の翼を食らえば跡形も無く消し飛ぶだろう。

しかし、一定の距離まで来た風斬氷華をそれ以上こちらに近づこうとしない。ガリガリと頭上の輪が高速回転しているが、何か必死に別の方向へと振り向こうと抵抗しているようにも見える。

そして、

「風斬イイイイイッ！」

その声の方向へとゆっくり顔を向けようとするがギギギと強制

的に顔の向きが修正された。

その声の主はクレーターの壁を下り、凸凹の地面を駆けてくる。

「尊！ 何やってんだこんなところで！」

駆けつけた上条当麻は守越尊の傍でしゃがんだ。

「何って当麻、八つ当たり……かな」

守越尊は視線を移した、それに合わせて上条当麻もそちらを向く。

「多分……操られてるぞ」

「ああ分かっている。風斬が自分の意思でこんな事をするハズがねえ。それに、あんなのって……」

ギシギシと上条当麻の歯噛みする音が聞こえる。

「くそ、ふざけんじゃねえぞ！」

上条当麻は立ち上がり風斬氷華へと駆け寄ろうとして、直ぐに立ち止まった。

気がついてしまったのだ。

近づいてどうするのか。何ができるのか。

上条当麻の右腕では彼女をどうにかする事は出来ない。触れれば風斬氷華と言う存在を問答無用に消し去ってしまう。

「ちくしょう……ッ！」

上条当麻は自分右手を地面に叩きつけた。自分の力の無さを嘆くように自分の小ささを改めて実感するように。

そして、聞こえてくる一つの足音。

「おやおや、大罪人同士、キズの舐め合いでもやってるトコだったかしら。まあ一人余分なものも混ざってるみたいだけど」

目を向ける先には黄色いワンピースの様な服を纏った、顔中ピアスだらけの女。

ローマ正教、『神の右席』前方のヴェント。

その魔術師の姿があった。

6・8 「正当化」(後書き)

この章を乗り切れば次章は……
とにかく頑張ります。

6・9 「前方のヴェント」(前書き)

総合ポイント900突破です。ありがとうございます！

6・9 「前方のヴェント」

13

「当麻……あの魔術師はお前を狙ってるぞ」

「ああ分かつてる。ローマ正教『神の右席』、前方のヴェント。もう面識ありだ」

ヴェントは笑っていた。手には有刺鉄線の巻かれたハンマーをぶら下げ、口からは鎖が腰まで垂れ下がり先端に付けられた十字架がキラキラと時折光っている。その口元は赤い血で染まっている。返り血では無い。自分自身の吐血。

それでもヴェントはニヤニヤと笑う。

「せっかく後回しにしてやろうと考えてたのに、自分からノコノコと前に現れるなんてね。これ以上悲惨なモンを見たくないから先にぶっ潰して欲しいってコトかな」

「風斬はやらせない」

「へえ、あんなのにも情が湧くんだけだ。黙示録に登場する『特大の淫婦』よりも醜く汚れた冒？の象徴だったのに」

「テメエ！ 撤回しやがれ！」

ヴェントは右手に持っていたハンマーを肩に担ぐ、その動作に何かの意味があるのかは分からないが、やれやれと全く感情のこもっていない口調で

「これだけ敵意を出されても効果なしか。厄介な右手よね、それ。予め予想はしてたんだけど。それよりも」

ヴェントは上条当麻から少し視線をずらした。

「その不思議少年は未だに理解できないんだけど」
ヴェントの本命は天罰術式だ。

何処の誰だろうが、神様に唾吐くものは許さないという理屈により、術者であるヴェントに悪意や敵意を抱いたものを距離や場所を

問わずに昏倒させる魔術。また一度姿を認識しさえしてしまえば、時間が経過してから思い返して敵意を向けてしまった場合でも影響下に入り昏倒してしまう。

本命である天罰術式が上条当麻に通用しないのは理解できる。幻想殺しが天罰術式をも打ち消してしまっているからだ。ジブレイカー 幻イマ

だが、目の前の少年はどうだろう。

その目は明らかにヴェントに対して敵意を放っている。にも拘らず昏倒するどころか、一層悪意や敵意が増加しているようにも見え
た。

「誰に向かってそんな目を向けてるか分かってんの」

「魔術師……だろ」

「『神の右席』ね。で、あんたがそこまでして敵意を向ける理由は何かしら？」

「父親が魔術師に殺された。……友達が目の前であんたの術式にやられた。学園都市がこんな事になっちまってる。敵意を向ける理由なんてそれだけで十分だろ！」

反動で動かなくなった体に鞭を打ち守越尊は立ち上がる。

「尊、お前そんな体で一体どうするつもりだ！ それに魔術師に殺されたってどういう事だよ！？」

「ハハ、まだあるぞ。俺の母さんは俺を産んだために死んだとかな」

ユラユラと足元の覚束ない状態で守越尊は歩を進めた。

「お前……」

「で、私にどうしろって言うの？ 哀れんでほしいとか？」

「そういう訳じゃない。ただ、もう少し早くあんたに会えればあの子に八つ当たりなんかせず済んだのにな。あんたを倒して父親の仇を討って学園都市も救う。そんな正当化も出来たのに」

「ハッ、笑わせるな。自分だけが何かを抱えてると思ってるんじゃないぞ！」

カチン、とヴェントの振るったハンマーと十字架が交差する。十字架の描く軌道に合わせて風の塊が守越尊へと飛ぶ。

歩く事に精一杯の守越尊に避ける力など残っていない。倒れる事くらいなら出来そうだが、それでも風の塊を避けれるか分からないと、

ドン、と横から突き飛ばされた。

上条当麻が守越尊を横から地面へと突き飛ばし、そして右手で風の塊をかき消した。

「バカ野郎、何やってんだ尊！」

倒れた体を起こして守越尊は投げ捨てるように呟く。

「所詮、犠牲の元に生まれた命だぞ」

「本気で言ってるのか！」

「おやおや、仲間割れかしら」

その光景を楽しむかのようにヴェントは笑う。

「その少年、あんたがそんな事で私に敵意を向けるなら、私と何も変わらないわね」

ヴェントがハンマーを振り上げるとそれと同時に、鎖の先端部分の十字架が柄の部分へと巻きつく。

「弟を殺されて科学を恨む私とね！」

地面にハンマーを叩きつけると風の塊が飛び出した。地面を走るように向かってくるそれは、土に埋もれるアスファルトやコンクリートの破片を巻き上げながら上条当麻と守越尊へと襲い掛かる。

バシユ、と上条当麻の突き出した右腕がヴェントの風の塊をかき消した。しかし、瓦礫は止まる事なく二人の体へと巻きあがった。

「科学に、殺されただと」

腕で顔を隠し瓦礫から身を守った上条当麻は呟いた。無数の破片は細かいながらも露出している皮膚や衣服を傷つける。

ゴボ、とヴェントは吐血した。手で口元を拭い、ハンマーの重りに耐えなかった様に多少フラつとよるけながらも続ける。

「何が科学の最先端だ、何が何重もの安全装置だ。それでも事故は起きた。所詮科学なんてそんなモノ、その後ろにある墮天使のようなクソみたいなモンだ！」

瞬間、ゴオンという轟音が響いた。

その音はヴェントから放たれたものではなかった。自分達よりも後ろ。その場所にいるのは一人しかない。

「風ぎ」

衝撃波は後から来た。

先ほどまで何事もなかった風斬氷華が破壊の一撃を放っていたのだ。光の翼の電光は学園都市の外部にまで及び、爆風によって地面が上空まで巻き上げられた。

守越尊へと向けられていた力が再び他の何かへと向けられていた。「これがあんた達科学。私の弟を見殺しにしか出来なかった憎き科学！ 幼い弟の言葉を鵜呑みにして私だけを助けた怨むべき科学！ あんたらもその一員なのよ！ 気持ち悪いと思わないワケ!？」
衝撃波後の不意についてヴェントがハンマーを振るうと同時に地面を蹴る。

風の塊を防いだ直後にヴェントが攻撃をしかける。防ぐだけでは対応が遅れると判断した上条当麻は瞬時に同じく地面を蹴った。

風の塊を右手でかき消し、すぐさま拳を引き戻してヴェントが振りかざしたハンマーに向けて拳を放った。

「チッ！」

上条当麻の拳がハンマーに触れる直前にヴェントのハンマーが消えた。即座に左手にハンマーが移り、上条当麻の右手が空を切る。

ヴェントは持ち変えたハンマーを横殴りで叩きつけたが、上条当麻は身を屈めてそれを交わし、空いた腹部へと肘を叩き込んだ。

体をクの字にしたヴェントはよるめき、後方へと距離を取る。

ゴボ、と再びヴェントの口から大量の血が流れ落ちた。

上条当麻の攻撃ではない。別の何かヴェントの体を蝕んでいるように見える。

「何でそこまでする理由があるんだ!？」

ピッ、とヴェントは口に溜まった血を地面に吐くと

「言ったでしょ、私は科学が憎い。弟を殺した科学が憎いつてね」

そして地面に零れた自分の血を一瞬眺めて、

「B型RH-。珍しい血液らしくてね、輸血のストックなんて簡単には手に入らない。最先端とかぬかいていた遊園地のアトラクションで事故にあつた私達姉弟二人分の血液は用意できない。一人分しか集まらなかった」

ヴェントは地面の血を踏みつける。

それこそが元凶であるかのように、グリグリと踏みつけた足を動かす。

「そして私だけが生き残った！ お姉ちゃんを助けてくださいって、そう言ったあの子は見殺しにされた！」

口から未だに血が流れながらもヴェントは続けた。

「私は科学が人を救うなんて信じない。奇麗事の単語ばかり並べて、結局の本質なんてその天使と一緒に。科学なんて所詮そんなモンだ！」

ヴェントはハンマーを振り上げ、地面へと叩きつけた。その動作に切れはなかった。ハンマーの重りに振り回されている、そんな感じさえ見て取れた。

生み出された風の塊は上条当麻から外れていた。標準が外れた。

そう思わせるような攻撃だったが、

「しまっ」

上条当麻の数メートル後方には守越尊がいた。

先ほど上条当麻によって突き飛ばされた守越尊は二人の見える事しか出来なかった。立っているだけでも精一杯の状態。

そんな守越尊に標準が合わされていた。

瞬間、砂塵が巻き起こった。ただ無防備に立っていた守越尊の周囲の地面が爆発し、その姿が確認できない。

「互いを怨む者同士、文句は言えないわよね」

「デメエええ！」

風に流されて、砂塵が晴れていく。

しかしそこに、

守越尊が立っていた。

「な……？」

その姿はボロボロであるのに変わりはないが、ヴェントの攻撃で受けた傷ではなかった。つまりは先ほどの攻撃は無傷だったのだ。

上条当麻は守越尊が持っている力を知っている。インデックスとのやり取りの際、その場に居合わせていたからだ。

当然その力によるものだと思っただが、

ふわり、と光の粉の様なモノが空から落ちてきた。

よく見れば、守越尊の周りを光る鱗粉のようなモノが漂っていた。それだけでは無い。周囲を埋め尽くしている瓦礫の山には倒れている民間人の姿があるが、そこにもその鱗粉が漂っていた。

上条当麻は別の所へと視線を移した。

その鱗粉がどこから来ているのか、上空を見上げて気がついた。

光を放つ無数の翼、それらが光の鱗粉を撒き散らす。ふわふわと宙を漂い、一〇〇人でも一〇〇〇人でも包み込み守ろうとしている。ガリガリ、と頭上の輪が高速に回転していた。ギシギシと何かに逆らうように不自然な動きを繰り返す。バリッと皮膚が零れ落ち、空洞の中身が露になっても彼女は抵抗をやめない。

風斬氷華は自分と戦いながら、守る事をやめない。

「な、何やってんのよ！？ この偽善者が！」

「確かに、科学の全てが良いなんて言わない。風斬をこんなにしちまったヤツだっている。でも、こうやって必死に命を守ろうとしてるヤツだっている！ テメエを助けた医者だっけそうだ、弟も助けたかったに決まってるだろ！ でも一人しか助ける事が出来ない、そんな中でお前の弟は世界で一番すごい事をしたんだ！ それなのにテメエが科学に復讐なんてしてどうする、そんなんでも弟が喜ぶと思ってるのか！？」

クツとヴェントは歯噛みする。

「尊、お前だっけそうだ！ 自分の子供が復讐や犠牲とか気にして嬉しくないがねえだろ！ どんな理由かは知らないけど、お前の

母親は自分の命が危ないと分かっているけれどもお前を産んだんじゃないのかよ!? 父親だって復讐なんてしてほしくないに決まってるだろ!」

上条当麻は守越尊の事情を知っている訳ではなかったが、まさにその通りだと思った。

父、天城三門は愛する人を守るために魔術の裏切り者とされながら守越無月と共に逃げた。恐らく命を狙われるだろうと言う事は分かっていたはずだ。それでも守越無月を守りたかった。

母、守越無月は能力者と魔術との間に子を授かればどうなるかは予め予想はできたであろう。目の前で魔術を使おうとした能力者が血まみれになって倒れる瞬間を目撃して、それでも尊を産んだのだ。その子供が魔術に復讐を抱いたり、母親の命を犠牲にしたという重荷を背負う事を望むはずが無い。

「気がつけよ二人とも。自分がどうするべきなのかを!」

「笑わせるな。そんな事で私の道が変わると思ってるのか!? この道は私が決めた。たった今話を聞いただけのテメエに、簡単に捻じ曲げられるはずがないのよ!」

ヴェントはふらつきながらもハンマーを振り回した。生み出された六つの風は互いに食い合い、混ざり合って巨大な杭と化する。

「グオおおお!」

と何かを振り払うような雄たけびと共に巨大な杭が放たれる。

同時に上条当麻も地面を蹴って走り出す。直後に巨大な杭と上条当麻の拳がぶつかった。

ゴオン! と轟音と共に杭を上条当麻の拳が打ち砕く。

しかし、杭は一つではなかった。上条当麻と激突する瞬間にそれを避けるように二つに分離したのだ。始から二つと分かっていたら対処できたかもしれないが、それはカムフラージュされていた。

その向かう先には、自分自身と戦っている風斬氷華の姿があつて、ドガツ! と巨大な杭が打ち砕かれた。

上条当麻は別のもう一つの拳が風の杭を打ち消した。

守越尊。

『神の目』を発動させ、風斬氷華の前へと立ったその拳がヴェントの攻撃を受け止めていた。

「テムエ！ その目はッ……！」

ヴェントがそちらに気を取られている間に上条当麻は動き出していた。

「オオオおおおおお！」

数歩でヴェントとの距離を詰めて、幻想を打ち砕く右手を振りかぶる。

ヴェントはさらにハンマーを振り上げようとしたが、ゴボつと口から血が溢れた。

「お前の弟に比べれば大した事ないけど」

体勢を崩したヴェントの懐へと上条当麻は飛び込み、様々な幻想を打ち砕く為にその右手を握り締めた。

「少しだけお前を救ってやる。もう一度やり直して来い、この大馬鹿野郎！」

ゴン！ と上条当麻の拳がヴェントの鼻っ柱に突き刺さった。

数メートル跳んだ彼女の体は、濡れた地面の上を転がった。

6・9 「前方のヴェント」(後書き)

無理やりこじつけましたね。

次回は恐らく短めです。

6・10 「戦いは終わらない」(前書き)

今回は短めです。

守越尊はその場に倒れた。

「徒でさえ悲鳴を上げていた体を酷使しての『神の目』の発動。意識があるだけでも増しなのかもしれない。」

「尊！」

地面に倒れる音を聞いて上条当麻が駆け寄ってきた。

「お前大丈夫なのか？」

「ああ……大丈夫」

地面に仰向けに倒れながら守越尊は答える。少し力の無い声だったが、少し笑っているようにも見えた。

「大丈夫だ、当麻。もう大丈夫。少し吹っ切れたから」

上条当麻に支えられて上半身を起こした守越尊の表情は、少し穏やかになっていた。

自分がどうするべきなのか。

それが少し分かった気がしていた。

父、天城三門が魔術師に殺されたのは許しがたい事だ。それが例え顔も見つた事がない父親であったとしても完全にそれを許す事はできないであろう。また、自分の所為で母、守越無月が死んでしまったと言う事実も完全に振り切る事は難しいかもしれない。

それでも、天城三門は守越無月を守りたいと思った。その守越無月が自分の命と引き換えに守越尊を産んだ。

ならば、生きなければならぬ。

精一杯生きる事。それが自分がやらなければならない事だと守越尊は思った。

何故、自分に『神の目』などと言うモノが宿っているのかとか、魔術と科学の二つの血が混ざっているのか。まだまだあるかもしれない。

ないが、

まず自分ややらなければならぬ事は精一杯生きる事。それを認識させてくれたのは、間違いなく上条当麻だ。

「つたく、当麻。あんたはやっぱすごいよ」

「ん？」

「いや、何でもねえよ」

自分がどれだけすごい事をしているのかまるで認識がない様子だった。そこがまたすごい所なのだが、

と、そんな事を思いながら守越尊は視線を移した。

「風斬氷華は……大丈夫なのか」

上空で蠢いていた光の翼は沈黙していた。迸ほとばしっていた電光もすっかりなりを潜めている。

「多分、インデックスが『核』の方をどうにかしてくれただと思
う」

『核』という事は風斬氷華を操っている何かだろうが、そんな所へインデックス一人で大丈夫だったのだろうかと守越尊は思う。ただ、こうして事態が収まりつつあると言う事はうまくいったと言う事なのだろう。

「翼とかはまだ消えるまで時間が掛かりそうだけど、俺が触つちまったら風斬本体も消しちまいそうだからな。このまま、待つしかないみたいだな」

「そうみたいだな」

どうして風斬氷華があんな事になってしまっているのか分からないが、どんな事になっていたとしても風斬氷華に手を出してしまっ
た。

元に戻ったらちゃんと謝らなきゃな、と思って

ゴン！と。

突然目の前にコンクリートの山が崩れて、視界が灰色の粉塵で覆
われた。

「……!?」

二人は目を庇うように手を当てた。崩れかけていた建物が倒壊したとかそういうレベルではない。地面に埋まっていた爆弾が爆発したかの様に瓦礫の山がまるまる一つ吹き飛ばされていた。

砂塵が少し薄くなり、そこに見えてきたのは風力発電用のプロペラだった。どこからきたのか分からないそのプロペラが柱の半分ほど地面に埋まっていた。

「……ヴェントは!?!」

上条当麻は周囲を見回す。しかし、先ほどまでそこにいたはずのヴェントの姿がどこにもなかった。代わりに別のモノが視界に入ってきた。

「誰だ!?!」

「失礼」

そこにいたのは一人の男だった。

青系の長袖のシャツの上に白い半袖シャツを重ね着している。ズボンは通気性のよさそうな薄手のスラックスで壮年の男性が好むゴルフウェアを連想させた。

その男はぐったりとしたヴェントを片手で抱えていた。

「この子に用があったのでな。手荒な真似を避けるために目を眩ませてもらったが、気に障ったかね」

「誰だつつつてんだよ」

「後方のアックア。ヴェントと同じく『神の右席』の一人である」

『神の右席』と言う言葉を聞いて、二人の顔が険しくなる。

つまりこのアックアという男は、単純に学園都市の壊滅寸前まで追い込んだヴェントと同等の力を持っていると言う事になる。

今この状況でそんな力を持った者がこの学園都市を襲えば、この街は立ち直れなくなる。上条当麻も守越尊も戦えるような状態ではない。

しかし、そんな二人の表情を見てアックアは小さく笑うと

「心配しなくても良い。今日のところはこれで引き返す」

「ヴェントを離せ」

「ほう、ヴェントを離せ、ときたか」

興味深そうな声でアックアは答える。

「そいつの科学への敵対心はただの勘違いだ。そいつだって本当はその事に気がついてる。『神の右席』なんて場所にいたらいつまで経ってもその感情から抜けられない！」

「ヴェントの闇がそう簡単に打ち消せるとは思えん。それにここでヴェントを離したとして、科学側に捕縛されれば間違いなく処刑だな」

「ッ！」

身を強張らせる上条当麻を見て、アックアは笑みを深くする。

「こいつをくれてやる」

ピン、とアックアは指先だけで何かを弾いた。受け取るとそれはヴェントが舌に付けていた鎖付きの十字架のアクセサリーだった。

「既に貴様の右腕で破壊されている。だたのガラクタだ。ヴェントにはもう『天罰』は使えん、制圧された人間もすぐに回復するだろう。今はそれで学園都市の平穏を守れたという事で安心しておけ」

「そんなので納得出来る訳ないだろ！」

「一つだけ、貴様に教えてやる」

アックアは上条当麻の握る拳には目もくれず背を向ける。

「私は聖人だ。無闇に喧嘩を売ると寿命が縮まるぞ」

ダン！　と言う地面を蹴る音が響いた。

どの方向へ行ったのかも分からない圧倒的な速度。瞬きをした一瞬でアックアとヴェントは目の前からいなくなっていた。

戦いが終わっても問題は解決しない。

学園都市とローマ正教。

科学と魔術は決して交わる事はない。

アックアは学園都市の外にいた。

右手にヴェント、左手に傘を待ちアックアは周囲を眺めていた。

学園都市の外周部。あの光の翼による攻撃で地面はめくりあがり、建物は崩落し、先ほどまでいた学園都市内と差ほど変わらない風景がそこにはあった。

「何の用だ」

不意にアックアは声を発した。

本来この場所で待機するはずだった別働部隊は既に下げさせてある。そんな場所にいるという事で学園都市からの追っ手と言う可能性も考慮してみたが、そうではなかった。

「気配は消したつもりだったんだけどな」

瓦礫の山の陰から出てきたのは一人の青年だった。

全身真っ黒の神父服を身に纏っていた。服の前にはボタンが付けられていて今は全てのボタンが留められているが、外せば神父服ではなくコートの様に見えなくも無い。

そして、それに反するような金色の短髪が印象的な青年だった。

「何をしに来たのだ。貴様は本来ここに来るはずではないであろう」

「偵察に来ただけさ」

偵察か、とアックアは呟き

「そんなモノまで持ち出してか」

アックアは青年の腰に提げてあるモノを見た。

そこには一本の剣があった。

長さは一メートル程度で、柄の部分や鞘の幅的にロングソードを思わせる。柄頭の部分は円状になっており、とてもシンプルな形をしている。

「偵察と言っても対象が一つじゃないからな。一つは学園都市の偵察なんだけど、もう一つは」

あんた等が俺の獲物を横取りしないかって事さ

声の質が変わった。

先ほどまでとは全く異質の声。陽気なモノから一気にどす黒いモ

ノへと変わった声には、仲間であろうアックアにさえ敵意を発しているようにも見える。

「なるほど。なら私やヴェントが貴様の獲物に手を出そうものなら、そのトスカナガルガーノの聖剣を振るっていたと言うわけか」

しかし、アックアは表情一つ変えずに答えた。寧ろ表情には小さな笑みすら混ざっている。

「身分は弁えてるさ。それに『神の右席』と『神の右席』になれなかつた者では、例えトスカナガルガーノの聖剣のレプリカを使ったとしても勝負は目に見えているだろう」

「そうであるな」

アックアは聞き流すように答えた。その青年がそんな事をするはずが無いと信じているのか、それとも全くのその逆なのか、どちらかは分からない。

「さて、偵察も終了したし、そろそろ帰りましょうかね」

陽気な声で青年は頭の後ろに手を組みながら呟いた。あのどす黒い感じなど微塵も見せずに、まるで残業の終わったサラリーマンが言うような口調で言う。

「それじゃ、お先に失礼しますよ。後方のアックアさん」

青年はそのまま歩きながら暗闇に消えていく。鼻歌交じりの陽気な様子で、そのまま歩いて帰るのではないかと思わせるようで、緊張の欠片も見当たらない。

そんな姿を見てもアックアの表情は変わらない。

ヴェントと傘を手に持ちながら、その青年の背中を見ている。

「『神の右席』になれなかつた男か」

アックアは小さく笑った。

「なれなかつたのと“ならなかつた”のでは大違いであるがな」

6・10 「戦いは終わらない」(後書き)

さて、ようやく個人的に一番やりたかった章がやってまいります。
暖めていたネタを開放する時が近づいているようです。
頑張ります。

7・1 「一〇月五日」(前書き)

さて、新章突入です。

7-1 「一〇月五日」

1

戦争が起きようとしていた。

九月三〇日。学園都市は正式に魔術集団の存在を肯定した。

ローマ正教内には『魔術』というコードネームを冠する科学的超能力開発機関があり、そこから攻撃を受けたと報告書をまとめた。

ローマ正教では学園都市の内部で『天使』の存在を確認。

十字教の宗教的教義反する冒？的な研究が行われているとして、ローマ教皇自らが学園都市を非難した。

学園都市とローマ正教の正面対立。

それにより、ここ数日間の間で各地では様々なデモ抗議が起こり始めている。

学園都市内でもそれに見合わせるように、『迎撃兵器ショー』などという物騒な名称のイベントが開催され始めていた。

一〇月五日。

世界がそのように大変な状況を迎えつつある中、守越尊もまたある意味大変な状況に置かれつつあった。

「……」

素人が見ても分かるほど理想的な角度。

流れるようにスムーズで無駄の無い動き。

思わず見とれてしまうほど、芸術的と言えるだろうライン。

「凄すぎだろ……」

しかし、それ故に大変だった。

「ふう。あれ？ 尊くんは泳がないの？」

第二〇学区に設備されているとあるスポーツジム。

二五メートル×八コース。ジャグジーにアイシングプールなどなど、娯楽施設ではなく、アスリート向けに作られた室内プールに守

越尊と和音はいた。

「いや、そんなに泳ぐの得意じゃないからさ」

元々、第二〇学区はスポーツ工学系の学校が集まる区であり、授業の成績よりも部活での地位が優先されるという学園都市内では少し変わったところでもある。

その為、第二〇学区ではいたる所に学生向けのスポーツジムが存在する。このスポーツジムのその中の一つだ。

本来ならば、部活動だけでなく、その他の学生が多く入っているハズなのだが、

「なら練習しようよ。ほら、今なら他の人もいないから一コース独占できちゃうよ」

戦争が起きるかもしれないと言う事や、デモ講義の影響で部活等を自粛している所が多く、学園都市が大変な状況に置かれつつある中で、このような場所に来る学生はほとんどいない。

その為、この室内プールには現在守越尊と和音しかいないのだ。さらに加えて、

「ほらほら、そんな所で壁にもたれてないでさあ」

健全な少年である守越尊には、視界に入り込む水面に浮かぶ豊満な二つの塊が目にも毒だった。

彼女が着ている水着は黒を基調に曲線的な白と赤いラインの入った水着だ。背中は大きく開き、クロスするように生地が通っていて、競泳水着とスクール水着のちょうど中間のようなモノだった。

競泳水着の様に締め付ける様なモノでもなく、かといってスクール水着ではない。お陰で生地はある程度薄いのにも拘らずある程度締め付けが緩い為、スタイルは細く見せつつ出る所は出るという困った水着になっている。

どうして和音がそんな水着を着ているのかというと、競泳水着では性能が良すぎて抵抗が無い為練習にならず、逆にスクール水着では動き辛い為、ある程度抵抗を残しつつ動きやすい水着を選んだ結果、このようなモノになってしまったと言うのだが、

とにかく目のやり場に大変だった。

「こんな時まで運動しなくてもいいんじゃないか？」

「こんな時だからだよ。何もせずに考え込むより、体を動かしてすっきりさせた方がいいに決まってる」

ここに誘ったのは和音だった。

九月三〇日の事件後、いつものカエル顔の医者 of 病院に一時的に入院した守越尊の荷物を和音が持ってきてくれた。

中にはパスポートが入っていたので、正直大助かり。その時に携帯の番号も交換した。

ここへ来たのも、守越尊のリハビリを兼ねて、という名目だったが、和音が気を使ってくれたか、或いは自分自身もすっきりしたかったのかもしれない。

端のコースの壁に寄りかかっていた守越尊は、和音に言われるままコースの真ん中へと移動してゴーグルを装着。

大きく息を吸って全身を水中に沈めると壁を蹴った。

別に金槌と言う訳ではない。ぎこちなさはあるものの、ゆっくりしたストロークでプール中央まで前進し、

「ブハアッ」

水面から飛び出して、大きく息を吸った。

「なあ、息継ぎってどうやってやればいいんだ？」

守越尊は息継ぎが出来なかった。

その為泳げる距離は自分の息が続く間だけに限られてしまっている。

「息継ぎ？ そんなの簡単だよ」

と、和音はゴーグルを付けると「見てて」と言ってトン、と壁を蹴った。

守越尊は歩きながら和音の泳ぎを見ていたが、とにかく綺麗な一言だった。

水上に上がった手は九〇度を保ち、呼吸する顔は半分が水中に残ったままだ。キックは水しぶきが大きく上がらずに白い泡がゴボゴ

ボと立つ程度しか動かしていない。それにも拘らず背中が水面から出ているのだ。力など入れずに楽に泳いでいる様に見えるが、泳速は守越尊の倍ほどあるだろう。

四〇秒も経たない間に二五メートルプールを往復して和音は帰ってきた。ちょうど真ん中から守越尊が歩いて帰ってくると同時だった。

「どう？ 分かったかな？」

「分かったかな？ って上手すぎて逆に分からん……。具体的にどうする訳？」

「多分ね尊くん、水中で息を吐いてないでしょ？」

「え？ だって息吐いちゃったら苦しいだろ」

当たり前前の回答をしたつもりでいたのだが、

「まずはそれが原因だね。だって尊くん、息継ぎの時間なんて一秒あるか無いかだよ？ その間に吐いて吸う動作をするなんて難しいよね」

確かに言う通りだった。

予め水中で息を吐ききる事によって顔を上げた時は息を吸うだけで済む。それを聞いただけでも息継ぎがスムーズに出来そうな気がしてきた。

さらに和音が言うには顔は上げるのではなく、耳を腕に付けるようにして横を向くだけでいいそうだ。顔を上げてしまうと重心が後ろに下がって体が沈み、余計に息継ぎが出来なくなる。などと言う少し専門的な事まで教えてくれた。

その他にも、リカバリー時は肘から先に力を入れないとか、水中では常に指先がプールの底を指す様にとか、専門的過ぎる知識を話してくれたが、とにかくまずは息継ぎだ。

守越尊はゴーグルを付けると、和音に教えられた事を頭で復唱しながら水中へと潜り壁を蹴る。

鼻で息を吐きながら、リラックスしたフォームで水をかいていく。
(息を吐ききったら、耳を腕に付けるように横を向く)

息を吐く動作は終了した。後は横を向いて息を吸う動作をすれば息継ぎは完成だ。

タイミングを見計らって水をかくと同時に顔を横に向けた。耳も前に伸ばしている腕にすっかりくっついていてる。

（よし、後は息を吸って）
瞬間、

ゴボオ、と守越尊の口の中に大量の水が流れ込んできた。

息を吸うタイミングが遅かったのか、空気と一緒に水が守越尊の中へと侵入した。

「ゴホツゴホツ、ゲホツ、オエ」

飲み込んだ水を吐き出すために咳が止まらない。何とも恥ずかしい姿ではあるがそんな余裕はなかった。

「尊くん大丈夫!？」

和音が慌てて守越尊の近くに泳いでやってきた。

ゴーグルを取って振り向いた守越尊の目が涙目だった事は言うまでも無い。

2

第七学区にある窓がないビル。

ドアも窓も階段も廊下もない。建物として機能するかも分からないビル。

その中にある全長一〇メートルの巨大なガラスの円筒器に逆さで浮かぶ一人の『人間』。

アレイスター。

一つの計画の為に様々なプランを作り上げ、イレギュラーな事柄が行われる度に、それすら利用してプラン短縮を企てる学園都市総括理事長。

九月三〇日に起こった学園都市の機能の八割以上をも麻痺させた

事件でさえ、アレイスターにとってはプラン実行の材料でしかなかった。

そんなアレイスターの目の前には無数のモニターが張り巡らされてあった。

世界地図の中に無数の赤い点が映し出されたモニターや、何かの出力を示したモニター。或いは学園都市全体を把握するための衛星からの映像など、窓が無く暗闇であるはずのその場所は、モニター画面から発せられる光が部屋を照らしていた。

「ふむ」

アレイスターはその中の一つを眺めていた。

普段表情を変えることのないアレイスターの口元が少し笑ったようにも見える。

そのモニターは衛星からの映像を映し出しているものだった。そこには、すでに日が沈みかけている学園都市を歩く一人の人物の姿が映し出されている。

「これは面白い客人が来たようだ」

その人物は腰まで届く長い髪をポニーテールで纏め、腰には一本の剣が鞘に収められていた。

明らかに学園都市の学生ではない人物がそのモニターには映し出されてあった。

7・1「10月5日」(後書き)

次回はついに……

7・2 「一つの名の下に」(前書き)

急展開になるかもしれませんが、時間があまりありませんので申し訳ない。

しかし、ついに……

既に辺りが暗くなった第七学区の繁華街を守越尊は一人歩いていた。

あれから、息継ぎが出来るまで練習させられたのだが、和音は全くと気にしていないのかそれとも意図的だったのか、所々目のやり場に困ったりドキドキする場面があり、大変だった。

「っ、疲れた……」

幾度となく体を酷使し入院するほどまで体を痛めつけて、ある程度は丈夫になったのではないか、なんて心の隅で思っていたりしたが、やはり慣れない事をすれば体は正直である。

水泳は全身運動。そう言われる通り全身がだるかった。

それでも明らかに守越尊の数倍は泳いでいた和音はケロッとしていた。それでも水泳部に所属している訳でもなく、ただ泳ぐのが得意なだけと言うから驚きだ。

その後、また『幸せ』でも探しに行くのかと思っていたが、今日の『幸せ』は十分集まった。

らしく、和音の家が第一八学区にある事もあって駅で別れて来たところだった。

守越尊は周辺を軽く見回した。

辺りの人影は夏場に比べると少なくなっているようだった。

一〇月になるとこの時間帯は肌寒くなって来ると言う事もあるが、多少は九月三〇日の事件も関係してきているだろう。

ちょうど繁華街を抜け大通りに差し掛かった守越尊は少し視線をずらした。

ここから数百メートル離れた所にとある『天使』によって切り崩された一角がある。一〇〇メートルほどのクレーターを作り出し、

周囲の建物は全壊。

数日前、守越尊はその場所にいた。

上条当麻を狙ってやってきた『神の右席』前方のヴェント。

何者かによつて操られ、光の翼を振るつた風斬氷華。

科学と魔術がぶつかり合い、そしてついには公おやけの場で二つの大きな力はぶつかり合おうとしている。

さらに最後に現れたもう一人の『神の右席』後方のアックア。

アックアは、今日の所は引き返す、と言っていた。つまりはまたいずれ学園都市の九割もの人間を昏倒させた力と同等の力をぶつけてくる事は間違いないだろう。

そして、アックアは聖人だ。

世界に二〇人といない、神の力を宿した人間。

考えなければならぬ事は沢山あった。

周囲の事にも思考を回さなければならなかったが、自分自身の問題についても考える必要がある。

アックアが世界に二〇人といない聖人であるのなら、守越尊はそのインデックスの頭脳の中にもほとんど記述されていない天人なのだ。

神の体の一部を宿した者、天人。

守越尊に宿っているのは『神の目』と呼ばれる力。

真つ先の疑問は何故こんな物が自分に宿っているかだ。

(魔術と科学……)

可能性として考えられるのはやはりそれしかない。

決して交わる事の無い力。

父親と母親の命を懸けて生まれてきた存在。

それがこの様な力を宿したのだろうか？

父親と母親の件に関しても完全に吹っ切れた訳ではないが、止まるわけにはいかない。上条当麻に気づかされた事、

自分が何をすべきなのか。

全てが解決した訳ではないが、とにかく精一杯生きること。母親

の命を犠牲にしてしまったのならその分まで自分は生きなければならぬ。

問題は山ほどあるが、まずはその部分だ。

思考を止めた守越尊は夜空を見上げた。

日が完全に沈に、完全下校時刻を過ぎた学園都市は明かりも少ない。都心部分であるのにも拘らず意外と星空が綺麗に見える。

聳え立つビルさえなければ満天の星空が見え、静けさからは山奥すら連想されるほど音がなく、

(音が……ない?)

そして気がついた。

静かなのだ。

大通りにも拘らず周囲に人影が全く無い。

この感じは幾度か感じたことがある。

「これは……」

人払いですよ。

瞬時にして人影が守越尊の前に現れた。

腰まで長い髪はポニーテールに纏められ、片足だけ大胆に切ったジーンズに、今はTシャツの上にへそくらいまでのジャケットを羽織っていた。そして腰にはトレードマークとも言える全長二メートルの日本刀を鞘に収めてある。

イギリス清教、神裂火織。

世界にも二〇人といない聖人の一人。

「また会いましたね、守越尊」

「神裂火織!？」

現在、学園都市のセキュリティはかなり強化させている。

巡回する警備用ロボットの数は増えているし、配置される警備員アンチスキルの数も多く見るようになってきた。学園都市に入る外部者に関しても何重にも重ねられたセキュリティをクリアして漸く学園都市内に入れる様になっている。

恐らく、そんな程度だけではなく、一般人の目に見えない部分で

もかなりの強化が図られているはずだ。

増して、神裂火織は魔術師だ。

学園都市の科学側とローマ正教の魔術側（公では魔術と言うコドネームを関する科学組織とさせている）が対立を露にしている状況で、魔術師が学園都市にいる事はある意味危険な事である。

神裂火織がローマ正教ではなく、イギリス清教の人間と言う事もあるかもしれないが、

「正直、ここまで簡単に学園都市に侵入できるとは思ってもしませんでした。恐らく私の正体を知った上で泳がせているのでしょう」
神裂火織は独り言を言うように呟く。

「何で学園都市に！？」

「貴方に会いに来たのですよ、守越尊」

「俺に？ 当麻じゃなくて？」

「ええ。確かに上条当麻に用がない訳ではありませんが、私が今回やってきた理由は貴方です」

神裂火織は上条当麻ではなく、守越尊に会いに来たと言う。

学園都市と対立するローマ正教の『神の右席』が上条当麻を狙っている事から、同じ魔術サイドのイギリス清教が何かしらの行動を起こしてもおかしくは無いと思っていたが。

自分に用がある、その言葉を聞いて何故か手に力が入る。

「何を硬くなっているのですか？ 私が貴方を訪ねたのはシエリーのお願いがあってです。確かに、過去同じような場所で貴方に手を出しましたが、もうそのような事は二度とありません。それにイギリスでも一度お会いしていますし、そんなに警戒されなくてもよいでしょう」

「シエリー、クロムウエルのお願いですか？」

手の力を抜いて守越尊は訪ねる。

「貴方の中に宿る力についてですよ」

神裂火織は静かに答えた。

「『神の目』ですか。貴方も私と同じ様に特別な力を授かっていた

のですね。ならばあの時、私の七閃を退けたのも頷けます」

「あなたは聖人だったつけ。神の力を宿す事の出来る人間だよな」

「ええ、そして貴方は天人。神の体の一部を宿す者ですが」

と神裂火織は一瞬間をおいた。

何かを躊躇する様に考え、守越尊を見つめる。二秒か三秒ほど沈黙した後一度目を瞑り、開くと同時に言葉を続ける。

「貴方は、天人についてどこまでご存知ですか？」

「神の体の一部を宿している者、って事しかインデックスには聞いてないけど」

「そうですか。それだけしか聞いていませんでしたか」

ピクッと守越尊は言葉に反応した。

「それだけって、やっぱり他にも何かあるのか!？」

「何か心当たりでも？」

守越尊は一瞬、自分についての事を教えるべきか迷ったが、前に進むと言う意味で神裂火織に話した。

自分の母親が能力者である事。

父親が魔術師である事。

母親は自分を産んだ為に死んでしまった事。

父親は魔術師に殺された事。

知っている事を話した。

「なるほど。貴方にはその様な事情がお有りでしたか。能力者と魔術師……、一つお聞きしますが、ご両親の真名は何といいますか？」

「真名って、名前だよな？ 母さんは守越無月で父さんは天城三門だけど。それがどうかしたのか？」

神裂火織は名前を聞くなり「守越無月……天城三門……」とボソボソ呟きながら顎の辺りに手を置きながら思考している。

「守越無月と天城三門ですか……」

「やっぱりこの力には父さんと母さんが関係してるのか!？」

「関係があると言えばそうなのですが、しかしそれではやはり辻褄が合わないのですよ」

「辻褄が、合わない？」

守越尊は首を傾げた。

つまり、神裂火織はこの力に魔術と科学は関係がないと言っているようなモノだった。能力者の母親に魔術師の父親。これでは辻褄が合わない。

「実は、先日貴方がイギリスを訪れてから、シェリーは貴方の力について調べ物をしていたのですよ」

「シェリーはクロムウエルが？」

「ええ、何でも「昔の誼だ」とか言われていました。本来ならあの子の知識の中に入ってもおかしくない情報なのですが、貴方があの子にそれだけの事しか聞いていないと言う事は、あの子の知識の中にもなかったか、あの子が躊躇ったかのどちらかですね。どちらにしる、私達には色々あってあの子に聞くことなどできませんが」

神裂火織は少し寂しそうな顔をした。

神裂火織もシェリーはクロムウエルもそれぞれの理由があったにしろ、一度インデックスの敵に回ってしまった事がある。彼女はその事を言っているのだろう。

「でも、どうしてあんだが？」

「シェリーは学園都市での出来事もあって学園都市に入ることなど到底できません。ですからこうして私が代わりに貴方に伝えに来たと言っ訳ですよ。天人について分かった事を」

「何が分かったんだ！？」

「はい、シェリーが調べた情報によりますと、そもそも天人とは」

と、神裂火織が言い留まった。

守越尊は首を傾げて神裂火織を見るが、彼女は無言のまま佇んでいる。

いや、正確に言うと、何かを探っていた。

じゃり、と言う足音。

大通りの先、神裂火織の後方から聞こえてくる一つの足音。

神裂火織は異様に警戒していた。なぜならば、現在この領域には人払いの魔術が刻ませてあるからだ。一般人であるなら絶対にこの場に近づいて来る事はない。学園都市の能力者であっても同じ事が言えるだろう。

なら誰が来たのか。

イマジンプレイカー

幻想殺しを持つ上条当麻と言う可能性も考えられた。彼なら例え人払いの魔術を刻んでいても、効力を示さずに領域に入ってくるかもしれないからだ。

その足音は次第に近づき、

「なるほど、魔術の流れを感じると思っ
て来てみれば、ちょうど良い。手間が省けた」

「誰です！」

神裂火織は腰に提げる七天七刀の柄に手を当てて振り返った。

そこにいたのは、一人の女性だった。

腰まで届く茶色い長い髪をポニーテールで纏め、紺色のアオザイの様な服には白い直線的な模様が入り、腰には動きやすい様にか帯が巻かれてある。その上には薄い黄色の羽織を着て、腰には一本の剣が提げられてあった。

明らかに学園都市の人間ではなかった。

「貴様、イギリス清教の魔術師だな」

「だったら何だと言うのです」

神裂火織の柄を握る力が強くなる。

「なら話しが早いな」

女は静かにそう告げると

「上条当麻はどこにいる」

場の空気が変わった。

女から凄まじいほどの重圧が押し掛かってきた。ビリビリと肌を伝って本能が何かを訴えかけてくる。

しかし、神裂火織は表情を変えずに答える。

「なぜ、上条当麻の居場所を訊くのですか」

「理由を言えば教えてくれるのか」

「もちろん、場合によりますが」

なるほど、と女は小さく笑い、

「斬る為」

「何を理由に！」

「悪漢を斬るのに理由は必要か」

悪漢。悪事をする男と言う意味だが、どうして上条当麻がその様に言われなければならないのか。寧ろ上条当麻はその逆のハズだ。

「なんで当麻が悪漢なんだ!？」

「言わなければ分からぬか？ 世界中で何が起きているのか貴様は知らぬ訳ではないだろう」

世界で起こりつつあるデモ騒動。或いはローマ正教と学園都市の全面对立。それらの事を指しているのだろう。

「それと当麻が何の関係が」

「元凶の根源は上条当麻」

な、と守越尊の言葉は止まった。

あまりにもストレートすぎる直球に守越尊は躊躇する。

「なんで、そう言い切れる!？ 当麻はッ」

言いかけて、スッと神裂火織が守越尊の前に手を出した。

「何を言っても無駄の様ですね」

神裂火織はそう言うのと守越尊の前に立った。

「東洋の魔術師、剣を抜くのか」

女は表情一つ変えない。ただ真っ直ぐ神裂火織を見つめて問いかける。

「仕方がありません。私は人を殺める為に力を振るいたくありませんが、上条当麻に受けた恩は数知れず。貴方が上条当麻を狙うと言うのであれば、私は一つの名の下にこの力を振るいましょう」

「面白い」

女は構えない。

ただ立ち尽くしたまま小さく笑うだけ、
それに構わず、神裂火織は一つの名と共に自分の力を振るう。
己の身と心と魂に自ら刻み付けたもう一つの名を。

「救われぬ者に救いの手を（Salveree000）」
言葉と共に七本の鋼系ロイヤを用いる『七閃』が音を引き裂くような速度で女に襲い掛かった。

七つもの斬撃が地面を走りコンクリートを削り上げ、衝撃は女を包み込んだ。

破片は辺りに散らばり、砂塵が立ち込める。刀が鞘に納まるチンと言つ音が衝撃音の後に僅かに聞こえた。

しかし

「こんなモノではないだろう」

女は砂塵の中から姿を現した。

腰に提げる剣すら抜かず、避けるといった動作すらせず、女は何事もなかったかの用に歩いて出てきた。

さすがに、これには神裂火織の表情が険しくなった。

「『七閃』を受けて無傷とは」

神裂火織が手を抜いた訳ではない。

全力に近い『七閃』。それにも拘らず女には傷一つなかった。

聖人である神裂火織の攻撃でだ。

「魔法名か」

女は静かに呟いた。

「一つの決意の表れと言つモノか、ならば某もそれがしそれ相応の対応をせねばならぬだろう」

左腰に提げる一つの剣に手をかける。

全長一メートルほどのその剣は柄頭が円状になっており、ロングソードを思わせる。その柄を握り締め、女もまた一つ名を発する。

「某が名はカリスノア。偉大なる祖ノアの名を継ぐ末裔にして天人。東洋の聖人よ。貴様が悪漢上条当麻に加担すると言つのであれば、偉大なる祖の名において、斬る！」

7・2 「」の名の下に（後書き）

漸く登場させれました。
長かった……

7-3 「カリスIIノア」(前書き)

久々の更新になります。

忙しい中、合間を見つけて書いたもので、ちょっとお粗末になっているかもしれませんが、ご了承下さい。

間が空くと書くの難しいですね

カリスが抜刀すると同時に二筋の炎が立ち上がった。鞘走った刀身に刻まれた二匹の蛇模様が浮かび上がる様に炎と化し、地面を走って渦を巻く。

カリスから放たれた二筋の炎は生きる蛇の様に蠢き地を走るが、神裂火織には届かず消滅する。

その炎は攻撃ではなく、ただカリスが抜刀した際に発生した炎でしかない。それを始めから知っていた様に神裂火織は炎には何もせず、七天七刀に手を当てて、

ガキーン！ と甲高い金属音が炸裂した。

炎が消えると同時に飛び込んできたカリスの剣と神裂火織の七天七刀がぶつかり合い、二人の距離は一瞬にして数十センチに縮まる。二メートルにも及ぶ七天七刀と刀身に蛇を描く剣がガリガリと音を立てて空気を揺らす。

カリスは小さく笑うと、七天七刀を弾いて後方へと大きく後退した。

弧を描いて宙を舞い、一メートル以上の距離を跳び地面に着地すると、再び激しい金属音が張り響いた。

後退したカリスが地面に足を着くと同時に、神裂火織は地を蹴って一瞬でその距離を埋めていた。

「カリス」『ノア』ですか」

神裂火織は近距離でカリスを見つめながら言う。

「聖人である貴様もその言葉の意味を知らぬ訳ではないだろう」
各々の剣と刀を弾き二人同時に距離を取ると、カリスは剣を鞘に収めて抜刀する。

描かれた蛇の首から二筋の炎が生まれ、地をうねりながら走る。

見せ掛けではない神裂火織を狙った攻撃。

しかし、同時に切断音が響いた。

二筋の炎が七本のワイヤーによって切り刻まれ、逆に地を走った神裂火織の『七閃』がカリスを襲う。

四方八方へと走ったワイヤーはカリスを中心に魔方陣を作り上げ、斬撃と共に爆発を巻き起こした。

ゴン！ と地面が吹き飛び、噴煙が立ち込める。

しかし、その噴煙を切り裂くようにカリスは飛び出し剣を振った。納刀された剣を抜刀し、下から上へと斜めに神裂火織を切断しようとするが、神裂火織は体を捻りそれを回避する。

避けた鞘走った刀身からは二匹の炎の蛇が生み出され、神裂火織の後方へと地を走っていくが神裂火織は見向きもせずには避けた勢いのまま反転し、七天七刀をカリスの懐へと滑らせていった。

それをカリスは手首を返して剣で受け止めると、受け止めた刀を軸にして流れるように避けて見せた。

「ええ、生憎つい最近知り得た事ですが」

攻防を続けながら神裂火織は答える。

刀と剣。同じ刃を武器とする二人は、攻撃を避けは反撃する、受け流しは反撃する、そういつた事を繰り返している。

神裂火織に関しては、時折ワイヤーによる『七閃』を織り交ぜながらカリスへと攻撃を加えるが、それでも傷を負わせるまでには至らない。

「ならば、なぜ某に抗う」

抜刀したカリスの剣から生み出された二匹の炎の蛇が地を走る。

渦を巻き、互いに絡み合いながら炎は勢いを増していく。

「私は自分の信念の元に動いています」

斬！ と神裂火織の七天七刀が二筋の炎を一掃した。

瞬きをしている間に抜刀と納刀を行う速度で斬撃を繰り返した神裂火織は静かに答える。

「先ほど申しましたが、救われぬ者に救いの手を、それが私の信

念です！」

爆発するほどの力で地面を蹴った神裂火織は七天七刀を握る手に力を込める。

一瞬にしてカリスの懐へと飛び込んだ神裂火織は抜刀し、その力を振るう。

『唯閃』

多種多様の術式に精通する神裂火織の放つ斬撃。

一瞬にして七度殺す事の出来る速度の『七閃』。その先にある『唯閃』は何人たりとも受け止める事のできないはずの斬撃だ。

一撃必殺の名に相応しい神裂火織の『唯閃』

放たれたる刃はカリスを捉え、その身を滅ぼす。

チン、と言う刀を鞘に収める音が小さく響いた。

地面を蹴って飛び出した神裂火織は『唯閃』を放ち、カリスの立つ場所から一〇メートルほど離れた場所で立ち尽くす。

「たった一人の信念でどうにかなるほど世界は甘くない」

カリスは何事を無かったかのように振り向き。神裂火織に言葉を発する。

(クツ、また……)

神裂火織は齒噛みした。

二人の攻防において、互いの攻撃を避け、受け流し、そして反撃する。

そんなやり取りが行われていた。

当然の如く、神裂火織はカリスの攻撃の全てを避け、いくつもの攻撃を繰り出していた。

七天七刀による斬撃、そこに『七閃』による攻撃を織り交ぜ、最終的な『唯閃』の使用。

そして、それらは全てが避けられていた訳ではないのだ。

「しかし、さすがは聖人と言った所か。某が相手でなければ既に決着はついていただろう」

はつきり言う神裂火織の攻撃は幾度かカリスを捉えていた。

『七閃』を織り交ぜた攻撃に加え、最終的な『唯閃』。それらはカリスに傷を負わせるどころか命を奪ってしまってもおかしく無いモノであった。

それでも彼女には傷一つ見当たらない。

「某を傷つけられぬ事がそれほど不思議なようだな」

神裂火織の表情を見てカリスが答える。

「我がカリブルヌスの前ではどのような傷をつける事も不可能」

カリスは腰に提げる剣の柄頭に手を置く。

「聖剣、カリブルヌス。かつて英国全土を支配したアーサー王が使用していたとされる霊装ですか。その鞘はいかなる傷をも受け付けない、と。しかし、その霊装は英国全土の統治者の象徴とされていたが故に英国圏内では効力を発揮しないはずですよ」

「某が与えられし『神の手』は、有りと有らゆる武器の使用を可能とする。無論、このカリブルヌスとて同じ事」

つまりは神裂火織が『七閃』や『唯閃』を放とうが、カリスの持つカリブルヌスの鞘が有る限りはその身体に傷をつける事は不可能となってしまう。

かつて、その鞘を所持していたアーサー王はその鞘を奪われた事でその人生の終焉を避け得ぬようになったとされているが、

(……その様な隙を与えてくれる事はないでしょう)

「さて、そろそろ良いであろう、東洋の聖人。上条当麻の居場所を言わぬのであれば、これ以上時間をかける意味もない」

「そう簡単に行かせると思っているのですか」

「正直、貴様の様な人間を亡くすのは惜しい。今一度問うが、引かぬのだな」

神裂火織は何も言わずに、七天七刀へと手をかける。

それが、言葉の代わりだした彼女の意思表示。

それを見たカリスはため息のような息を吐き、静かに目を瞑ると柄を握った。

そして、一言

「残念だ」

瞬間、刀身から眩いばかりの閃光が発せられた。

「ッ……！！」

抜刀と同時に発せられた光は神裂火織の視界を全て奪い去った。

「私とした事が……ッ」

抜刀による炎を警戒していた神裂火織は不意の閃光で目をやられてしまった。いかなる斬撃が来たとしても、聖人としても神裂火織なら避ける事が出来たかもしれないが、光の速さまでは反応が出来なかった。

「かつてアーサー王はカリブルヌスを用いて敵の目を射たと言っ」

カリスは呟きながら剣を構える。

「視覚を奪われて某の攻撃を避ける事など不可能であろう」

トン、とカリスは地面を蹴り、神裂火織との距離を詰める。神裂火織は視覚以外の感覚を使ってカリスの攻撃を防ごうを構えているが、視覚があつた状態で互角であつた力をそう簡単に防げる訳が無い。

「聖人、その首、貰い受けた」

カリスの斬撃が神裂火織を襲った。

ガゴン！ と全身に重い衝撃が走った。

カリスはカリブルヌスを神裂火織へと振り抜き、神裂火織は僅かな気配をたどって七天七刀をカリスがいるであろう方向へと横振りする。

神裂火織の攻撃は一テンポ遅れた。

その為、本来ならば首を刎ね飛ばされていたハズなのだが、神裂火織の七天七刀も何かを捉えていた。

「さつきから萱の外って感じだけどさ」

神裂火織には見えなかったが、カリスの視界にはその存在が鮮明に映っていた。

自分自身のカリブルヌスを右手で受け止め、神裂火織の七天七刀を左手で受け止め、二人の間に割ってはいる形で一人の少年がカリ

スと神裂火織の間に立ちふさがっていた。

「俺を忘れるなよな」

『神の目』を発動させ、右の目を青に染めた天人の守越尊がそこにいた。

7 - 3 「カリス」ノア」（後書き）

次回もいつになるかわかりませんが、頑張っ更新したいと思いま
す。

恐らく少ないですが、これくらいの量になるかと、

7・4 「世界を正す者」(前書き)

土日を使って更新できているだけでも増しなのかもしれません。その内、もっと忙しくなってきたそうです。

気がつけばもう直ぐ総合1000ポイント。

本当にありがとうございます。

それにしても、相変わらず説明も文章も下手ですね。

まあ、更新できただけでも良しとしてください。

カリスは驚いていた。

自分の攻撃を防がれた事に対してではなく、目の前の少年の持つ『力』に対して、カリスは動揺を隠せなかった。

二つの刃物を素手で受け止め、間に入り込んできた少年の目には魔方阵の様な光の線が浮かび上がり、その瞳は青く染まっている。

『神の目』

その青き瞳に宿されているのは自分と同様の力。

それは天人である証でもある。

(なぜ……！？)

カリスは後方へと跳んで距離を取るとカリブルヌスを鞘へと収めた。

「守越尊、どうして出てきたのですか!？」

神裂火織も七天七刀を鞘へと収めながら声を発する。

「どうしてつて、今のは危なかっただろ？」

視界を奪われた神裂火織は明らかにカリスより攻撃のタイミングが遅れていた。それは僅かコンマ数秒の世界だが、人間の領域を超えた二人の間では致命傷になる時間だった。

もちろん、守越尊がその様な領域の速度に対応できたのは『神の目』を発動していたからだ。

カリスの抜刀時に発せられた閃光で神裂火織を同じように視界を奪われた守越尊であったが、それと同時に発動した『神の目』によって右目の視界は無事であった。

始めから力を使用しなかったのは、時間に制限があったからだ。

制御によって『神の目』の使用時間は飛躍的に上がったが、二人の速度と同じ動きをすれば直ぐに体が動かなくなってしまう。

だからこそ、極力いざと言う時まで力の使用は避けなければならぬ。

「それに、俺も当麻には色々借りがあるからな。それとも俺に出てこられたらまずいのか？」

「それは……」

と、神裂火織は言葉に悩んだ。

(本当に出てきちゃまずいのか?)

そう考えながら守越尊は視線を移した。

その視線の先には未だに驚きを隠せていないカリスの姿がある。考えられるのは彼女の存在だろう。

(『神の手』……。俺と同じ天人)

「なぜ、貴様にその様な力が」

しかし、カリスもカリスで何やら動揺しているようにも見える。

先ほどまで、常にクールで冷静だったカリスも驚きを隠せていない。

「あんと同じ天人だからだろ」

「同じ……だと？」

カリスの眉がピクリと動いた。

「笑わせるな。その言葉、『ノア』の名に対する侮辱であるぞ！」

カリスの口調は強かった。

本当に自分自身を貶されている、侮辱されている、そんな時の様にカリスは声を上げている。

「守越尊」

後ろで神裂火織が視界を確認する様に目を細めながら言った。

「貴方一人でどうにかなる相手ではありません。このままの方が私達を突破すれば確実に上条当麻は殺されてしまいます」

神裂火織は二人掛りでカリスを止めると言ってきた。

もちろん、神裂火織でさえ苦戦した相手に自分が易々と勝てるなどと守越尊も思っていない。相手が同じ天人であるなら尚更の事である。

「分かつてる。でもどう言う事が先に教えてくれ。天人つてのは何なんだ？ それに侮辱つて？」

『ノア』の名の侮辱。

カリスは守越尊が天人である事が気に食わない。納得できない。そんな感じに見える。

「そう言えば、話しの途中でしたね」

神裂火織は漸く八割方見えてきた視界を確かめる様にカリスを見る。

「あの方が侮辱と仰るのは、そもそもその『神の目』などと言う力は、貴方の様な者に宿るはずの無い力だからですよ」

何故か神裂火織は急に改まった様な口調になっていた。

「宿るはずがない？」

守越尊は目線だけを神裂火織に向ける様にして聞き入る。

「『ノアの箱舟』をご存知ですか？」

「言葉だけなら」

「詳しい説明は時間が無いので省きますが、かつて悪に満ちていた世界を浄化しようと神は大洪水を起こします。その際、神はある一人にその事実を伝え、箱舟を作り、その家族とすべての動物のつがい乗せるように命じました。その者の名は『ノア』。旧約聖書では我々人類全ての祖と言われる人物です」

視力が戻った神裂火織の瞳は再びカリスをしっかりと捉える。

その一言一言は語ると言うよりもカリスに対して確かめる様に発しているようにも聞こえた。

「大洪水の後、神は『ノア』へと約束をします。全ての生きとし生ける物を絶滅させてしまうような大洪水は、決して起こさない。その代わりに世界を正しき方向へと導く役目を『ノア』に命じると同時に、自分の体の一部を与えます。そして、『ノア』の一部の子孫はその名をついで代々、『天人』、すなわち神に認められた者として世界を見てきたのです」

「その通り」

カリスは言う。

「『天人』とは我ら選ばれし『ノア』の名を継ぐ末裔に与えられし称号。貴様の様な人間如きに『天人』を名乗る資格などない」
ならどうして自分にその様な力が宿ったのか、ますます分からなくなつて来た。

恐らく、神裂火織が両親の名を聞いてきたのにもこの様な理由があつたのだろう。

だからこそ辻褃が合わない。

『ノア』の名を継いでいないのに何故守越尊に天人としての力が宿っているのか。

伝えに来た神裂火織が言い詰まつたのもその事が気にかかつていたのだろう。

「守越尊」

神裂火織は何かを察したように守越尊に声をかける。

「気になる事は山ほどあるとは思いますが。しかし、先ほども言いましたが、あの方はこのまま行けば間違ひなく上条当麻を殺します。上条当麻を悪漢と呼ぶのは恐らく、ここ数ヶ月の世界の流れを見てきて、上条当麻が世界の秩序を乱す可能性があるかと判断した為でしょう」

「何だよ世界を乱すつて、当麻がそんな事をするつても思つてんのか!?!」

「いえ、決してその様な事はありませんが、ここ数ヶ月の間に科学と魔術のバランスに大きな歪みが生じてします。それだけに留まらず、魔術側だけでも勢力に変化が起こりつつあります。そしてその中心には上条当麻がいるのです。この様な事態を『世界を正す者』が放つておけるハズがないという事です」

『世界を正す者』

『ノア』の名を受け継ぐ天人。世界を正しき方向へと導く存在。
「当麻を殺せば世界が正しい方向へ行くつても言うつのかよ!」

投げ捨てるように発した言葉にカリスは静かに答える。

「無論、その通りだ」

ふざけるな、と守越尊は齒噛みする。

上条当麻がやってきた事はそんな事ではない。

世界を乱す、なんて事はない。

「某とした事が、多少動揺してしまっただが問題はない。某は偉大なる祖から受け継がれし御言を全うするのみ。義はこちらにある」

そう呟くカリスは一度目を閉じると、ギリッと鋭い目つきへと変わる。

「なぜ貴様にその力があるのか気にはなるが、所詮は高が人間。某の邪魔をするのであれば切り捨てるのみ」

カリスはカリブルヌスの柄を握る。

瞬間、空気が変わった。

ビリビリと体に伝わる殺気は以前の比ではない。本当にその剣を抜いた瞬間体を真つ二つにすると無言で発している様なモノである。

しかし守越尊は下がらない。

両足を軽く開いてグツと重心を落とし、身構える。

「やらせません」

神裂火織も守越尊の隣に立つ。

「誰かの命を犠牲にして成り立つ正義など断じて認める訳にはいきません。それが世界を正す者に刃向かう事になったとしても」

「『ノア』の名に敗北と言う文字はない。心してかかるがいい、愚かな人間よ」

三人はほぼ同時に地面を蹴った。

7・5 「力の片鱗」(前書き)

漸く投稿できました。

多少雑っぽい所があると思いますが、ご了承ください。

総合1000ポイントありがとうございます。

神裂火織は走り出すと同時に『七閃』を放った。

地を走る七本のワイヤーはコンクリートを巻き上げながらカリスへと向かい、

ガシユ、つと数本がカリスのカリブルヌスによって切り裂かれる。それと同時に、抜刀と共に発生した二つの炎が神裂火織と守越尊へと襲い掛かるが、先を行く神裂火織の七天七刀によって、蛇にも似たその二つの炎は切り裂かれ消滅する。

そして再び二つの刃は交差した。

ガギン！ と金属音が炸裂する。

「神裂！」

声と共に、ぶつかり合っていた神裂火織が後方へとバツク宙をする様に飛翔する。入れ替わるようにして守越尊が拳を振るった。

突き出した右の拳はカリスへと向かい、直後にカリブルヌスによって防がれた。

ふわり、と衝撃を吸収するように後方へと跳んだカリスは一〇メートルほど離れた地面へと着地し、ゴン！ と地面が爆発した。

神裂火織が仕掛けたワイヤーによって生み出された爆炎がカリスを飲み込んだのだ。

初手に『七閃』を放った際に切り裂かれなかったワイヤーを使って神裂火織が仕掛けた魔方陣が爆発したのだ。

「どうだ？」

神裂火織を背に、守越尊は爆炎へと目をやる。

チン、と七天七刀を一度鞘へと戻す音が聞こえ、

「恐らく効いていないでしょう」

声と同時に、爆炎の中からカリスがゆっくりとした足取りで現れ

る。

炎の中から出てきたと言うのに服の端から端まで焦げた様な跡すらない。

「あんたの魔術でなんとかなったりしないのか？」

「それは無理です。あの方が傷を受けないのは全てはあの霊装の力です。魔術による結界か何かであるのなら、その隙間に割り込んで阻害する方法が取れたかもしれませんが、それにあの方は今の戦いにおいて一度たりとも魔術を使用していません」

ならば、あの炎は一体何なのかと言う疑問が湧くかもしれないが、霊装の力に過ぎない。

カリスは自らの腕に宿る『神の手』によってカリブルヌスの力を操っている。そこに魔力は必要ない。天人として与えられてる力を使っているに過ぎないのだ。

「やはり、あの霊装をどうにかするしかないようですね」

聖剣カリブルヌス。

その鞘はどのような傷をも寄せ付けぬ、魔法の鞘。

それをどうにかしない限り、カリスには傷一つつける事が出来ない。

その方法としては恐らく二つある。

まず一つは霊装そのモノを破壊してしまう事。

しかし、聖剣と言われし霊装を破壊するとなれば、思いつく限りで上条当麻の幻想殺しくらいなものだろう。
イマジンプレイヤー

その為、この方法は不可能に近い。

なにせ、目の前にいるカリスは上条当麻を狙っているのだ。

ならば、方法は残りの一つしかないだろう。

恐らく、神裂火織もその方法を考慮して戦っている。

守越尊は今までのカリスの動きと、神裂火織の攻撃パターンから予測は出来た。

「要するに、あの霊装をあいつから手放させればいいんだろ？」

「ええ、その通りです」

守越尊の発言に驚く様子もなく神裂火織は静かに答える。

「そもそも、傷を負わないのなら私達の攻撃を避けたり防いだりする必要は無いわけです。それにも拘らず攻撃を避けたり防いだりするのには、万が一あの鞘に当たってしまう事を防ぐ為でしょう。先ほどの『七閃』の内二本は鞘を狙ったモノでした。それをあの方が防いだと言う事は恐らくそう言う事です」

そう言い終えると、神裂火織は守越尊の横へ立ちカリスを見つめる。

そのカリスはと言うと、

「作戦は決まったのか？」

攻撃をせずに待っていた。

「ええ。しかし、あなたも攻撃をせずに待っているとは余裕のようですね」

神裂火織は柄に手を当てて構える。

「時間がかかればかかるほど不利になるのはそちらであろう？」

「それも承知しています。だからこそ、全力でその鞘を奪わせていただきます。守越尊、左右から挟みます」

「ああ、了解！」

ドン！ と地面を蹴る音が聞こえたかと思うと、神裂火織は『七閃』を放っていた。

「ふん、同じ事を」

カリスは鼻で笑う様に呟くと、鞘に当たる可能性のある数本を抜刀と同時に切り裂く。残りの『七閃』の衝撃が腕や頬を切り裂いて行くが、カリスには傷一つつかない。

続く様にして神裂火織りが抜刀して斬撃を放つ。

本来ならば一撃で相手を仕留める必殺の『唯閃』。

『七閃』で多少の体勢を崩す事が出来ればと思っていたのだが、カリスは構わず『唯閃』を自らの刃で受け止める。

同時に後方から飛び掛った守越尊がカリブルヌスの鞘へと手を伸ばすが、

「そう簡単に、某の鞘を奪えなくても思っているのか」

ワルツを踊るように振り上げられたカリスの足が守越尊の右肩へと直撃し、数メートル吹き飛ばされた。

「ッ！」

回転しながら数メートル飛び上がったカリスは再び神裂火織と刃を交えた。

ガリガリと金属がぶつかり合う中、地面を転がり立ち上がった守越尊がカリスへと迫るべく地面を蹴る。

その間に神裂火織はぶつかり合う刃を引つ込め、次なる数手を繰り出しカリスへと反撃するが、回避が必要な攻撃は紙一重で回避され、防ぐべく攻撃は受け流され鞘に掠る事も出来ない。

更にタイミングを見計らって飛び込んできた守越尊にも、神裂火織の攻撃を捌きながら攻撃を加えてくる。

「無意味な魔術は避け接近戦だけで某の鞘を奪いに来る辺り、同じ刃を扱う者として見上げた物だな」

カリスは神裂火織と対峙しながら言う。

僅か二メートルにも満たない距離で刃を振るい続けいた両者は、バツと後方へ跳び、

カリスは納刀したカリブルヌスを抜刀し、二筋の炎を繰り出す。

同時に神裂火織が繰り出した『七閃』の斬撃がぶつかり合い消滅した。

「しかし、そう長くは続くまい」

未だに涼しげな表情で話すカリスに対して、神裂火織の頬には汗が流れ始めた。

元々『唯閃』が一撃で相手を仕留める必殺であるように、聖人の力は無制限ではない。例え人間を超越した力を保持し、それを扱えようと神裂火織が人間である事に変わりは無いのだ。

身体の限界を超えた速度で動き回っていれば、直ぐにでもその反動は体に現れてくる。

時間が長引けば長引くほど神裂火織に不利な状況に陥っていく。

だからこそ神裂火織は動く。

七つのワイヤーを走らせ、高速の抜刀術でカリスの鞘を狙う。しかし、それらはカリスに悉く防がれる。

放った衝撃波の一つが通りに並ぶ風力発電用のプロペラを切り落とすとした。

落下してくるそのプロペラの一部を、瞬時に飛び上がった神裂火織が回し蹴りの様に蹴り落とす。

急速に落下速度を上げたプロペラだったが、

斬！ とカリスはカリブルヌスで真つ二つに切り裂いた。

更に二つに斬られたプロペラはカリスの左右の地面へと突き刺さり、粉塵を巻き上げる。

「うおおお」

その粉塵を利用して守越尊がカリスへと飛び掛った。

「不意を突くのであれば静かに行うべきであろう」

突き出した守越尊の拳とカリスの掬い上げる様に放ったカリブルヌスが激突した。

ゴン！ という衝撃と共にビリビリと空気が揺れた。

その衝撃によって巻きあがっていた粉塵が一瞬にして吹き飛ばされ、二人の姿がはっきりと見える。

至近距離になった二人の視線が合う。

「しかし、やはり切れぬか」

守越尊の拳をカリブルヌスの刃で受け止めたカリスは小さく呟き、ぐるりと回転し、守越尊の腹部へと回し蹴りを放った。

「が……は……ッ」

クの字に折れ曲がった守越尊の体は数メートル跳び、地面を転がって降りてきた神裂火織の近くで止まる。

「勿体無いの一言だな。その力、使いこなせていれば直角以上の戦いが出来ると言うのに。所詮は高が人間か」

カリスは地面から立ち上がるうとしている守越尊に対して言い放つ。

「使いこなせて、いないだと？」

切れて赤くなつた口元を拭いながら守越尊は訪ねる。

「左様。『神の目』の力はそんなモノではない。だが、ノアの末裔でない紛い物である貴様に、力の片鱗が扱えているだけでも奇跡である。」

「片鱗って」

「『神の目』とは『全てを見通す目』。貴様が扱えているのはその副産物に過ぎぬ。」

7 - 6 「天人と聖人」 (前書き)

久しぶりの投稿となります。

時間があまりない状態で書いたのでお粗末ですが、楽しんでもらえたら幸いです。

「副産物？」

ゆっくりと立ち上がりながら、守越尊は問いかける。

「無意識での力の発動、言うなら呼吸の様なモノだ。我々が生きていく中で呼吸をする事を常に意識している訳ではないであろう。貴様が行っているのはそれと同じだ。例えば呼吸と言うものがどんなモノが知らなくとも我々は呼吸をするように」

カリスはカリブルヌスを鞘へと収め、守越尊に正対する。

「副産物と言うより、無意識下での能力と言うべきかもしれぬな」
守越尊は今までの事を思い出す。

過去に『神の目』を発動していた際、自分の能力について何も知らないのにも拘らず、その力を使える事が『当たり前』の様に力を使用していた。

それこそ呼吸の様に。

「本来であるならば呼吸とは異なり、生まれながらにしてその力を理解している。聖人が自分の力の制御法を心得ている様に、我々天人も自分の力が何なのか把握しているのだ」

だがしかし、とカリスは加えて

「紛い物でしかない貴様は、自分の力が何なのかまるで理解していない」

理解していない。

呼吸をするのが当たり前のように『神の目』を発動した状態では、カリスの斬撃を受け止め、鞘走り生み出された炎を打ち消した能力、即ち『目には目を歯には歯を』を使えるのが当たり前。

だからこそ、なぜ使えるのか疑問に思ったことがない。

なぜ自分に『神の目』が宿っているのかを疑問に思っても、その

事に関しては疑問に思わない。

『神の目』を発動している時には使えて当たり前なのだから。

「だからこそ、使いこなせていない。理解していないのだから」
指摘を受けて、守越尊は初めてその事に気がつくと同時に、もう一つ思うことがあった。

人が生きていく為に呼吸を行うのは無意識だが、より大きな行動つまり走ったり運動をするとなると無意識ではなく意識的に呼吸をするようになるものである。

より多くの空気を体内に取り込み、体中に酸素を送る為に。

即ち、単純に考えて、

「つまり……さらに上の能力があるって事か」

「正確に言えば本来の力と言うべきであるがな。そして、もちろん貴様の力だけでなく、某とてそれは同じ事」

そう言つと、カリスは腰に提げてあつたカリブルヌスを鞘ごと抜き、顔の前で両手で平行にかざした。

身に着けていれば、どのような傷も受け付けない魔法の鞘をだ。

その光景を見ていた神裂火織は迷っていた。

今、この瞬間カリスに攻撃すればカリスに致命傷を与えられるかもしれない。まさに絶好のチャンス。

しかし、それとは逆に飛び込む事に危険を感じていた。

(なぜ鞘を離す様な事を……魔術的要素な見当たらない、だとすると……天人としての力)

スーッとカリスは数センチ、カリブルヌスを鞘から滑らすと、

「鞘を収めることで汝、我が意思に“答えた”モノとする」

チン、とカリスが言葉と同時に鞘に剣を収め、

「聖人よ、感覚が鋭いが故に迷ったか」

ガクン、と守越尊の隣にいた神裂火織が突然地面に膝をついた。

「な」

神裂火織は一瞬自分の身に何が起こったのか、理解できなかった。そして気がつく。

(力が……入らない)

「先ほどまでなら何とかなつたかもしれぬが、これを見たからには聖人の貴様であつても抜け出す事は容易い事ではあるまい」

そこにあつたのはカリブルヌスではなかつた。

「なるほど……恐怖の感情を最大限に高め、相手の力を失わせる。

私の防衛術式を貫いて、感情を押し込めた訳ですね。」

神裂火織は七天七刀を支えにして地面から立ち上がる。

全身が重く、立つだけでも精一杯だつた。

「フラガラツハ。応答者^{アンサー}とも言われている」

「まさか武器を操るだけでなく、伝承や神話を素に意味を込める事によつて、武器そのものまで作り上げてしまふなんて。それが、貴方の本来の力」

フラガラツハ。

ケルト神話に登場する剣。その剣を見たものは恐れるあまり力を失い、その剣はどんな鎧も貫く。

そしてまたの名を応答者^{アンサー}。

カリスは鞘に納まる事で剣が主に答えた、とする事によつてフラガラツハ、つまり“答えるもの”と言ふ意味を武器に込めたのだ。

「それが、某に与えられた『神の手』の力」

伝承や神話に基づいて意味を込める事によつて霊装を作り出し、その力を引き出す。それが、『神の手』。

「だが、その『目』には魔術的要素は無意味の様だな」

カリスはショートソードほどの大きさになつたフラガラツハを腰へと戻した。

「瞬時に周囲のあらゆる情報を分析し、同様の力をぶつけて相殺する。いや、この場合は『魔除け』の方が働いていると見るべきか。どちらにしろ、あまり期待はしていなかつたが」

そう言い終えたカリスは、ふわりと動いたかと思つと

ドン！ と大きく地面を蹴つた。

その姿を確認した神裂火織は瞬時に七天七刀を構えるが、その瞬

間神裂火織は後方へと飛ばされていた。力を失っているにも拘らず、瞬時に鞘から抜刀した神裂火織だったが、そこまでだった。反応は出来たが、圧倒的な力負け。フラガラツハの効力によって力の入らない体ではカリスの攻撃を受けきることが出来ず、そのまま宙を舞う。

「神裂！」

「さて、魔術的要素が効かぬのであればどうすればよいのか。答えは簡単であろう？」

吹き飛ばした神裂火織に目もくれる様子も無く、守越尊へと視線を移したカリスは武器を鞘へと収め、姿勢を低くして守越尊の懐へと潜り込むと、そのままアッパーの様に拳を突き上げた。

「ぐッ」

顔の前で腕をクロスにして防いだが、それでも体は宙を舞った。

尻餅を搗き、前を見た瞬間すでにそこにはカリスの踵が迫っていた。

ゴン！ と地面が凹み、一瞬で守越尊がいた場所のコンクリートは粉々に碎かれる。

（なるほど、肉弾戦って訳か……ッ）

守越尊は横方向へと大きく回避した。

踵落しで地面を粉碎したカリスは、間髪入れずに襲い掛かる。

が、

キリキリ、と二人の間に数本のワイヤーが張られていた。

カリスはそれを発見するが気に留める事なく、フラガラツハを抜刀、地面に向かってそれを突き刺し、抜き取ると同時に鞘へと収める。瞬時にその行動だけを行い、

轟！！ とそのワイヤーが描く魔法陣から発せられた爆炎がカリスを飲み込む。

そして次の瞬間には神裂火織がその爆炎目掛けて地面を蹴っていた。

ガギン！ と神裂火織の七天七刀と何かがぶつかり合う。その衝

撃で爆炎は吹き飛ばされ、その中からは、

「さすがは聖人と言った所か。この短時間で防御術式を新たに構築し、反撃してくるとはな」

無傷のカリスがいた。

そしてその手に握られているのはフラガラツハではなく、

「石に刺さった剣を抜く」事で再びカリブルヌスへと戻したのですね」

ギリギリと金属の擦れる音を立てながら、二人はにらみ合い、バツと後方へ跳び距離を取る。

「炎を纏いて光り輝く剣からは何人も逃れる事を許されん」

カリスが抜刀すると炎が生み出され、しかしそれは放たれる事なく剣に纏わり付く。その炎は紅蓮から光へと変わり、刀身を包み込む。

「炎……いや、光の剣……ッ！ 北欧ではなく、クラウ＝ソラスですか！」

神話の中には『不敗』と言う言葉がたびたび出現する。

例えば、北欧神話に登場するフレイの剣は神話の中でたった一度たりとも敗北するシーンを描写されていない。

それほどの破壊力を秘めていると言う事だ。

そして、クラウ＝ソラスにも同じような描写がある。

『誰も逃れる事の出来ない』

『一度も負けた事がない』

『ひとふりで敵を倒し何者にも破れぬ』

それほどの破壊力を同じように持つ。

カリスがその剣を一振りすると、光の閃が走った。見える光の斬撃。不敗を誇る刃が神裂火織を襲う。

が、しかし

バシユン！ とその光は神裂火織の前で弾けとんだ。

「これなら止めれる！」

間に割って入った守越尊がそれを打ち消す。

(助かりました、守越尊！)

神裂火織も即座に動く。

なぜなら、既にカリスが守越尊に対して回し蹴りを放とうとしていたからだ。

鞘でそれを受け止められたカリスはふわりと宙を舞って後退する。その間にもカリスは次の行動を取るべく抜刀し、一本の木の表面に着地するとそれに剣を突き刺した。同時に指先で木に何かを刻む。

一秒にも満たない一瞬で行われた為、何をしたか分からないのが普通であるが、視力八・〇で人間を超えた身体能力を発揮する神裂火織の目はそれを捉えていた。

(ルーンを刻み、ただの木を『リンゴの木』に見立てた？)

次にカリスが木を蹴り、距離をつめた時にはその手に二メートルを超す大剣が握られていた。

(その意味は、竜の皮膚をも切り裂く刃……ッ！)

神裂火織は意味を読み取り、防御術式を新たに組み込もうとするが、

「遅い」

それより速くカリスの刃が神裂火織に届く。

七天七刀でそれを受け止めたが、容易く横方向へとなぎ払われた。

「が……は……ッ」

受身を取る形で多少の勢いを殺すことが出来たが、神裂火織の頬からは血が伝い落ちる。

(なるほど……次々と武器を変えるのは、こつ言う意図も、含まれていたのでですね)

次々に作り変えられる武器。様々な意味合いを持つそれらの武器は、

相手の力を奪う、強力な一撃を放つ、龍の皮膚をも貫く

多種多様の魔術的な効果を發揮する。

もし、それらの武器の使用が一つだけなら神裂火織にも何とかなっただかもしれないが、

それらの意味合いを分析し、それ相応の対処を取れるだけの力を有してしるにも拘らず、それが出来ない。

(く……、もう少し時間があれば)

カリスが武器を作り変え、その霊装の効力を発揮する。

しかし神裂火織がそれに対して何らかの対処を行った時には、既に別の意味合いを持つ武器に変更されているのだ。

聖人の力を有し、瞬時にして術式を組み上げるにしても、一つ一つの霊装が伝説級のモノばかりでは時間が足りない。

更に加え、

「動きが鈍くなってきたようであるな」

人間の限界を超えた動きを繰り返していた二人の体に限界が近づきつつあった。

「がッ……!!」

カリスの蹴りが守越尊の腹部へと突き刺さる。

吐血した守越尊の血が二メートルを超す大剣に飛び散るがカリスは気にしない。

それどころか、それすら利用して次なる意味合いを作り上げていく。

「素は北欧、血肉を欲するその刃は、如何なる治癒も許さん」
更なる斬撃が二人を襲う。

7-7 「吸血の剣」

8

まるで生き血を吸い取っている様な感じだった。

刀身へと張り付いた守越尊の血はみるみる刃の中に吸収されていたのだ。流れ落ちるのではなく、染み込んでいった。

「まだ諦めぬか」

カリスは刀身の赤く染まった剣を片手に言う。

二対一であったとしても、その優位は変わらない。人間の限界を超えた動きと、天人である『神の手』の力を使って圧倒的な力を見せ付けるカリス。

それに対して、守越尊と神裂火織には刻々と限界が近づいていた。それでも

「誰が、諦めるかよ」

もし、この場をカリスが抜ければ、間違いなく上条当麻はやられる。

イマジンプレイカー

幻想殺しと言う特殊な能力を持っていても、上条当麻は単なる高校生に過ぎない。例えばカリスの持つ霊装を破壊できたとしても、恐らくその身体能力だけでカリスは目的を達成する事が出来るだろう。守越尊はガクガクと震えだした足を抑えるように立ち上がる。

能力使用後の反動が体に出始めているのだが、カリスから受けたダメージも大きかった。

過去を思い出してみても、あらゆる能力や魔術を防いできた『神の目』の力であったが、能力や魔術に関わっていないモノ、鉄筋や拳等は例外だった。鉄筋を弾いた時には手が赤く腫れたり、ただの拳は『神の目』を発動している時でさえ、きちんと自分の手で防がねばならなかった。

じゃり、と少し離れた所まで飛ばされていた神裂火織も七天七刀

の柄へと手を伸ばす。

「解析は済んだのか？ 聖人」

「……恐らく、その霊装は吸血の剣」
ダイインスレイフ

抜けば必ず人の血を吸わずにおかない、妖剣とも呼ばれる霊装。

伝承では鞘をはなれる度に人を殺め、斬ればはずすことないと言われるが、それらは単にこの霊装の威力を示しているに過ぎない。

吸血、と呼ばれるその霊装の力は、言うまでも無く相手の血を取り込む事にある。

「人の血を取り込み、それを魔力として力を生み出す。それ故に、その剣で切られた者は」

「不治の傷を負う」

さらりとカリスは言う。

「が、実際は他人の血を媒介として生み出された魔力を体内に混入させられる事による魔力循環不全と言うべきか。加えて、傷の治りを阻害する魔術を刻まれ、そうする事によって不治の傷となる訳であるが」

手の内を明かそうが勝敗に変わりはないと言わんばかりにカリスは話した。

ならば、と守越尊は飛び出す。

傷つける事で發揮する力であるなら、傷つけられない自分が行けばいい。

震える足に鞭を打ち、残る力で拳を振るおうとする。

が、

「哀れであるな」

ガクン、と膝が折れた。

突然の事であったが自分の身に何が起こったのかは明確に理解できた。

「既に限界を超えていたか」

ジユブ、と生々しい音が耳に響いた。

既に、その目に青い光は無かった。

つまり、普通の人間に戻ってしまったという事。

「あ……」

一瞬にして、目の前に地面が来た。

全身がだるく、カモ入らない。そして何より、腹部が熱い。

ジユワ、と刀身に付着していた血が内側へと吸い込まれていく。

同時に燃える様な赤へと色を変えていく吸血の剣ダイインスレイブ

(あれ……前にもこんな事……あつたっけ)

視界の片隅では、金属のぶつかり合う音と共に火花が飛び散っていた。

もやは、人の姿は見えない。ただ何も無い所から火花と金属音が響いているだけにも感じる。

(そう言や……倒れてばっかだな、俺)

自分の目で見える事は出来ないが、そこで神裂火織はカリスと戦っている。

上条当麻を守る為に。

それなのに、自分はまた倒れて、いつも助けてもらってばかりで、助けるつもりが、最後には誰かに助けられている。

(また……そうなのか)

上条当麻にミサカに、そしてまた上条当麻に。

意識が遠のいていく。

このまま目を瞑ってしまえば、次に目が覚めたとき一体どうなっているのか。

神裂火織がカリスを止めて全てが無事に収まっているのか。

それとも、カリスが目的を達成してしまっているのか。

どちらにしろ、また、知らない間に決着がついてしまっている。

(そんなのは……!!)

目に光が戻っていく。

拳に力が入る。

足に力が入る。

火花だけが飛び散る視界に、再び二人の姿が映し出される。

そして、

9

神裂火織に守越尊の心配をしている余裕が無かった。

カリスが今手にしている吸血の剣には既に守越尊の血液が付着している。その為、一掠りもする事を許されない。

(く、このままでは……)

血を吸収し、その血を魔力に変換し相手の中に混入させる事によって、魔力の循環不全引き起こす吸血の剣。

魔術を行使する者にとっては脅威とも言える。

少しの掠り傷さえも許されないと云う事はその斬撃を確実に避けきるか、防ぎきるしかない。

実力に差があるなら、それは容易いことだ。

しかし、互いの力が均衡していれば、一瞬の気のゆるみが小さな傷へと繋がる。

今の戦闘において、小さな傷は敗北を意味していた。

「いつまで避けきれぬであろうな」

淡々とした声が聞こえる。

息切れた様子も無く、立ち話をしているようにも聞こえるトーンでカリスは話す。

同じ様に高速で動きまわっているにも拘らず、その差は明らかに見て取れた。

天人と聖人。

同じ様に人間を超えた身体能力を兼ね備え、刀と剣、同類の武器を手に持ち、それでも差が現れる原因はただ一つ。

神裂火織が聖人であると同時に、一人の人間でしかないと言ふ事。

(このままでは、ダメです)

カリスの攻撃を捌きながら、神裂火織は思考する。

既に、この状態では限界に近い事が自分自身で分かっていた。

（やはり、このままではこの辺りが限度ですか）

一瞬の間をおいて、神裂火織は七天七刀の柄を再度強く握り直す。その一秒にも満たない行動で何かを読み取ったカリスも、同じように柄を握り直し、

そして、

瞬、と目の前に守越尊が現れた。

「ッー！」

（この速度で動き回っている中、私達以上の速度で！？）

既に作りこんでいた拳を守越尊はカリスに放つ。

カリスは攻撃しようとしていた動作を即座に防御へと変更し、拳の軌道を読み、吸血の剣で防ごうと行動にでる。

が、

「な！？」

その軌道が、当たる寸前に変更された。

頬の辺りを狙っていた軌道は、吸血の剣に当たる寸前で右肩の位置に変更されたのだ。

まるで、行動を先読みしているかの様に。

ゴン！ 鈍い音と共にカリスの体勢が崩れる。威力が無かったのか、カリスは数歩下がるだけにと留まったが、初めて、カリスに打撃を加えた。

「くー！」

カリスも間髪入れずに反撃をする。

行なうは肉弾戦。

守越尊の瞳は再び青く染まっている。つまりは『神の目』を発動していると言う事。吸血の剣で攻撃したとしても、全く同じ力で相殺されるのが関の山だ。

先ほど、刃の部分で防いだと言うのに守越尊の拳に傷が無い事を見なくとも分かる事。

しかし、

その拳までもが空を切る。

(此奴、某よりも早く動いているとでも言うのかッ? ……いや)
足を入れ替え、右足を軸にカリスは回し蹴りを放つ。

(違う。早く動いているのではない)

その蹴りも寸前の所で守越尊に避けられる。

ただで際、音速とも言える領域で動く事の出来る天人と聖人。その二人が動き回る中への加入。そして、今回の動き。

(我々の動きを見て最短距離を移動してきた……そして今の動き)
カリスはその青く光る瞳を見た。

『神の目』。その目は、全てを見通す目。

「まさか、『見た』と言うのか」

直後に、守越尊の拳がカリスへと迫った。その拳を見極め、カリスは回避を行うが、またもや寸前で軌道が変わる。

カリスが避けた方向へと吸い寄せられる様に、拳が方向を変えて、ポン、とただカリスの頬へと触れた。

攻撃と呼べる代物ではないその拳は、同時に力なく下へと垂れ落ち、同時に体ごと地面へと倒れこんだ。

「まだ……だ」

かすれる様な声が聞こえる。

「行かせたり……するか」

地面に這いつくばりながら、守越尊はカリスの足へと手を伸ばす。握るほどの力もないまま、それでも震える手を精一杯伸ばした。

その様子を、カリスは上から見下ろし、

「なぜ、そこまでして上条当麻を守りたいと言うのだ」

静かに質問する。

「ただ、一人の命でこの世界を取り巻く問題が解決すると言うのに」
「もし……そうだとしても、あいつは俺の恩人で、友達なんだよ。」

細かい理由は、いい。……友達を、助ける。ただ、それだけ……だ」
その言葉を受け、カリスは数秒考えた後、吸血の剣を地面へと突

き刺す。

その意味は『石に刺さった剣』

「温ぬるい言葉であるな」

カリスは再び戻ったカリブルヌスを腰へと収める。

「本当にそう思っているのですか」

カリスが鞘を収めると同時に神裂火織は言った。

「貴様には温い言葉に聞こえぬのか？」

「私が訊きたいのはそんな事ではありません。私が訊きたいのは本当に一人の命で解決すると思っているのか、という事です」

「思っているからこうして来ているのである」

「ではどうして、加減などしていたのですか。もし、本当に上条当麻の命一つで解決するのであれば、この場を終わらし上条当麻のもとへと行けばよかったハズです。貴方になら、それが出来たハズです」

神裂火織は話しながら徐々にカリスへと近寄っていく。その手は柄に行っていない。警戒する様子も無い。

「態々霊装に解説させやすい単純な意味を込めていたのも、効力がある程度抑えていたのも、そう思っている者が行う行動には思えません。何より、貴方の殺気には殺意が全くありませんでした」

なるほど、とカリスは相槌を打ち、

「その辺りまで気がついていたからこそ、態々自分に不利になると分かっている某に合わせる様に力を抑える真似をしていたのである。だが、勘違いしてもらっては困るが、某は本当に上条当麻を殺す気でやって来たぞ。何せ、貴様の首を取りに行った時は本気であったからな」

「ええ、それは心得ています。私もあの瞬間は不覚でした。しかし、その後はまるで何かを確認している様に見えましたが」

と、神裂火織は視線を下に落としました。

カリスも同じ様に視線を移動させ、

「守越尊ですか。正確に言うと、その者が持つ『神の目』でしょう

が

『神の目』即ち神の体の一部とされ、それを宿す者は天人とされる。

そして、天人とは『ノア』の名を継ぐ者を意味している。

(この少年、一瞬ではあるが、先を『見た』のか)

本来、ただの人間が神の体の一部を宿す事などありえない。

「東洋の聖人。一人の命で解決するのかと訊いていたな。無論その通りだ。が、気が変わったと言う事にしておくのだな」

カリスは小さく口元を緩ますと、

「この者に多少の興味が湧いてきた。そこまで言うのであれば、再度見極める時間を設けてもいいだろう」

また、倒れてしまった。

一度は立ち上がり、再び立ち向かって行った。ただ、考えてみればそれも今までと同じ事。誰かを助けたい、そう強く思っても現実にはうまくは行かない。

気を失っている間に、また物事がある意味解決してしまっていたみたいだ。

「どうなっただよ……」

倒れてしまった事に嘆きたい気分でもあったが、目の前の状況にそんな事をしている余裕はないかもしれない。

現在、守越尊がいるのは、自室だ。

昨日の激戦から夜が明け、誰かによつてこの部屋まで運ばれたみたいなのだが、

その相手が問題だ。

ベッドから起き上がり、自室の真ん中に置かれてある小さな卓袱台を見ると、そこにはまだ湯気の出ているご飯に、味噌汁、焼き鮭、お新香、と言う純和食と呼べる朝食が並べられてある。

それも二人前。

ここは守越尊の自室であり、ここに住んでいるのは守越尊一人のはずである。それに加え、守越尊は今日朝食を作っていない。

「何故呆気にとられた顔をしておるのだ？」

「あんたがこんな所にいるからだろ！」

腰まで届く茶色い長い髪をポニーテールで纏め、紺色のアオザイの様な服には白い直線的な模様が入り、腰には動きやすい様にか帯が巻かれてある。その上には薄い黄色の羽織を着て、

カリスがそこにいた。

「昨日当麻を狙って学園都市に来て、敵同士だったってのになんでこんな所に　って当麻は!?!」

「心配する事はない。上条当麻はまだ生きているぞ」

カリスは静かにそう告げる。

「当麻は無事……なのか」

勢いよく立ち上がっていた守越尊は、ドサッとベッドに座り込んだ。

「はあー、つてあれ？　傷が……」

安堵して漸く気がついたのが、自分の腹部に違和感を感じた。昨日、カリスに斬られた傷が痛まないのだ。服を捲り上げ確認してみるのが、傷一つ残っていない。

「不治の傷じゃなかったのか？」

吸血の剣ダイインスレイブによってつけられた傷は不治のモノとなる。そう言っていた様に思っただが、

「確かに、吸血の剣ダイインスレイブによってつけられた傷は不治のモノとなるが、あの時剣が得ていたのは貴様の血だけであろう。自分の体に自分の血から生み出された魔力を注ぎ込まれても何も起こるまい。吸血ダイインスレイブの剣は様々な血を取り込む事により威力を増していく霊装であるからな」

そう言いながら、カリスは向かい合う様にして卓袱台の傍に座り、腰に据えてある霊装を床に下ろすと、並べられてある朝食へと手をつけ始めた。

「……どう言うつもりだ」

「遠慮する事はない。貴様も食べるがいい」

「だから、どう言うつもりか訊いてるんだ」

「何だ？　日本の朝食と言うモノはこう言うモノであつたはずだが」

「ああ。誰が見てもこれは日本の朝食だ。俺が言いたいのそんな事じゃない!」

「ならば食べる。某が作つてやったのだ。訊きたい事があるなら食

べながらでもよいであろう」

ム、と守越尊は顔を歪ませながらも、言われる通りにカリスと向かい合う様に座り、朝食へと手をつける。

自分の家の冷蔵庫にこれだけの朝食を作る材料があったか？ などと言う疑問も湧いて出たが、とりあえず箸を進めた。

「で、どう言うつもりだ」

守越尊は味噌汁を一杯すすり、その予想以上のおいしさに驚きながらも、それを表情に出さずに問いかけた。

「貴様に興味がでた」

「は？」

「言ったであろう。天人とは『ノア』の名を継ぐ者だと。にも拘らず如何にしてその力が貴様に宿ったのか興味が湧いてな。それに聞く所によると、隣人は上条当麻と言うではないか」

「それとこれにどう言う関係がある？」

行儀が悪いのは百も承知だが、守越尊は箸で卓上を指す。

「上条当麻を見極める時間を設けてやると言っているのだ。貴様に興味があり、隣には上条当麻がいる。ここに居座る理由はそれで十分であろう？ これは居候としてもせめてもの礼儀だ」

「居座るって……ここ男子寮だぞ！？」

カリスは気にする様子もなく、淡々と味噌汁をすすり、

「問題なかるう。某はこの住人ではない」

「確かにそうだけど」

「何を心配しているかは知らんが、某と貴様の様な若造では変な間違いを起こす事もなかるう」

「若造って」

確かに守越尊は高校一年だが、見た感じカリスも差ほど歳の差を感じない。大人びた感じはあるが、言えば神裂火織の様に歳に比例していないだけにも見える。

「貴様の一〇倍ほど生きている某にとっては、若造の他ならぬであるう」

「は？ 一〇倍？」

「女性に対して年齢を訊くとは失礼な奴ではあるが、まあいいだろう。某は一三二歳だ」

箸が止まる守越尊に対して、カリスは変わらず淡々とおかずを口へと運んでいた。いつの間にか、カリスの前の朝食はほとんどなくなっている。

「一三二!？」

「驚く事はあるまい。偉大なる祖『ノア』は九五〇まで生きられたのだからな」

驚く守越尊を他所に、カリスは朝食を済ませていた。

11

カリスが言うには

天人とは、

『ノア』の名を継ぐ者、世界を正す者とも言われるそうだが、ノアが神より授かった力を受け継ぐ一子相伝の一族らしい。

似たようなモノとして聖人が上げられる。ただ聖人はその身体的特徴や魔術的記号が神の子に似ていると言う事から、神の力の一端をその身に宿す事が出来る人間を指す。その為、聖人自身の肉体は人間であるが故に、その力を完全に扱うにはある程度の限界が生じる。

しかし天人の場合は、その肉体が「原罪」を受ける前の人間に限りなく近いという事から、天人としての力を遺憾なく発揮する事が出来ると言う。

神の許しを得た者。人類の罪を薄められる事によってその肉体は楽園を追われる前のモノへ限りなく近づいた。その為、人間の身体能力を超えた動きを行ったとしても、その体に負荷がかかる事はほとんどない。

が、守越尊は人間だ。その身に能力者と魔術師の血が流れているという稀な存在ではあるが、普通の人間に変わりはない。

「過去にそう言った事例が無い事もないのだがな」

カリスはこの家にあつたか記憶のない急須からお茶を注ぎながら言う。

「確か、彼のジャンヌⅡダルクも貴様と同じ様に天人に似た力を有してしたと聞くがな。ただ、彼女の場合はその力が偉大なる祖『ノア』と同じ『神の声』を聞く力である事から、人類の祖であるノアの力が何らかの影響で引き出されたと考えられているがな」

カリスは左手で湯のみの底を押さえ、右手は横に沿え、お茶を一口すすする。

彼女が言うには、天人には様々な神の体の一部が与えられている。人類の祖であり、天人の始まりでもあるノアに与えられた力は「神の耳」。その力によりノアは神の声を聞き、方舟を作ったとされる。さらに「神の耳は万物の声を聞き分ける」と言う事から、動物達の声を聞き、それぞれの番つがいを船に乗せたと言う。

カリスⅡノアに与えられたのは「神の手」

「創造主たる神の手は万物を作り出す」と言う力らしいのだが、カリブルヌスと言う霊装に意味を込める事によって、他の霊装を作り出すと言う力に留まってしまっているらしい。色々な理由があるそうなのだが、一番の原因は、数代にかけて人間の血が混ざり、天人としての力が弱まりつつあるのだとか。

そして、守越尊に宿る力。『神の目』

「創造主たる神の目は全てを見通す」と言う力らしい。

カリスがこの力に対して副産物と挙げていたモノに、同等の力をぶつける事によって相殺する、と言うモノがあつたが、それはこの力の一部を使ったモノに過ぎないと言う。

全てを見通すと言う事は、つまりは「先読み」

「貴様が最後に見せたのは間違いない、先読み。そんなモノを見せられてしまつては紛いモノではなく、本物と認めざるを得まい」

「何で、そんなモノが俺に？」

「そんな事は某が訊きたい。だからこそ、こうしてここに居るのである。」

昨日見せた殺気など微塵も感じさせないで、カリスはお茶をすすっている。

天人であり、既に一三二年も生きてきたカリスが分からないのであれば、自分自身に知る術はあるのだろうか。

そんな考えをしている間にもお茶を飲み終えたカリスは、

「さて」

そう呟き、立ち上がるとカリブルヌスを腰へと提げる。

「居座ると言ったが、某はこれからフランスへ向かわねばならんでな。数日部屋を空けるぞ」

「は？ フランス？」

「上条当麻が元凶ではあるのだが、その他にも気になる粒子は山ほどある。中でも今回のデモ騒動を引き起こしたモノがフランスにあると情報が来たのでな、少しばかり様子を見てくると言う訳だ」

「情報つて、そんな事誰から？」

「某の使い魔ファミリアからだ」

と、ガチャと部屋の扉が開いた。

守越尊はドアの方向へと視線を向けるが、場所の関係で誰が来たのかが見えない。それとは逆に顔を横に向けただけで部屋の入り口が一望できるカリスは、その誰かに向かつて、

「遅かったではないか、ネルフィ」

「はい、遅くなりましたニヤ」

入って来たのは、白銀の髪の少女だった。肩にかかるくらいの長さの髪は染めた様に白く、そしてその着ている服には見覚えがある。ベージュ色のブレザーに紺系チェック柄のプリーツスカート。確か、常盤台中学の制服だった。

更に極めつけは、ピョコッと頭についているそれ。

「猫耳に尻尾!？」

頭にはコスプレの様な真っ白の猫耳に、お尻の部分から長い尻尾。常盤台中学の制服を来た少女は守越尊の反応に、ニヤン？ と首を傾げている。それこそ本当の猫みたいに。

「ご苦労であったな」

「はい、お箸にコップ、スプーンにフォークにやどにやど、カリス様に言われた品はここに全て入っていますニヤ」

そう言いながら、ネルフィと呼ばれる少女はカリスへと袋を渡す。「常盤台の生徒が何で??」

カリスは学園都市の住人ではない。それはカリス自身が言っていた事だ。

にも拘らず、何故常盤台中学の生徒とこれほど親しいのか。

「これですかニヤ？」

と、ネルフィは自分の着ている制服を摘む。

「これは、さつき見かけた人の服装を真似ただけですニヤ」

「真似るって、じゃあ常盤台の生徒じゃ……」

「ネルフィは某の使い魔だ。ファミリア人間ではない。猫だ」

「猫!?!」

よく見れば、頭についている耳がピヨピヨと動いていた。お尻の辺りから伸びている尻尾もクネクネと動いている。

「某の居ない間は、このネルフィをここに居座させるのでな」

「よろしく願いますニヤ」

顔の近くで手首を折ってポーズを決める姿は、確かに猫そのものだった。

12

バチカンの聖ピエトロ大聖堂。

その一角を一つのシルエットが歩いていた。

時折窓から見えるその上空には薄気味悪い空が広がっていた。無

数の結界が衝突や競合を行いまるでオーロラのように揺らいでいしまっている。

その為、差し込んでくる月の光は十分ではなく、人工的な灯りが無ければ辺りは闇に包まれてしまう。

ピタリ、とそのシルエットが月の光りが差し込む窓の手前で止まった。

「何か用ですかね？」

低い男の声だった。

男は立ち止まり、前方で待っていた何かに対して質問を投げかける。

「いやいや、偶々通りかかったただけですよ」

対する声は若い男の声だった。

カツ、とタイルに足音を響かせて窓際までやって来た男は黒い神父服を纏っていた。

「今からフランスへ？」

「ええ、アレを使えるのはここかあそこしかありませんからね」

それに、と男は付け加え

「貴方の働きでフランスには色々と融通が利きますからね。こちらとしては動きやすいんですよ」

なるほど、と神父服の男は呟く。

雲の動きによって月の隠れていた部分が現れた為、窓から入ってくる光りの角度が動いた。胸元辺りまでしか映し出されていなかった神父服の男のシルエットがハッキリと映し出されていた。

金髪の青年だった。

その顔を見て男は、おや？ と首を傾げ、

「ああ、今日は確か満月でしたね」

青年の顔にかけられてある眼帯を見ながら男はそう答えた。

「それもあるけど、最近不安定なモノでね。貴方だって嫌でしょ？

死んじやうの」

青年がそんな言葉をかけるが、男は平然とした様子で、

「ええそうですね。確かに困ります。何せ私達にはまだまだやらなくてはならない事がありますからね。ただでさえ、人数が一人減っていますから」

本当にそう思っているのか分からない様な声だった。軽くあしらっただけでも聞こえる回答だったが、青年もそんな事は気にしている様にも見えない。

「それでは失礼しますね。私も色々忙しいのでね」

男はそう言いながら青年の横を通り過ぎて行く。

窓際を通り過ぎて行く際、見えたのは緑色の修道服を着て線の細い痩せたシルエットだった。

「すみませんね足止めしちゃって。まあ頑張ってください」

こちらも本当にそう思っているのか分からない返答だった。気持ちのこもっていない、寧ろ笑みさえを見える表情で、

「 神の右席さん」

静かに呟いた。

それが相手に聞こえていたか分からないが、例え聞こえていなくても問題ない。その程度の会話でしかない。

所詮は上っ面だけの会話だ。

キャラクター集(前書き)

主要なキャラが出揃いつつあるので、この辺りで軽くまとめてみました。

キャラクター集

名前

・ かみこえ みこと
守越尊

本編に置ける主人公で高校一年。

『神の目』を有し、天人とされている。

能力者の母と魔術師の父を親とする混血児であり、その事によって一度はその力の使い方や生き方を見失いかけたが、上条当麻の存在によって立ち直った様子。

他人を放っておけないタイプの人間だが、上条当麻の影響も大きい。

口癖「あんた」

能力

・ 『神の目』

「創造主たる神の目は全てを見通す」と言う力で、その一部の力だけで、相手の発動した魔術、能力、霊装を分析した上で同等の力をぶつける事で相殺する、と言う事を成し遂げてしまう力。原子崩^{マルチタウ}しを防いだ際には、光りの閃光に対して光りの壁の様なモノを出現させて防ぐと言った応用も利くようである。その全ての力を使いこなせれば『先を見る』事が出来るらしい。

名前

・ わおん
和音

> i 3 4 5 8 5 — 4 3 2 9 <

本編のヒロインの一人で、霧ヶ丘女学院の一年。

日々『幸せ』を捜し求めていたり、自分が追われている様な行動を取ったりと、秘密がありそうな少女。 守越尊に助けられた（本

当は守越尊が狙われていた)事もあって、守越尊に対してそれなりに好意を持っている様子。

泳ぐ事が得意であり、プールに言った際には競泳用水着とスクー
ル水着の中間の様な水着で、守越尊の目のやり場を困らせていた。

能力

・名前は不明

『音』に關係している能力らしく、本人曰く「ある特定の周波数の音を発する事で演算能力を阻害する」モノらしい。ただ、使用の際には自分自身にも負荷がかかる為リスクは高い。

名前

・ミサカー一九〇九〇号

本編のヒロインの一人。

シスターズ

妹達の中で唯一人間の感情データをインストールされている個体。他の個体とは違い、上条当麻ではなく守越尊に好意を持っている様子。大覇星祭では他の個体にお願いしてまで行動を起こしたが、肝心の守越尊がいなかった為に失敗に終わっている。

名前

・カリスIIノア

> i 3 4 4 4 4 — 4 3 2 9 <

本編の最年長ヒロイン?

『ノア』の名を継ぐ天人であり、一三二歳。

世界を正す者として、世界で起こっている状況の元凶が上条当麻であると言う事から、学園都市へと侵入。そこで聖人である神裂火織と守越尊に出会い、一戦を交える。

戦いの中で二人を相手に様子を見る余裕を見せつけなど、本来で

あるならば二人を一掃して上条当麻の所へ向えたであろうと神裂火織は推測している。

その際に『ノア』の名を継ぐ者ではない守越尊が、天人としての力を授かっている事に興味を持ち、その守越尊が上条当麻を守ると言っている事から、上条当麻を見極める時間を再度設けると共に守越尊の部屋に居座ると宣言した。

口癖は「某々」

能力

・『神の手』

「創造主たる神の手は万物を作り出す」と言う力らしいのだが、現在ではカリブルヌスに意味を込める事によって、別の霊装に作り変える力に留まってしまっている。様々な理由があるようだが、その一つとしては子を作る為に数代に渡り人間の血が混入した事によって天人としての力が弱まっているとの事。

名前

・ネルフイ

本編の人間外ヒロイン？

カリスの使い魔であり、人間ではなく猫。

白銀のショートヘアで、人間の姿をしているが頭には猫耳があり、お尻の部分からは尻尾が生えている。

守越尊の部屋へやって来た時には外で見かけた常盤台中学の制服を見て、全く同じ服を真似て来ていた。

口癖は「〜ニヤ」

名前

・マリリー＝アンソワージュ

魔術的道具や霊装の盗みを専門とする魔術師。

姉マリーと妹リリー二人でマリリーとなる。

ローマ正教内の霊装を盗もうとしてある男に捕まり、レイザーソード剃刀の剣を盗むように命令される。一時は霊装を手に入れるが、『神の目』を発動した守越尊の前に呆気なく敗れた。

その際現場に残っていたのはリリーの方で、マリーはローマ正教へと戻るが二人を捕まえた男によって殺される。リリーはイギリス清教に捕まっている模様。

能力

トッヘル
・重複分身魔術

実際に実体が増える訳ではなく、相手に対して恰ももう一人の自分がそこにいるかのように錯覚させる魔術。マリーとリリーはツインミラーである事を利用し、二人の容姿を全く同じにする事によってマリリー＝アンソワージュと言う魔術師が分身している様に錯覚させた。

その際に、気配を絶つ魔術や死角に潜る魔術を織り交ぜる事によってその効力は格段に向上する。

名前

・『神の右席』になれなかった男（本名は不明）

真つ黒の神父服を纏っており、髪は短髪で色は金髪。神父服の前にはボタンがいくつもつけられており、それらを全て取るとコートにも見える。

聖ピエトロ大聖堂でマリー＝アンソワージュを殺したのも、アックアの前に現れたのも、眼帯をつけていたのも、同じ男と思われる。自分では『神の右席』になれなかった者、と言っているが、アックアが『なれなかった』のと『ならなかった』のでは大違い、と言っており、実際はどうなのかは分からない。

名前

・ 守越無月 かみこえ なつき

守越尊の母親であり、二〇年前に学園都市とイギリス清教内で行われた『新たな術者』を生み出す実験における学園都市側の被験者。その際にイギリス清教に所属する天城三門と出会い、数年後に守越尊を授かる。能力者が魔術を使うと体が破壊される事から、魔術師との間に子を授かった事で出産時にその影響の為亡くなった。

名前

・ 天城三門 あましろ みかど

守越尊の父親であり、二〇年前に学園都市とイギリス清教内で行われた『新たな術者』を生み出す実験における魔術側の被験者。実験後に守越無月やシェリー・クロムウエルと共にイギリス清教の清教派によって保護されていたが、能力者である守越無月が無事に保護されて行く保障が無いとして、守越無月と共にイギリス清教を抜け出し、その事から裏切り者とされた。

その五年後、魔術師達の手によって殺されたとされている。

名前

・ 新風正一 あらいひびつ せいいち

守越尊の育ての親。数年前に病気の為に他界してしまっている。

名前

・ 新風洋子 あらいなみ けいし

守越尊の育ての親。施設の保母として親のいない子供達の世話を

しているが、その場所で剃刀レイザーソードの剣を代々管理している管理人でもある。守越尊の両親について何か知っていた事から、守越無月や天城三門の事も知っている様子。

設定集（前書き）

今回も軽いまとめです。

原作とは多少設定が異なるモノもございませす

設定集

・天人^{てんじん}

偉大なる祖『ノア』の名前を継ぐ一子相伝の一族。

世界を正す者、神の許しを得た者、様々な呼び名を有しているが全て正しいと言える。

その肉体は、楽園にいた頃の人間に限りなく近く、ノアが九五〇歳まで生きたように長寿である。実際にカリスは現在一三二歳であるにも拘らず、見た目は守越尊よりも少し年上に見える程度。

その為、天人としての力を発揮し人間の身体能力を超える動きを続けたとしても、体への影響はほとんど無い。

神の体の一部を授かっており、ノアの『神の耳』、カリスの『神の手』、守越尊の『神の目』がある。

・カリブルヌス

カリスが愛用する、かつて英国全土を治めていたアーサー王が所持していた聖剣とも呼ばれる霊装。

その鞘はいかなる傷をも受け付けぬ魔法の鞘であり、抜刀すれば二匹の炎蛇が地を走る。

・剃刀の剣^{レイザースード}

魔術師ウィリアム・オツカムが作り出した霊装。全てを斬り裂く剣と言われている。対象とするモノとの距離があるうが、大きさがあろうが、硬さがあるうが、それらの項目を削ぎ落とす事によって最終的には『斬る』と言う部分だけが残る。

・ジュワイユーズ

フランス王家に伝わるデュランダルに対を成すと言われる霊装。柄頭には聖槍が埋められているとわれ、デュランダルに似た性質を持つ。神の右席になれなかつた男が幾度か使用を試みたが、フランスの王家の者でなければ使用する事は不可能の様で、恩を売る意味でフランスへと返還される事となった。

・カリスが作り出した霊装

・フラガラツハ

アンサラ 応答者とも言われる霊装。見た者の恐怖の感情を最大限に増大させ、力を失わせる。

足がすくんで動けない、力が入らない、そう言う状況を意図的に作り出してしまう。

ダインスレイ
・吸血の剣

抜けば必ず人の血を吸わずにおかない、妖剣とも呼ばれる霊装。相手の血を刀身より吸収し、別の相手に切りつける事で効力が発揮される。様々な血が混ざり合えば混ざり合うほどその効力は増し、それによって生み出された魔力を体内に混入させられる事によって、負傷者は魔力の循環不全を引き起こす。

・クラウソラス

『不敗』の名をモノにする、フレイの剣に劣らぬ霊装。『誰も逃れる事の出来ない』『一度も負けた事がない』『ひとつりで敵を倒し何者にも破れぬ』などの描写があるように、その破壊力は折紙付であるが、放たれた光の刃は守越尊の『神の目』によって防がれた

為、実際にその破壊力を目にする事はなかった。

8 - 1 「それぞれの分野」(前書き)

オリジナルが続きます。

学園都市の中には外とは違う別世界が広がっている。

道端には地べたにへばり付くガムでさえも、一瞬にして剥がしてしまふドラム式掃除ロボットが巡回していたり、同じ様に警備方向ポットが街中をうろつろしているのは当たり前だ。

手から炎を出す発火能力者や電撃使い。バイロキネシス エレクトロマスター その様な能力者が街中にいたとしても、それはこの学園都市にとっては最早常識となっている。

そんな中でもただ一人目立っている人物がいた。

人物と呼んでも良いのか分からないが、一応人の形はしている。この学園都市内にある学校の制服を纏い、その人物は過ぎ去って行く人から注目を集めていた。

「ニヤニヤ!? まだ底にアイスクリームを隠しているとは、恐るべし学園都市ですニヤ」

そんな事もお構いなしで当の本人、ネルフィはただでさえ目立つ常盤台中学の制服を纏い、加えて猫耳にクネクネ動く尻尾をお尻の部分から出し、先ほど購入したクレープを頬張りながら歩いていた。目立っている理由は言うまでも無いが、常盤台中学と言えば学園都市五本の指に入るエリートお嬢様校であり、その生徒がコスプレなどしているとすれば、目立たない訳がない。更に日本人離れた白銀の髪が目立つ要素にプラスされている。

「おいおい、目立ってるぞ」

隣を歩く守越尊はため息交じりに、そう忠告してみるが、

「ニヤるほど。アイスがもう終わってしまったと思わせた所に、もう一つのアイスを登場させる事によって喜びを倍増させる技術ニヤ

のですニヤ」

ネルフィは気にする様子もなくクレープを頼張っている。

守越尊の部屋へネルフィが居座り始めて数日。カリスはフランスへ行くと言ってまだ帰って来ていない。その代わりに居座り、上条当麻を見極める、守越尊を監視する、主にこの二つを任されていたネルフィであったが、

「おお、あそこにまた違った種類の使い魔ファミリアがいますニヤ」

と、指差す方向にはドラム式掃除ロボットの姿がある。違う形と
いうのは警備方ロボットの事を言っているのだろう。

監視する所か、これではトコトコとネルフィの方がどこかに行つてしまいそうである。

「ってか、当麻の事はいいのかよ」

上条当麻の事を見極めると言っていたが、肝心の上条当麻もネルフィが来てから二日ほど部屋を空けていた気がする。また何処かで厄介ごとに巻き込まれていなければ良いのだが、そんな心配を他所にネルフィは、

「それなら大丈夫ですニヤ。尊様が学校に居られる間は隣クラスにいる上条当麻を見えますし、不在だった時は姉さまが付けてましたニヤ。彼からも色々とお話を聞きましたし、問題ニヤしです」

そう言えば、教室の窓から白い猫が窓の外を歩いている姿を見た気がしたし、『彼』と言うのは恐らく、上条当麻の部屋で飼われている猫、スフィックスの事であろう。

「姉がいるのか？」

「はい、今はヨーロッパの方にいますニヤ」

「ヨーロッパってことは、当麻もヨーロッパにいたのか??」

「みたいですニヤ」

確か、カリスが向かったのはフランスだったはず。近くに上条当麻も行っていただけであれば、また何かの事件に巻き込まれている可能性が無い訳ではない。

(てか、カリスがフランスに行ったのは当麻を追ってじゃないよな)

ただでさえカリスに狙われていると言うのに、これ以上目に付く事があれば容赦なく斬りつけられそうな予感がする。

「付けられていますニヤ」

不意にネルファイがそんな事を言った。

「は？」

守越尊は背後を確認しようとして振り返ろうとしたが、

「そのまま歩いて下さいニヤ」

ネルファイはクレープを食べ終え包み用紙を折りたたみ、偶然通りかかった掃除ロボットへとゴミを差し出す。

「付けられてるって、どう言う事だ」

「そのままの意味ですニヤ。正確に言いますと、尊様と一緒に行動し始めた時には既に監視されている状態でしたニヤ」

初めて聞くネルファイのまじめな声や表情に、新鮮味を感じながら守越尊は問い返す。

「今朝からって事か？」

「居座るようになってからですニヤ。もしかすると、それ以前から監視していたかもしれニヤいですが」

監視。

一体何故？

と、一瞬思考した所、可能性のある要素がいくつもあった。

天人、神の目、能力者と魔術師の血を引く。大きなモノとしてこれらが挙げられる。そう言えば、科学側からも狙われた事があった、と守越尊は思い出す。

メルトタウン

原子崩しとの一件だ。

「何で今まで黙ってたんだ？」

「確信がニヤかったんです。姉さまなら一瞬で判断出来たと思うんですけど」

ネルファイが始めて落ち込む様な素振りを見せた。

本の一瞬だけ。しかし、表情を戻すと

「ニヤー、用事を思い出しましたニヤ」

「はい？」

「ですから、用事があるのですニヤ。尊様は先に部屋に帰っていて下さいニヤ」

なんともワザとらしい言い草である。

「（尊様を追跡してるですニヤ。尊様はこのまま帰路に着いて下さいニヤ、そうしないと相手が何者なのか調査できニヤいですから）」
「って、おい」

「心配しニヤくても、直ぐに戻りますニヤ」

そう言っただけでネルフィは人ごみの中へと消えていく。

もし、相手がこの会話聞いていたらどうするのか、と言う疑問も湧きあがるが、恐らく盗聴はされていないと確信した上での行動だ
と思う。そう思いたいと守越尊は考える。

（なら、こっちはちゃんと部屋に戻るか。対処はネルフィが帰って来てからにしよう。それにもかしたら、カリスも帰ってるかもしれないからな）

2

学園都市には表の世界には知られていない裏の世界で働く者達がいる。

『グループ』

彼らもその中に一つの組織だった。

「なんの用だ土御門」

その一員である一方通行は携帯電話を握っていた。
アクセラレータ

学園都市第一位の能力者である彼は、ある事件をきっかけにその能力に制限をかけられた。演算能力の消失。脳を傷つけた彼は全ての演算能力を失った。

現在ではその演算を約一万もの妹達によるミサカネットワークシスターズを通して代理演算を任せていると言った状態だ。

能力使用は三〇分。

電極のバッテリーの都合上、たったのそれだけしか能力を使用できない。

『なあに、ちよつとばかり仕事さ』

電話越しの彼、土御門元春も『グループ』の一員だ。イギリス清教ネセサリウス必要悪の教会の一員でもあり、能力者でもある彼はイギリス清教のそして学園都市の二重スパイだ。

「ならそつちで勝手に片付けちまえばいいだろう。生憎、今日は気が進まねエンでな」

『人手が足りないんで嫌でも動いてもらわないと困るんだがな』

「海原は」

『私用で来れないだと』

「結標は」

『そつちに向かわせてある』

「テメエは何をする」

『今回の仕事は二手に分かれる必要があるんでな。俺はそつちに向かう』

なるほど、と一方通行アクセラレータは呟き、

「なら、結標をそつちに向かわせる。こつちは一人で十分だ」

『いやあ、それは出来ないんだにや』

「何故だ」

『簡単な事だ。それぞれの分野つてもんがあるだろ。こつちは俺の分野つて事だ』

一方通行アクセラレータはそれ以上余計な追求はしなかった。土御門の言っている事を一〇〇%理解した訳ではないが、言いたいことは分かる。

恐らく海原がいたのなら、土御門側に入るであろう。

たまに、海原と土御門アクセラレータからは一方通行ですら理解できない用語が飛び出す事がある。

それが一体何なのか興味を持った事はないが、言いたい事はそう言う事だ。

「なら、さつさと情報をよこせ」

『仕事はある研究者の拘束と能力者の保護ってトコだ。研究者の名は天井羽衣』
あまい はころも

（天井だと？）

アクセラレータ

一方通行は眉をしかめた。

その名前を知っていたからだ。

「おい、その天井ってのは」

『天井亜雄の弟だ』
あまい あお

アクセラレータ

ち、と一方通行は舌を打つ。

天井亜雄と言うのはかつて量産型能力者計画と絶対能力進化計画
レディオノイズと絶対能力進化計画
レベル6ソフトに携わっていた研究者だ。

しかし研究は全て失敗に終わり、最終的には打ち止めを使い妹達
ラストオーダー暴走を引き起こそうとした。その際に一方通行は打ち止めを助ける
ラストオーダー為に演算能力を失った。

「なるほど、あのクソ野郎の弟とやらをぶつ殺せばいいって訳か」

『まあ、それでもかまわねえが、能力者の確保を優先しろ。生きて
ままだ。それが今回の仕事の最優先事項だ』

つまりは、能力者さえ回収できれば、研究者はどうなっても良い
と言う事。

「簡単な仕事だ。で、能力者の情報は」

普段であるなら、そんな事を聞く事はなかったかもしれない。

ただ、今回は研究者の名前が引つかかる。兄が兄なのだ。天井亜
雄の弟であるならば、量産型能力者計画や絶対能力進化計画に関わ
レディオノイズっていた可能性はある。実際に一方通行が参加していた絶対能力進
レベル6ソフト化計画ではその様な姿は見受けられなかったが、
能力者の情報はそれほど無いが、名は……掛橋至
かけはし いたる

「……フ」

『ん？ どうした一方通行』
アクセラレータ

「なんでもねえ。場所は向かえの奴が知ってる。なら切るぞ」
おい、と言う土御門の声が聞こえたが、お構いなしに電話を切っ

た。

裏路地の入り口の壁に腰掛けていた一方通行は腰を上げた。
何とも言いがたいめぐり合わせだと思う。

天井亜雄の弟に加え、

「八、まさかあの雲野郎とはな」

掛橋至。一方通行はその名を知っている。

その人物と出会ったのは一方通行が九歳の時だったが、その頃一方通行は『特力研』にいた。

特例能力者多重調整技術研究所。

通称『特力研』

そこで行われていたのは言うまでも無く、
多重能力者の研究だった。

8 - 1 「それぞれの分野」(後書き)

何か思うことがあれば、感想にちよちよと書いてやって下さいな。

8 - 2 「天井羽衣」(前書き)

リメイクすると言いながら、こちらを進めると言う形になってしまいました。これからもとある魔術の天の住人をよろしく願います。

一方通行はゴミ収集車の中にいた。

偽造車であるこの車の中には、『グループ』のメンバーでもある結標淡希も一緒に乗っている。

運転席には、作業服を着た男が一人。真ん中に結標淡希、窓側に一方通行と車内は意外と狭い。

もちろん、本当にゴミを回収に行くのが目的ではなく、あくまでもゴミ収集車はカムフラージュだ。運転をしている作業服の男も、上が寄こした案内役。

基本的に、偽装した車で移動する事が多かったが、『グループ』のメンバーでそんな事を気にしている者はいなかった。

「んで、場所はどこなんだ」

一方通行は作業服の男に尋ねた。

「第二三学区です」

男は単調に答える。

第二三学区と言えば、航空・宇宙産業を専門としている特別な学区だ。宇宙開発の為に最先端のロケット発射台や、国際空港を備えている。

「確かターゲットは研究者と能力者よね？ 何でまたそんな所に居座ってるのかしら」

研究者の多くは第一〇学区に研究施設を構えている者が多い。最も土地の値段が安いと言う事もあるが、

「その辺りまでの詳しい情報は分かりません。確かに、第一〇学区は研究をすると言う意味では適している場所でしょう。土地の価格、動物実験の破棄場、それに墓地がありますからね」

「動物実験じゃなくて、人体実験の破棄場の間違いじゃねエかア。」

少なくとも、俺の知ってる研究者ってのは動物で満足している様な輩じゃなかったがな」

「まあ、その為に墓地が作られたんじゃないでしょうか。名目上区別する為に」

とんでもない会話に聞こえないのだが、これが現実だった。

一つを例にあげると、一方通行がかったていた『特力研』では多重能力の実験が行われていた。

現在では、能力者に能力は一つまで、と言う事が当たり前になっているが、それはこの『特力研』で行われていた数々の実験の結果によって導き出されたモノだ。

つまり、その結論にたどり着くまでに数多くの学生が犠牲になっている。

さらにそこには、その失敗によって出来てしまった死体が、その辺りに転がっていたとかで、しかしそんな事を行っていた研究者達でさえ、一方通行は手に負えなかったと言う。

「見えましたよ」

男はそう言うのと車を路肩に止めた。

「ふーん。あんなトコにいる訳ね」

結標淡希は窓越しにその建物を見た。

周囲に張られた金網には、立ち入り禁止の表札が張られており、その中心にはコンクリートの建物、そして、巨大なアンテナが空に向いている。

「ツリーダイヤグラム樹形図ツリーダイヤグラムの設計者情報送受信センター。て言うか、そもそも『樹形図ツリーダイヤグラムの設計者』はもう壊れてるのに、こんな所使うなんていい趣味してるわね。今更知らないって事も無いでしょうし」

「さあ、私には分かりません。情報ではここで能力者の実験を行っているとかで、詳しい事は直接本人に訊いてもらえればいいかと」

一方通行と結標淡希が車から降りると、ゴミ収集車はその場を離れていく。

「さて、どうやって乗り込めばいいのかしら」

結標淡希はフェンスの前に立って言う。

元々、この施設は樹形図ツリーダイアグラムの設計者との通信を唯一行っていた施設と言ふ事もあって、機密区域とされていた。

今現在も、樹形図ツリーダイアグラムの設計者が破壊されてからも電力は供給され続けているため、セキュリティが健在な可能性は十分にある。

例え、そのセキュリティが一度解除されていたとしても、この施設を使用している天井羽衣が再び設定を行っているかもしれない。

「その必要なエミタだな」

一方通行がフェンスの先を見つめると、そこには一人の男性が立っていた。

遠くにいるので、その容姿までは分からないが、纏っているのは恐らく白衣だろう。

男はまるで誘っているかのように、一方通行達を数秒見た後、建物へと走っていく。

「誘ってやがンのか」

上等だ。そう言って一方通行は首筋のチョッカーへと手を伸ばす。能力を失った一方通行が最強へと変わる瞬間。

そのスイッチをオンにすれば、あらゆるベクトルアクセラレータを操る一方通行へと変わる。

ゴン！ と一方通行は地面を蹴った。

フェンスは一方通行に当たると同時にトラックでも衝突したかの様に、左右へと引き裂かれた。

空気でも切り裂くように、一〇〇メートルはあった距離が一瞬にして詰まる。

が、

「チッ」

と、一方通行はその移動を止めた。

目の前に人影が割り込んだからだ。

「ハッ、懐かしい顔にご対面ってかア？」

背の低い少年だった。

身長は一五〇センチ程度と言った所か。

背が小さいだけではなく、その容姿もまだ幼さが残っている。

サラサラとした黒色のショートヘアは髪質からも手入れは不要だろう。

天井羽衣は能力者を使って実験を行っている、と言っ情報からも纏っている手術服に何故か違和感はない。

足元は歩きやすい用にか、サンダルの踵部分には足を固定できる用に工夫が成されてある。

「……………」

「話す気はねエってか。掛橋至^{かけはし いたる}」

「…………… 侵入者は…………… 排除します」

まるでロボットの様な口調で掛橋至は言う。

感情すらもっていない、ただ決められた文章を読み上げた様に。

「先に行けば？」

追いついた結標淡希が言う。

「正直、天井羽衣がどんな実験をしているか気になってるんじゃない？ 兄が兄だけにね。似合いもせず^{シスターズ}に妹達に危険が及ばないか、調べる必要があると思ってるんでしょ？」

この尼が、と一方通行は吐き捨てるが、結標淡希の言う事は一理合っていた。

一方通行は妹達^{シスターズ}、特に打ち止め^{ラストオーダー}に危険が及ぼす可能性があるものは全て排除したいと考えている。

そして、今回の天井羽衣。兄である天井亜雄は打ち止め^{ラストオーダー}を使っ^{シスターズ}て妹達の暴走を企てようとしていた。それ以前に、増産型能力者計画^{レベル6シフト}や絶対能力進化実験にも関わっていた。

つまり、天井羽衣もある程度、そちらの部類の研究を行っている可能性があると言っ事だ。

ただ、目の前の掛橋至を使った実験と言っ報告を受けている事から、正直どうなのかは分からない。

「送れ」

一方通行はただ一言発すると、

フツ、と一方通行の姿が消えた。

正確には、結標淡希の座標移動↑フポイントによって数十メートル或いは数百メートル先へと空間移動テレポートさせられた。

「さあて、一応能力者は生きたままつて言う事だったけど、無傷つてのは難しそうよね」

結標淡希は無口な掛橋至を前にそんな事を呟くが、掛橋至は見えずなくなった一方通行を探すように辺りをキョロキョロとしている。ぐわつとその視線が結標淡希へと向いた。

「変更……目の前の敵を、排除します」

言葉と同時に、薄い膜の様なモノが掛橋至から辺りに広がっていった。

＊＊

一方通行は施設の入り口付近にいた。

ただ樹形図ツリーダイアグラムの設計者との通信を行うだけの施設にしては、無駄だと思っほほど入り口付近のスペースは広がった。

(あのヤロウ、どこに行きやがった)

現在、一方通行は電極のスイッチをオフにしている為、杖を突いていた。

能力の使用時間は三〇分と決められている。それを過ぎてバッテリーを使い切つてしまえば、歩く事さえ儘ままならない。

その為、能力が必要でない場合は極力電極のスイッチはオフにしておかなければならない。

と、

「いやあ、始めましてだねえ、一方通行アクセラレータ！」

その男は施設の入り口から堂々と姿を現した。

天井羽衣。痩せぎすっていた兄の天井亜雄とは違い、その体は程よく鍛えられてあるのが白衣の上からでも分かる。

明らかに染めた短い金髪は、本当に科学者をやっているのか疑いたくなるほどだ。

「元気のいい挨拶なこつたア。それに何だア？ テメエは『天井』を捨てて『木原』にでもなりてエのか？」

顔の左側に入れた刺青。それはかつて一方通行を直接開発、研究していた木原^{きはら}数多^{あまた}を連想させるモノであった。

「名を捨てる気は無いが、俺は兄よりも木原さんをリスペクトしてるからねえ。これはその表れとでも思ってくれ」

「ハッ、あのクソ野郎を尊敬するなンざア、いい趣味してるじゃねエか」

入り口付近の階段を降りて、向かい合う様に天井羽衣は一方通行へ正対する。

「当の木原さんを殺したヤツが言う台詞じゃないよねえ」

「何なら、同じ末路を辿らせてやってもいいんだぜエ？」

「ああ、そいつあ遠慮しとくわ。俺にはまだやりたい事があるんでな。実験とか、実験とか？」

ふざけた回答だと、一方通行は思う。

本来であるならば、このまま電極のスイッチを入れてスクラップにでもするのだが、今回はその前に確かめたい事があった。

「やりたい実験ねエ。そりゃ、テメエが今やつてる実験の事か」

「ああ、そっかそっか。お前は実験を止めに来たのか。あのガキみたいに学習装置^{テストメント}使って頭の中書き換えるのが気に食わなかったか？」

それとも、かつて同じ研究所にいた『アイツ』を実験にされるのが気に食わなかったか？ まあそれだけじゃねえか。その気になれば、妹達^{シスターズ}が構築するネットワークに干渉しちまうなんて可能性も無きにしも非ずだからなあ」

ああそっかい、と一方通行は相槌、

「スクラップ確定だなア」

一方通行は電極のスイッチに手を伸ばし、オンへと切り替える。

ドン！ と一方通行が地面を蹴ると爆発を起こした。地面を滑る

様に一直線に天井羽衣へと向かう。

「ああそうそう、分かっているとと思うけど、俺が木原さんの研究データを読破してる事くらい気づいてるよなア？」

瞬間、一方通行は再び進行を止めた。

天井羽衣までの距離は五メートルと言った所か。既に、天井羽衣は拳を握り締めてモーションに入ろうとしていた。

「お、賢いねえー。モーションだけで気が付いたかあ？ それとも俺の言葉がなければそのまま突っ込んで来たかあ？」

一方通行は思い出していた。

木原数多の使用した対一方通行用戦術。

『反射』を適用される直前に手を引き戻す事によって戻るベクトルを反射させる。それによって直撃させると言うモノだった。

「もう一つ言つとくと、俺のやりたい事つてのは木原さんを超える事。つまり一方通行を倒せば、俺は木原さんを超えられる」

天井羽衣は、右手を前に出すと手を握り締めた。

「もちろんそれだけじゃねえ。科学者として木原さんを超える為には、この実験は成功させなきゃならねえモノなんだよ。アイツにはその可能性がある。ほおら、噂をすれば登場つてか」

一方通行は目線を横に向けた。

その方向は結標淡希がいた方向でもある。

そこからやって来たのは、

「よお、とりあえず一匹は掃除完了つて感じだなあ」

「……掃除完了です」

手術服に身を包んだ掛橋至の姿があった。

肌は愚か服一つ汚れてない。

つまり、大能力者である結標淡希に対して、傷一つ負わずにここまで来たと言う事。

(チツ、結標は負けたのか)

「んじゃ、次はこっち行ってみようか」

「……目標再設定、一方通行へ変更します」

「ハハツ、さあテメエの多重の可能性を見せてくれえ」

8 - 2 「天井羽衣」(後書き)

感想等がありましたら、よろしく願います。

8・3 「多重の可能性」(前書き)

一応この物語は、転生モノならば一発で解決してしまいそうな能力を、どう原作に合わせるような形で登場させる事が出来るか、と言う事に頑張ってはいるのですが、うまくいっているのかサッパリです。

4

霧の様な薄い膜が掛橋至の体から広がり始めた。

「霧を作って目眩まじってかア？」

モワモワと生み出されていくそれは、半円を描くように広がっていく。上空すら覆うのではなく、二メートルほどの壁みたいなものだ。

スツと、掛橋至が手を前に出した。

バチバチとその手のひらから火花が飛び出し、閃光が一方通行を打ち抜く。

だが、

「バカかあ、テメエ」

それは一方通行に当たると同時に反射された。

あらゆるベクトルを操る一方通行、その能力はデフォルトでは反射に設定してある。

自分の攻撃がそのまま掛橋至に向けられた。

二億ボルトにも匹敵する電撃の槍。エレクトロマスター電撃使いで言えば大能力者レベル4に匹敵する力だ。

しかし、掛橋至は動かない。

電撃の槍が自分に向かって来ても、その場から動こうともせず、

そして、

その槍が掛橋至を突きぬけた。

「あん？」

一方通行は顔をしかめた。

文字通り、その雷撃は掛橋至を突きぬけたのだ。

体をすり抜けるようにして。

「……水」

今度は掛橋至を中心として大量の水が波の様に発生し一方通行を襲う。

突如として地面の上に現れた波は一方通行を飲み込もうとする。

「相変わらず、ふざけた能力だなア」

ドゴオっと大量の水が宙へと弾かれた。一方通行が水の流れるベクトルを操ったのだ。

ザアアアと雨の様に降り注ぐ大量の水。まるでゲリラ豪雨の様に降り注ぐ水に対して、

「……氷」

掛橋至は表情一つ変えずに呟く。

瞬間、降り注ぐ雨粒が鋭くとなった氷の粒となって一方通行へと降り注いだ。

が、それらは全て一方通行によって反射させられる。

無数の氷の刃は向きを変え、掛橋至に突き刺さる。

ゴオオオ、と突き刺さった氷の刃は施設の外壁を打ち崩していった。

「おいおい、あんま壊すんじゃねえぞ。以外に気に入ってんだからよお、こじ」

高みの見物をしていた天井羽衣は腕組みをしたまま言葉を発する。
「……はい」

答えたのは、掛橋至だ。

「チツ、またすり抜けやがったか」

先ほどから、二度ほど向けられた攻撃のベクトルを操り、それらは掛橋至へと反射していた。電撃の槍、無数の氷の刃。しかしそれらは掛橋至に当たることなく、突きぬけてしまうのだ。

まるで、そこに立体映像でも写している様に、すり抜けてしまう。能力者である掛橋至には傷一つ付いていない。

服すら汚れていない。

「いやあ、それにしても参ったねえ。やっぱこっちの攻撃は一方通行イクタには無意味つてかあ？」

天井羽衣は戦いを見て楽しいでいる様だった。

「それともなんだあ、三〇分間経過するのを待つつてもありかあ？」

自問自答にも聞こえる。

天井羽衣の癖だろうか。

その独り言にも聞こえる声に反応する様に掛橋至は動きを見せる。ゆらゆらと揺れる掛橋至の周囲にある霧の様な壁は、形を作り始めた。

真つ黒な髪、手術服、小さな体。

モクモクと形を成し、出来上がったのは、

「分身だア？」

二人。掛橋至の姿が二つになった。鏡に映した様なその姿は、かと言って左右対称になっていく訳でもない。

さらに、それで留まらず、次々に分身は生み出されていく。

一方通行を囲うように生み出されていた霧の様な薄い壁。半円を描いているその場所に次々と掛橋至が現れた。

「デメエは大気系能力者じゃなかったのかよ」

「雲使い」

掛橋至の能力はそう呼ばれる。

簡単に言えば、雲を操る事で雷を放つたり、水を生み出したり、風を操つたり、と多種多様の力を生み出す。

一方通行はその力を知っていたからこそ、掛橋至が系統の異なる力を発揮しても驚く事はなかった。

ただ、今回の分身。

(光学系能力で光の屈折を利用した幻影かあ？ いや、アイツにそんな力はねエ。水力や電子つてのはアイツの能力の掌握範囲だから分かるが、光学はヤツの領域じゃねエ)

現れた一〇にもなる掛橋至の分身。

もし、本当に掛橋至が光学を使って光りを屈折させる事で分身を生み出しているのなら、それに実体はない。

故に実体のある本体は一つだけ。

だが、

一〇人の掛橋至は一斉に人差し指を前に出し、その先に水が集まっ
ていく。

渦を巻き集まった水は圧縮に圧縮を繰り返して、

超高速で打ち出された水の力は、そこに触れたモノを根こそぎ切り落とす。

ウォータージェットと言えば分かりやすいかもしれない。加圧された水を一ミリ程度の穴から放射する事でコンクリートなどを切り落とすが、実際には『切る』というよりも『水流の当たった部分を吹き飛ばす』と言うイメージの方が正しい。

ただ、今回の場合はそれだけに留まらない。

(ハッ、圧縮した水を打ち出すと同時に電流を纏わせやがったか) 同時に二つの系統を操る能力。

多重の可能性を持つ能力者が故の攻撃だ。

「面白れエ攻撃だが、例えどれだけ能力を組み合わせようがオレの敵じゃねエンだよ」

一方通行はそれすら容易に反射する。

例え、二つの能力が重なっていようと、その一つ一つのベクトルを反射してしまえば、何も問題はない。

ゴアアア！ と地面が吹き飛んだ。

水流の当たった部分が吹き飛ばされたのだ。

それぞれ一〇の閃光が生み出した一〇の小さなクレーター。

であっても、掛橋至には傷一つない。

(実体であつて、実体がないだア?)

すり抜けると言うよりも、最初からそこに何も無い様な感覚。

にも拘らず、そこには掛橋至の姿がハッキリと見えている。

学園都市の中には光りの屈折で相手から見えなくする能力であつ

たり、実体とは別の場所に誤認させる能力を持つ者がいたりするが、それとはまた違ったモノを感じる。

「おやおや苦戦中かあ？ 一方通行！？」アクセラレータ そんなんじゃ俺の所になんて来れやしねえぜ」

「何言つてやがる。遊んでやってるのに、そんな事にも気づかねエのかア？」

一方通行はあらゆるベクトルを操る。

その手を翳せば、大気を掴む事など容易い事。

瞬間、暴風が吹き荒れた。大気を掴んだ一方通行が風を操り、周囲を囲んでいた霧の様な白い壁が吹き飛ばされていく。

そこに残ったのは、一人だけの掛橋至。

正確に言えば、一人目と言う方がいいのかもしれない。

先ほど、一〇人がいた場所とは離れている。

「なるほど、その壁を生み出した時から、テメエは実体を持たない雲と入れ替わっていたって寸法か」

吹き飛ばされた壁を確認する様に掛橋至は辺りをキョロキョロと見る。

ただ、焦っているとかそう言った表情は見えなかった。

状況を確認しているだけに過ぎない。

「なかなか面白れエ茶番だったぜエ。だが、お遊びはこの辺でお開きだ、クソ野郎」

ドン！ と地面を蹴った一方通行が一瞬にして掛橋至に迫り、その振り上げた拳が掛橋至の顎下を捉えた。

宙を舞う掛橋至。

ハッハッハ、とそれ見ていた天井羽衣が笑う。

「いいねえ、さすがだあ一方通行！アクセラレータ くうう、第一位には敵わねえがいい感じだあ。周囲に散らばるA I M拡散力場を集めて実体を作り出す所までは完璧。後は、その力を広範囲に広げる事が出来れば、実験は最終段階に入る」

「A I M拡散力場を操って実体を作り出すだと？」

「ああ、ほら、あれだ。コードANGEL、テメエも知ってるだろ」
ピクリ、と一方通行の眉が動いた。

「あれは打ち止めの頭ん中にウイルスぶち込んで、妹達を制御しなくちゃなんねえが、まあ、用はそのスペアプランってトコさあ。態々万人の妹達を使わなくとも出来るのであれば、それに超した事はねえだろう？」

天井羽衣は一方通行に問いかける様に、

「なら、テメエにこの実験を止める意味はあんのかあ？ このガキの実験が成功しまえば、態々打ち止めの頭をいじくる必要も無くなるって事だあ」

言い分には一理あつた。

一方通行は打ち止めを闇から遠ざけたいと考えている。

もし、本当に天井羽衣の行っている実験が終わり、その結果が打ち止めを使用する際よりも有効であると判断された場合、もう打ち止めが危険な目にあう事もなくなるのでは無いだろうか。

そう考えた一方通行は、

「バカかテメエ。そもそも実験が成功するとは限らねえし、仮に成功したとしてもあのガキの安全が保障されるってモンでもねえ」

それに、と一方通行は付け加え、

「テメエはあの木原を超えろとか吐かしてたなア。そんなんで超えれんのかよオ？ 裏に何を隠してやがる。多重の可能性とかほざいてやがったよなア？」

天井羽衣の言葉。

まずは、一方通行を倒す事で木原数多を超える。

本当にこの天井羽衣が木原数多の使用していた戦術を身に付け、一方通行に関する研究データを全て読破しているとしても、正直それが達成出来るかと言えば疑問に残る部分がある。

そして、実験を成功させる事で木原数多を超える。

天井羽衣の説明からすれば、掛橋至をコードANGELのスペアプランとして実験を行い、その実験は既に最終段階へと入ろうとし

ているとの事。

だが、例えばその実験を成功させたとしても、科学者としてあの木原数多を超えられるとは思えない。

ならば最後に残った言葉。

多重の可能性。

特力研にいた頃、掛橋至には多重能力の可能性があると、研究者が騒いでいた時期があったと、一方通行は思い出していた。

雲を操る能力。

雷を生み出し、風を操り、水を生み出す。

多種多様の力。だが、それらは系統は異なるように思っても、一つの能力から生み出されたモノでしかなかった。

(となると、ヤツの言っていたA I M拡散力場が関係してるって事かア?)

「ご名答、名探偵だねえ アクセラレータ 一方通行」

拍手交じりに天井羽衣は答える。

「そう、肩書きはスペアプランだが、俺がやりてえのはそんな事じやねえ。多重の可能性。未だ存在しない絶対能力、そして デュアルスキル 多重能力。掛橋至にはその多重能力の可能性がある」

「アイツの能力は同じ一つの能力から生み出されるモンだ」

「ああ、そんな事あ分かつてる。でもなあ、俺がアイツに求めてんのは雲使いの能力じゃねえんだよ」

ザアッと地面と肌が擦れる音が聞こえた。

一方通行がそつちに目を向けるとそこには、掛橋至の姿があった。

「二重人格者には二つの能力が宿るか」

不意に天井羽衣がそんな事を言った。

「俺はそこに可能性を見出した」

バカか、と一方通行は天井羽衣に振り向いて

「二重人格に二つの能力なんてモンは宿らねえ」

「ああそうさ。二重人格にしたってそれは一人の人間でしかねえんだからよ」

と、一瞬天井羽衣は間を置いて、

「なあ、人間の脳つてのは片方無くなっちまうとどうなると思う？」

「あん？」

「補っちまうんだよ。その片方がもう片方の分までよお」

そんな話しをしている間にも、掛橋至がヨロヨロとした足取りで一方通行へと歩いてきていた。

しかし、一方通行はそちらには振り返らなかつた。チョッカーのスイッチはオンにしてある。時間もまだ十分に余裕がある。

何をして来ようが反射が適用されるからだ。

「何が言いてエンだ」

「分かんねえかなあ？ 後一つのピースなんだよ。それさえ揃えば、その先は誰も体験した事のない未知の領域、多重能力への扉だ。その為に学習装置使つてガキの右脳だけを弄くつたり、テメエと戦闘させたりしたんだからよお」

ドン、と一方通行の直ぐ傍までやって来た掛橋至は地面へと座り込んだ。

何か仕掛けてくる様子も無く、地面に俯いているが、

「 けて下さい」

何かを呟いた。

それは一方通行が知っている掛橋至のモノとは微妙に違っている気がした。

「 助けて下さい」

ハッキリと聞こえてくるその声。

今まで感情一つ表さないロボットの様であつた掛橋至の口から発せられているものだった。

「兄を、助けて下さい！」

地面に座り込む掛橋至が発した声。

「キタキタキター！ ハッハッハ、ビンゴ！ 未知なる扉によっこそお！」

高らかに笑う天井羽衣。

一方通行へ助けを求めるその声は、掛橋至本人とは思えないほど別のモノだった。

8・3 「多重の可能性」(後書き)

感想やご指摘等がありましたら、よろしく願います。

8 4 「多重人格」(前書き)

久しぶりの投稿になりました。

時間がなかったもので、空いてしまった分、少し内容が心配です。

8 4 「多重人格」

5

何が起こったか、一方通行にもよく分からなかった。アクセラレータ

目の前にいる掛橋至。その人物は先ほどまでの人格とまるで違っている様に感じる。口調や言葉使い、ある程度そう言った部分を解析できる一方通行にはその違いが分かる。アクセラレータ

ただ、それが何を意味するのかが分からなかった。

二重人格。それでまとめてしまえば話は早いのだが、その程度であるならば、天井羽衣の反応の説明がつかない。

それすら超えた何かが、掛橋至に起こっている。

「ようやく現れやがってえ。見る、俺は正しかった。ここに木原さんを超える為の素材が揃ったぞ！」

高らかに笑う天井羽衣。

「テメエ、何をしやがった」

「あ？ 何だ、第一位のクセしやがってそんな事も分からないかあ？ ピースが足りねえならくれてやらあ。何の為にテメエと戦わせたいと思っただがる。学習装置テストメントによる情報の書き換え、二重人格。おら、ピースはまだまだあんどお」

まず、二重人格者に二つの能力は宿らない。だが、天井羽衣はそこに可能性を見出した。

そして、学習装置テストメントによる情報の書き換え。一体何を書き換えたのか。

さらには自分との戦闘。これが意味するモノは何か。

少しずつ学園都市最高の頭脳がピースを組み立てていく。

（多重人格者は一つの体でしかねえ。俺との戦闘は何を意味する？ 何を書き換えやがった？ そして、コイツの変わりようはなんだ）

最後に言った、兄と言う言葉。

(なるほど、そう言う事か)

「テメエ、コイツの頭の中に別の脳を詰め込みやがったな」

「さすが第一位だぜ。そうさ、そいつの左脳はそいつの物じゃねえ。元々はそいつの双子の妹のモンだ」

「二重人格者になぜ能力が一つしか宿らないのか。それは脳が一つでしかないからだ。」

ならば、もしも二つの脳を持っていたとすれば。一つの体の中に別の脳があり、それが意識を持ち覚醒したならば、一つの体に二つの人格。

二つの脳を持つ二重人格者となる。

「可能性は十分だったんだがな。ピースを揃えるのに時間がかかった。右脳の余分な記憶をいじって一方通行と面識アクセラレータがあると言う事を強調させたり、テメエが一度その能力を使って学習装置で打ち込んだウイルスを消去したってデータもぶち込んだりと、案外手間取ったぜ」

恐らく重要だったのは、一方通行との接触だったのだろう。

掛橋至と一方通行は過去に面識がある。

学習装置で上書きされた脳を上書きされる前の脳と比較して消去する、と言う方法で打ち止めを助けたと言う情報が書き込まれたと言っ情報も書き加えられた。

つまりは、書き換えられてしまった掛橋至の右脳を書き直し、救うことができるのは一方通行だと言う事を左脳に理解させた。

その上で、一方通行と接触させその意識を刈り取る事によって、左脳が覚醒する。

右脳の兄を救うべく、一方通行へと助けを求めめるために。

「おい、実際どうなんだ」

傍で膝をついている掛橋至に対して訊ねる。

「はい。あの人の言う通り、私は掛橋神鳴かけはし かなな。至兄さんの双子の妹です」

本当に別人になっていた。

声色こそ一緒だが、口調や微妙なイントネーションの違い、そう言った細かな部分まで分かる一方通行だからこそ、彼女の言っている事が本当であると分かってしまう。

「貴方は本当に兄を助けられるのですか？」

「今すぐつてのは無理だ。まずはアイツをスクラップにしてからじゃねエとなア」

天井羽衣は建物の前で腕組みしながらこちらの様子を伺っている。まずはそれをどうにかしない限り話しは進まない。

依頼の内容は、能力者は無事に連れて帰って来いとはあったが、研究者である天井羽衣の生死は問われていない。

「かつこいいなあ、一方通行。まるで正義の味方じゃねえか」

天井羽衣は余裕の表情だった。

学園都市最強の超能力者を目の前にして、臆するどころか常に挑発的な態度を取ってくる。

その自信は、木原数多の研究データを掌握し、対一方通行用の戦術を身に付けているからか。

ならば、こちらはそれを計算に入れて演算をやり直す。

（当たる直前に拳を引いてるんだったらそれを計算に入れた上で演算しなおせばいい）

「勘違いすんじゃねエ。俺はとっとと仕事を終わらせてエだけだ。

能力者は生きたままで、研究者は生死を問わず。簡単な話しじゃねエか」

ドン！ と地面が爆発し、一方通行は地面を滑るように飛んでいく。

今まで天井羽衣に攻撃しなかったのは、対一方通行用の戦術があるからだけではなく、その前に掛橋至が割り込んで来るからだだった。しかし、中身が代わり掛橋神鳴となった今、割り込んで来る者は誰もいない。

「取りあえず、スクラップになっとけやア」

予想通り、天井羽衣は拳を突き出してきた。

反射の効いている一方通行を貫くためには、触れる直前で拳を引き戻す事により、ベクトルの向きを変えらる必要がある。

しかし、それを考慮した上で演算を行えば、相手の拳が反射を突き抜けて一方通行に届くことはない。

だがしかし、そんな事も天井羽衣は分からなかったのだろうか。一度見せた戦術を、そのまま代用するだけで一方通行に勝てると思っただろうか。

その答えを、一方通行は身をもって体験することになる。
キイイイイイイイイイ。

まるで、頭をハンマーで殴られた様な衝撃があった。

「な……！？」

瞬間、天井羽衣に向かってベクトルを操り移動していた一方通行の体がガクつと傾いた。

正確には、変更してたベクトルが元に戻ったのだ。

その為、失速した一步通行はバランスを崩したまま天井羽衣の射程圏内に入ることとなった。

「言っただろう。俺は木原さんを超えるってなあ」

ドガ！ と天井羽衣の拳が無防備な一方通行の頬に突き刺さった。
（拳を引き戻したンじゃねエ……反射が使えてねエだと……！？）

「ハハツどうした一方通行！ オラオラ自慢の反射はどうした！」
地面を転がる一方通行を追いかける様に天井羽衣は走り、起き上がったところにもう一発拳を突き出す。

腹部へとめり込んだ拳で、一方通行は宙を舞う。

地面で背中を叩きつけられ、肺から一気に空気が抜け落ちた。

「が……は……」

震える手を地面について立ち上がるが、

（クツ、なんだ……電極のスイッチは入ってる。だが、どうして反射が効かねエ……）

「がアあああ」

キイイイイイイ、と再び頭の中をノイズが駆け巡った。

まるで頭が叩き割られそうな激痛。

「おうおう、絶対調だねえ。どうよ、対一方通行用キャパシテイダウンのお味は？」

（キャパシテイダウンだア？）

「何だ？ お前は俺が一方通行の対策を戦術だけ用意したとでも思っていたのか？ そいつはめでたえこった」

絶えず続く頭に響いてくるノイズ。

その所為で演算に集中することが出来ない。

通常デフォで設定している反射ですらままならない状態だ。

「テメエ、何しやがった」

「キャパシテイダウン。能力者の演算能力を大幅に阻害する装置だが、本来だと超能力者に対しては完全にその能力を阻害する事は不可能って報告を受けてんだが、こいつは特別性でな。お前の演算パターンや脳波パターン、全てを考慮し作られた一方通行にしか通用しない特注品だ。他の能力者には効力は全くないが、予定通りお前だけには効果覲面だったみたいだなあ」

演算能力の阻害。

一方通行は一万もの妹達に代理演算を任せている。

電極のチョッカーを付けることによって脳波を変換し、一方通行へと送り込んでいる。

（思考能力が落ちてないってことは、ミサカネットワークを阻害されてる訳じゃねエ）

この頭に響くノイズ。それが直接一方通行の演算機能を阻害しているのだろう。

（どっかにこの周波を出している音響があるはずだ。だが、見つけた所で能力が使用出来ねエんなら破壊する事もできねエ）

状態を例えるなら電極のスイッチをオフにしている状態だ。

その状態であるなら、一方通行は杖無しでは歩くこともままならないのだが、思考能力が落ちていないので、普通に動く事は可能のようだ。

「さあて、こつからが本番だ。おら掛橋！　いつまで寝てやがんだ」

ビクンと声に反応する様に掛橋神鳴の体が大きく跳ねた。

「ぐああああッ……至兄さん、ダメ……出てきちゃ」

頭を抑えて声を上げる掛橋神鳴だったが、その様子を次第に変化し始める。

悲鳴が少しずつ止み、軽く下を向いたような状態で、掛橋神鳴は動かなくなった。

いや、それは神鳴ではなく、その前。意識を失う前の姿、掛橋至だった。

（チツ、こんな状態である野郎の相手をやるってか）

「さあ、フィナーレが近づいて来たぜえ！」

ゆるりと動いた掛橋至は、再び能力を使用する。

雲を操り、雷を風を水を。それらを一方通行へとぶつけにかかった。

8 5 「多重の力」

6

一方通行は先日チャフシードの駒場利徳との戦いを思い返していた。

攪乱チャフシードの羽により能力の使用を制限させられ、最後には換気することチャフシードで攪乱の羽を空気中から排除することで能力を取り戻したが、

今回はそうはいかない。

一発目に音が耳に入ってしまったえば、それで一方通行の能力は使用不可となってしまう。

『反射』と言っても、あらゆる物を反射している訳ではなく、必要最低限のも、空気や音は設定に加えていない。

不必要と感じれば音をシャットアウトすることもあったが、聞いてからでは遅い。

それに、今では極力バッテリーの残量を考えて細かいオンとオフを繰り返している。

オフの時に耳に入ればアウト。

オンの時でも、その音を設定の中に入れていなければ、その音は反射を突き抜けて中へと入ってくる。

能力を失った一方通行は横に飛び、受身をするように地面を転がる。

刹那、

轟！ と天から落雷があった。

雲を操つての掛橋至の攻撃だ。

地面が爆発して小石や砂利が周囲に飛び散る。

一方通行は膝をついて上体を起こすと、ポケットに忍ばせてあった拳銃を取り出し掛橋至に狙いを定める。

能力者は生かしたまま。

こんな状態になってまでそう言った事を気をつけるのは任務を全うするためか、それとも一方通行自身の心境の変化か。

一ヶ月ほど前までなら考えられなかっただろう。

(足か、腕か)

一瞬考え、一方通行は狙いを足に絞る。

迷わず引き金を引いた。

発射された弾丸は狂いなく掛橋至の右足に着弾する。

ブワァッと空気を貫いた弾丸によって掛橋至の姿が揺らいだ。

(クソツたれが。雲か)

塵気楼を見ているかのように掛橋至の姿は消えた。

気が付けば、辺り一面を薄い膜のような雲が覆い囲んでいた。

(周囲のA I M拡散力場を操って実態を作るとか言ってたな。だが、実際は実態に見せかけた分身。熱の生成、光の反射、生体電気の発生、それらを認識させることでそこに恰も人間がいると認識させる訳か。ハッ、フザケた能力だ。なら、この雲がある限り奴の実態を把握できねエな)

一方通行は天井羽衣の居場所を確認した。

相変わらず建物の入口付近で高みの見物をしている。

(気に食わねエ奴だッ)

周囲に広がる雲を無視して、一方通行はその銃口を天井羽衣へと向けた。

態々、掛橋至と戦う必要はない。

能力が制限され、ベクトル操作が出来ない今、最も有効な策はこの引き金を引いて能力者を無視して研究者を始末すること。

しかし、銃口を向けられえてそれが見えているにも拘わらず、天井羽衣は身動き一つ取らない。

と、

フットその前に掛橋至が現れた。

引き金を引こうとしていた一方通行の指が止まる。

「そのまま打ち抜いちまえばよかったものを、丸くなったなあ一方

通行」

その行動すら予測していた様に、天井羽衣は笑う。

一方通行に掛橋至は殺せない。

だからこそ、自分が狙われた場合盾になるよう、何かしらの小細工を施しているのだろう。

「誰が、撃たねエって決めやがった？」

だが、一方通行は引き金を引く。

狙うは掛橋至と天井羽衣が重なっていない部分だ。

掛橋至の身長は一五〇センチ程度だ。一回り大きい天井羽衣の前で盾になるには体が小さ過ぎる。

そこを貫けば、後ろの天井羽衣だけを打ち抜くことができる。が、

落雷が落ちた。

一方通行が引き金を引くと同時に、掛橋至が雷を落としその弾丸を飲み込んだ。

「ハツハツハ、残念だったなあ。おら、お返ししてやれ」

掛橋至の手に水が集まっていく。

ウォータージェット。『切る』というよりも『水流の当たった部分を吹き飛ばす』効果を持つ圧縮された水の一撃は、当たれば貫通は間違いない。

そのまま内臓ごと貫かれ、その先に待っているのは死だけだ。

反射を使えない一方通行には重すぎる一撃。

一方通行は手に構える銃を強く握り直す、その銃では役不足だった。

この銃ではこの場を回避出来ない。

この弾丸を弾いたとしても、相手には天より落ちる落雷、水を圧縮したウォータージェット、嵐を起こす風。

これらを使われてしまえば、この手に握られている小さな銃一つでは対処できるはずがない。

何か別のモノ。

それこそ、木原数多を葬った時の力の様なモノがなければ。その時、渦を巻き集まっていた水の圧縮が完了。

掛橋至の行動一つで、その一筋の水は一方通行を貫き、内臓をえぐりとる。

「あばよ、一方通行」

天井羽衣は勝利を確信し、深い笑みを作った。

拳銃を捨て、自分の奥深くへ入っていく一方通行、その先に見たのは。

ゴバア！ と地雷が爆発したように地面が悲鳴を挙げた。

掛橋至から放たれたウォータージェットが一方通行を通過し、地面を吹き飛ばした音だ。

貫いた場所から十メートルは離れた部分の地面をも吹き飛ばした。そんなモノを体を貫けば、言うまでもない。

しかし、天井羽衣の表情は冴えない。

ただ単に一方通行の死に様が気に食わなかった訳ではなかった。

「チ、外しやがったか。微調整が足りねえってか」

その水弾は一方通行の頬を掠るように、地面に激突していた。

もちろん、後方からその衝撃を受けた一方通行は前のめりになって地面に倒れたが、傷を負うことはなかった。

(今は……)

上半身を起こす一方通行は、その視線を二人に向ける。

表情一つ変えることのない掛橋至と、一転して不機嫌な様子

の天井羽衣。

一方通行が確かめたかったのは掛橋至だった。

「おい、今度は外すんじゃないぞ」

その言葉にしたがって掛橋至は再び水を圧縮していく。

が、二度目は全くの見当違いの方向へと発射された。

近くに設置されていた風力発電用の支柱を打ち抜いて、それは地面へと倒壊していく。

「てめえ、何やってやがる！」

「　　ない」

「あ??」

掛橋至の後ろにいた天井羽衣には見えなかっただろう。先ほど、一方通行が見たもの。

「　　させない」

ウォータージェットが発射される直前に、一方通行が見たもの。

それは、不自然に動く言葉にならない掛橋至の口の動き。

「これ以上、兄さんを好き勝手させない！」

「て、てめえ、どうやって出てきやがった！」

後ろを振り返り、言い放つその声は掛橋至ではなく、掛橋神鳴のモノ。

これには天井羽衣も驚愕していた。

「バカな。至の脳は覚醒しているハズなのに、何故妹の神鳴が出てきた。その段階へはまだ踏み込んでいないハズだ！　てめえ、兄を殺してえのか！」

左脳と右脳の同時覚醒。

元々の人格者である掛橋至。その人物の意識が途絶えるからこそ左脳の掛橋神鳴の覚醒が可能となるのだ。

そうしなければ、同時に二つの脳が覚醒することとなり、体はどちらの指令を受け取れば良いかわからなくなってしまう。

本来ならば別々の脳。

それが同時に動いた時の負担は一体どれほどのモノか。

「貴方に操られるより増しです」

天井羽衣の表情が一変した。

今まで天井羽衣の指示にしたがってきたのは、至の脳に小細工を施していたからだ。

それが、掛橋神鳴に変わってしまったってはこちらの指示を受け付けない。

至の上から意識をかぶせるように現れた神鳴は、先ほどの至が意識を失って覚醒した時とは訳が違う。

「なら、てめえの意識を刈り取って至に出てきてもらっただけだ！」
まるでサッカーのシュートの様に蹴り上げた足は、掛橋神鳴の腹部へと突き刺さる。

その一撃で十分だった。

小さな子供の意識を刈り取るくらい、簡単な事だった。

なのに、

その蹴りは空を切った。

「な……に……ッ!？」

よく見れば、その周囲には僅かながら薄い膜の様なものが見えた。それは、掛橋至が使用する雲の能力。

A I M 拡散力場を操り、そこに恰も人がいるかのように錯覚させるモノだ。

「まさか、能力の使用、だと？」

呟くと同時に、掛橋神鳴の姿は数メートル先に見えた。

しかし、元々は掛橋至の能力。

その力を使用した反動は大きい。

ガクつと膝をついて、体からは嫌な汗が吹き出している。

それでも、掛橋神鳴は能力をしようする。

恐らく、この状況ではあと一回の能力の使用が限界だと感じ取っていた。

だからこそ、やらなければならないことはたった一つ。

掛橋神鳴は手を振りかざす。

雲を操り、その落雷を持って、一方通行の能力を封じているキャ

パシテイダウンを破壊するために。

ツリーダイヤグラム
樹形図の設計者情報送受信センターの屋上に設置された、その巨

大なスピーカーに雷を落とす。

バリバリ！ と落雷が屋上の巨大な機械を丸ごと破壊した。

それと同時に一方通行を蝕んでいた特定周波数の音も止み、一方通行も自分自身の能力が戻ったことを確認する。

掛橋神鳴はそれと同時に地面へと倒れた。

能力の酷使。

自分自身でなく至の脳すら危険を及ぼす能力の併用。

その代償で、一気に体の力が抜けた。

その、様子を何もできずに見ていた天井羽衣は、

（能力の使用の段階はまだ先だった。にも拘わらず、それを可能にする……いや、至の能力は雲使い）

多少の違和感はあった。

なぜ、雲を操るだけの能力である掛橋至にA I M拡散力場を操作する能力があるのか。以前からそれは至の操る雲自身に周囲に漂うA I M拡散力場を付着させているのだと捉えられていたが、

（簡単な事じゃねえか。妹神鳴の能力はA I M拡散力場の把握だったってことだ。なら、以前から互いの能力は干渉し合っていたのか。ハハ、こりゃやられたぜアレイスター。一杯食わされた）

最早、木原数多を超える、と言う概念すら操られていた。

そもそも、上層部はなぜこの研究の停止を要求し、それに従わなかった天井羽衣の元へ一方通行が送られてきたのか。

それは天井羽衣自身が仕組んだものと思い込んでいた。

だが、そうでは無かったのだ。

天井羽衣は思考をやめると共に、その姿を捉える。

ガゴン！ と壁にめり込んでいく天井羽衣。

キャパシティダウンの効力が無くなった今、一方通行の能力に對抗しうる手段は対一方通行用の体術しか残っていない。

しかし、このような状況になってしまっただけは、最早一方通行を止める手段は残っていないかった。

（所詮は、俺もただの操り人形って訳、か）

「さアアて、スクラップの時間だア！」

その言葉を聞いてから意識がなくなるまでは一瞬だった。

めり込んだ所にさらに拳を突き出し、天井羽衣の体は建物を突き抜ける。壁という壁を全て突き抜けた天井羽衣が肉片へと変わるには十秒も掛からなかった。

建物の壁を突き抜けて、反対側の地面に天井羽衣だった塊が落ちる。

最早生死を確認する必要すらなかった。

電極のスイツチを切った一方通行はその辺に投げ捨ててあった杖を拾い、掛橋の元へと歩いた。

「おい、今はどっちだ」

「ありがとう、ごさいます。これで、兄が苦しむ事も、なくなりそうです」

今は神鳴だった。

「後は、あなたが兄の人格データを、書き換えてくれれば、元通りの兄に戻れます」

息が荒かった。

自分がこれ以上表に出ている事は体の負担になる。そんな事は分かっていた。

だが、最後の確認を取るまでは、どうしてもこの意識を途切れさせる訳にはいかなかった。

「お願い……出来ますか？」

「チツ……やるだけの事はやる。だが、保証は出来ねエぞ」

吐き捨てた様な言葉だったが、なぜかその言葉が神鳴には「任せろ」に聞こえた。

最後に小さな笑みを作って、神鳴の意識は途絶える。

至が覚醒してこないのを見ると、どちらも意識を失っているようだ。

一方通行は携帯を開き、特定の番号を押す。

「……こちらの番号は教えていませんでしたが、割り込むことを前提に電話をかけるのは正直止めてもらいたいですね。仕事は終わりましたか？」

「救急車を一台手配しろ。今から一〇分後だ」

「怪我人でもできましたか？」

「関係ねエ事だ。素直に言われた通りにしてくれりゃいい」

『そうですか。分かりました。くれぐれもお気をつけて戻って来て
くださいね。結漂淡希はこちらで回収しておきますので』
要件だけ済ませると、携帯を切ってポケットにしまった。

(さて、これから建物の中に入る訳だが
地面に倒れる掛橋至を見る。)

(コイツをこのまま放置して行く訳にもいかねエか)
チツと舌打ちし、電極のスイッチを入れる。

トン、と地面を叩くだけで、掛橋至の体がふわりと浮き、その手
をつかむとベクトルを調整し背中におぶった。

そのまま電極のスイッチを切るが、ズシつとその重さが直に伝わ
ってきた。

(まあ見た目通りの重さってとこか、この残業代は高く付きそうだ
なア)

電極のバッテリーは残り三分もないだろう。

以前、打ち止めのウィルス除去には約一分の時間を消費した。
ラストオーダー
それを考慮すると、自力で担いで行くしかなさそうだ。

人を背中に乗せると言う行為は、一体いつ以来だっただろうか。
以前までの一方通行では考えられない行動だった。

「全く、何やってんだか」

呟くが悪意は感じられなかった。

変わってきている。

恐らく、その変化は一方通行の中でも感じ取れているはずだろう。

8 6 「もう一つの仕事」

7

土御門元春がいたのは、第七学区の中でもよくスキルアウトが屯している路地裏だった。

数日前の騒動の所為か、周囲には人影がなくゴーストタウンのようだ。

(さてさてどうしたもんか)

土御門は目だけで辺りを見回す。

建物に挟まれ、頭上には様々なシートが渡してあり薄暗い。道の上には無理やりこじ開けられたATMの残骸や自動車のパーツらしきモノがゴロゴロと転がっている。

(見られてる、か)

その視線を感じ取る。

この空間のどこかから確かに土御門に向けられる鋭い視線。

恐らくはわざとこちらが気づく様に気配を完全に断っていない。

見られていると言っ事を警戒させ、集中させる部分を拡散させると言っ意味も込められているのだろう。

土御門はしばらくそのまま歩き続けた。

今回、グループに与えられた仕事は二つだ。

一つは上の命令を無視して研究を実行し続けている研究者の拘束、及び能力者の保護。

これらは、一方通行と結標淡希が担当することとなっていた。

もう一つは現在土御門が行なっている事。

本来であるならば、海原光貴と土御門二人でこの仕事に当たる予定だったのだが、海原光貴は別件の為にこの仕事には参加していない。

その為、土御門一人でこの仕事をこなす必要がある。

一方通行を一人で仕事に当たらせ、結標淡希と二人でこちらの仕事をすればいいのではないかと言う案があったが、超能力者と大能力者、土御門と海原に分けたのには理由があるのだ。

「そろそろ姿を見せてみる。魔術師」

足を止めて、サングラス越しに目を光らせ、土御門を言い放つ。

侵入者の排除。

今回の主な目的はそれだ。

しかし、九月三〇日の事件やアビニヨンでの大規模なデモ。科学と魔術が大きく対峙しているこの時期に魔術師が学園都市に侵入すると言ふ事は、些か無謀にも見える行為である。

「が、裏を返せば、そこまでして侵入する必要があったと言ふことにもなる。」

相手は意外にすんなり姿を現すつもりらしい。

建物の隙間から足音が近づいて来たと思うと、いとも簡単に土御門の前にその人物は現れた。

「あれ？ ここはどこ？ ってミサカはミサカは迷子になったかも」
「なッ？」

土御門は一瞬目を疑った。

そこに現れたのは土御門が全く予想もしていなかった人物だったからだ。

茶色い短髪に白い水玉模様のワンピース、男性モノの様な白いワイシャツを上から羽織っている。

頭为天辺から生えている俗に言うアホ毛と呼ばれるモノ。時にはリーダーの役目を果たしそうだ。

「なぜこんな場所にいる、打ち止め」
ラストオーダー

「あれ？ 実はお知り合い？ ってミサカかミサカは覚えがないので謝ってみる。ゴメンなさい」

シスターズ
妹達の上位個体である打ち止めは、軽く頭を下げた。

（どういう事だ。なぜこんな所に打ち止めがいる？）

元はスキルアウトが屯している場所でもあるこの路地裏。

そんな場所に、打ち止めが、それもたった一人でやってくる事はどう考えてもおかしい。

「人を探してるの、ってミサカはミサカは情報提供をお願いしてみる。真つ白で杖をついた人を見なかった？ 　ってミサカはミサカは訪ねてみる」

（ここまで一方通行を探しに来たのか）

九月三〇日以降、暗部へと落ちた一方通行。

その日から、一方通行は打ち止めに会っていない。

「アイツはここにはいないぜい」

「もしかして、あの人の居場所を知ってる？ 　てミサカはミサカは訪ねてみる」

一方通行は現在別の任務にあたっている。

居場所はもちろん分かっているが、そんな事は口が避けても言うことは出来ない。

「いや、そこまでは知らないんだにや。それより、こんな場所はお嬢ちゃんのいる場所じゃないんだぜい。早く戻るんだ」

土御門は辺りの気配を探る。

この場所には魔術師がいるのだ。

そんな場所に打ち止めをこれ以上居させる訳にはいかない。

（魔術師の気配がなくなった……。打ち止めが現れた事で一度気配を隠した、か？）

先ほどまで明らかに放っていた気配が、プツリと途切れていた。

場所を特定出来ないのは困ったが、今は一刻も早くこの場から打ち止めを遠ざける事の方が先決だった。

「でも、ミサカはまだあの人を見つけてないのってミサカはミサカは困ってみたり」

「ならこうしよう。俺がもしもアイツに会う事があつたら、打ち止めが会いたがっていた、と伝える。それでいいだろう？」

土御門はそう打ち止めに約束をしようとしたが、実際はこの場から離れさせる口実を作るだけだ。

一方通行にそのことを伝えることもない。

伝えなくても、それは一方通行が一番分かっているだろう。

打ち止めが会いたがっている。

その事が分かっているとしても、一方通行は今の段階で打ち止めに会うことは出来ない。

土御門の言葉に打ち止めは小さく頷くと、

「うん、分かった。ってミサカはミサカは頷いてみる」

「なら、早くここから離れるんだ。ここはスキルアウトともが屯する場所だからな、危険が一杯なんだぜい」

「ミサカは能力者だから大丈夫、ってミサカはミサカは自分自身のスペックを今一度確認してみる」

超能力者^{レベル5}である御坂美琴のクローンである妹達の力は、その一万分の一でしかないが、それでも数万ボルトの電撃を操る電撃使い。

「でも、やっぱりあの人は心配するかもしれないからここは大人しく帰る。ってミサカはミサカは良い子全開になってみる」

この場から離れる気になったので、土御門は少しホツとした。

（さすがに、これ以上打ち止めに危険な目に合わす訳にはいかない。只でさえ、九月三〇日の事件があるからな）

「でも、帰る前に親切な貴方に大事な話があるかも、ってミサカはミサカは大胆に手招きしてみたり」

打ち止めは土御門に近寄ると、小さな体を一杯に使って手を口に添えて背伸びをしてきたので、土御門もそれに応えて、耳を傾ける。

内緒話してもするかの様に、打ち止めは言葉を発する。

「貴方の周りにも危険は一杯だよ、ってミサカはミサカは貴方の心配を、するとも思いましたの？ このロリコン野郎」

刹那、

土御門は腹部に強烈な衝撃を受けた。

（な………に！？）

大の男の体が宙を舞って壁に激突する。

「最もらしい事ですけど、あの不意打ちに対して咄嗟に対処するなんて中々ですわね」

小さな体で回し蹴りを放った打ち止めが似合わぬ口調で話す。

(打ち止め、じゃない)

口元を拭って、土御門はその打ち止めの姿をした何かを見る。

「何者だ貴様」

「あら？ 見て分からないかしら？」

と、打ち止めはワンピースのスカートの裾を両手で持ってひらひらと回り、

「可愛い可愛い打ち止めですよ？」

「ふざけるのもいい加減にしろ」

地面を蹴った土御門が地を走りその拳を突き出す。

それを体を横に捻って交わした打ち止めが、そのまま足元へミドルキックを放つ。

ズカン、と重い衝撃が足へと伝わる。

小さな体から放たれたとは思えない、その重量感。

膝を折ってそれを防いだ土御門はその足を掴んで横へなぎ払った。

その小さな体は宙を舞うと、ふわりと勢いを殺して地面に降り立つ。

「いい加減、本性を現したらどうだ、魔術師」

「あら、最もらしいけどバレてましたのね」

そう言いながら、打ち止めはまるで衣を剥がす様に白いワイシャツを脱ぎ捨てたと思うと、

金色の髪がなびいた。

短髪の髪は中央の部分から一本纏められた御下げが編まれ、お腹の部分が見える様に上半身には半袖の黒のアンダーアーマーの様なモノが身に付けられている。

その上からは、胸下の辺りまでのジャケットの様なモノを羽織っていた。ただ、ジャケットよりかは生地は薄く、ワイシャツの様にも見える。

灰色っぽい短パンを履いて、その下からも膝上位までのアンダーアーマーを着ていた。

「さすがにあの口調は疲れましたわ。どうして男って言うのはああ言う類の子供を好む傾向があるのかしら」

「皮膚の護符。アステカの魔術師か」

対象となる者の皮膚を剥ぎ取り、それを被る事によって他人と入れ替わる魔術。

グループの海原光貴が使用しているのがそれだ。

しかし、皮膚の護符と言うのは、名の通り皮膚を使用する。

そうなると、この魔術師は打ち止めの皮膚を剥ぎ取ったと言う事になるのだが、

「ふん。あの様な手間の掛かる魔術をこの私のモノと一緒にしないで頂けます？ 最もらしい事ですけど、種明かしはいたしませんわよ？」

（だが、打ち止めの姿を知っているとと言う事からも、何かしら打ち止めと接触した可能性はある。侵入者、いや、かなり前からこの学園都市に潜伏していた可能性もあるな）

口調だけでなく、行動や仕草、それらは打ち止めそのものだった。それらを考えると、短時間ではなく、相当前からこの学園都市に侵入していたと考える他なかった。

「貴様の目的は何だ」

「目的？ 強いていいいますとあなたと同じ、ですわね。最もらしい事ですけど私の場合は貴方の様に両方と言う訳ではありませんけど」

「……なるほど、スパイ、か」
両方を兼ねていない。

土御門の場合は魔術側のスパイでもあり、学園都市側のスパイでもある。

言わいる二重スパイ。

つまり、この魔術師の場合は、一方的な魔術側のスパイと言う事だ。

「それにしても、今までよく気が付きませんでしたのね。それとも知っていながら泳がせていたのか、まあどちらでも私は構いませんけど」

(恐らく、上層部は知っていながら黙認していたのだろう)

「俺もどちらでも構わない。が、今重要なことは俺がこうしてお前の前に現れたと言う事だ」

「なぜ、このタイミングなのかは分かりませんが、触れてはならないモノに触れてしまったか。まあ最もらしい事ですが、私は必要な情報を入手出来ればそれで構いませんわ。それも大方入手出来ましたし、そろそろ御暇しようと思っていた所でしたの」

「それを聞いちまっては益々逃すわけにはいかなくなったぜい」

拳の握り具合を確認するかの様に、力を入れる土御門。

魔術師でありながら能力者でもある彼は、ほとんど魔術を使用する事は出来ないが、その状況下で生き抜くために身に付けた体術が彼にはある。

「いいですね。なら私はあなたを倒してこの学園都市を離れるまで、ふふ、このカーラ・フレイヤル、久しぶりにヴァルキリーとしての血が騒ぎそうですわ」

(ヴァルキリーだと……！？)

「気を抜くと一瞬で終わってしまいますわよ？」

その声と共に、地面が爆発した。

8 7 「ヴァルキリー」

8

(ヴァルキリーが、スパイだと?)

カーラ「フレイヤルの重い一撃を受けながら土御門は思考する。ヴァルキリーとは北欧神話において、天女・戦乙女と呼ばれるオーディンのしもべであり、ラグナロクに備えて戦士の魂をヴァルハラへと運ぶ役目を持つ。

またの名をワルキューレとも言うが、その存在は十字教の聖人に相当する力の持ち主である。

その様な存在が、なぜスパイなどを行う必要があるのか。

聖人と言うのは、科学側で言うなら各兵器みたいなものだ。

その一人だけで、戦況を左右できる兵器と言っても過言ではない。その聖人と相当の存在でもある、ヴァルキリーが何故スパイを？と言うのが土御門の一番の理解不能な事項であった。

土御門は重い拳の衝撃を受け流して後方へ跳ぶと、間髪入れずにカーラとの距離を詰める。

狙うは後頭部攻撃。

フレイシエーカー
右の拳を振り抜き、フェイントを加えて空振りと同時に後頭部への攻撃をヒットさせる。

が、それを予測していたかの様にカーラは体勢を低くし、水面蹴りを放つ。

しかし水面蹴りのレベルではなく、まともに喰らえば骨ごと砕かれそうだった。

その一撃を受け流す様に喰らうことによつて直撃を免れた土御門は、地面に転がると同時に後方へ移動し、距離を取る。

「やはりヴァルキリーはこうでありませんと。戦う乙女にこそ本当の美貌が宿るモノですわ」

テンションを上げながらカーラは地面を蹴って土御門との距離を一瞬にして詰める。

そのまま大きく後方へ右足を振り上げたかと思うと、その足は一回転して土御門の頭上から襲いかかる。

踵落とし。

その足を両手をクロスさせる事で防ぎ、その足を持って地面に叩きつけようとした土御門は、ふと彼女の足が両方地面に付いていないのが分かった。

(しまッ)

そう思った時には二度目の衝撃が両手から響いてきた。

頭上より放たれた二つ目の足が、いとも簡単に土御門を地面に這い蹲せた。

うつ伏せに倒れた土御門はそのサングラス越しに次の一撃を確認する。

二つ目の足の反動で元の体勢にクルリと回転して着地したカーラは、まるでサッカーボールでも蹴るかのようにその右足を振り抜いていた。

「クッ！」

状態を反らして横へと転がった土御門のすぐ傍を風が吹き抜けた。空振ったカーラの足が生み出した風圧だ。

「あら、惜しいですわね」

ニヤリと笑うカーラを他所に、土御門はブレイクダンスの様に体を入れ替えると、逆にカーラの足元へ水面蹴りを放った。

一本足で立っていたカーラはその足を刈られて地面へと倒れる。間髪を入れずに土御門はマウントポジションを取った。

両手を両膝で抑え、速いモーションでその拳をカーラの顔目掛けて突き出した。

「甘いですわ」

ゴキ、と拳から鈍い音が響いた。

「が、あぁッ」

両手を塞がれ、マウントポジションを取られているにも拘わらず、カーラはその上半身を起こして土御門の拳に対して頭突きを放った。拳の骨と額の骨。どちらが硬いかなどは言わなくても分かるだろう。

表情を歪めた土御門を押しつけて、カーラは何事もなかったかのように立ち上がる。

「あらあら、最もらしい事ですけどそんな事では私の相手は務まりませんわよ?」

左手を腰に当てて、右手のひらを肩の高さで上部に向ける。

(ク、この女、遊んでやがる)

余裕を見せつけるカーラに対して、土御門は自分の右拳を見る。

既に薄く晴れ上がっている事から、骨はやられたであろう。

(肉体再生オトリバースの力では治らないだろうな)

「降参して頂けます? これ以上やると私も楽しくて本来の目的を忘れてしまいそうですわ」

「……そうだ。貴様の目的は何だ。なぜヴァルキリーであるお前がスパイなどをやっている」

「あら、このタイミングでお喋りですか? まあウォーミングアップの後のお喋りも良いかもしれませんわね」

と、一呼吸おいて、

「私の目的はある人物の監視。その人物がこの学園都市にいたからこそ、学園都市に入ったまで」

「ある人物だと?」

「ええ。もちろんそれが誰なのかは教えませんわよ?」

カーラは、それから、と付け加えて

「ヴァルキリーがなぜスパイを、と言う事が気になるのでしたわね? まあ確かにヴァルキリーを知る者からすれば不思議に思うことかもしれませんわ。ただ、私は天然では無く人工的なモノですし、私の場合それ以前に得意なものがあるんですの」

カーラは一瞬の間を作った。

まるで自分の特技を自慢するかの様に、ゆつくりと笑を作り言葉を続ける。

「物真似ですわ」

土御門の表情が変わった。

その最悪の言葉に土御門は歯噛みする。

スパイをやっているからこそ分かる。

ヴァルキリーでありながら、なぜ彼女がスパイを行うのか。

それこそ、彼女にとってそれが一番の適任者だからだ。

「古来より、人はまだ国家や社会や文明を形成する前、更には説話や民話、神話を語るより遙か前に、人間は空を飛ぶ鳥や大地を駆け回る獣の鳴き声等を真似する事があった。言わば物真似は人類の中で最も古い演芸と言っても過言ではありませんわね」

人は古代より空に憧れ、獣の強さに心を震わせ、そのマネをすることによってその気高さや強さに近づこうとした。

「最もらしい事ですが、もちろん真似をするだけでは到底そのものになることは出来ませんわ。しかし、人はそれを追い求めた結果、外見だけを真似ると言う魔術を生み出す事になり、加えてアステカの魔術師の様に皮膚の護符によって肉体を変化させる事もできるようになりましたわ」

グループには海原光貴と言う魔術師がいる。

正確に言えば、海原光貴の姿を借りている魔術師なのだが、皮膚の護符と言うのは相手の皮膚を一〇センチ程度剥がす必要があり、その用途は限られている。

「しかし、私にかかれば、皮膚の護符など必要ないことですわ。この様に」

見えない衣を被る様に、カーラが手を横に振るうと

「こんな事も出来ちまう訳だ」

白い短髪と赤い瞳。白とグレーの縞柄の長袖Tシャツを着たその姿。

そして、独特な口調。

その姿は、一方通行。

「姿を借りて口調や行動、人格を真似ちまえばこの通りこんな事も出来ちまうって訳だ。スパイにはもってこいだろう？」

土御門は一瞬ゾツとした。

もし、この魔術師が以前からこの学園都市に侵入しており、それを上層部が黙認していたとしよう。

そして、この技法により、数々の人物になりすまし行動をしていたのなら、

自分の接してきた人物ももしかしたら、このカーラ＝フレイヤルだったかもしれない。

カーラが再び手を振ると、その容姿が変わる。

「もちろん、短時間で全てを真似る事はさすがに難しいですが、容姿と口調だけならこの様に聖人にもなり得ると言う訳です」

今度の姿は神裂火織だった。

「もちろん。相手の使用する魔術や能力をそのまま使える訳じゃないんだよ。そんな事が出来ればそれこそその人は魔神になれちゃう」

白い修道服を纏ったインデックスの姿でカーラは言う。

真似できるのは声色や口調と言った簡単なモノだ。

その相手が使用する魔術をそのまま使用したり、もちろん、遺伝子レベルでの変装は無理である。

が、目の前で姿形を変えられているにも拘わらず、土御門から見てもその姿は本元と見分けがつかなかった。

なぜ、と土御門は呟く。

「なぜ、そこまで自分の力を見せびらかす。魔術師にとって己の術式を見破られることは敗北につながるぞ」

「見破られた所で、姿を変えた私が分からないでしょうに。最もらしい事ですが、貴方の近くにいるアステカの魔術師の皮膚の護符を見分けがつかないのと同じですわ。それに、もしそうだったとしてもあなたが私に勝つ事などありませんから」

衣を剥ぎ取る様な素振りを見せ、カーラは自分の姿に戻った。

カーラの言う様に、海原光貴が皮膚の護符を使用すれば、皮膚を剥がされた相手を見つけるか、言われるまで見分けがつかない。

彼もまたそのようにして学園都市に潜り込んでいたのだから。

さて、とカーラは呟いて、

「お話しはもうよろしくて？ そろそろ体も冷めて来たことですし、再び拳を交えるか御暇するかどちらか選びたいのですけど、あなたはどちらをご志望ですか？」

実力の差は明らかだった。

たった数分拳を交えただけでその力量を知るには十分だった。

能力は無能力者、魔術もろくに使えない。体術にしても聖人に相当する力を持つヴァルキリー相手に土御門一人では荷が重過ぎる。

だが、

「決まっているだろう。……拳を交える方だ」

「ふふ、いいわ。ならあなたには残酷だけど容赦はなしにするわ。

後悔」

そう言いながら、カーラは手を横に振るう。

それは何かに姿を変える時の仕草だ。

その瞬間、土御門の体に嫌な汗が流れた。

「しないでくれよ？ 兄貴」

「な……ッ」

思わず土御門は後ずさりする。

「こつなつたら、兄貴の勝ちは万が一無くなったぞ」

「貴様、舞夏に何をした！」

「逆に怒らせてしまったか？ 義妹には指一本触れられないと思っ

ただな」

その姿は土御門の義妹である、土御門舞夏。

土御門があらゆる欺いたとしても守りたいと思う存在。

例え、その中身が違つとしても、その容姿に拳を向ける様な事は土御門には出来ない。

「心配ないぞー。皮膚の護符とは違つからな。痛い思いなんてこれ

「ぽつちもないんだぞ」

メイド服を着た土御門舞夏の姿をしたカーラは不意に笑う。

「ってことで、ここは手っ取り早く一発でやられてくれよな、兄貴」
その地面を蹴る力は決して土御門舞夏のモノではない。

人間の身体能力を越えた、聖人と相当の力を持つヴァルキリーのモノ。

だが、中身が違つて分かつていても、その全くと行ってよいほど似たその姿を見て、土御門は拳を握ることは出来なかった。

義妹だけは、絶対に裏切らないと決めたから。

「あはは、じゃあなー」

カーラはそう言つて、

ドカツ、とその体が宙を舞つた。

頬をぶち抜かれ、十メートルほど飛んでいくその体。

路地裏を形成する建物の壁に激突し、無残にもそのコンクリートが剥がれ落ちる。

「ようやく、視線の犯人を見つける事が出来ましたニヤ」

宙を待つたのは、土御門舞夏の姿をしたカーラだった。

宙より舞い降りた、その小さな体は人間技とは思えないほどの高速の回転を見せ着地する。

「何だ、お前は……ネコ耳？」

常盤台中学の制服を纏い、頭にはネコ耳、お尻からは真っ白な尻尾を生やした少女が目の前に立っていた。

「カリス様の忠実な使い魔^{ファミリア}、ネルフィですニヤ。本当ニヤら様子見だけにしようと思つたのですが、意外にピンチみたいでしたので、助太刀ですニヤ」

「使い魔、だと？」

「貴方は上条当麻と同じクラスの土御門さんでしたかニヤ？」

「俺の名前まで知つているのか」

「これでも使い魔ですからニヤ、ってどうやらお話ししている時間はなさそうですニヤ」

ドガ！ と崩れ落ちていたコンクリートの破片が吹き飛んだ。

ゆるりと起き上がったカーラは元の姿だった。

「小娘が、調子に乗るんじゃないですよ」

「ニヤー、これは久々に歯ごたえ抜群すぎるかもしれニヤいです」

ネコと言う動物は以外にも優れた運動神経を持ち合わせている。

関節が緩やかで筋肉や靭帯も柔らかいため、頭の周り以外は体のほぼすべての場所を自分で舐めることができたり、自分の体高の約五倍もの所に飛び上がったたりすることができ、走る速度は時速七〇キロにも達し、跳躍力や瞬発力に優れている。

その特性を持ち合わせたまま人間の姿になることができれば、一体どれだけの動きが出来るのか。

小さな体が宙を舞った。

聖人と相対する力を持つヴァルキリーの一撃を受けた小さな少女が建物の壁目掛けて一直線に飛んでいく。

激突。

その言葉が頭の中を過ぎる。

が、

小さな体は、壁側に足を向けたと思うと体全身の骨を撓ませ、縮んだバネが弾き戻る様にその足でコンクリートの壁を強く踏み切った。

その小さな体は弾丸の様に空気を切り裂き、体を半回転させて回し蹴りを放った。

顔の横へ腕を挙げたカーラ＝フレイヤルは腕一本でその蹴りを御する。

ギシギシと骨の軋む音が伝わる。

反対の足で顔面を踏み付けるようにして、ネルフィは後方へと距離をとった。

それも逆の手で顔を覆ってカーラは防ぐ。

「獣の特性を持つと言う事は戦闘においてこれほど優位に働くモノ

ですのね。ネコの持つ柔軟性、跳躍力、瞬発力。このヴァルキリーである私と互角にやり合うのは予想外でしたわ」

ただ、すべての使い魔がそうであるかと言えばそうではない。

伝言、届け物、留守番、偵察、戦闘、など様々な用途があるが、伝言を用途とする使い魔にこれほどの運動能力は必要ない。

必要なのは、いつでもどこでも如何なるときでも、その情報を目的の者の所まで届ける能力。届け物を用途にする使い魔も同じことが言えるだろう。

偵察ともなれば、相手に気づかれない隠密性であったり、数キロ先まで見渡せる視野であったり、その能力は各々の目的によって様々である。

さらに加えて、主の力量によってもその使い魔の能力は異なってくる。

特に実態を持つ使い魔に関しては主に動物を使用する事が多い。

その際に特殊な契約を行う事になるのだが、単純に考えて術者よりも優れた使い魔が生まれる事はない。使い魔は従者であり、主よりも優れると言う事はまずないであろう。

もちろん、その用途によっては優れた部分と言う面は生まれるだろうが、術者の力量を超える使い魔が仕えると言う事はない。

その為、使い魔を見れば、その主である術者の力量が見て取れると言う訳である。

(つまり、この主はヴァルキリーと互角以上に強いと言う事になっちまうな)

片膝を着いた状態で数十メートル先の二人の戦いを見つめながら土御門は思考する。

(まったく、次から次へと。誰も待つてはくれねえって事か)

右の拳の調子を確かめる様に動かすが、やはりまだ痛みはほとんど取れていない。

やはり、無能力レベル。でしかない肉体再生オートリパリスでは傷の回復を期待するのは無理があった。

しかし、この状態であつても戦わなければならない。
幸いにも、傷は右拳だけで済んでいる。

こうしている間にも、視界の向こうではヴァルキリーのカーラと使い魔のネルフィが人間の身体能力を上回る速度で激突しあっている。

ただの魔術師、それもほとんど魔術を使えない土御門にとっては入りたくても近づく事の出来ない領域へと化しているそこへ、土御門は加わらなくてはならない。

「ちようどいい」

土御門の口元が鋭く笑った。

「このまま奴らを戦わせておけば」

両者の力量はほぼ互角と言つていいだろう。

今の所、互いの身体能力を活かした接近戦を主として戦っている。魔術によつてこちらまで被害が及ぶことはない。

今回の目的はカーラ＝フレイヤルの撃破。

ただ排除するだけならば、誰が行おうと同じことだ。

土御門がやらなくても、使い魔のネルフィがカーラを倒してくれば、それはそれで事が収まるのだ。

「心置きなく準備が出来るつてもんだぜ」

しかし、土御門は懐からフィルムケースを取り出した。

「仕事の時間だバカども」

四つのフィルムには亀、虎、鳥、龍の小さな動物の折り紙が込められてある。

声と同時にフィルムは風に乗る様に四方へと飛んでいった。

「次は面倒くせえ中心点を作成」

その壊れた右の拳で地面を殴りつける。

グシャ、と鈍い音をたてて、皮膚から骨が飛び出した。

地面に血が滴り落ちる。

それでも土御門はその姿勢を変えない。

地面に拳を突き刺したまま、さらにその拳に力を込めていく。

「俺の血と肉と骨をくれてやる」

その血が導かれる様に円を描き出した。

そしてその中に浮かび上がる八つの文字。

乾は天と首を。

坤は地と腹を。

震は雷と足を。

巽は風と股を。

坎は水と耳を。

離は火と目を。

艮は山と手を。

兌は沢と口を。

八卦を司る文字が、土御門を中心として描かれていく。

本来であるなら、能力者でもある土御門は魔術を使えない。

使えば、体が破壊され、一歩間違えば死に至る可能性もある。

にも拘わらず、土御門は今回も魔術を使用する。

「それを糧として命を与える」

空が不思議な空気に包まれた。

八卦の陣を中心として巨大なエネルギーが吹き出す。

その、奇妙な光にカーラは気がついた。

ネルフィと戦っている最中にも、土御門が何かしているのは見て

取れたが、正直気にしなくても良いと思っていた。

(自分の命がかかると分かかっていて魔術を平気で使ってくるなんて、

正直何を考えているのか分かりませんわね)

カーラは土御門が魔術師であり、能力者である事を知っている。

能力者は魔術を使えない。

それにも拘わらず魔術を使って来るとなるとそれ相応の魔術を警

戒しなくてはならない。

「よそ見とはいい度胸だニヤ」

一瞬のスキを付いてネルフィが懐に飛び込む。

「貴方も自分の管理くらいちゃんとする事ですわね」

ドガ、と小さな体が宙を舞った。

ネルフィの拳を一步後ろに下がることで交わしたカーラがネルフィの顎を蹴り上げた音だった。

くるくると回転をして着地するネルフィであったが、着地と同時に足が痙攣を起こしたように言うことを効かない。

そのまま横に倒れてしまう。

「良い使い魔でしたわ。ですが、主の傍を離れすぎた様ですわね。

その体、そのままでは後数分も持ちません事よ？」

「クツ、シャー」

威嚇する様にネルフィが声をあげる。

使い魔と言うのは主に契約を果たした動物がほとんどである。

その為、ネルフィの様に人間と同じような姿に変身するとなればそれ相応の魔力を使用する事となる。

もちろん、その魔力はネルフィ自身のモノではなく主から供給されているものにすぎない。

中には、動物でありながらその身に魔力を宿すモノがいるが、それは九尾や獣王といった異質なモノ達に限られる。

使い魔は主からの魔力の供給がなければ使い魔としてのその姿を維持する事が出来ない。

ネルフィの場合も、ヴァルキリーと互角に渡り合うだけの力を有しているが、その為に使用する魔力もほとんどなくなりかけていた。

「そこで大人しくしている事ですわ」

カーラは地面に倒れるネルフィから視線を外し、土御門の方を見た。

魔術を発動させようとしている土御門。その周りには術式である陣が張り巡らされてある。

「能力者である貴方が今更魔術を使うなんて、そもそも貴方の体の方は持つんですの？」

最早勝負は見えていると言わんばかりにカーラは言う。

いかに強力な魔術を使おうと、所詮は一般の魔術師でしかない土

御門に負けるはずがない、とカーラは高を括っていた。

「今更、か」

「ん？」

「確かに、今更からもしれないが。言っておく。これを使えば俺はただじゃ済まないだろう」

「何を言い出すかと思えば」

「だが、お前もただでは済まない」

半分笑った様な表情をしていたカーラの顔から笑みが消えた。

「俺が何故今までこの術式を使わなかったのか。それは至って単純明快。覚悟が必要だったのさ」

土御門にとつて魔術の発動はいつも死と隣り合わせである。

故に、必ず必要と感じる時でなければ使用するわけにはいかない。

「そう。お前はミスを犯した。重要なミスをな」

「私がミスですって？」

「ああそうだ。お前はスパイでありながら、この土御門元春って男がどう言う男なのか、理解出来ていなかったみたいだな」

八卦の陣からの光が一層強くなった。

土御門が術の発動を宣言する。

「土御門元春って男は、義妹のためならなんだってするんだぜい。なんだって騙す。自分自身すら騙してみせる」

その拳が強く握られる。

「俺の前で舞夏の姿を見せたのがテメエのミスだ」

名乗るは魔法名。

Falierre025

「背中刺す刃」

嘘をついてでも、何かを裏切っても目的を果たしてみせる。

その覚悟の現れ。

「さあクソツタレども」

自分すら騙す術式を唱える。

オレにチカラをカシてあげ

「集気三叉」

ネルフィは地面に前屈みになった状態で座りながら、自分の状態を確かめていた。

手の指先から足の指先までの感覚、耳から入ってくる音による情報、視線の先に移る映像による情報。

それらの一つ一つを確認していく。

(手と足の感覚は大丈夫だニヤ。言葉の情報も理解できてるし、目に見える情報にも変わりなしだニヤ)

アクセサリーの様に頭から生えている猫耳をピクピクと動かし、お尻から生える尻尾も異常がないかを確認するが、これらは元々あるものなのでそこまで気を配る必要はない。

(残る問題は……)

何かを祈る様にネルフィは口を開く。

「あ……ニヤ……ツ……」

そこに言葉は無かった。

ネルフィの表情が歪んだ。

言葉が出ない。

それを意味する事は何か？

(まずいニヤ……予想以上に術式が消えかかっているニヤ)

ネルフィは主であるカリスの魔力によってその姿を留めているが、正確に言えばカリスによって刻まれ術式によって、人間の姿を保っていると言う方が正しい。

使い魔は主と特殊な契約を結ぶと言ったが、ネルフィの場合はこの術式が契約そのものと言ってもよいのかもしれない。

使い魔には様々な用途が存在するが、すべてがネルフィの様に人

間の姿をしている訳ではない。

人間の姿は目立つ。

その為、自分の使い魔を人間の姿に変えようとする魔術師は以外にも少ない。

加えて、言葉を話す使い魔となれば希少だった。

なにせ、言葉を扱う必要はほとんど無いからだ。

情報を受け渡すなら何か魔術的な物で渡したほうが、洩れる可能性も少なくなる。

何かを尾行したり偵察するのであれば、人間の姿でない方が何かと便利だろう。

根本的な事から言えば、使い魔は使い魔なのだ。

必要以上のコミュニケーション能力など必要ないと考えるのが、一般的な魔術師だろう。

万が一に備えて、そちらのほうがすぐに切る事もしやすい。

ただ、ネルフィの場合は戦闘を用途とする上に、刻まれた術式が術式だけに、二足歩行を可能とし、人間の言葉を使用する。

野生児と呼ばれる者がいる。

その者達は人間でありながら、動物に育てられた者を指す。

その者達の話は、人間に捨てられた赤子を狼が育てた話しや、ゴリラに育てられた子供の話しなど、地方によって様々な物語が存在している。

数や種類はその地域それぞれで、恐らく把握されてないモノも存在するだろう。

そして、その物語のほとんどに共通している部分が存在する。

動物とのコミュニケーション。

人間でありながら動物の言葉を理解し、加えて、動きや仕草もその育てられた動物と同じように行動する。

動物に育てられて人間が動物の行動や仕草を行い、言葉を理解し、コミュニケーションをとる。

ならば、

人間に育てられた動物も人間の行動や仕草を行うようになる。
そう言う術式なのだ。

カリスと言う主に育てられたネルフィと言う猫は、カリスの様に二足歩行を可能とし、人間の言葉を理解し、その言葉を使ってコミユニケーションを取る。

それが、ネルフィに刻まれた術式の正体。

ネルフィがヴァルキリーであるカーラと互角の戦いを見せたのも、その影響が大きい。

育てたのが、天人であるカリスなのだ。

動物に育てられた人間が、その動物と同じ様な身体能力を得たと
言う話しかも、天人としても身体能力を持つカリスに育てられた
ネルフィは、自身の持つ動物としての運動能力に加え、カリスの身
体能力の影響も受けている。

その術式が消えかかっている。

術式に必要な魔力が足りなくなってきた。

その影響でネルフィは言葉が発せられなくなっていた。

(魔力はカリス様が近くにいないと補充されないニヤ。この状態を
維持するならあと二時間つてとこかニヤ。ただ動くとなると……)

土御門元春と言う魔術師はただの魔術師でしかない。

ヴァルキリーであるカーラ「フレイヤルと一対一で戦うとなると、
圧倒的に不利なのは目に見えている。

だからこそ、自分が動かなければならぬと考えていた。

そうなれば、魔力が持つ時間は三十分とないだろう。

下手をすれば、ものの数分で底をつく事も考えられる。
が、

そんな思考とは裏腹に、

ドガア！ と建物の一角が崩れ落ち粉塵が舞い上がった。

位置的にはネルフィから二十メートルほど離れた所だ。

間髪入れずに、その場所から大量の瓦礫が飛び散った。

粉塵ごとその瓦礫を吹き飛ばしたカーラは驚愕の表情を隠しきれ

ていなかった。

「まさか……このヴァルキリーである私に膝を付かせるとは」
その光景はネルフィも予想していなかった。

自分の状態を確かめ、土御門元春を援護しなければと考えていたのだが、たった一つの術式によって戦況は大きく覆っていた。

「言ったはずだぜい？ お前もただじゃ済まないと」

不思議な光を帯びながら、土御門は言う。

そして、ネルフィは見た。

その手からポタポタと垂れ落ちている赤い液体。

恐らく、その部分でカーラを殴りつけたのだろうが、状態から見てその衝撃に体がついて行っていない。

自分自身の活動できる限界を超えて放った一撃に、体が耐えていないのだ。

だが、そこでネルフィはさらに見た。

ジユウ、と焼ける様な音を立てて、その手が修復されていく。

回復魔術か何かかと思っただが、その際に見られる暖かな光とは違い、まるで無理やり傷をふさいでいる様にも見えた。

「クツ、貴方自身もただでは済まないと言っていましたわね。その術式、リミッター解除か何かですの」

「さあな、テメエに教える義理はねえ」

言葉が終わると同時に土御門は地面を蹴った。

それだけで、地面が割れた。

圧倒的な速度を持って、土御門はカーラへと急接近する。

クツ、と息を漏らしてカーラも迎え撃つ様に地面を蹴った。

二つの影がぶつかり合う。

蹴り上げた足と足が衝突し、空気が音をたてた。

周りの建物すら揺らしかねない衝撃が、土御門の体に流れ込んでくる。

瞬間、足から鈍い音とともに皮膚を切り裂いて真っ赤な血が噴出した。

カーラが何か仕掛けたのではなく、その衝撃に土御門の体が耐えられなかったのだ。

それが、歪な音とともに修復されていく。

(この回復の早さは……)

続けて拳をあわせるカーラは、土御門の術式の正体を思考する。

考慮すべきは、周囲を囲む異様なオーラ。

(地脈を利用し、それを放出させることで辺り一面に特別な空間を設定。あの四つの式神と地面に描かれた陣。加えて、異常な程の回復速度)

土御門と拳を交えるたびに、その体は悲鳴を上げるように切り裂かれては、修復を繰り返している。

先ほどまでは、動揺を隠せていなかったが、時間の経過とともに本来のクリアな頭が戻ってきていた。

(東洋の魔術には詳しくありませんけど、大方自分自身の活性と、放出される地脈のエネルギーを体内へと誘導する術式と捉えておいて間違いなさそうですわね)

本来、人間の体は知らずの内に自分自身の力をセーブしている。

半分以下、或いは数パーセントと言われるその力を一〇〇パーセント使用する事ができたなら、それは人間の身体能力を超える事になる。

(加えて、自分自身を騙す。痛みも麻痺させているのかしら? それでしたら、こちらもそれなりのモノで対処しなければなりませんわね)

距離を取ったカーラは言葉を紡ぐ。

「 槍を差し出す事を望み、戦いの汗を求め傷つける鍬をこの手に」

鉛細工を見ている様だった。

カーラの右手から流れ落ちた血が、踊るように形を成していく。その形は剣。

一メートルほどの厚さ一ミリにも満たない極細の刃だ。

「 飢えた雌鷲の駆逐艦は剣の岬を欲し、それは傷海に浮かぶ太陽の家の様に赤い」

左手から落ちた血は腕を伝って流れ、丸い形を作る。
見た目は円盤。

前腕の外側にへばり付く様に形を作っていく。

それは盾。

右手に剣、左手に盾。

自らの血で作りに出した自分自身の一部。

完成と同時にその右手を振るった。

土御門までの距離は十メートルはある。その手に握られる剣は十メートル。

しかし、

「ッ……！？」

土御門は瞬間的に後方へと飛ぶ。

たった一メートルしかなかったその血の剣は次の瞬間には十メートルもの距離を伸ばして、土御門の胸元を切り裂いていった。

「血液の量を調節して距離を伸ばしているって訳か」

土御門が言葉を発している間に、その傷は痕も残さずに修復されていく。

「ヴァルキリーの血ですわ。高くつきますわよ？」

さらに間合いを伸ばした刃を横になぎ払うカーラ。

それを、地に這う様にかわした土御門はそのまま地面を蹴った。

爆発的な加速を見せて、土御門は一瞬にしてカーラの懐へと飛び込んだ。

反転して足技を繰り出す。

その蹴りは、カーラの腹部に突き刺さる。

が、その直前に左腕から伸びた血の盾が、土御門の蹴りを阻んだ。受け止めると同時に形を変えていく盾は、土御門の足を掴む様に覆う。

「フッ！」

掴んだ足を引き上げると、そのまま地面に叩きつける。

「がッ……」

肺の空気が一瞬にして吐き出された。

空気を求めて肺が酸素を補充しようとすると同時に、カーラはその右手を振り上げていた。

長さ二メートルほどに調整された刃は土御門を真つ二つにする勢いで振り下ろされる。

「このッ」

土御門は自由の利く左足で、体を捻ると同時に右足を掴む血の盾を打ち砕く。

地面に突き刺さった刃は一带を吹き飛ばす。

その衝撃を受けながら、土御門はバネの様に縮めた体を伸ばして足の裏でカーラの顔を蹴り上げた。

後ろに仰け反るカーラ。

しかし、倒れる事なく地面に着地する。

僅かに切れた口元の血を拭い、そして笑みを浮かべる。

「簡単に打ち砕ける盾を作った所で、何の意味もなさないぜい」

「ご忠告感謝しますわ。ただ、一度目は壊れる様に作っただけですよ？」

瞬間、土御門の足元を血の塊が覆い尽くした。

先ほど砕いた血の欠片が集まって今度は両足を押さえた。

「血に塗られた男は宙を舞い、血の氷柱は銃の馬となって木を破壊する」

カーラが言葉を唱えると、体から浮かび上がった無数の血が宙を舞って刃へと変わる。

それこそ氷柱の様に形を作った血の刃が、両足を取られた土御門目掛けて一斉に降り注ぐ。

ドガガガ！ と一つ一つは僅か数センチの刃が、爆弾のような破壊を生み出す。

突き刺さった地面は狼にでも噛み千切られた様に、形を変えてい

く。

「デクのボウとせめて青キ木ノ札ヲ用イ我ガ身ヲ守レ」
タテとしてヤクにタテ

その刃は土御門に届く直前で、盾に弾かれるように左右に散った。それでも、僅かな隙間を縫うようにして血の刃が土御門の皮膚を掠めていく。

それだけで皮膚は食いちぎられた様な傷を残していく。

無数の刃は終わろうとしない。

全方向から嵐の様に降り注ぐ。

傷を負うたびに土御門の皮膚は音をたてる様に修復されていく。

しかし、徐々に土御門の表情が変化する。

(まずい……時間が迫ってるぜ)

何かを決めた様に、土御門は行動を起こした。

ガリ、ビリビリ、と

皮膚を無理やり剥がして、土御門は拘束から抜け出した。

それを確認したカーラは血の雨を止める。

足元の皮膚を根こそぎ持っていかれた。

その痛みで表情が歪む。

カーラは痛みを麻痺させていると推測していたが、実際はそうではない。

痛みは残る。

土御門の『集気三叉』は地脈のエネルギーを体内へ流し込み、その力を利用して自分自身の治癒能力を爆発的に高めている。

そのため、傷を負っても自分自身の治癒能力で傷を癒し、魔術によつて体が破壊されてもその破壊された部位を修復することで、今の体を維持する事ができているのだ。

加えて、身体能力を一〇〇パーセント引き出したとしても、その影響すら治癒される為、ヴァルキリーであるカーラと直角以上の動きを可能としていた。

もちろん、その効力は無制限ではない。

集気三叉を発動させるために使用された魔力がなくなれば、地脈

からのエネルギーは確保できず、治癒能力も元に戻りその体は破壊されてしまう。

そのリミットが迫っていた。

「それじゃ、ファイナーレと行きますか」

剥がされた皮膚が修復されていく中、黒い折り紙を出した土御門は言葉を紡ぐ。

「黒キ色（黒い色）八水ノ象徴。其ノ暴力ヲ以テ道ヲ開ケ」

何も無い空間から直径一〇メートルは成す巨大な水の塊が出現した。

それを見たカーラは細く微笑み、右手に持つ剣を構えなおす。

「乙女の娘を切り裂く血を好む蟲は、眠りの剣を運ぶ」

剣の形状が変わる。

刃先に付いた戻しは、釣り針同様の引き抜き防止の安全具。

と言うレベルではない。

刺さってしまったえば引き抜きはできない。

加えて、『資格のあるものしか抜けない剣』の術式を織り交ぜれば、それこそ、岩に刺さった聖剣の様に誰にも抜くことはできない。傷を癒す力があっても、その場所に刃があり続けられれば、傷を癒すことはできない。

土御門が生み出した水の塊がカーラを飲み込む形で突き刺さる。

それを、カーラは右手の剣で切り裂いた。

左右に割れた球体は、力を無くして大量の雨となって地に降り注ぐ。

「クツ」

水の術式を破られた土御門が次の行動を起こす前に、ジユブ、と血塗られた刃が土御門の腹部を貫いた。

決して抜けない刃を突き刺し、カーラは笑う。

自分自身が、戦士達を死に駆り立てる者であることを思い出したかの様に。

「捕まえたぜ」

しかし、土御門は静かに告げる。

腹部を貫かれ、集気三叉ですら治癒できない傷を負って、それでも笑う。

カーラ以上の笑みを浮かべて、土御門はその耳元で告げる。

「四獣は配置済み、弾はすでに込められた」

その時、カーラは寒気を感じた。

ヴァルキリーとしての血が、戦う乙女としての感が訴えている。離れると。

詠唱すら必要ない。

すでに、周囲には四獣を設置し、神殿は築かれてあった。

必要な魔力も、地脈から溢れ出ていた。

後は、トリガーを引くだけだった。

「 零距离赤ノ式」

直後、

獣にも似た咆哮と爆音が炸裂した。

11

半径二〇メートルほどのクレーターが完成していた。

ネルフィはそのクレーターの本の数メートル先で地面に伏せていた。

（あの威力の魔術をあのと近距離で放つなんて無茶苦茶だニヤ）
正直、その魔術の影響を受けなかっただけで奇跡にも近かったのかもしれない。

実際のところ、クレーター部分以外の場所にはほとんど被害が及んでいない状態だった。

恐らく、魔術を放つ直前に土御門が周りに被害が及ばないように、一工夫加えたのであろう。

その場所からは、今も尚粉塵が巻き上がっていた。

中の様子は外からでは分からない。

ただ、はつきりと言えることは、あの魔術規模で二人ともが無事であると言う事は無かった。

装填された弾丸は、地脈から溢れるエネルギーによって本来の規模に比べて一〇倍程度。

ネルフィ自身がもしもあの魔術をまともに食らっていたら、何かを犠牲にしない限り無事では済まされないだろう。

その中心で、

ゴソ、と何かが動いた。

まだ視覚での情報を正確に把握出来ているネルフィの視線の先で、粉塵が立ち込める魔術の中心でどちらかが動いた。

徐々に粉塵が晴れていき、その正体が見えてきた。

（あれは……）

金髪のツンツン頭に、サングラスが見えた。

術式を放った土御門だった。

零距离からの赤ノ式。

その威力は普段の一〇倍にも及んでいた。

しかし、集気三叉によって治癒能力を活性化させている土御門なら、零距离からの術式の衝撃で体が傷ついたとしても、治癒することが出来る。

が、

その腹部には刃が刺さっていた。

血で作られた厚さ一ミリにも満たない極細の剣。

『資格のある者でなければ抜けない剣』と化したその刃は、術者が倒ればその血はただの血液として地面に流れ落ちるハズであった。

だが、それが刺さったままだった。

加えて、

(周りに張り巡らされていた神殿が解除されてるニヤ)

それが意味する事は何か。

直後、

ドサ、と土御門の体が地面へと崩れ落ちた。

その体からは夥しいほどの血が流れ出していた。

魔術による体の破壊。

集気三叉によって抑えられていた体の破壊が、術式の破壊によって一気に襲いかかっていた。

血管という血管は破れ、臓器は破裂。

息をしているのが不思議なほど、その体は破壊しつくされていた。そして、その傍らに立つもう一つの影。

カーラ＝フレイヤル。

ヴァルキリーである彼女は土御門の零距离赤ノ式を耐え抜いていた。

「……まさか、この私に血の魔術を酷使させるなんて、少々貴方を

見くびっていたようですわね」

最早、ピクリとも動かない土御門に対して言葉を投げかけるが、反応はない。

微かに息をしている事はカーラにも感じ取れた。

クラ、とカーラは頭を抑える。

(とは言え、さすがに血を使いすぎましたわ。あの術式を防ぐために必要最低限の血を残して魔術に使用しましたし)

カーラは目線を落として、土御門の腹部に刺さった刃を見た。

(最早虫の息。この位の血は回収しておいてもいいですわね)

カーラが手を向けると、その刃は形を崩して再びカーラの手に戻っていく。

その手に取った刃を払い、余分な血を削ぎ落とすと、まるで管の中を通るようにしてカーラの体にその血が入っていく。

血が入り終わると、手の感触を確かめる様に指を動かす。

(まあ、多少の違和感はありませんが、この程度なら問題なさそうですわね)

一段と強く手を握って、それを開くと今度は視線を変えた。

その先には、クレーターの傍で地面に横たわる一匹の使い魔の姿があった。

(さて)

軽いいとはいいきれないが、このクレーターを作り出した魔術を食らった後とは思えない足取りで、カーラはネルフィに近づいていく。ネルフィはそれを視界で捉えると、震える足を動かしてその場を動こうとする。

が、

「遅いですわね」

ドゴオ！ とその体が横に飛んだ。

「が……はッ……」

一〇メートルはあった距離が、たったの二歩で詰りそのカーラが放った横蹴りがネルフィの体を吹き飛ばした。

地面を転がり、壁にぶち当たった所でようやくネルフィは止まった。

顔をしかめるネルフィが、その目を開いた時にはカーラが地面を蹴っていた。

そして、槍の様に飛んできたその蹴りを、ネルフィは反射的に交わした。

と言うよりは横に転がった。

動物の危機回避能力がここに来て発動したのだろうか、目で見て脳から体に信号を送ったのではなく、目で見た瞬間には体が横に動いていた。

ネルフィがいた壁は穴が開き、壁が崩れ落ちて来る。

立つ時間よりも転がる事を優先させたネルフィは地面を這いずり回ってカーラから距離を取ろうとする。

「私、これでも一応スパイとしてこの学園都市に入ってきたわけですけど、顔を認識されると色々と後で面倒です。ですから、貴方にはここで使い魔としての人生に幕を下ろしていただかなければなりません。理解して頂けますか？」

笑顔でさらりと言ったのけるカーラの言葉に、ネルフィは答える事が出来ない。

人間の言葉は理解できるが、それを言葉として発する能力がもうないのだ。

もう、二足歩行で歩く事さえ難しくなってきた。

予想以上に進行が早かった。

計算では何もしなければ二時間はこの姿を維持できると踏んでいたネルフィに取っては誤算だった。

ここに来て、ネルフィは後悔し始めていた。

大人しく、命令された事だけを実行していればよかったと。

守越尊の傍にいて、主であるカリスがいない間の情報を収集する。その単純な命令だけを実行していればこんな事にはならなかった。

ネルフィにとって、術式が切れる事は契約の破綻と同じである。術式が切れてしまえば、『人間に育てられた動物が人間のようになる』魔術の効力は切れ、ネルフィは単なるネコへと戻ってしまう。ヴァルキリーと互角に渡り合う力が失われる所か、人間の言葉を理解する能力も失われ、下手をするとカリスが主であった事すらも忘れてしまいかもしれない。

(クツ……カリス様)

「そろそろ終わりですわね」

その手に血の剣が構成される。

長さは五〇センチほどしかないのは、血の無駄な使用を避けてもらう。

それでも、何も出来ないネルフィに止めを指すことは簡単な事だった。

刃がネルフィに降りおろされた。

死んでしまっても、使い魔としての人生は終わる。

人間は死に直面する間際、今までの出来事が走馬灯の様にフラッシュバックされるらしいが、使い魔のネルフィにも同じことが起きるのだろうか。

しかし、ネルフィが走馬灯を見る事はなかった。

ゴアアア！ と血の刃がネルフィに突き刺さる直前に、カーラを炎の蛇が覆い尽くしたからだ。

「あ……？」

「がああッ」

炎に埋め尽くされていくカーラはその炎から抜け出し、残火を振り払う。

そして、ネルフィは気がついた。

自分が今、言葉を口にしたことを。

それがどういう事なのか。

魔力は主が傍にいなければ補充されることはない。

言葉の回復は、魔力の回復を意味する。

ならば、

ザ、ザ、と地面を擦る様な音が聞こえた。

それは後方から聞こえてくる。

「魔力の著しい減少を感じたので足を運んでみれば、某の使い魔が世話になっっているようだな」

「クツ、貴方は……」

カーラは無意識に後ずさりしていた。

その存在がどれほどのモノか、体で理解してしまっている。
ヴァルキリーである自分と互角の身体能力を持つ使い魔。

その主。

加えて、自分自身の状態を見ても勝てる可能性はゼロに等しい。

「……なるほど。貴様ヴァルキリーか。自分自身の役目も忘れ、この様な所で道を外れるとは、戦士として恥ずかしい限りだな」

その言葉一つ一つに重圧を感じた。

カリスがネルフィに近づくにつれて、カーラは後ろへ足を運んでしまう。

存在は聞いていた。

かつて、神に選ばれ、その身に神の体の一部を宿す者。

その者は天人。

その名はノア。

「貴方が……本物ですね」

「某を知る者か」

「でしたら、まともに相手をしている暇はありませんわね。ここは素直に引き上げさせていただきますわ」

そう言ってカーラは建物の隙間へと入り込もうと、地面を蹴って、同時に、その入口を炎の蛇が塞いだ。

その炎が抜刀した余波だと気がついたのはカーラが振り返ってからだった。

直後に、カリスはカーラの懐に潜り込んでいた。

「クツ、 戦いの汗は氷の氷柱で拭う」

咄嗟にだした血の剣とカリスのカリブルヌスがぶつかり合う。

「血の剣か。確かヴァルキリーは死者を集めその血を手を受けていたそうだな。それを考慮した術式か」

カーラの受けた剣は小刻みに震えていた。比べてカリスの剣は動きを見せない。

（血が、足りませんわ）

酸素の供給が追いついていない。

必要最低限の血液しか体に残していないカーラは本来の力の半分も出せていない。

それでも一〇メートルもの距離をたったの二歩で詰めるだけの身体能力を発揮するが、相手はその倍の距離を一歩で進むような存在だ。

もう自分の血を使うわけにもいかない。

カーラは後方の気配を探っていた。

僅かに聞こえる呼吸音を使い、その存在の一要確かめる為に集中する。

と、

「なるほど、他人の血をも操作出来ると言う事か」

「ッ！」

剣を弾いて振り向いたカーラは土御門の場所を確認する。

その作り出した剣を体内へ戻しながら、カーラは土御門が流している血へと手を伸ばす。

他人の血を自分の中に入れる事はできないが、魔力を込めることで自由に作り替える事は出来る。

が、

その目の前にカリスがふわりと、花に降り立った蝶の様に降り立った。

ドガ！ とその腹部にカリスの蹴りが突き刺さった。

「がはッ……………」

一〇メートルは飛んで地面を転がるカーラ。

その姿を横目に、静かにカリスは告げる。

「自分自身の体の状態を考えるべきだな。そんな状態で某から逃げ切れるとも思っているのか？」

さらに五メートルは転がってカーラはようやく止まった。

転がりながらもその眩きが聞こえていたカーラはその通りである事を理解した。

普通にやっついては逃げる事は出来ない。

例え建物の隙間に飛び込もうとしても、カリスはそれを上回る速度で先回りをしてくる。

上空は建物が邪魔をして逃げ道がほとんどない。

自分自身が逃げる事を想定していなかったカーラは短時間の間に逃げるための行動を思考する。

天人である彼女の目を盗んで逃げる為にはどうすれば良いか、スキを作るためにはどうしたら良いか。

そして、その答えは身近な所に落ちていた。

カーラの視界に入っていく一つの影。

それは、唯一天人がスキを見せるかもしれない可能性。

(こうなれば……ッ！)

カーラはそのまま上空へと飛び上がった。

逃げ道が一番少ない上空へ移動するが、その先へ行ったカリスに地面にたたき落とされる。

絵に描いたような回し蹴りだった。

防ぐ動作すらする時間も与えない圧倒的なスピードで、的確にカーラを地面に叩きつける。

「大人しくするのだな。もう先は見えている」

地面に落ちた衝撃で、粉塵が舞う。

しかし、それも一瞬にしてかき消される。

カリスの抜刀によって生み出された衝撃で、空中を舞う塵は瞬時にして無くなった。

が、

そこでカリスが目にしたのは、

「ニヤ？」

「ニヤ？」

地面に座り込んでいたネルフィが二人。

「フム、なるほど。考えたな」

どちらかがネルフィであり、どちらかがカーラである事は間違い無いのだが、なにせ見た目は全く同じ。傷の位置から常盤台中学の学生服の破れ具合まで何もかもが一緒なのだ。

見ただけでは判断のしようがない。

加えて、カーラは物真似を得意とする。

性格や癖まではマネできなくとも、その声色であったり仕草を一瞬で真似る事は容易いことだった。

それに、今のネルフィは言葉は話せるようになったものの、満足に行動出来ない状態だ。

真似る仕草も限られてくる。

カリスは二人のネルフィを交互に見るが、やはりその容姿だけでは判断出来そうに無かった。

「どちらか判断しづらいな」

と、カリスは一瞬、張り詰めていた気を緩めて、

斬！ とカリブルヌスの抜刀と共にネルフィを切り裂いた。

一瞬、何が起こったのか理解できなかった。

「な……なぜ、分かりましたの」

その刃はひと時の迷いも見せることなく、カーラを確実に貫いたのだ。

切られた部分から、衣が取れるようにカーラの姿が露わになる。

容姿や声色の真似は完璧だった。

服装の乱れ具合も、傷の箇所も残り少ない血を使い完璧に再現したハズだった。

だが、ネルフィがカリスの何なのかよく考えるべきだった。

使い魔は、主から魔力の供給を受けている。

つまり、魔力を供給していない方が、偽者となる。

「自分の使い魔くらい把握できるのは当然であろう？　しかし安心するがいい。貴様の魔術もなかなかった。恐らく変身されたのがネルフィでなければ某でさえ見分けがつかぬだろう」

完全に姿を現したカーラは地面に倒れていく。

「……『鷹の羽衣』か。条件にはその者の毛を衣に縫いこむ必要があるが、それを短縮するために結ぶ事でそれを省略し、纏う事で効力を発揮させると言った所だろう。加えて、血の魔術に、それを織り成すサイズの術式。彼のヴァルキリーの長を連想させるモノであるな」

崩れ落ちていくカーラに返答の声はない。

必要最低限の血しか入っていない体から、血を流した事で意識を失ったのだろう。

その姿を見届けると、カリスは視線を移す。

「ニヤ……」

その視線の先には悪いことをして親に叱られる直前の子供みみたいな表情のネルフィがいた。

自分の今の状態を理解し、カリスが何を言ってくるか大方予想がついているため、その耳は伏せ、尻尾も小さく丸めている。

「ネルフィ」

ビクン、と小さくその体が震えた。

似合わず涙目になりつつあるネルフィに対して、カリスは静かに告げる。

「無事で何よりだ。だが、もうしばらくそこで待て」

「あ……」

ネルフィは呆気に取られたような声をだした。

主の行動を熟知し使い魔として仕えてきたネルフィには予想外の言葉。

間違いを決して許さぬ主からでは、その言葉。

間違いを犯したと感じていた彼女にとっては、その一言で全身の

緊張が解け、体の力が抜けてしまった。

同時に、ヒック、ヒック、とベそをかく。

カリスはその姿をみて、軽く笑みを浮かべると、もう一つの影に足を運ぶ。

その者は、大量の血を地面に流し、最早息をしているかも分からない様な状態だった。

「本来であるなら、助ける義務はないのだがな」

聞こえているかも分からないが、それでも静かにカリスは土御門に対して告げる。

「某の使い魔が世話になつた分の礼くらいはさせてもらおうでしょう」
カリスが取り出したのは一枚のオリーブの葉だった。

「 大海に放った鳩はオリーブの葉を銜え、洪水の終わりを告げ始める」

パアア、とオリーブの葉が宙に舞うと同時に土御門の周りが不思議な光に包まれた。

その光は雨の上がった大地を照らす太陽の様に優しく暖かい。

「 種を植えよう。それは血となり肉となる貴重な食料となるろう」
次にカリスが取り出したのは小さなビンに詰められた赤い液体。

血の様にも見えるそれは、葡萄酒。

「 それを求め降り立つ聖霊ルリアハは肉体に生のしるしとして息ルリアハを与える」

ドクン、と弱々しかった鼓動が、力強く脈打った。

「 祭壇を建てよう。燃やせば贅となり、世界の破壊は終わりを告げるだろう」

宙を舞うオリーブが、手に持つ小さなビンが音をたてて燃える。

途端に、土御門の体にも変化が現れた。

腹部の傷が、体中の傷が治癒されていく。

暖かい光に包まれて、破壊は収まり、体を流れる血が補充されていく。

ピクリ、とその指が微かに動いた。

息をしているかも分からなかった体から、脈を打つのが分かる。

肺には酸素を溢れんばかりに取り込み、それが全身を駆け回る。

「峠は越えた。後は自分の力でどうにかなるだろう」

羽織を靡かせて、カリスはその場を去って行く。

「それがせめてもの礼だ。ありがたく受け取るがいい」

8 - 11 「それぞれの後」

12

土御門が目を覚ますと、辺りは薄暗かった。

ガタガタ、と地面が揺れている。

周囲を見渡して、そこが車の中だと言うことに気がついた。

「目が覚めたみてエだなア」

赤い目がこちらを見てた。

全身真っ白に覆われた学園都市最強の超能力者が目の前に座っている。

ちょうど、キャンピングカーの様なキャビンには左右に一つずつ長椅子のような座席が設置されており、その一つを土御門が寝そべる形で陣取っていた。

「俺は、どのくらいの間寝ていた」

「さアな。テメエが地面でお昼ねをしているところを拾い上げたのが三十分前ってところかア」

辺りは、すでに暗くなり始めている。

どうやら、数時間の間意識を失っていたようだった。

「ずいぶんと派手にやったみてエだが、それにしても無傷ってのも疑問なところだな」

崩壊する建物。

二〇メートルを越すクレーター。

そして意識を失う土御門。

その割りに、彼自身の傷が少なすぎる。

むしろ、傷は一つも見当たらなかった。

「俺の他に誰もいなかったか？」

「いいや。誰もテメエの昼ねを邪魔する様なヤツはいなかったがなア。まア、上が言うには互いの任務は無事に終了したみてエだから、

何があったは知らねエがご苦労さまってトコだ」

土御門は、記憶に残る部分を思い返していた。
零距离からの赤ノ式。

それを真つ向から受けたヴァルキリー、カーラ＝フレイヤルはあの瞬間、自分の血液を操作し巨大な球体を作成。

盾ではなく、それはシエルターとでも呼べそうなほどのモノだった。

さらに強度を上乗せするためにいくつかの魔術をしようしていた。結果として、カーラに対して赤ノ式ではほとんどダメージを与える事はできなかった。

加えて、自分自身の術式の崩壊による体の破壊。

今回の任務を完遂したのは土御門ではなかった。

(……あの女だ)

記憶に僅かに残る羽織を纏った女。

あれが、使い魔の主。

その主がその後どのようにあの場を終息させたのかは分からなかったが、土御門の傷が癒えていると言う時点で、ヴァルキリーが負けた事は確実だった。

(確か、神裂からの報告では、ノアの名を継ぐものが学園都市の内部にいるって情報を受けてたが、……あれが本物の天人か)

土御門は守越尊と言う天人を知っている。

しかし、本来であるならば、天人とはノアの名を継ぐ者であり、守越尊の様な者が神の体の一部を有しているのはおかしい事なのだ。(今回のヴァルキリーの件。あのヴァルキリーが何の目的で学園都市に侵入していたのか気になるが、それに加え、上はなぜそれを泳がせていたのか。なぜ本物の天人が現れ、守越尊の様な神の体の一部を有する者がいるのか)

問題は山ほどある。

(ヴァルキリーを学園都市に侵入させた者の存在も気になる。が、それだけじゃない。アレイスターはこれらの事を全て知りながら全

てを泳がせている。アレイスターのプランにこれらの要素が必要と言う訳か……それともまだ別の理由があるのか)

ヴァルキリーに関しては、今になっての排除命令。

だが、考えてみればこの任務は土御門一人で遂行するには多少に
が重すぎた。

海原光貴と二人で対処させる予定だったのかもしれないが、それでも万全とは言い難い。

しかし、結果として侵入者のヴァルキリーを排除する事に成功している。

天人の登場と言う異例の事態を引き起こして。

(時が満ちるのを待っていた？ 今回の一件はイレギュラーではなく、予め予想されていた？)

外だけではない。

内にこそ、本当の問題があるのかもしれない。

(全く、大体の事は把握できていると思ってたが、全然足りない。上への反撃するにしても、もっと動く必要がある、か)

「何笑ってやがる」

「……さてな、自分にも分からんぜよ」

13

病室には一人の少年が眠っていた。

何かから開放されたような、安らかな寝顔だった。

花の飾りすらない真っ白な部屋には、少年の他にそれを見つめる
医師の姿が見える。

「……正直ね。今回は僕にもお手上げだよ」

ハブンキャンセラ
冥土帰しと呼ばれ、あらゆる傷を直してきた医師でさえ、今回は
かりは分が悪かった。

「君たちは既に二つで一つになってしまっている。脳波の検査や体

への影響を見たとしても、今現在で異常はみられないね？」

独り言にも見えるが、医師はその眠っている少年へ語る様に優しく話しかける。

その状態で、少年が医師の話しを聞いていても言うように。

「ただ、その状態もいつまで持つか分からない。他人の臓器を入れる事には問題はない。適合さえしていれば、拒絶反応を起こすことも、副作用が出ることも大幅抑えることが出来る」

風が窓から入り込むと、少年の髪が僅かに靡く。

それが、まるで医師の言葉に頷いている様にも見える。

「君たちにはすでに二つの人格が生まれているそうだね？ 生まれたと言うよりも、元々存在していたと言うべきかな？」

医師は少年に問いかけるように、

「その人格を分けるとなると器が必要なのは分かるね？ 元々二つあった脳を一つにして、そこに二つの意思があるでしょう。その脳を二つに分けたとして、その一方をどうすればいいか分かるかい？」
元々は事故だった。

その所為で傷ついた脳を修復するために、二つの脳は一つとなり、一つの命が救われた。

ならば、もう一つの体はどうなるのか。

「妹さんだったかい？ 彼女の人格を入れる器がここには無いんだよ。その体はもうこの世には存在してないんだよ。分かるね？」

二つの人格を分けたとして、その片方を入れる体が存在しないのだ。

「今の時点で、君たちを二つに分ける事は出来ない」

医師は小さく首を横に降った。

人の体を一から作り上げる。

それは神にも等しい行為だった。

器がなければ、取り出した片方の脳を入れる場所がない。

そうなればあの少年から受けた、元通りに戻してやってくれ、と言う要望に答える事は出来ない。

「ただ、君たちが望むなら僕は何だって用意しよう。クローンを作り出すのか、サイボーグとして体を構成するのか、それを僕に決める権利がないのは分かるね？」

医師は静かに告げる。

「だから、まずは目を覚ますんだ。それからでも遅くはない。君たちがどうしたいのか、ゆっくり話そうじゃないか。いいね？」

再び、風が病室へと流れ込む。

髪を揺らすだけではなく、一瞬その少年の口元が動いた様に見えるた。

医師の見間違いだったのか、それとも、もう一人の人格がそれに答えたのかは分からない。

14

一匹のネコが、気持ちよさそうに横になっていた。

太陽の日を浴びて日向ぼっこを楽しむ様に、その表情には安らぎと安心に満ち溢れている。

「フニャー」

あくびをする猫の背を撫でる一つの暖かな手があった。

その手が背を摩る度に、長い尻尾が大きく揺れる。

「バカ者め。一体何の為に人の姿になる術式を契約と共に結んでい
ると思っっているのだ」

しかし、その顔は言葉とは逆だった。

説教と言う言葉ではなく、それは心配だった。

「某が間に合わなければ、契約が切れていたのだぞ」

「ミャー」

ネコはその膝の上で甘い声を出す。

甘えているのか、それとも謝っているのかもしれない。

それを見つめる守越尊にはネコの言葉は分からないので実際がど

うなのかは知る由もない。

「が、見ている限りでは甘えているのだろう。」

「ネルフィは俺をつけていた魔術師と戦ってこんな事になったのか？」

「カリスがネルフィを連れて帰って来て以来、一時間以上もの間ネルフィは猫の姿のままだった。」

「まだ、数日の付き合いだが、そのほとんどを人の姿で過ごしている所しか見ていない守越尊にとっては、珍しい光景だった。」

「だからこそ、変に心配になってしまう。」

「遅刻をしない友達が珍しく遅刻をしてきた。そんな場面に出くわした気分だった。」

「心配はない。魔力の補充をしているだけだ。もうしばらくすればいつもの騒がしいネルフィに戻るだろう。」

「そうか。それならよかった。」

「守越尊はホツと息を吐く。」

「で、俺をつけていた魔術師ってのは結局なんだったんだ？」

「某も詳しくは分からないが、あれはヴァルキリーだ。」

「ヴァルキリー？」

「あの東洋の聖人と同等のチカラを有する者と言えば分かりやすいか。」

「東洋の聖人と言うのは神裂火織の事だろう。」

「世界に二〇人といない、科学で言えば兵器とも呼べる魔術師。」

「それと同等の存在が自分をつける理由。」

「理由は、恐らく貴様の天人としての力だろうが、それに関しては某にも分らん。が、確かに魅力的な存在であるには間違いないだろう。天人以外に天人としての力が宿ると言う事は、貴様以外の誰かにも同じことが出来ると言う考えを抱く者がいたとしても不思議ではない。」

「つまり、俺みたいに天人としての力を持つヤツがいるって事なのか？」

「そう言う訳ではない。が、オルレアン騎士団のような者達がいたと言う事も事実であるからな」

「オルレアン騎士団？」

「ジャンヌ・ダルクに関する話しをしたと思うが、オルレアン騎士団はその力を増産させる事を目的として行動していた集団だ。ジャンヌが授かった力は天人としての力に近いモノがあつたのでな。神の声を聞く力、それは我らの祖であるノアの力が濃く出た証でもある。彼らはその力を欲していた」

「でもジャンヌは天人じゃないんだろ？」

「近い存在であつたかもしれぬな。だが、大事なのはそんな事ではなく、その様な集団が世界のどこかに存在していると言う事だ」

ジャンヌ・ダルクの『特別な声』を聞く力を求めた者達がいた様に、天人としての力を手に入れようとする者がいるかもしれないという事だつた。

「今回の一件でその可能性が浮上してきた訳だ。貴様の存在が知られば知られるほど、そう言う輩に目をつけられるハズだ。少なくとも、あのヴァルキリーに命じた者は貴様を狙っていると考えた方がいいだろう」

「……それが誰なのかは分からないのか？」

「ローマ正教の者だ」

さらりとカリスは言う。

「本来、ヴァルキリーは北欧神話におけるオーディンのしもべだ。それが、ローマ正教の十字架を首に提げていた。これが意味するモノは大きい。なぜならローマ正教は異教徒を嫌うからだ。何か特別な理由でもない限り、わざわざ十字教でもない北欧の神話に出てくる様な輩を配下に加えようとは思わんだろう」

「その、特別な理由って言うのが俺、いや、この力つてことか」

ローマ正教と言われて思い出すのは、数日前の事件だつた。

たった一人で学園都市の機能を麻痺させた神の右席ヴェント。

そして同じく神の右席、聖人アックア。

上条当麻を狙ってやってきた彼らが、自分自身を狙っている可能性がある。

（あの時はそんな素振りを見せていなかった。いや、確かヴェントは最後に俺の目を見た時、何かを知っている様な素振りを見せた）つまり、ヴェントは守越尊が天人としての力を有している事を知らなかっただけなのかもしれない。

（ヴァルキリーはローマ正教の命令で俺を監視していた。にも拘わらず、神の右席のヴェントは知らなかった？）

あれだけの力を見せたヴェントが守越尊の事を知らされていないかった理由があるのか。

「……そのヴァルキリーはどうしたんだ？」

「ローマ正教に送り届ける手はずは整えてある。まあ、警告をかねての処置だが正直どこまで効果があるかは分からぬ。あまり期待はしない方がいいだろう」

狙われていると言う事が分かっただけで、不安な気持ちが生まれ始める。

これほどの力を持ってしても、その不安をかき消す事は出来ない。巨大な力を有していたとしても、その力を使いこなす事が出来なければ、まさに宝の持ち腐れ。

神の目は使用出来る時間が短すぎるのだ。

もし、ヴェント級の魔術師が今度は自分自身を狙って現れた時、そこに自分一人しかいなかった場合、どうなるのか。

今までは、誰かの助けがあった。

必ずと言って良いほど、誰かの助けが入った。

だからこそ、神の目を使用し行動不能に陥ったとしても乗り越えることが出来ていた。

（今までは考えなかったけど、この力をちゃんと使える様になる必要がある。狙われる可能性が出てきた以上、それに対処出来るだけの自分を構築しておかなくちゃならない）

以外にも、冷静だった自分に少し驚いた。

が、なぜここまで冷静なのか、自分自身でも心当たりがある。
(……あいつならどうすれば良いかを先に考えるハズだ。俺は、十分過ぎる手本を知ってる)

「なあ、カリス。この力の扱い方を教えてくれないか」

15

「何だこの報告書は？」

バチカンのピエトロ大聖堂でローマ教皇は呟いた。

報告書の内容は至って単調だった。

『ローマ正教徒であるヴァルキリーの回収のついて』

ただ一言だけそう書かれた紙がローマ教皇の元へと届いた。

「ローマ正教内にヴァルキリーだと？ そんな話し私の耳には入っておらんぞ」

ローマ正教には二〇億もの信者がいる。

いつ、だれが、どこで、新たな信者になったのか。二〇億もの信者の全てをローマ教皇が把握することはもちろんできない。

が、今回は話が違う。

十字教の聖人とはフォーマットの異なるヴァルキリーがローマ正教の加わったとなると、その情報は必ずしもローマ教皇の元へと届くハズである。

しかし、ローマ教皇はこの日初めてローマ正教内にヴァルキリーがいることを知った。

兵器とも呼べる聖人。

それと同等のチカラを持つ存在であるヴァルキリーがローマ正教に加わっていた。

「私に報告なしにこんな事を」

主を信じる者を拒むことはしないが、そもそも北欧の神話に出てくる様な存在が、ローマ正教が掲げる主に祈りを捧げるのか、疑問

でもある。

「こんな事を報告もせずに行ってしまつ様な者は……」

ローマ教皇はしばらく沈黙し、

「イーサか」

「呼びました？ ローマ教皇」

暗闇から現れたのは、黒い神父服を纏つた金髪の青年だった。

身長は一七〇センチ程度で、体格は神父服を着ているのではつきりしないが細身だろう。

「今更こんな報告書を上げてきてどういふつもりだ？ なぜ私に報告しなかった」

「わざわざ信者が一人増えた事をローマ教皇に報告する必要もないと思つたからね」

「そう言うレベルではないだろう。ヴァルキリーだぞ？ 下の者が知つたらどういふ反応をするか分かつているのか？」

「心配ないよ。あれは変装がうまいから。実はローマ教皇にも化けてその辺を歩いた事だつてあるかもね」

まあ冗談だけどね、と付け加えてイーサと呼ばれる青年は言うが、事実であればそれはそれで大問題である。

「……貴様には『裏』で動き回る権限を与えてはいるが、最近その行動が目につておるな」

「その分、『表』でも仕事はやってますよ？ この前も、五〇人ほどの孤児を教会で預かる手続きを教皇自らの署名付きで申請してきましたし」

少し位の下の方が見ていたなら、ゾツとする光景だったに違いない。

ローマ正教のトップである教皇と、このような口調で話せる人間は指を折るほどしか居ないだろう。

「何をするつもりだ」

「やることは沢山あるさ。今だ路地裏に溢れる孤児達の保護や新たな教会の設置、それから」

「『表』の話いはよい」

指を折ながら数えていたイーサの動きが止まる。

「今回の一件も貴様の企む何かの破片に過ぎぬのだろうか？」

「俺が望むのは『世界の平和』さ」

イーサはさらりと言つてのける。

あまりにも規模が大きい為、それこそ本気なのか、「冗談なのか判断のしようがない。

「貴様に聞いた私が愚かであった」

ローマ教皇も理解しているのか、イーサの回答を軽く流してしまふ。

「だが、報告はしろ。それが出来なければ行動の権利を剥奪する」となるぞ」

「それは困るな。……なら早速、事前報告でもしましょうか」

イーサは予め用意してあった紙を懐から取り出した。

「霊装の使用許可をもらいたいね。もちろん理由は、『世界の平和』の為さ」

8 - 11 「それぞれの後」(後書き)

ご意見、感想がありましたらよろしくです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7588n/>

とある魔術の天の住人

2012年1月10日02時45分発行